

福翁自伝

福翁自伝

福澤諭吉

青空文庫

慶應義塾の社中にては、西洋の学者に往々自から伝記を記すの例あるを以て、兼てより
 福澤先生自伝の著述を希望して、親しく之を勧めたるものありしかども、先生の平生甚だ
 多忙にして執筆の閑を得ずその儘に経過したりしに、一昨年の秋、或る外国人の需に応じ
 て維新前後の実歴談を述べたる折、風と思ひ立ち、幼時より老後に至る経歴の概略を速記
 者に口授して筆記せしめ、自から校正を加え、福翁自伝と題して、昨年七月より本年二月
 までの時事新報に掲載したり。本来この筆記は単に記憶に存したる事実を思い出すまゝ
 に語りしものなれば、恰も一場の談話にして、固より事の詳細を悉くしたるに非ず。左れ
 ば先生の考にては、新聞紙上に掲載を終りたる後、更に自から筆を執てその遺漏を補い、
 又後人の参考の爲めにとて、幕政の当時親しく見聞したる事実に拠り、我国開国の次第よ
 り幕末外交の始末を記述して別に一編と爲し、自伝の後に付するの計画にして、既にその
 腹案も成りたりしに、昨年九月中、遽に大患に罹りてその事を果すを得ず。誠に遺憾なれ
 ども、今後先生の病いよく全癒の上は、兼ての腹案を筆記せしめて世に公にし、以て今
 日の遺憾を償ふことあるべし。

明治三十二年六月

時事新報社

石河幹明

記

幼少の時

福澤諭吉の父は豊前中津奥平藩の士族福澤百助、母は同藩士族、橋本浜右衛門
 の長女、名を於順と申し、父の身分はヤツト藩主に定式の謁見が出来ると云うので
 すから足輕よりは数等宜しいけれども士族中の下級、今日で云えば先ず判任官の家でし
 よう。藩で云う元締役を勤めて大阪にある中津藩の倉屋敷に長く勤番して居ました。
 夫れゆえ家内残らず大阪に引越して居て、私共は皆大阪で生れたのです。兄弟五人、
 総領の兄の次に女の子が三人、私は末子。私の生れたのは天保五年十二月十二日、父四十
 三歳、母三十一歳の時の誕生です。ソレカラ天保七年六月、父が不幸にして病死。跡に遺
 るは母一人に子供五人、兄は十一歳、私は数え年で三つ。斯くなれば大阪にも居られず、
 兄弟残らず母に連れられて藩地の中津に帰りました。
 兄弟五人中津の風に合わず扱中津に帰てから私の覚えて居ることを申せば、私共の兄弟五
 人はドウシテも中津人と一所に混和することが出来ない、その出来ないと言うのは深い
 由縁も何もないが、従兄弟が沢山ある、父方の従兄弟もあれば母方の従兄弟もある。

マア何十人と云う従兄弟がある。又近所の小供も幾許もある、あるけれどもその者等とゴチャクチャになることは出来ぬ。第一言葉が可笑しい。私の兄弟は皆大阪言葉で、中津の人が「そうじゃちこ」と云う所を、私共は「そうでおます」なんと云うような訳けで、お互に可笑しいから先ず話が少ない。夫れから又母は素と中津生れであるが、長く大阪に居たから大阪の風に慣れて、小供の髪ふの塩梅あんばい式、着物の塩梅式、一切大阪風の着物より外ほかにない。有合ありあの着物を着せるから自然中津の風とは違わなければならぬ。着物が違い言葉が違ふと云う外には何も原因はないが、子供の事だから何だか人ひと中なかに出るのを気恥かしいように思て、自然、内に引込んで兄弟同士遊んで居ると云うような風でした。儒教主義の教育夫れから最も一つこれ之に加えると、私の父は学者であつた。普通あたりまえの漢学者であつて、大阪の藩邸に在勤してその仕事は何かというと、大阪の金持かねもち、加島屋かじまや、鴻こうノ池いけというような者に交際して藩債つかさの事を司つかさどる役であるが、元来父はコンナ事が不平で堪たまらない。金銭なんぞ取扱うよりも読書一偏の学者になつて居たいという考かんがであるに、存ぞんじ掛かけもなく算盤そろばんを執とつて金の数を数えなければならぬとか、藩借はんしゃく延期の談判けがをしなければならぬとか云う仕事で、今の洋学者とは大に違つて、昔の学者は銭を見るも汚れると云うて居た純粹の学者が、純粹の俗事に当ると云う訳けであるから、不平も無理はない。

ダカラ子供を育てるのも全く儒教主義で育てたものであらうと思うその一例を申せば、斯う云うことがある。私は勿論幼少だから手習どころの話でないが、最う十歳ばかりになる兄と七、八歳になる姉などが手習をするには、倉屋敷の中に手習の師匠があつて、其家には町家の小供も来る。其処でイロハニホヘトを教えるのは宜しいが、大阪の事だから九々の声を教える。二二が四、二三が六。これは当然の話であるが、その事を父が聞いて、怪しからぬ事を教える。幼少の小供に勘定の事を知らせると云うのは以ての外だ。斯う云う処に小供は遣て置かれぬ。何を教えるか知れぬ。早速取返せと云て取返した事があると云うことは、後に母に聞きました。何でも大変喧ましい人物であつたことは推察が出来る。その書遺したものなどを見れば真実正銘の漢儒で、殊に堀河の伊藤東涯先生が大信心で、誠意誠心、屋漏に愧じずということ許り心掛たものと思われるから、その遺風は自から私の家には存して居なければならぬ。一母五子、他人を交えず世間の附合は少く、明ても暮れても唯母の話を聞く許り、父は死んでも生きてるような者です。ソコで中津に居て、言葉が違い着物が違ふと同時に、私共の兄弟は自然に一団体を成して、言わず語らずの間に高尚に構え、中津人は俗物であると思つて、骨肉の従兄弟に対してさえ、心の中には何となく之を目下に見下して居て、夫等の者のすることは

厳ならずして家風正し今申す通り私共の兄弟は、幼少のとき中津の人と言語風俗を殊にし
 て、他人の知らぬ処に随分淋しい思いをしましたさびが、その淋しい間にも家風は至極正しい。
 嚴重な父があるでもないが、母子睦じく暮して兄弟喧嘩など唯の一度もしたことがない。
 のみか、仮初かりそめにも俗な卑陋な事はしられないものだびろうと育てられて、別段に教える者もな
 い、母も決して喧しい六かしい人でないのに、自然に爾うなつたのは、矢張り父の遺風と
 母の感化力でしよう。その事實に現われたことを申せば、鳴物なりものなどの一条で、三味線
 とか何とか云うものを、聞こうとも思わなければ何とも思わぬ。斯様なものは全体私なん
 ぞの聞くべきものでない、矧いわや玩ぶべき者でないと云う考かんがえを持て居るから、遂ついぞ芝居見物
 など念頭に浮んだこともない。例えば、夏になると中津に芝居がある。祭の時には七日も
 芝居を興行して、田舎役者が芸をするその時には、藩から布令ふれが出る。芝居は何日の間あ

るが、藩士たるものは決して立寄ることは相成らぬ、住吉の社の石垣より以外に行くことならぬと云うその布令の文面は、甚だ嚴重なようにあるが、唯一片の御布令だけの事であるから、俗士族は脇差を一本挟して頬冠りをして颯々と芝居の矢来を破て這入る。若しそれを咎めれば却て叱り飛ばすと云うから、誰も怖がって咎める者はない。町の者は金を払て行くに、士族は忍姿で却て威張て只這入て観る。然るに中以下俗士族の多い中で、その芝居に行かぬのは凡そ私のところ一軒位でしょう。決して行かない。此処から先きは行くことはならぬと云えば、一足でも行かぬ、どんな事があつても。私の母は女ながらも遂ぞ一口でも芝居の事を子供に云わず、兄も亦行こうと云わず、家内中一寸でも話がない。夏、暑い時の事であるから涼には行く。併しその近くで芝居をして居るからと云て見ようともしない、どんな芝居を遣て居るとも噂にもしない、平気で居ると云うような家風でした。

成長の上、坊主にする前申す通り、亡父は俗吏を勤めるのが不本意であつたに違いない。左れば中津を蹴飛して外に出れば宜い。所が決してソナ気はなかつた様子だ。如何なる事にも不平を呑んで、チャント小禄に安んじて居たのは、時勢の爲めに進退不自由なりし故でしょう。私は今でも独り気の毒で残念に思います。例えば父の生前に斯う云う事

がある。今から推察すれば父の胸算きようさんに、福澤の家は総領に相続させる積つもりで宜よろしい、所が子供の五人目に私が生れた、その生れた時は大きな療やせた骨ほねぶと太な子で、産婆さんばの申すに、この子は乳さえ沢たくさん山吞まされれば必ず見事に育つと云うのを聞て、父が大層喜んで、是れは好い子だ、この子が段々成長して十か十一になれば寺に遣やつて坊主になると、毎度母に語ったそうです。その事を母が又私に話して、アノ時阿父おとつさんは何故坊主になると仰おつしやつたか合点がてんが行かぬが、今御存命ごぞんめいなればお前は寺の坊様ぼうさまになつてゐる筈はずじやと、何かの話の端はしには母が爾そう申して居ましたが、私が成年の後のちその父の言葉を推察するに、中津は封建制度でチャント物を箱の中に詰めたように秩序が立て居て、何百年経ても一寸ちよいともし動かぬと云う有様、家老の家に生れた者は家老になり、足輕あしがらの家に生れた者は足輕になり、先祖代々、家老は家老、足輕は足輕、その間に挟あいだまつて居る者も同様、何年経ても一寸ちよいとも変化と云うものがない。ソコで私の父の身になつて考えて見れば、到底どんな事をしたつて名を成すことは出来ない、世間を見れば茲ここに坊主と云うものが一つある、何でもない魚屋さかなやの息子が大僧正になつたと云うような者が幾人いくらもある話、それゆえに父が私を坊主にすると云たのは、その意味であろうと推察したことは間違ひなからう。

門閥制度は親の敵こん如斯なことを思えば、父の生涯、四十五年のその間、封建制度に束縛せ

られて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したるその心中の苦しさ、その愛情の深さ、私は毎度この事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私のために門閥制度は親の敵で御座る。

年十四、五歳にして始めて読書に志す私は坊主にならなかつた。坊主にならずに家に居たのであるから学問をすべき筈である。所が誰も世話の為人がない。私の兄だからと云て兄弟の長少僅か十一しか違わぬので、その間は皆女の子、母も亦たった一人で、下女下男を置くと云うことの出来る家ではなし、母が一人で飯を焚いたりお菜を拵えたりして五人の小供の世話をしなければならぬから、中々教育の世話などは存じ掛もない。云わばやり放しである。藩の風で幼少の時から論語を讀むとか大学を讀む位の事は遣らぬことはないけれども、奨励する者としては一人もない。殊に誰だつて本を讀むことの好きな子供はない。私一人本が嫌いと言ふこともなからう、天下の小供みな嫌いだらう。私は甚だ嫌いであつたから休でばかり居て何もしない。手習もしなければ本も讀まない。根っから何にもせず居た所が、十四か十五になつて見ると、近處に知て居る者は皆な本を讀で居るのに、自分独り讀まぬと云うのは外聞が悪いとか恥かしいとか思たのでしよう。夫れから自分

で本当に読む気になつて、田舎の塾へ行始めました。どうも十四、五になつて始めて学ぶのだから甚だきまりが悪い。外の者は詩経を読むの書経を読むのと云うのに、私は孟子の素読をすると云う次第である。所が茲に奇な事は、その塾で蒙求とか孟子とか論語とかの会読講義をすると云うことになる、私は天稟、少し文才があつたのか知らん、能く其の意味を解して、朝の素読に教えて呉れた人と、昼からになつて蒙求などの会読をすれば、必ず私がその先生に勝つ。先生は文字を読む許りでその意味は受取の悪い書生だから、之を相手に会読の勝敗なら訳けない。

左伝通読十一偏その中、塾も二度か三度か更えた事があるが、最も多く漢書を習たのは、白石と云う先生である。其処に四、五年ばかり通学して漢書を学び、その意味を解すことは何の苦勞もなく存外早く上達しました。白石の塾に居て漢書は如何なるものを読だかと申すと、經書を専らにして論語、孟子は勿論、すべて經義の研究を勉め、殊に先生が好きと見えて詩経に書経と云うものは本当に講義をして貰て善く読みました。ソレカラ蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、莊子と云うようなものも能く講義を聞き、その先きは私独りの勉強、歴史は史記を始め前後漢書、晋書、五代史、元明史略と云うようなものも読み、殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五卷の内三、四卷で仕舞

うのを、私は全部通読、凡そ十一度び読返して、面白い処は暗記して居た。夫れで一通り漢学者の前座ぐらいになつて居たが、一体の学流は亀井風で、私の先生は亀井が**大信**心で、余り詩を作ることなどは教えずに寧ろ冷笑して居た。広瀬淡窓などの事は、彼奴は発句師、俳諧師で、詩の題さえ出来ない、書くことになる**と**漢文が書けぬ、何でもない奴だと云て居られました。先生が爾う云えば門弟子も亦爾う云う氣になるのが不思議だ。淡窓ばかりでない、頼山陽なども甚だ信じない、誠に目下に見下して居て、「何だ粗末な文章、山陽などの書いたものが文章と云われるなら誰でも文章の出来ぬ者はあるまい。仮令い舌足らずで吃た所が意味は通ずると云うようなものだなんて大造な劍幕で、先生から爾う教込まれたから、私共も山陽外史の事をば軽く見て居ました。白石先生ばかりでない。私の父が又その通りで、父が大阪に居るとき山陽先生は京都に居り、是非交際しなければならぬ筈であるに一寸とも付合わぬ。野田笛浦と云う人が父の親友で、野田先生はどんな人か知らない、けれども山陽を疎外して笛浦を親しむと云えば、笛浦先生は浮氣でない学者と云うような意味でしたか、筑前の亀井先生なども朱子学を取らずに經義に一説を立てたと云うから、その流を汲む人々は何だか山陽流を面白く思わぬのでしよう。

手端器用なり以上は学問の話ですが、尚なお此この外ほかに申せば、私は旧藩士族の小供こくらに較べ
て見ると手の先さきの器用な奴やつで、物の工夫をするような事が得意でした。例えば井戸に物
が墜おちたと云えば、如何どうい云う塩梅あんばいにして之これを揚げるとか、箆たす笥すの錠じょうが明あかぬと云えば、
釘くぎの尖さきなどを色々に扨まげて遂に見事に之を明けるとか云う工風くふうをして面白がつて居る。又
た障子しょう子を張ることも器用で、自家の障子は勿論もちろん、親類やとへ雇やとわれて張りに行くこともある。
兎とに角かくに何をするにも手先が器用でマメだから、自分にも面白かつたのでしよう。ソレカ
ラ段々とし年を取るに従て仕事も多くなつて、固もとより貧士族ひんしぞくのことであるから、自分で色々
工風して、下駄げたの鼻緒はなおもたてれば雪駄せつたの剥はがれたのも縫うと云うことは私の引受ひきうけで、自分
のばかりでない、母のものも兄弟のものも繕つくろうて遣やる。或あるいは晝針たみばりを買かつて来て晝おもての表を
附つけ替え、又或は竹を割かつて桶おけの箍たがを入れるような事から、その外ほか、戸の破れ屋根の漏もり
を繕うまで当あたりまえ前の仕事で、皆私が一人ひとりでして居ました。ソレカラ進んで本当の内職を
始めて、下駄こしらを拵こしらえたこともあれば、刀剣の細工をしたこともある。刀の身みを磨とぐことは
知らぬが、鞆さやを塗つり柄つかを巻まき、その外、金物かなものの細工は田舎ながらドウヤラコウヤラ形だ
けは出来る。今でも私の塗ぬつた虫喰むしくい塗りの脇差わきざしの鞆が宅に一本あるが、随分不器用なも
のです。都すべてコンナ事は近きんじよ処に内職をする士族があつてその人に習いました。

鋸鑢に驚く金物細工をするに鑢は第一の道具で、是れも手製に作って、その製作には随分苦心して居た所が、その後、年経て私が江戸に来て先ず大に驚いたことがある、と申すは只の鑢は鋼鉄を斯うして斯う遣れば私の手にもヲシ／＼出来るが、鋸鑢ばかりは六かしい。ソコデ江戸に這入たとき、今思えば芝の田町、処も覚えて居る、江戸に這入て往来の右側の家で、小僧が鋸の鑢の目を叩て居る。皮を鑢の下に敷いて鑢で刻んで颯々と出来る様子だから、私は立留て之を見て、心の中で扨々大都会なる哉、途方もない事が出来るもの哉、自分等は夢にも思わぬ、鋸の鑢を拵えようと云うことは全く考えたこともない、然るに小供がアノ通り遣て居るとは、途方もない工芸の進んだ場所だと思て、江戸に這入たその日に感心したことがあると云うような訳けで、少年の時から読書の外は俗な事ばかりして俗な事ばかり考えて居て、年を取ても兎角手先きの細工事が面白くて、動もすれば鉋だの鑿だの買集めて、何か作つて見よう、繕うて見ようと思うその物は皆な俗な物ばかり、所謂美術と云う思想は少しもない。平生万事至極殺風景で、衣服住居などに一切頓着せず、如何いう家に居てもドンナ着物を着ても何とも思わぬ。着物の上着か下着かソレモ構わぬ。況して流行の縞模様など考えて見たこともない程の不風流なれども、何か私に得意があるかと云えば、刀劍の拵えとなれば、是れは善く出来たと

か、小道具の作柄^{さくから}釣合^{つりあい}が如何^{どう}とか云^{かん}う考^{がえ}はある。是れは田舎ながら手に少し覚えのあ
る芸から自然に養うた意匠^{いさく}でしよう。

青天白日に徳利^{とくり}夫^それから私が世間に無頓着^{むとんちやく}と云うことは少年から持^{もつ}て生れた性質、周囲
の事情^{じきやう}に一寸^{いちゆん}とも感じない。藩の小士族などは酒、油、醬油などを買^みうときは、自分自^{みず}か
ら町^{つかい}に使^{つか}に行かなければならぬ。所がその頃の士族一般の風^{ふう}として、頼冠^{ほんかむり}をして宵出^{よるでかけ}掛^かて
行く。私は頼冠は大嫌^{きん}いだ。生れてからしたことはない。物を買^ぜうに何だ、錢^{ぜに}を遣^{やつ}て買^みう
に少しも構^{かま}うことはないと云^いう氣で、顔も頭も丸出^{まるで}しで、士族だから大小は挟^さすが、徳利^{とくり}
を提^{さげ}て、夜は扱^{さて}置き白昼公然、町の店に行く。錢は家の錢^{うち}だ、盗^{ぬす}んだ錢^{ぜに}じゃないぞと云^いう
ような氣^き位^{ぐらい}で、却^{かえつ}て藩中者の頼冠^{らんかん}をして見榮^{みえ}をするのを可笑^{おか}しく思^{おも}つたのは少年の血氣^{けき}、
自分独^{ひと}り自惚^{うぬぼ}れて居たのでしょう。ソレカラ又家に客を招く時に、大根や牛蒡^{ごぼう}を煮^{くわ}て喫^くせ
ると云^いうことに就^つて、必要があるから母の指図^{さしず}に従^{したが}って働^{はたら}て居た。所で私は客などがウヂヤ
／＼酒を呑^のむのは大嫌^{きん}い。俗な奴等だ、呑^のむなら早く呑^のんで歸^{かえ}つて仕舞^{しま}えば宜^いいと思^{おも}うのに、
中々歸^{かえ}らぬ。家は狭くて居^い処^{どころ}もない。仕方ないから客の呑^のむの間は、私は押入^{おし入れ}の中に這^は
入^いて寝^いて居る。何時^{いつ}でも客をする時には、客の來^きる迄^{まで}は働^{はたら}く、けれども夕方になると、自
分も酒^{すき}が好^すだから颯々^{さつさつ}と酒を呑^のんで飯^{めし}を喰^くつて押入^{おし入れ}に這^は入^いて仕舞^{しま}い、客が歸^{かえ}た跡^{あと}で押入^{おし入れ}か

ら出て、何時も寝る処に寝直すのが常例でした。

夫れから私の兄は年を取て居て色々の朋友がある。時勢論などをして居たのを聞たこともある、けれども私は夫れに就て喙を容れるような地位でない。只追使れる許り。その時、中津の人氣は如何かと云えば、学者は挙て水戸の御隠居様、即ち烈公の事と、越前の春嶽様の話が多い。学者は水戸の老公と云い、俗では水戸の御隠居様と云う。御三家の事だから譜代大名の家来は大変に崇めて、仮初にも隠居など、呼棄にする者は一人もない。水戸の御隠居様、水戸の老公と尊称して、天下一の人物のように話して居たから、私も左様思て居ました。ソレカラ江川太郎左衛門も幕府の旗本だから、江川様と蔭でも屹と様付にして、之も中々評判が高い。或時兄などの話に、江川太郎左衛門と云う人は近世の英雄で、寒中給一枚着て居ると云うような話をして居るのを、私が側から一寸と聞て、何にその位の事は誰でも出来ると云うような氣になつて、ソレカラ私は誰にも相談せず、毎晩搔卷一枚着て敷蒲団も敷かず畳の上に寝ることを始めた。スルト母は之を見て、何の真似か、ソナ事をするゝ風邪を引くと云て、頻りに止めるけれども、トウ／＼聴かずに一冬通したことがあるが、是れも十五、六歳の頃、唯人に負けぬ氣で遣たので身体も丈夫であつたと思われる。

兄弟問答又当時世間一般の事であるが、学問と云えば漢学ばかり、私の兄も勿論漢学一方つぽうの人で、只他ただの学者と違うのは、豊後ぶんごの帆足万里先生ほあしばんりの流りゆうを汲くんで、数学を学んで居ました。帆足先生と云えば中々大儒だいじゆでありながら数学を悦よろこび、先生の説に、鉄砲と算盤そろばは士流の重んずべきものである、その算盤を小役人こやくにんに任せ、鉄砲を足輕あしがらに任せて置くと云うのは大間違いと云うその説が中津に流行して、士族中の有志者は数学に心を寄せる人が多い。兄も矢張り先輩やばに倣ならうて算盤そろばんの高尚な所まで進んだ様子です。この辺は世間の儒者と少し違うようだが、その他は所謂いわゆる孝悌忠信で、純粹の漢学者に相違ない。或時あるとき兄が私に問といを掛けて、「お前は是これから先き何になる積りかと云うから、私が答え、」左様さようさ、先まず日本一の大金持おおがねもちになつて思うさま金を使うて見ようと思ひますと云うと、兄が苦い顔して叱しかつたから、私が返問はんもんして、「兄にいさんは如何どうなさると尋ねると、真面目まじめに、「死に至るまで孝悌忠信と唯一言ただいちごんで、私は「ヘーイと云た切りそのまゝになつた事があるが、先まず兄はソナ人物で、又妙な処もある。或時あるとき私むかつに向て、「乃公おれは総領で家督をして居るが、如何どうかして六むすかしい家の養子になつて見たい。何とも云いわれぬ頑固がんこな、ゴク喧やかましい養父母に事つかえて見たい。決して風波ふうはを起させないと云うのは、畢ひつきよ竟う養父母と養子との間あいだ柄がらの悪いのは養子の方の不行届ふゆきとどきだと説を極めてたのでしょ

う。所が私は正反对で、「養子は忌な事だ、大嫌いだ。親でもない人を誰が親にして事える者があるかと云うような調子で、折々は互に説が違て居ました。是れは私の十六、七の頃と思います。

母も亦随分妙な事を悦んで、世間並には少し変わつて居たようです。一体下等社会の者に附合うことが数寄で、出入りの百姓町人は無論、穢多でも乞食でも颯々と近づけて、軽蔑もしなければ忌がりもせず言葉など至極丁寧でした。又宗教に就て、近処の老婦人達のように普通の信心はないように見える。例えば家は真宗でありながら説法も聞かず、「私は寺に参詣して阿弥陀様を拝むこと許りは可笑しくてキマリが悪くて出来ぬと常に私共に云いながら、毎月米を袋に入れて寺に持て行て墓参りは欠かしたことはない（その袋は今でも大事に保存してある）。阿弥陀様は拝まぬが坊主には懇意が多い。旦那寺の和尚は勿論、又私が漢学塾に修業して、その塾中に諸国諸宗の書生坊主が居て、毎度私処に遊びに来れば、母は悦んで之を取持て馳走でもすると云うような風で、コンナ所を見れば唯仏法が嫌いでもないようです。兎に角に慈善心はあつたに違いない。

乞食の虱をとる茲に誠に穢い奇談があるから話しましょう。中津に一人の女乞食があつて、馬鹿のような狂者のような至極の難浚者で、自分の名か、人の付けたのか、チエノ

と云て、毎日市中を貰て廻る。所が此奴が穢いとも臭いとも云いようのない女で、着物にはボロく、髪はボウく、その髪に虱がウヤくして居るのが見える。母が毎度の事で天氣の好い日などには、おチエ此方に這入て来いと云て、表の庭に呼込んで土間の草の上に坐らせて、自分は襦掛けに身構えをして乞食の虱狩を始めて、私は加勢に呼出される。拾うように取れる虱を取ては庭石の上に置き、マサカ爪で潰すことは出来ぬから、私を側に置いて、この石の上のを石で潰せと申して、私は小さい手ごろな石を以て構えて居る。母が一疋取て台石の上に置くと私はコツリと打潰すと云う役目で、五十も百も先ずその時に取れる丈け取て仕舞い、ソレカラ母も私も着物物を払うて糠で手を洗うて、乞食には虱を取らせて呉れた褒美に飯を遣ると云う極りで、是れは母の楽しみでしたらうが、私は穢なくて穢なくて堪らぬ。今思出して胸が悪いようです。

反故を踏みお札を踏む又私の十二、三歳の頃と思う。兄が何か反古を揃えて居る処を、私がドタバタ踏んで通つた所が兄が大喝一声、コリヤ待てと酷く叱り付けて、「お前は眼が見えぬか、之を見なさい、何と書いてある、奥平大膳大夫と御名があるではないかと大造な権幕だから、「ア、左様で御在ましたか、私は知らなんだと云うと、「知らんと云ても眼があれば見える筈じや、御名を足で踏むとは如何云う心得である、臣子の道

はと、何か六なかしい事を並べて厳しく叱るから謝らずには居られぬ。「私が誠に悪う御在
ましたから堪かん忍にんして下さいと御辞儀おじぎをして謝ったけれども、心の中では謝りも何もせぬ。
「何の事だろう、殿様の頭でも踏みはしなからう、名の書いてある紙を踏んだからッて構
うことはなさそうなものだ」と甚はなだ不平で、ソレカラ子供心に独り思案ひとして、兄にいさんの云う
ように殿様の名の書いてある反古を踏んで悪いと云えば、神様の名のある御札おふだを踏んだら
如何どうだろうと思おもつて、人の見ぬ処で御札を踏んで見た所が何ともない。「ウム何ともない、
コリヤ面白い、今度は之を洗手場ちようずばに持もつて行いつて遣やらうと、一步を進めて便所に試みて、そ
の時は如何どうかあるうかと少し怖おそかつたが、後あとで何ともない。「ソリヤ見たことか、兄さん
が余計な、あんな事を云わんでも宜いいのじやと独り発明したようなものだが、是れ許こりばばか
母にも云われず姉にも云われず、云えば屹きつと叱られるから、一人ひとりで窃そつと黙もくつて居ました。
稲荷様の神体を見るソレカラ一つも二つも年を取れば自おのずから度胸どくも好よくなつたと見えて、
年とし寄よりなどの話にする神罰しんばつ冥罰みようばつなんと云うことは大嘘だいうそだと独り自みから信じ切きつて、
今度は一つ稲荷様いなりを見て遣やらうと云う野心を起して、私の養子になつて居た叔父様おじさまの家の
稲荷やしろの社の中には何はが這入はいつて居るか知らぬと明あけて見たら、石が這入はいつて居るから、その石
を打擲うちやつて仕舞しまつて代りの石を拾ひろうて入れて置き、又隣家しむむらの下村と云う屋敷の稲荷様を明

けて見れば、神体は何か木の札で、之も取て棄て、仕舞い平氣な顔して居ると、間もなく初午になつて、幟を立てたり大鼓を叩いたり御神酒を上げてワイ／＼して居るから、私は可笑しい。「馬鹿め、乃公の入れて置いた石に御神酒を上げて拝んでは面白いと、ひとり嬉しがつて居たと云うような訳で、幼少の時から神様が怖いだの仏様が有難いだの云うことは一寸ともない。卜筮呪詛一切不信仰で、狐狸が付くと云うようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。小供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした。或時に大阪から妙な女が来たことがあるその女と云うのは、私共が大阪に居る時に邸に出入をする上荷頭の伝法寺屋松右衛門と云うものゝ娘で、年の頃三十位でもあつたかと思う。その女が中津に来て、お稲荷様を使うことを知て居ると吹聴するその次第は、誰にでも御幣を持たして置いて何か祈ると、その人に稲荷様が憑拠とか何とか云て、頻りに私の家に来て法螺を吹て居る。夫れからその時に私は十五、六の時だと思ふ。「ソリヤ面白い、遣て貰おう、乃公がその御幣を持とう、持て居る御幣が動き出すと云うのは面白い、サア持たして呉れろと云うと、その女がつく／＼と私を見て居て、「坊さんはイケマヘンと云うから、私は承知しない。「今誰にでもと云たじやないか、サア遣て見せろと、酷くその女を弱らして面白かつた事がある。

門閥の不平ソレカラ私が幼少の時から中津に居て、始終不平で堪らぬと云うのは無理でない。一体中津の藩風と云うものは、士族の間に門閥制度がチャンと定まつて居て、その門閥の堅い事は啻に藩の公用に就てのみならず、今日私の交際上、小供の交際に至るまで、貴賤上下の区別を成して、上士族の子弟が私の家のような下士族の者に向ては丸で言葉が違ふ。私などが上士族に対して、アナタが如何なすつて、斯うなすつてと云えば、先方では貴様が爾う為やつて、斯う為やれと云うような風で、万事その通りで、何でもない只小供の戯れの遊びにも門閥が付て廻るから、如何しても不平がなくては居られない。その癖今の貴様とか何とか云う上士族の子弟と学校に行て、読書会と云うような事になれば、何時でも此方が勝つ。学問ばかりでない、腕力でも負けはしない。夫れがその交際、朋友互に交つて遊ぶ小供遊の間にも、ちゃんと門閥と云うものを持て横風至極だから、小供心に腹が立て堪らぬ。

下執事の文字に叱かられる況して大人同士、藩の御用を勤めて居る人々に貴賤の区別は中々喧ましいことで、私が覚えて居るが、或時私の兄が家老の処に手紙を遣て、少し学者風でその表書に何々様下執事と書いて遣たら大に叱られ、下執事とは何の事だ、御取次衆と認めて来いと云て、手紙を突返して来た。私は之を見ても側から独り立腹して

泣^{ない}たことがある。馬鹿々々しい、こんな処に誰が居るものか、如何^{どう}したつて是^これはモウ出るより外^{ほか}に仕様^{しよう}がないと、始^し終^{じゆう}心の中に思て居ました。ソレカラ私も次第に成長して、少年ながらも少しは世の中の事が分^{わか}るようになる中に、私の従^{いとこ}兄弟などにも随分一人や二人^{ひとり}は学者がある。能^よく書を読む男がある。固^{もと}より下士族の仲間だから、兄なぞと話のときには藩風が善^よくないとか何とかいろ／＼不平を洩^もらして居るのを聞いて、私は始終ソレを止^とめて居ました。「よしなさい、馬鹿々々しい。この中津に居る限りは、そんな愚論^{ぐろん}しても役に立つものでない。不平があれば出て仕舞^{しまう}が宜^よい、出なければ不平を云^いわぬが宜^よい、毎度止^{とめ}て居たことがあるが、是^これはマア私の生^{うまれ}付きの性質とでも云うようなものでしう。

喜怒色に顯^{あらわ}わさず或^{あるとき}時私が何か漢書を読む中に、喜怒色に顯^{あらわ}さずと云う一句を讀^{よん}で、その時にハット思^{おも}うて大に自分^{おおい}で安心^{あんしん}決定^{けつじよう}したことがある。「是^これはドウモ金^{きん}言^{げん}だと思^{おも}い、始終忘れぬようにして独^{ひと}りこの教^{おしえ}を守り、ソコデ誰が何と云^いて賞^ほめて呉^くれても、唯^{ただ}表面^{うわべ}に程^{ほど}よく受けて心の中には決して喜ばぬ。又何と輕蔑^{けいべつ}されても決して怒^{おこ}らない。どんな事があつても怒つた事はない。矧^いや朋輩^{わんぱい}同士で喧嘩^{けんか}をしたと云うことは只^{ただ}の一度もない。どんツイゾ人と掴^{つか}合^あつたの、打つたの、打たれたのと云うことは一寸^{ちゆういん}ともない。是^これは少年

の時ばかりでない。少年の時分から老年の今日に至るまで、私の手は怒に乘じて人の身体からだに触れたことはない。所が先年二十何年前、塾の書生に何とも仕方しかたのない放蕩者があつて、私が多年衣食を授けて世話をして遣るにも拘わらず、再三再四の不埒ふらち、或るときそのものどこが何処に何をしたか夜中酒に酔て生意気な風をして歸て来たゆえ、貴様は今夜寝ることにはならぬ、起きてチャント正座して居ると申渡して置いて、少して行て見ればグウ／＼いびき／＼軒をして居る。この不埒者めと云て、その肩の処をつらまえて引起して、目の醒めてるのを尚おグン／＼ゆたぶつて遣たことがある。その時跡で独り考えて、「コリヤ悪い事をした、乃公は生涯、人に向て此方から腕力を仕掛けたようなことはなかったに、今夜は氣に済まぬ事をしたと思つて、何だか坊主が戒律でも破たような心地こころもちがして、今に忘れることが出来ません。その癖私は少年の時から能く饒舌り、人並よりか口数の多い程に饒舌つて、爾うして何でも為することは甲斐々々しく遣て、決して人に負けないけれども、書生流儀の議論と云うことをしない。似合ひ議論すればと云ても、ほんとうに顔を赧めて如何あつても勝たなければならぬと云う議論をしたことはない。何か議論を始めて、ひどく相手の者が躍起となつて来れば、此方はスラリと流して仕舞う。「彼の馬鹿が何を馬鹿を云て居るのだと斯う思つて、頓と深く立入ると云うことは決して遣らなかつた。ソレ

でモウ自分の一身は何処どこに行て如何どうな辛苦しんくも厭いとわぬ、唯ただこの中津に居ないで如何どうかして出
て行ゆきたいものだ、独り夫そればかり祈こつて居た処ところが、とうと長崎に行くことが出来まし
た。

長崎遊学

それから長崎に出掛けた。頃は安政元年二月、即すなわち私の年二十一歳（正味しやうみ十九歳三箇
月）の時である。その時分には中津の藩地に横文字を読む者がないのみならず、横文字を
見たものもなかった。都会の地には洋学と云いうものは百年も前からありながら、中津は田
舎の事であるから、原書は扱さ置き、横文字を見たことがなかった。所がその頃は丁度ちやうど
ルリの来た時で、亜米利加アメリカの軍艦が江戸に來たと云うことは田舎でも皆知して、同時に砲術
と云うことが大變喧やかましくなつて來て、ソコで砲術を学ぶものは皆和蘭流オランダに就つて学ぶので、
その時私の兄が申すに、「和蘭の砲術を取調べるには如何どうしても原書を読まなければなら
ぬと云うから、私には分わからぬ。「原書とは何の事ですと兄に質問すると、兄の答に、「原
書と云うは、和蘭出版の横文字の書だ。今、日本に翻譯書と云うものがあつて、西洋の事

を書いてあるけれども、真実に事を調べるにはその大本の蘭文の書を読まなければならぬ。夫れに就ては貴様はその原書を読む気はないかと云う。所が私は素と漢書を学んで居るとき、同年輩の朋友の中では何時も出来が好くて、読書講義に苦勞がなかったから、自分にも自然頼にする気があつたと思われる。「人の読むものなら横文字でも何でも読みましよう、ソコデ兄弟の相談は出来て、その時丁度兄が長崎に行く序に任せ、兄の供をして参りました。長崎に落付き、始めて横文字の abc と云うものを習うたが、今では日本国中到處に、徳利の貼紙を見ても横文字は幾許もある。目に慣れて珍しくもないが、始めての時は中々六かしい。廿六文字を習うて覚えて仕舞うまでには三日も掛りました。けれども段々読む中には又左程でもなく、次第々に易くなつて来たが、その蘭学修業の事は扱置き、抑も私の長崎に往たのは、唯田舎の中津の窮屈なのが忌で、堪らぬから、文学でも武芸でも何でも外に出ることが出来さえすれば難有いと云うので出掛けたことだから、故郷を去るに少しも未練はない、如斯處に誰が居るものか、一度出たらば鉄砲玉で、再び帰て来はしないぞ、今日こそ宜い心地だと独り心で喜び、後向て唾して颯々と足早にかけ出したのは今でも覚えて居る。

活動の始まり夫れから長崎に行て、そうして桶屋町の光永寺と云うお寺を便つたと云

うのは、その時に私の藩の家老の倅で奥平壹岐と云う人はそのお寺と親類で、其処に寓居して居るのを幸いに、その人を使つてマアお寺の居候になつて居るその中に、小出町に山本物次郎と云う長崎両組の地役人で砲術家があつて、其処に奥平が砲術を學んで居るその縁を以て、奥平の世話で山本の家に食客に入込みました。抑も是れが私の生來活動の始まり。有らん限りの仕事を働き、何でもしない事はない。その先生が眼が悪くて書を読むことが出来ないから、私が色々な時勢論など、漢文で書いてある諸大家の書を読んで先生に聞かせる。又その家に十八、九の倅が在て独息子、余りエライ少年でない、けれども本は読まなければならぬと云うので、ソコでその倅に漢書を教えて遣らなければならぬ。是れが仕事の一つ。それから家は貧乏だけれども活計は大きい。借金もある様子で、その借金の云延し、新に借用の申込みに行き、又金談の手紙の代筆もする。其処の家に下婢が一人に下男が一人ある。「所で」動もするとその男が病氣とか何とか云う時には、男の代をして水も汲む。朝夕の掃除は勿論、先生が湯に這入る時は背中を流したり湯を取たりして遣らなければならぬ。又その内儀さんが猫が大好き、狆が大好き、生物が好きで、猫も狆も犬も居るその生物一切の世話をしなければならぬ。上中下一切の仕事、私一人で引受けて遣て居たから、酷く調法な男だ、何とも云われぬ。

ない調法な血氣の少年であり乍ら、その少年の行状が甚だ宜しい、甚だ宜しくて甲斐々々しく働くと云うので、ソコデ以て段々その山本の家の氣に入て、仕舞には先生が養子にならないかと云う。私は前にも云う通り中津の士族で、遂ぞ自分は知りはせぬが少さい時から叔父の家の養子になつて居るから、その事を云うと、先生が夫れなら尚更ら乃公の家の養子になれ、如何でも乃公が世話をして遣るからと度々云われた事がある。

その時の一体の砲術家の有様を申せば、写本の蔵書が秘伝で、その本を貸すには相当の謝物を取て貸す。写したいと云えば、写す為めの謝料を取ると云うのが、先ず山本の家の臨時収入で、その一切の砲術書を貸すにも写すにも、先生は眼が悪いから皆私の手を経る。それで私は砲術家の一切の元締になつて、何もかも私が一切取扱て居る。その時分の諸藩の西洋家、例えば宇和島藩、五島藩、佐賀藩、水戸藩などの人々が来て、或は出島の和蘭屋敷に行て見たいとか、或は大砲を鑄るから図を見せて呉れとか、そんな世話をするのが山本家の仕事で、その実は皆私が遣る。私は本来素人で、鉄砲を打つのを見た事もないが、図を引くのは訳けはない。颯々と図を引いたり、説明を書いたり、諸藩の人が来れば何に付けても独り罷り出て、丸で十年も砲術を学んで立派に砲術家と見られる位に挨拶をしたり世話をしたりすると云う調子である。処で私を山本の居候に世

話をして入れて呉れた人、即ち奥平壹岐だ。壹岐と私とは主客処を易えて、私が主人見たようになったから可笑しい。壹岐は元来漢学者の才子で局量が狭い。小藩でも大家の子だから如何も我儘だ。もう一つは私の目的は原書を読むに在て、蘭学医の家に通うたり和蘭通詞の家に行ったりして一意専心原書を学ぶ。原書と云うものは始めて見たのであるが、五十日、百日とおいゝ日を経るに従て、次第に意味が分るようになる。所が奥平壹岐はお坊さん、貴公子だから、緻密な原書などの読める訳けはない。その中に此方は余程エラクなつたのが主公と不和の始まり。全体奥平と云う人は決して深い巧みのある悪人ではない。唯大家の我儘なお坊さんで智恵がない度量がない。その時に旨く私を籠絡して生捕つて仕舞えば譜代の家来同様に使えるのに、却てヤツカミ出したとは馬鹿らしい。歳は私より十ばかり上だが、何分気分が子供らしくて、ソコデ私を中津に還えすような計略を運らしたのが、私の身には一大災難。

長崎に居ること難しソリヤ斯う云う次第になつて来た。その奥平壹岐と云う人に与兵衛と云う実父の隠居があつて、私共は之を御隠居様と崇めて居た。ソコデ私の父は二十年前に死んで居るのですけれども、私の兄が成長の後に父のするような事をして、又大阪に行き勤番をして居て、中津には母一人で何も無い。姉は皆嫁いて居て、身寄りの若い者の

中には私の従兄いとこの藤本ふじもと元岱げんたいと云う医者いただが唯一人、能く事が分り書も能く読める学者であるが、そこで中津に在る彼の御隠居様が無法な事をしたと云うは、何れ長崎の倅壹岐の方から打合うちあわせのあつたものと見えて、その隠居が従兄の藤本を呼よびに來て、隠居の申すに諭吉を呼よび還せ、アレが居ては倅壹岐の妨げになるから早々呼還せ、但しソレに就ては母が病氣だと申遣もうしつかわせと云う御直おじきの厳命くたが下つたから、固より否いなむことは出來ず、唯畏りましたと答えて、母にもそのよしを話して、ソレカラ従兄が私に手紙を寄送して、母の病氣に付き早々帰省致せと云う表向おもてむきの手紙と、又別紙に、実は隠居から斯う云う次第、余儀なく手紙を出したが、決して母の身を案じるなど詳に事實を書いて呉れたから、私は之を見て実に腹が立つた。何だ、鄙劣ひれつ千万な、計略を運めぐらして母の病氣とまで偽を云いわせる、ソナ奴があるものか、モウ焼やけだ、大議論をして遣やろうかと思たが、イヤく左様そうでない、今アノ家老と喧嘩をした所が、負けるに極きまつて居る、戦わずして勝負は見えてる、一切喧嘩はしない、アンナ奴と喧嘩をするよりも自分の身の始末が大事だと思おもい直ちして、夫れからシラバクレて胆きもを潰つぶした風ふうをして奥平の処ところに行て、扱中津から箇様かよう申して参りました、母が俄にわかに病氣になりました、平生至極丈夫な方ほうでしたが、実に分らぬものです、今頃は如何云う容体ようたいでしょうか、遠国えんごくに居て氣になりますなんて、心配

そんな顔してグチャ／＼述立てると、奥平も大に驚いた顔色を作り、左様か、ソリヤ
気の毒な事じゃ、嘸心配であらう、兎に角に早く帰国するが宜からう、併し母の病氣全快
の上は又再遊の出来るようにして遣るからと、慰さめるように云うのは、狂言が旨く行
われたと心中得意になつて居るに違いない。ソレカラ又私は言葉が続けて、唯今御指図
の通り早々帰国しますが、御隠居様に御伝言は御在ませんか、何れ帰れば御目に掛ります、
又何か御品があれば何でも持て帰りますと云て、一ト先ず別れて翌朝又行て見ると、主
公が家に遣る手紙を出して、之を屋敷に届けて呉れ、親仁に斯う／＼伝言をして呉れと云
い、又別に私の母の従弟の大橋六助と云う男に遣る手紙を渡して、これを六助の処に
持て行け、爾うすると貴様の再遊に都合が宜かろうと云て、故意とその手紙に封をせず
明けて見よがしにしてあるから、何もかも委細承知して丁寧に告別して、宿に帰て封なし
の手紙を開て見れば、「諭吉は母の病氣に付き是非帰国と云うからその意に任せて還すが、
修業勉強中の事ゆゑ再遊の出来るようその方にて取計らえと云う文句。私は之を見てま
す／＼癪に障る。「この猿松め馬鹿野郎めと独り心の中で罵り、ソレカラ山本の家にも
事實は云われぬ、若し是れが頭われて奥平の不面目にもなれば、禍は却て私の身に降て
来て如何な目に逢うか知れない、ソレガ怖いから唯母の病氣とばかり云て暇乞をしま

した。

江戸行を志す^{ちようど}丁度そのとき中津から鉄屋惣兵衛^{くろがねやそうべえ}と云う商人が長崎に来て居て、幸いその男が中津に帰ると云うから、兎も角も之と同伴と約束をして置いて、ソコデ私の胸算^{きようさん}は固より中津に帰る気はない。何でも人間の行くべき処は江戸に限る、是れから真直に^{まっすぐ}江戸に行きましよう^{もと}と決心はしたが、この事に就ては誰かに話して相談をせねばならぬ。所が江戸から来た岡部同直^{おかべどうちよく}と云う蘭学書生がある。是れは医者の子で至極面白い慥^{たし}かな人物と見込んだから、この男に委細^{いさい}の内情を打明けて、「斯うく云う次第で僕は長崎に居られぬ、余り癪に障るからこのまゝ江戸に飛出す積りだが、実は江戸に知る人はなし、方角が分らぬ。君の家は江戸ではないか、大人は開業医と開いたが、君の家に食^{しよつか}客^{きやく}に置いて呉れる事は出来まいか。僕は医者でないが丸薬^{がんやく}を丸める位の事は屹と出来るから、何卒世話を^{どうか}して貰^{もら}いたいと云うと、岡部も私の身の有様を気の毒に思うたか、私と一緒に^{おやじ}なつて腹を立て、容易く私の云う事を請合^{うけあ}い、「ソレは出来よう、何でも江戸に行け。僕の親仁^{おやじ}は日本橋檜物町^{ひもの}に開業して居るから、手紙を書いて遣ろうと云て、親仁名当^{なあて}の一封を呉れたから私は喜んで之を請取^{うけと}り、「ソコデ今この事が知れると大変だ、中津に帰らなければならぬようになるから、是ればかりは奥平にも山本にも一切誰^{たれ}にも云わずに、

君一人で吞込んで居て外に洩らさぬようにして、僕は是れから下ノ関に出て船に乗て先ず大阪に行く、凡そ十日か十五日も掛れば着くだろう。その時を見計らうて中村（諭吉、當時は中村の姓を冒す）は初めから中津に帰る気はなかった、江戸に行くと言て長崎を出た、奥平にも話して呉れ。是れも聊か面当だと互に笑て、朋友と内々の打合せは出来た。

諫早にて鉄屋と別るそれから奥平の伝言や何かをすっかり手紙に認めて仕舞い、是れは例の御隠居様に遣らなければならぬ。「私は長崎を出立して中津に帰る所存で諫早まで参りました処が、その途中で不図江戸に行きたくなりましたから、是れから江戸に参ります。就ては壹岐様から斯様々々の御伝言で、お手紙は是れですからお届け申すと丁寧に認めて遣つて、ソレカラ封をせずに渡した即ち大橋六助に宛た手紙を本人に届ける為めに、私が手紙を書添えて、「この通りに封をせぬのは可笑しい、こんな馬鹿な事はないがこの儘御届け申します。原はと言えば自分の方で呼還すように企てゝ置きながら、表べに人を欺くと云うのは卑劣至極な奴だ。私はもう中津に帰らず江戸に行くからこの手紙を御覧下さいと云うような塩梅に認めて、万事の用意は出来て、鉄屋惣兵衛と一処に長崎を出立して諫早まで——この間は七里ある——来た。丁度夕方着たが何で

も三月の中旬、月の明るい晩であつた。「扱鉄屋、乃公は長崎を出る時は中津に帰る所存であつたが、是れから中津に帰るは忌になつた。貴様の荷物と一処に乃公のこの葛籠も序に持て歸て呉れ。乃公はもう着換が一、二枚あれば沢山だ。是れから下ノ関に出て大阪へ行て、夫れから江戸に行くのだと云うと、惣兵衛殿は呆れて仕舞い、「それは途方もない、お前さんのような年の若い旅慣れぬお坊さんが一人で行くと云うのは。」「馬鹿云うな、口があれば京に上る、長崎から江戸に一人行くのに何のことがあるか。」「けれども私は中津に歸てお母さんにいい様がない。」「なあに構うものか、乃公は死も何もせぬから内のお母さんに宜しく云て呉れ、唯江戸に参りましたと云えば夫れで分る。鉄屋も何とも云うことが出来ぬ。」「時に鉄屋、乃公は是から下ノ関に行こうと思うが、実は下ノ関を知らぬ。貴様は諸方を歩くが下ノ関に知てる船宿はないか。」「私の懇意な内で船場屋寿久右衛門と云う船宿があります、其処へお入来なされば宜しいと云う。抑もこの事を態々鉄屋に聞かねばならぬと云うのは、実はその時私の懐中に金がない。内から呉れた金が一步もあつたか、その外に和蘭の字引の訳鍵と云う本を売て、掻集めた所で二朱か三朱しかない。それで大阪まで行くには如何しても船賃が足らぬと云う見込だから、そこで一寸と船宿の名を聞て置て、夫れから鉄屋に別れて、諫早から丸木船と云う船

が天草あまくさの海を渡る。五百八十文もん出してその船に乗れば明日あしたの朝佐賀まで着くと云うので、その船に乗のつた所が、浪風なみかぜなく朝佐賀に着て、佐賀から歩いたが、案内もなければ何もなく真実どう一身体、道筋の村の名も知らず宿しゆくじゆく々の順も知らずに、唯東ただの方に向て、小倉こくらには如何どう行くかと道を聞て、筑前を通り抜けて、多分太宰府だざいふの近所を通つたろうと思います

が、小倉には三日めに着た。

贗手紙を作るその間あいだの道中と云うものは随分困りました。一人旅、殊ことに何処どこの者とも知れぬ貧乏そうな若侍、若もし行倒ゆきだおれになるか暴れでもすれば宿屋が迷惑するから容易に泊めない。もう宿の善悪よしあしは忖えらぶに暇なく、只泊めて呉れさえすれば宜しいと云うので無暗むやみに歩行あるいて、何か斯どうか二晩泊つて三日目に小倉に着きました。その道中で私は手紙を書いてすなわすなわくろがねや即ち鉄屋惣兵衛の贗手紙にせを拵こしらえて、「この御方おかたは中津の御家中、中村何様の若旦那で、自分は始終そのお屋敷に出入して決して間違まちがなき御方おんかただから厚く頼むと鹿爪しかづめらしく手紙の文句で、下ノ関船場屋寿久右衛門へ宛て鉄屋惣兵衛の名前を書いてちゃんと封をして、明日あす下ノ関に渡あすてこの手紙を用もちに立てんと思ひ、小倉こくらまでたどり付て泊つた時はおかしかった。彼方あつちこつち此方マゴマゴして、小倉中、宿を捜さがしたが、何処どこでも泊めない。ヤツト一軒泊めて呉くれた所が薄汚ない宿屋で、相宿あいやどの同間どうまに人が寝て居る。スルト夜半よなかに枕まくら

辺^{もと}で小便する音がする。何だと思うと中^{ちゅう}風^{ふう}病^{やみ}の老^お爺^{やじ}が、しびんに遣^{やつ}てる。実は客ではない、その家の病人でしょう。その病人と並べて寝かされたので、汚^たくて堪^{たま}らなかったのは能^よく覺^よえて居^ゐます。

それから下ノ関の渡^{わた}場^{しば}を渡^{わた}て、船^{せん}場^ば屋^やを搜^{さが}し出して、兼^{かつ}て用意^{ようい}の贖^{にせ}手^て紙^しを持^もつて行^いつた所^{ところ}が、成^{なる}程^{ほど}鉄^{くろ}屋^{ろがねや}とは懇^{こん}意^いな家^けと見^みえる、手^て紙^しを一^{いち}見^みして早^{さつ}速^{そく}泊^{ぱく}めて呉^くれて、万^{まん}事^じ能^よく世^せ話^わをして呉^くれて、大阪^{おさか}まで船^{せん}賃^{ちん}が一^{いち}分^{ぶん}二^に朱^{しゆ}、賄^いの代^{だい}は一^{いち}日^{にち}若^わ干^{かん}、ソコで船^{せん}賃^{ちん}を払^はうた外^{ほか}に二^に百^{ひゃく}文^{ぶん}か三^{さん}百^{ひゃく}文^{ぶん}しか残^{のこ}らぬ。併^{しか}し大阪^{おさか}に行^いけば中^{ちゅう}津^{しん}の倉^{くら}屋^や敷^{しき}で賄^いの代^{だい}を払^はう事^{こと}にして、是^これも船^ふ宿^{なやど}で心^{こころ}能^よく承^{しやう}知^ちして呉^くれる。悪^{あく}い事^{こと}だが全^{ぜん}く贖^{にせ}手^て紙^しの功^{こう}徳^{とく}でしょう。

馬^{うま}関^{かん}の渡^{わた}海^{かい}小^{せう}倉^{くら}から下ノ関に船^{せん}で来^きる時^{とき}は怖^{こわ}い事^{こと}がありました。途^と中^{ちゅう}に出^いた所^{ところ}が少^{せう}し荒^あく風^{ふう}が吹^ふいて浪^{なみ}が立^たつて来^きた。スルトその纜^{つな}を引^ひ張^はつて呉^くれ、其^そ方^{はう}の処^{ところ}を如^{どう}何^{なに}して呉^くれと、船^{せん}頭^どが何^{なん}か騒^{さわ}ぎ立^たて乗^{のり}組^{ぐみ}の私^{わたし}に頼^{たの}むから、ヨシ来^きたと言^いうので纜^{つな}を引^ひ張^はたり柱^{はしら}を起^{おこ}したり、面^{めん}白^{はく}半^{はん}分^{ぶん}に様^{よう}々^々加^か勢^{せい}をして先^まず滞^{とど}りなく下ノ関の宿^{しゆく}に着^つて、「今日^{けふ}の船^{せん}は如^{どう}何^{なに}したのか、斯^こう云^いう浪^{なみ}風^{かぜ}で、斯^こう云^いう目^めに遇^あつた、潮^{しほ}を冠^{かぶ}つて着^き物^{もの}が濡^ぬれたと云^いうと、宿^{しゆく}の内^{うち}儀^ぎさんか「それはお危^あない事^{こと}じや、彼^あれが船^{せん}頭^どなら宜^よいが実^{じつ}は百^{ひゃく}姓^{せい}です。この節^{ふし}暇^まなものですから内^{うち}職^{しやく}にそん^{そん}な事^{こと}をしま^しす。百^{ひゃく}姓^{せい}が農^{のう}業^{ぎやう}の間^{あいだ}に慣^なれぬ事^{こと}をするから、少^{せう}し浪^{なみ}風^{ふう}が

あると毎度大きな間違いを仕出来しますと云うのを聞いて、実に怖かった。成程奴等が一生懸命になつて私に加勢を頼んだのも道理だと思ひました。

馬関より乗船夫れから船場屋寿久右衛門の処から乗た船には、三月の事で皆上方見物、

夫れはく種々様々な奴が乗て居る。間拔けな若旦那も乗て居れば、頭の禿た老爺も乗

て居る、上方辺の茶屋女も居れば、下ノ関の安女郎も居る。坊主も、百姓も、有ら

ん限りの動物が揃うて、其奴等が狭い船の中で、酒を飲み、博奕をする。下らぬ事に大き

な声をして、聞かれぬ話をして、面白そうにしてる中に、私一人は眞実無言、丸で取付

端がない。船は安芸の宮島へ着た。私は宮島に用はない。唯来たから唯島を見に上る。

外の連中はお互に朋友だから宜いだらう。皆酒を飲む。私も飲みたくて堪らぬけれど

も、金がないから只宮島を見たばかりで、船に帰て来てむしやく船の飯を喰てるから、

船頭もこんな客は忌やだらう、妙な顔をして私を睨んで居たのは今でも覚えて居る。そ

の前に岩国の錦帯橋も余儀なく見物して、夫れから宮島を出て讃岐の金比羅様だ。多度

津に船が着て金比羅まで三里と云う。行きたくないことはないが、金がないから行かれな

い。外の奴は皆船から出て行て、私一人で船の番をして居る。爾うすると一晩泊て、ど

いつもこいつもグデン／＼に酔て陽気になつて帰て来る。癪に障るけれども何としても仕

様がない。

明石より上陸爾う云う不愉快な船中で、如何やら斯うやら十五日目に播州明石に着た。朝五ツ時、今の八時頃、明旦順風になれば船が出ると云う、けれどもコンナ連中のお供をしては際限がない。是れから大阪までは何里と聞けば、十五里と云う。「ヨシ、それじや乃公は是れから大阪まで歩いて行く。就ては是迄の勘定は、大阪に着たら中津の倉屋敷まで取りに來い、この荷物だけは預けて行くからと云うと、船頭が中々聞かない。「爾う旨くは行かぬ、一切勘定を払て行けと云う。云われても払う金は懷中にない。その時に私は更紗の着物と絹細の着物と二枚あつて、それを風呂敷に包んで持て居るから、「茲に着物が二枚ある、是れで賄の代位はあるだろう、外に書籍もあるが、是れは何にもならぬ。この着物を売ればその位の金にはなるではないか。大小を預ければ宜いが、是れは挟して行かねばならぬ。何時でも宜しい、船が大阪に着次第に中津屋敷で払て遣るから取りに來いと云うも、船頭は頑張て承知しない。「中津屋敷は知てるが、お前さんは知らぬ人じや。何でも船に乗て行きなさい。賄の代金は大阪で請取ると云う約束がしてあるからそれは宜しい。何日掛ても構わぬ、途中から上ることは出来ぬと云う。此方は只管頼むと小さくなつて訳けを云えば、船頭は何でも聞かぬと剛情を張て段々声が大きくなる。

喧嘩にもならず実に当惑して居た処に、同船中、下ノ関の商人風の男が出て来て、乃公が請合うと先ず発言して船頭に向い、「コレお前も爾う、いんごうな事を云うものじゃない。賄代の抵当に着物があるじゃないか。このお方はお侍じゃ、貴様達を騙す所存ではないように見受ける。若し騙したら乃公が払う、サアお上りなさいと云て、船頭も是れに安心して無理も云わず、ソレカラ私はその下ノ関の男に厚く礼を述べて船を飛出し、地獄に仏と心の中にこの男を拝みました。

そこで明石から大阪まで十五里の間と云うものは、私は泊ることが出来ぬ。財布の中はモウ六、七十文、百に足らぬ錢で連も一晚泊することは出来ぬから、何でも歩かなければならぬ。途中何と云う処か知らぬが、左側の茶店で、一合十四文の酒を二合飲んで、大きな筍の煮たのを一皿と、飯を四、五杯喰て、夫れからグン／＼歩いて、今の神戸辺は先だか後だか、どう通たか少しも分らぬ。爾うして大阪近くなると、今の鉄道の道らしい川を幾川も渡って、有難い事にお侍だから船賃は只で宜かったが、日は暮れて暗夜で真暗、人に逢わなければ道を聞くことが出来ず、夜中淋しい処で変な奴に逢えば却て氣味が悪い。その時私の指してる大小は、脇差は祐定の丈夫な身であつたが、刀は太刀作りの細身でどうも役に立ちそうでなくて心細かつた。実を云えば大阪近在に人殺しの無

暗^{やみ}に出る訳^{わけ}もない、ソナに怖^{おそ}がる事はない筈^{はず}だが、独旅^{ひとり}の夜道、真暗^{まぐら}ではあるし臆^{おく}病^{やうがみ}神^{かみ}が付^ついてるから、ツイ腰^{こし}の物を便^{べん}りにするやうな氣になる。後^{あと}で考^{かん}えれば却^{かえ}て危^きない事だと思^{おも}う。ソレカラ始^し終^{しゆう}道^{どう}を聞^きくには、幼少^{ようせう}の時^{とき}から中津^{なかつ}の倉屋敷^{くらやしき}は大^{どう}阪^{はん}堂^{どう}島^{じま}玉^{たま}江^え橋^{はし}と云^いうことを知^してゐるから、唯^{ただ}大^{だい}阪^{はん}の玉^{たま}江^え橋^{はし}へはどう行^いくかとばかり尋^{たず}ねて、ヤツト夜^よ十^{じゅう}時^じ過^かぎでもあろう、中津^{なかつ}屋敷^{やしき}に着^つて兄^{あつ}に逢^あつたが、大^{だい}変^{へん}に足^{あし}が痛^{いた}かつた。

大^{だい}阪^{はん}着^{ちやく}大^{だい}阪^{はん}に着^{ちやく}て久^{ひさ}振^{しぶり}で兄^{あつ}に逢^あうのみならず、屋敷^{やしき}の内外^{ないがい}に幼^こない時^{とき}から私^{わたし}を知^してゐる者^{もの}が沢^{たく}山^{さん}ある。私^{わたし}は三^{さん}歳^{さい}の時^{とき}に国^{くに}に帰^{かえ}て二^に十^{じゅう}二^に歳^{さい}に再^{また}び行^いつたのですから、私^{わたし}の生^うれた時^{とき}に知^してゐる者^{もの}は沢^{たく}山^{さん}。私^{わたし}の面^{かお}が何^{どこ}処^こか幼^お顔^{さな}に肖^にて居^ゐると云^いうその中^{うち}には、私^{わたし}に乳^{ちち}を吞^のまして呉^くれた仲^{なか}仕^しの内^{うち}儀^ぎさんもあれば、又^{また}今^{こん}度^ど兄^{あつ}の供^{とも}をして中津^{なかつ}から来^きて居^ゐる武^ぶ八^{はち}と云^いう極^{ごく}質^{しつ}朴^{ぱく}な田^{いな}舎^か男^{おとこ}は、先^い年^{ねん}も大^{だい}阪^{はん}の私^{わたし}の家^{いえ}に奉^{ほう}公^{こう}して私^{わたし}のお守^{もり}をした者^{もの}で、私^{わたし}が大^{だい}阪^{はん}に着^{ちやく}た翌^{あした}日^{にち}、この男^{おとこ}を連^れて堂^{どう}島^{じま}三^{さん}丁^{てい}目^{もく}か四^よ丁^{てい}目^{もく}の処^こを通^{とほ}ると、男^{おとこ}の云^いうに、お前^{まへ}の生^うれる時^{とき}に我^{われ}身^み夜^よ中^{ちゆう}にこの横^{よこ}町^{ちやう}の彼^あの産^う婆^ばさん^の処^こに迎^{むか}ひに行^いつたことがある、その産^う婆^ばさん^は今^{いま}も達^{たつ}者^{もの}にし居^ゐる、それからお前^{まへ}が段^{だん}々^{ぜん}大^{だい}きくなつて、此^{この}身^みお前^{まへ}をだいて毎^{まい}日^{にち}々^{ぜん}湊^{みなと}の部^ぶ屋^や（勧^{かん}進^{しん}元^{もと}）に相^あ撲^{ぱく}の稽^き古^こを見^みに行^いつた、その産^う婆^ばさん^の家^{うち}は彼^あ処^こじや湊^{みなと}の稽^き古^こ場^ばは此^{この}処^この方^{かた}じやと、指^さをさして見^みせたときには、私^{わたし}も旧^{むかし}を懷^{おも}うて胸^{むね}一^{いつ}杯^{はい}になつて思^{おも}わす涙^{なみだ}をこぼし

ました。都て如斯な訳けで私はどうも旅とは思われぬ、真実故郷に帰た通りで誠に宜い心
ころもち
地。それから兄が私に如何して貴様は出し抜けに此処に來たのかという。兄の事であ
るから構わず斯う云う次第で参りましたと云たら、「乃公が居なければ宜いが、道の順序
を云て見れば貴様は長崎から來るのに中津の方が順路だ。その中津を横に見ておッ母さん
の処を避て來たではないか。それも乃公が此処に居なければ兎も角、乃公が此処で貴様に
面会しながら之を手放して江戸に行けと云えば兄弟共謀だ。如何にも済まぬではないか。
おッ母さんは夫程に思わぬだろうが、如何しても乃公が済まぬ。それよりか大阪でも先
生がありそうなものじや、大阪で蘭学を学ぶが宜いと云うので、兄の処に居て先生を捜し
たら緒方と云う先生のある事を聞出した。

長崎遊学中の逸事鄙事多能は私の独得、長崎に居る間は山本先生の家、食客生と為
り、無暗に勉強して蘭学も漸く方角の分るようになるその片手に、有らん限り先生家の家
事を勤めて、上中下の仕事なんでも引請けて、是れは出来ない、其れは忌だと云たことは
ない。丁度上方辺の大地震のとき、私は先生家の息子に漢書の素読をして遣た跡で、
表の井戸端で水を汲んで、大きな荷桶を担いで一足跡出すその途端にガタ／＼と動揺
て足が滑り、誠に危ない事がありました。

寺の和尚、今は既に物故したそうですが、是れは東本願寺の末寺、光永寺と申して、下寺の三ヶ寺も持て居る先ず長崎では名のある大寺、その和尚が京に上つて何か立身して歸て来て、長崎の奉行所に廻勤に行くその若党に雇われてお供をした所が、和尚が馬鹿に長い衣か装束か妙なものを着て居て、奉行所の門で駕籠を出ると、私が後からその裾を持てシツ／＼と附いて歩いて行く。吹出しそうに可笑しい。又その和尚が正月になると大檀那の家に年礼に行くそのお供をすれば、坊さんが奥で酒でも飲でる供待の間に、供の者にも膳を出して雑煮など喰わせる。是れは難有く戴きました。又節分に物貰いをしたこともある。長崎の風に、節分の晩に法螺の貝を吹て何か経文のような事を怒鳴つて廻わる、東京で云えば厄払い、その厄払をして市中の家の門に立てば、銭を呉れたり米を呉れたりすることがある。所が私の居る山本の隣家に杉山松三郎（杉山徳三郎の実兄）と云う若い男があつて、面白い人物。「どうだ今夜行こうじゃないかと私を誘うから、勿論同意。ソレカラ何処かで法螺の貝を借りて来て、面を隠して二人で出掛けて、杉山が貝を吹く、お経の文句は、私が少年の時に暗誦して居た蒙求の表題と千字文で請持ち、王戎簡要天地玄黄なんぞ出鱈目に怒鳴り立て、誠に上首尾、銭だの米だの随分相應に貰て来て、餅を買い鴨を買い雑煮を拵え

てタラフク喰^くた事がある。

師弟アベコベ私が始めて長崎に来て始めて横文字を習うと云うときに、薩州の医学生に松^ま崎^{つぎ}鼎^{てい}甫^ふと云う人がある。その時に藩主薩摩^{さつまのかみ}守は名高い西洋流の人物で、藩中の医者な
どに蘭学を引立て、松崎も蘭学修業を命ぜられて長崎に出て来て下宿屋に居るから、その
人に頼んで教えて貰^{もら}うが宜^よかろうと云うので行^いた所が、松崎が^{ロウ}を書いて仮名を附けて
呉^くれたのには先^まず驚いた。是^これが文字とは合^が点^{てん}が行^ゆかぬ。二十何字を覚^{なんじ}えて仕舞^{しま}うにも余
程^か手間^{かつ}が掛^かたが、学べば進むの道理で、次第々々に蘭語の綴^{つづり}も分^{わか}るようになって来た。ソ
コデ松崎と云う先生の人^{にん}相^{そう}を見て応^お対^{たい}の様^{よう}子を察^{さつ}するに、決^{けつ}して絶倫の才子でない。依^よ
て私の心中^{ひそか}窃^{せき}に、「是^これは高^{たか}の知^ちれた人物だ。今でも漢書を読^{よん}で見^みろ、自分の方が数等上
流^{りゅう}の先生だ。漢蘭^{ひと}等^{どう}しく字^じを読^よみ義^ぎを解^{かい}することゝすれば、左^さまでこの先生を恐^{おそ}るゝこと
はない。如何^{どう}かしてアベコベにこの男に蘭書を教^{おし}えて呉^くれたいものだ」と、生^{なま}々^{なま}の初学生
が無鉄砲な野心を起したのは全く少年の血氣に違^{ちが}ひない。ソレはそれとしてその後私は大
阪^{あいだ}に行き、是れまで長崎で一年も勉強して居^ゐたから緒方でも上達^{すこぶ}が頗^{すこ}る速^{すみ}くて、両三年の
間^{あいだ}に同窓生八、九十人の上に頭角^{あたま}を現^{あら}わした。所^{ところ}が人事^{じんじ}の廻^{まわ}り合せは不思議なもので、そ
の松崎と云う男が九州から出て来て緒方の塾^はに這^{はい}入り、私はその時ズット上級で、下級生

の会頭かいとうをして居るその会談かいだんに、松崎も出席することになって、三、四年あいだの間に今昔こんせきの師弟アベコベ。私の無鉄砲な野心が本當な事になって、固もとより人には云いわれず、又云うべきことでないから黙だまつて居たが、その時の愉快は堪たまらない。独ひとり酒を飲のんで得意がつて居ました。左されば軍人の功名こうみょう手柄、政治家の立身出世、金持の財産蓄積いずなんぞ、孰いずれも熱心で、一寸ちよいと見ると俗なようで、深く考えると馬鹿ばかなように見えるが、決して笑うことはない。ソナ事を議論したり理窟りくを述べたりする学者も、矢張やはり同じことで、世間並なみに俗な馬鹿毛ばかげた野心があるから可笑おかしい。

大阪修業

兄の申すことには私も逆さからうことが出来ず、大阪に足を止とめまして、緒方先生おがたの塾に入門したのは安政二年卯歳うとしの三月でした。その前長崎に居る時には勿論もちろん蘭学の稽古うちをしたので、その稽古をした所は櫛ならばやし林やしと云う和蘭通詞オランダつうじの家、同じく櫛林うちと云う医者うちの家、それから石川桜所いしかわおうしよと云う蘭法らんぽう医師、この人は長崎に開業して居て立派な門戸はっを張はて居る大家たいかであるから、中々入門することは出来ない。ソコで其処そこの玄関いっに行いて調合所ちようごうじよ

の人などに習つて居たので、爾そう云うように彼方あち此方こちにちよいくと教えて呉くれるような人があれば其処そこへ行く。何処どこの何某なにがしに便り誰の門人になつてミツチリ蘭書らんしょを読よんだと云うことはないので、ソコで大阪に来て緒方に入門したのは是これが本当に蘭学修業の始まり、始めて規則正しく書物を教えて貰もらいました。その時にも私は学業の進歩が随分速くて、塾中には大勢おおぜい書生があるけれども、その中ではマア出来の宜よい方であつたと思う。

兄弟共に病氣ソコで安政二年も終り三年の春になると、新春早々茲ここに大なる不仕合ふしあわせな事が起つて来たと申すは、大阪の倉屋敷に勤番中の兄が儂麻質斯リユーマチスに罹かかり病症が甚はなはだ輕くないトウ／＼手足も叶かなわぬと云う程になつて、追々おいおい全快するが如く全快せざるが如くして居る間に、右の手は使うことが出来ずに左の手に筆もつて書くと云うような容体ようだい。ソレと同時にその歳の二月頃であつたが、緒方の塾の同窓、私の先輩で、予て世話になつて居た加州の岸直輔きしなおすけと云う人が、腸窒扶斯ちようぢふすに罹つて中々の難症すずきぎろく。ソコで私は平生の恩人だから、コンナ時に看病しなければならぬ。又加州の書生に鈴木儀六と云う者があつて、是れこも岸と同国の縁で、私と鈴木と兩人、昼夜看病して、凡そ三週間も手を尽したけれども、如何どうしても悪症でとう／＼助からぬ。一体この人は加賀人で宗旨は真宗だから、火葬もつにしてその遺骨を親元おくつに送て遣やらうと兩人相談の上、遺骸を大阪の千日せんにちの火葬場もつに持もつて行いて

焼て、骨を本国に送り、先ず事は済んだ所が、私が千日から歸て三、四日経つとヒヨイと煩い付た。容体がドウも只の風邪でない。熱があり気分が甚だ悪い。ソコで私の同窓生は皆医者だから、誰かに見て貰た所が、是れは腸窒扶斯だ、岸の熱病が伝染したのだと云て居る間に、その事が先生に聞えて、その時私は堂嶋の倉屋敷の長屋に寝て居た所が、先生が見舞に見えまして、愈よ腸窒扶斯に違いない、本当に療治しなければ是れは馬鹿にならぬ病氣であると言う。

緒方先生の深切夫れから私はその時に今にも忘れぬ事のあると言うのは、緒方先生の深切。「乃公はお前の病氣を屹と診て遣る。診て遣るけれども乃公が自分で処方することは出来ない。何分にも迷うて仕舞う。此の薬彼の薬と迷うて、後になつて爾うでもなかったと云て又薬の加減をすると云うような訳で、仕舞には何の療治をしたか訳が分らぬようになる」と云うのは人情の免れぬ事であるから、病は診て遣るが執匙は外の医者に頼む。そのつもりにして居れと云て、先生の朋友、梶木町の内藤数馬と云う医者に執匙を託し、内藤の家から薬を貰て、先生は只毎日来て容体を診て病中の摂生法を指図するだけであつた。マア今日の学校とか学塾とか云うものは、人数も多く逆も手に及ばない事で、その師弟の間は自から公なものになつて居る、けれども昔の学塾の師弟は正しく親子の通り、緒

方先生が私の病を見て、どうも藥を授るに迷うと云うのは、自分の家の子供を療治して遣るに迷うと同じ事で、その扱は実子と少しも違わない有様であつた。後世段々に世が開けて進んで来たならば、こんな事はなくなつて仕舞ましよう。私が緒方の塾に居た時の心地は、今の日本國中の塾生に較べて見て大變に違ふ。私は眞実緒方の家の者のように思い又思はずには居られません。ソレカラ唯今申す通り実父同様の緒方先生が立会で、内藤数馬先生の執匙で有らん限りの療治をして貰いましたが、私の病氣も中々輕くない。煩い付て四、五日目から人事不省、凡そ一週間ばかりは何も知らない程の容体でしたが、幸にして全快に及び、衰弱はして居ましたれども、歳は若し、平生身体の強壯なその為めでしょう、恢復は中々早い。モウ四月になつたら外に出て歩くようになり、その間に兄は儂麻質斯を煩て居り、私は熱病の大病後である、如何にも始末が付かない。兄弟中津に歸るその中に丁度兄の年期と云うものがあつて、二ヶ年居れば國に歸ると云う約束で、今年の夏が二年目になり、私も亦病後大阪に居て書物など読むことも出来ず、兎に角に歸國が宜かろうと云うので、兄弟一緒に船に乗て中津に歸つたのがその歳の五、六月頃と思う。所が私は病後ではあるが日々に恢復して、兄の儂麻質斯も全快には及ばないけれども別段に危険な病症でもない。夫れでは私は又大阪に参りましよう云て出た

のがその歳、即ち安政三年の八月。モウその時は病後とは云われませぬ、中々元気が能く
て、大阪に着たその時に、私は中津屋敷の空長屋を借用して独居自炊、即ち土鍋で飯を
焚て喰て、毎日朝から夕刻まで緒方の塾に通学して居ました。

家兄の不幸再遊困難所が又不幸な話で、九月の十日頃であつたと思う。国から手紙が来て、
九月三日に兄が病死したから即刻歸て来いと云う急報。どうも驚いたけれども仕方がない。
取るものも取り敢えずスグ船に乗て、この度は誠に順風で、速に中津の港に着て、家に歸
て見ればモウ葬式は勿論、何も斯も片が付て仕舞た後の事で、ソレカラ私は叔父の処の
養子になつて居た、所が自分の本家、即ち里の主人が死亡して、娘が一人あれども女の子
では家督相続は出来ない、是れは弟が相続する、当然の順序だと云うので、親類相談
の上、私は知らぬ間にチャント福澤の主人になつて居て、当人の帰国を待て相談なんと云
うことはありはしない。貴様は福澤の主人になつたと知らせて呉れる位の事だ。扱てその
跡を襲だ以上は、実は兄でも親だから、五十日の忌服を勤めねばならぬ。夫れから家督相
続と云えば其れ相応の勤がなくてはならぬ、藩中小士族相応の勤を命ぜられて居る、けれ
ども私の心と云うものは天外万里、何もかも浮足になつて一寸とも落付かぬ。何とし
ても中津に居ようなど云うことは思いも寄らぬ事であるけれども、藩の正式に依ればチャ

ント勤をしなければならぬから、その命を拒むことは出来ない。唯言行を謹み、何と云わ
れてもハイ／＼と答えて勤めて居ました。自分の内心には如何しても再遊と決して居るけ
れども、周囲の有様と云うものは中々寄付かれもしない。藩中一般の説は姑く差措き、近
い親類の者までも西洋は大嫌で、何事も話し出すことが出来ない。ソコで私に叔父が
あるから、其処に行て何か話をして、序ながら夫れとなく再遊の事を少しばかり言掛けて
見ると、夫れは／＼恐ろしい剣幕で頭から叱られた。「怪からぬ事を申すではないか。兄
の不幸で貴様が家督相続した上は、御奉公大事に勤をする筈のものだ。ソレに和蘭の学
問とは何たる心得違いか、呆返った話だとか何とか叱られたその言葉の中に、叔父
が私を冷かして、貴様のような奴は負角力の瘡斃と云うものじやと苦々しく睨み付
けたのは、身の程知らずと云う意味でしょう。逆も叔父さんに賛成して貰おうと云うこと
は出来そうにもしないが、私が心に思つて居れば自から口の端にも出る。出れば狭い所だ
から直ぐ分る。近処辺りに何処となく評判する。平生私の処に能く来るお婆さんがあ
つて、私の母より少し年長のお婆さんで、お八重さんと云う人。今でも其の人の面を覚え
て居る。つい向うのお婆さんで、或るとき私方に来て、「何か聞けば諭吉さんは又大阪に
行くと云う話じやが、マサカお順さん（私の母）そんな事はさせなさらんじやろう、再び

出すなんと云うのはお前さんは気が違うて居はせぬかと云うような、世間一般先ずソナ風で、その時の私の身の上を申せば、寄辺汀の捨小舟、まるで唄の文句のようだ。

母と直談ソコデ私は独り考えた。「是れは逆も仕様がな。唯頼む所は母一人だ。母さえ承知して呉れば誰が何と云うても怖い者はないと。ソレカラ私は母にとつくり話した。

「おツ母さん。今私が修業して居るのは斯う云う有様、斯う云う塩梅で、長崎から大阪に行て修業して居ります。自分で考えるには、如何しても修業は出来て何か物になるだろうと思う。この藩に居た所が何としても頭の上の氣遣はない。真に朽果つると云うものだ。どんな事があつても私は中津で朽果てようとは思いません。アナタはお淋しいだろうけれども、何卒私を手放して下さらぬか。私の産れたときにお父ツさんは坊主になると仰しやつたそうですから、私は今から寺の小僧になったと諦めて下さい」。その時私が出れば、母と死んだ兄の娘、産れて三つになる女の子と五十有余の老母と唯の二人で、淋しい心細いに違いないけれども、とつくり話して、「どうぞ二人で留主をして下さい、私は大阪に行くから」と云たら、母も中々思切りの宜い性質で、「ウム宜しい。「アナタさえ左様云て下されば、誰が何と云ても怖いことはない。「オーそうとも。兄が死んだけれども、死んだものは仕方がない。お前も亦余所に出て死ぬかも知れぬが、死生の事は一切

言うことなし。何処へでも出て行きなさい」。ソコデ母子の間と云うものはちゃんと魂胆が出来て仕舞て、ソレカラ愈よ出ようと云うことになる。

四十兩の借金家財を売る出るには金の始末をしなければならぬ。その金の始末と云うのは、兄の病氣や勤番中の其れ是れの入費、凡そ四十兩借金がある。この四十兩と云うものは、その時代に私などの家に取ては途方心ない大借。これをこの儘にして置ては逆も始末が付かぬから、何でも片付けなければならぬ。如何しよう。外に仕方がない。何でも売るのだ。一切万物売るより外なしと考えて、聊か頼みがあると云うのは、私の父は学者であつたから、藩中では中々蔵書を持て居る。凡そ冊数にして千五百冊ばかりもあつて、中には随分世間に類の少ない本もある。例えば私の名を諭吉と云うその諭の字は天保五年十二月十二日の夜、私が誕生したその日に、父が多年所望して居た明律の上諭条例と云う全部六、七十冊ばかりの唐本を買取て、大造喜んで居る処に、その夜男子が生して重ね／＼の喜びと云う所から、その上諭の諭の字を取て私の名にしたと母から聞いた事がある位で、随分珍らしい漢書があつたけれども、母と相談の上、蔵書を始めて、一切の物を売却しようと云うことになって、先ず手近な物から売れるだけ売ろうと云うので、軸物のような物から売り始めて、目ぼしい物を申せば頼山陽の半切の掛物を

金二分に売り、大雅堂の柳下人物の掛物を二両二分、徂徠の書、東涯の書もあつたが、誠に値がない、見るに足らぬ。その他はごたくした雑物ばかり。覚えて居るのは大雅堂と山陽。刀は天正祐定二尺五寸拵付、能く出来たもので四両。ソレカラ蔵書だ。中津の人で買う者はありはせぬ。如何したって何十両と云う金を出す藩士はありはせぬ。所で私の先生、白石と云う漢学の先生が、藩で何か議論をして中津を追出されて豊後の臼杵藩の儒者になつて居たから、この先生に便つて行けば売れるだろうと思つて、臼杵まで態々出掛けて行て、先生に話をした処が、先生の世話で残らずの蔵書を代金十五両で臼杵藩に買貰い、先ず一口に大金十五両が手に入り、その他有らん限り皿も茶碗も丼も猪口も一切売て、漸く四十両の金が揃い、その金で借金は奇麗に済だが、その蔵書中に易経集註十三冊に伊藤東涯先生が自筆で細々と書入をした見事なものがある。是れは亡父が存命中大阪で買取殊の外珍重したものと見え、蔵書目録に父の筆を以て、この東涯先生書入の易経十三冊は天下稀有の書なり、子孫謹で福澤の家に蔵むべしと、恰も遺言のようなことが書いてある。私も之を見ては何としても売ることが出来ません。是れ丈けはと思つて残して置たその十三冊は今でも私の家にあります。夫れと今に残つて居るのは唐焼の丼が二つある。是れは例の雑物売、弘のとき道具屋が直

を付けて并二つ三分と云うその三分とは中津の藩札で錢にすれば十八文のことだ。余り馬鹿々々しい、十八文ばかり有ても無くても同じことだと思つて売らなかつたのが、その後四十何年無事で、今は筆洗になつて居るのも可笑しい。

築城書を盗写す夫れは夫れとして、私が今度不幸で中津に歸て居るその間に一つ仕事をしました、と云うのはその時に奥平壹岐と云う人が長崎から歸て居たから、勿論私は御機嫌伺に出なければならぬ。或日奥平の屋敷に推参して久々の面会、四方山の話の序に、主人公が一冊の原書を出して、「この本は乃公が長崎から持て来た和蘭新版の築城書であると云うその書を見た所が、勿論私などは大阪に居ても緒方の塾は医学塾であるから、医書、窮理書の外に遂ぞそんな原書を見たことはないから、随分珍書だと先ず私は感心しなければならぬ、と云うのはその時は丁度ペルリ渡来の当分で、日本國中、海防軍備の話が中々喧しいその最中に、この築城書を見せられたから誠に珍しく感じて、その原書が読で見たくて堪らない。けれども是れは貸せと云た所が貸す氣遣はない。夫れからマア色々話をする中に、主人が「この原書は安く買つた。二十三両で買えたから」なると云うたのには、実に貧書生の胆を潰すばかり。逆も自分に買うことは出来ず、左ればとてゆるりと貸す氣遣はないのだから、私は唯原書を眺めて心の底で独り貧乏を歎息して

居るその中に、ヒヨイと胸に浮んだ一策を遣て見た。「成程是れは結構な原書で御在ます。迎も之を讀で仕舞うと云うことは急な事では出来ません。責めては図と目録とでも一通り拝見したいものですが、四、五日拝借は叶いますまいかと手輕に觸つて見たらば、「よし貸そう」と云て貸して呉れたこそ天与の僥倖、ソレカラ私は家に持て歸て、即刻驚筆と墨と紙を用意してその原書を初から写掛けた。凡そ二百頁余のものであつたと思う。それを写すに就ては誰にも言われぬのは勿論、写す処を人に見られては大変だ。家の奥の方に引込んで一切客に遇わずに、昼夜精切り一杯、根のあらん限り写した。そのとき私は藩の御用で城の門の番をする勤があつて、二、三日目に一昼夜当番する順になるから、その時には昼は写本を休み、夜になれば窃と写物を持出して、朝、城門の明くまで写して、一目も眠らないのは毎度のことだが、又この通りに勉強しても、人間世界は壁に耳あり眼もあり、既に人に悟られて今にも原書を返せとか何とか云て来はしないだろうか、いよく露顯すれば唯原書を返したばかりでは済まぬ、御家老様の劍幕で中々六かしくなるだろうと思えば、その心配は堪らない。生れてから泥坊をしたことはないが、泥坊の心配も大抵こんなものであらうと推察しながら、とう／＼写し終りて、図が二枚あるその図も写して仕舞て、サア出来上つた。出来上つたが読合せに困る。是れが出来な

くては大変だと云うと、妙な事もあるもので、中津に和蘭オランダのスペルリングの読めるものが只ただ一人ある。それは藤野啓山ふじのけいざんと云う医者で、この人は甚はなだ私の処はなに縁がある、と云うのは私の父が大阪に居る時に、啓山が医者いしやの書生で、私の家うちに寄宿して、母も常に世話をして遣やつたと云う縁故からして、固もとより信じられる人に違ちがいしないと見抜いて、私は藤野の処はなに行て、「大秘密だいひみつをお前に語るが、実は斯こうく云うことで、奥平の原書を写して仕舞た。所が困るのはその読合せだが、お前はどうか原書を見て居て呉くれぬか、私が写したのを読むから。実は昼遣やりたいが、昼は出来られない。ヒヨツと分わかつては大変だから、夜分私が来るから御苦労だが見て居て呉くれよと頼んだら、藤野が宜よろしいと快く請合うけあつて呉れて、ソレカラ私は其処そこの家に三晩か四晩読よみ合せあわせて行て、ソツクリ出来て仕舞しまつた。モウ連れんじよ城うの壁たまを手握とつたようなもので、夫それから原書は大事にしてあるから如何どうにも氣遣きづかいはない。しらばくれて奥平壹岐おくだいらいきの家に行て、「誠に難有ありがとうございます。お蔭で始めてこんな兵書を見ました。斯こう云う新舶来の原書が翻訳にでもなりましたら、嘸さぞマア海防家には有益の事でありましょう。併しかしこんな結構なものは貧書生の手に得らるゝものでない。有ありがと難なうございました。返上致しますと云て奇麗に済んだのは嬉しかった。この書を写すに幾日かゝつたか能く覺えないが、何でも二十日以上三十日足らずの間に写して仕舞しまうて、

原書の主人に毛頭もうとう疑うような顔がんしよく色もなく、マンマとその宝物ほうもつの正味しょうみを偷ぬすみ取とつて私の物にしたのは、悪漢わるものが宝蔵に忍び入いったようだ。

医家に砲術修業の願書その時に母が、「お前は何かをするのか。そんなに毎晩夜を更ふかして碌ろくに寝ねもしないじゃないか。何の事だ。風邪かぜでも引くと宜よくない。勉強にも程のあつたものだやかまと喧やしく云う。「なあに、おツ母かさん、大丈夫だ。私は写本をして居るのです。この位の事くらゐで私の身体からだは何ともなるものじゃない。御安心下さい。決して煩わづらいはしませぬと云うたことがあります。ソレカラ愈いよ大阪に出ようとすると、茲ここに可笑おかしい事がある。今度出るには藩に願書を出さなければならぬ。可笑しいとも何とも云いようがない。是れこゝまで私は部屋住へやずみだから外ほかに出るからと云て届とどけねがい、願いも要いらぬ、颯々さつさつと出入でいりしたが、今度は仮初かりそめにも一家の主人であるから願書を出さなければならぬ。夫れから私は兼かねて母との相談が済んで居いるから、叔父おじにも叔母おばにも相談は要りはしない。出拔だしぬけに蘭学の修業に参りたいと願書を出すと、懇意なその筋の人が内々ないない知らせて呉くれるに、「それはイケない。蘭学修業と云うことは御家おいえに先例のない事だと云う。「そんなら如何どうすれば宜よいかと尋ねば、「左様さようさ。砲術修業と書いたならば済むだろうと云う。「けれども緒方おがたと云えば大阪の開業医師だ。お医者様の処に鉄砲を習いに行くと云うのは、世の中に余り例のない事の

ように思われる。是れこそ却て不都合な話ではござらぬか。「イヤ、それは何としても御例のない事は仕方がない。事実相違しても宜しいから、矢張り砲術修業でなければ済まぬと云うから、「エー宜しい。如何でも為ましよう」と云て、ソレカラ私儀大阪表緒方洪庵の許に砲術修業に罷越したい云々と願書を出して聞濟になつて、大阪に出るこゝになつた。大抵当時の世の中の塩梅式が分るであろう、と云うのは是れは必ずしも中津一藩に限らず、日本国中悉く漢学の世の中で、西洋流など云うことは仮初にも通用しない。俗に云う鼻掴みの世の中に、唯ベルリ渡来的一条が人心を動かして、砲術だけは西洋流儀にしなければならぬと、云わば一線の血路が開けて、ソコで砲術修業の願書で穩に事が済んだのです。

母の病氣願が済んで愈よ船に乗て出掛けようとする時に母の病氣、誠に困りました。ソレカラ私は一生懸命、此の医者を頼み彼の医者に相談、様々に介抱した所が虫だと云う。虫なれば如何なる薬が一番の良剤かと医者のお話を聞くと、その時にはまだサントニーネと云うものはない、セメンシーナが妙薬だと云う。この薬は至極価の高い薬で田舎の薬店には容易にない。中津に只た一軒ある計りだけれども、母の病氣に薬の価が高いの安いのと云て居られぬ。私は今こそ借金を払つた後でなけなしの金を何でも二朱か一歩出して、その

セメンシーナを買かつて母に服用もつさせて、其それが利きいたのか何か分わからぬ、田舎いなか医者い者の言うこと
も固もとより信しんずるに足たらず、私は唯ただ運うんを天てんに任たせて看病しやう大事だいじと昼夜番しややばんをして居ゐましたが、幸さいわい
に難症なんしやうでもなかつたと見みえて日数ひかずおよ凡およそ二週間ふたしゅうかんばかりで快はやくなりましたから、愈いよいよ大阪へ出
掛かけると日ひを定きめて、出しゅつ立たつのとき別わかれを惜おししみ無事むじを祈いのつて呉くれる者は母と姉とばかり、
知人朋友みおくり、見送みおくりは扱さて置き見向みむかう者ものもなし、逃にげるようにして船ふねに乗りましたが、兄あにの死
後あと、間まもなく家財けざいは残のこらず売う払はらうて諸道具しよどうぐもなければ金かねもなし、赤貧せきひん洗せんうが如ごとくにして、
他人たにんの来きて訪問おとずれて呉くれる者ものもなし、寂々せきせき寥々せきせきよりようよう、古寺ふるでら見みたような家いへに老母らうぼと
小こさい姪めいとタツタ二人残ふたりして出でて行くのですから、流石さすが磊落らいらく書生しよせいも是これには弱よわりました。
先生せんせいの大恩だいおん、緒方おがたの食客しやくとなる船中無事ふねちゆうむじ大阪おさかに着ついたのは宜よろしいが、唯ただ生なきて身み体たいが着ついた計はか
りで、扱さて修業しゆぎやうをすると云いう手当てあは何なんもない。ハテ如何どうしたものかと思おもつた所ところが仕方しかたがない。
何なにしろ先生せんせいの処いへ行いつてこの通り言いおうと思おもて、夫それから、大阪おさか着ちやくはその歳としの十一月頃じゅういちがつころと思おもう、
その足あしで緒方おがたへ行いつて、「私は兄あにの不幸ふこう、斯こうく云いう次第しだいで又また出でて参まゐりましたと先まず話わを
して、夫そから私は先生せんせいだからほんとうの親おやと同じ事ことで何も隠かくすことにはない、家うちの借金かりかねの始はじ
末はつ、家財けざいを売う払はらうた事ことから、一切いっけつ万まん事じ何なんもかも打明うちあけて、彼かの原書写本げんしやうほんの一条いっじょうまで真実まじつを
話わして、「実は斯こう云いう築城書ちやくじやうしよを盗ぬすみ写みうつしてこの通り持もつて参まゐりましたと云いつた所ところが、先生

は笑て、「爾うか、ソレは一寸との間に怪しからぬ悪い事をしたような又善い事をしたような事じゃ。何は扱置き貴様は大造見違えたように丈夫になった。」「左様で御在ます。身体は病後ですけれども、今歳の春大層御厄介になりましたその時の事はモウ覚えませぬ。元の通り丈夫になりました。」「それは結構だ。ソコデお前は一切聞て見ると如何しても学費のないと云うことは明白に分ったから、私が世話をして遣りたい、けれども外の書生に対して何かお前一人に鼻屑するようにあつては宜くない。待て。その原書は面白い。就ては乃公がお前に云付けてこの原書を訳させると、斯う云うことにしよう、そのつもりで居なさいと云て、ソレカラ私は緒方の食客生になつて、医者の家だから食客生と云うのは調合所の者より外にありはしませぬが、私は医者でなくて只翻譯と云う名義で医家の食客生になつて居るのだから、その意味は全く先生と奥方との恩恵好意のみ、實際に翻譯はしてもしなくても宜いのであるけれども、嘘から出た誠で、私はその原書を翻譯して仕舞いました。

書生の生活酒の悪癖私は是れまで緒方の塾に這入らずに屋敷から通つて居たのであるが、安政三年の十一月頃から塾に這入て内塾生となり、是れが抑も私の書生生活、活動の始まりだ。元来緒方の塾と云うものは真実日進々歩主義の塾で、その中に這入て居る書生は皆

活潑有為の人物であるが、一方から見れば血氣の壯年、乱暴書生ばかりで、中々一筋縄でも二筋縄でも始末に行かぬ人物の巢窟、その中に私が飛込で共に活潑に乱暴を働いた、けれども又自から外の者と少々違つて居ると云うこともお話しなければならぬ。先づ第一に私の悪い事を申せば、生来酒を嗜むと云うのが一大欠点、成長した後には自からその悪い事を知ても、悪習既に性を成して自から禁ずることの出来なかつたと云うことも、敢て包み隠さず明白に自首します。自分の悪い事を公けにするは余り面白くもないが、正味を言わねば事実談にならぬから、先づ一ト通り幼少以来の飲酒の歴史を語りましょう。抑も私の酒癖は、年齢の次第に成長するに従て飲覚え、飲慣れたと云うでなくして、生れたまゝ物心の出来た時から自然に数寄でした。今に記憶して居る事を申せば、幼少の頃、月代を剃るとき、頭の盆の窪を剃ると痛いから嫌がる。スルト剃て呉れる母が、「酒を給へさせるから此処を剃らせると云うその酒が飲みたさ計りに、痛いのを我慢して泣かずに剃らして居た事は幽に覚えて居ます。天性の悪癖、誠に愧すべき事です。その後、次第に年を重ねて弱冠に至るまで、外に何も法外な事は働かず行状は先づ正しい積りでしたが、俗に云う酒に目のない少年で、酒を見ては殆んど廉恥を忘れるほどの意気地なしと申して宜しい。

ソレカラ長崎に出たとき、二十一歳とは云いながらその実は十九歳余り、マダ丁年にもならぬ身で立派な酒客、唯飲みたくて堪らぬ。所が兼ての宿願を達して学問修業とあるから、自分の本心に訴えて何としても飲むことは出来ず、滞留一年の間、死んだ氣になつて禁酒しました。山本先生の家食客中も、大きな宴会でもあればその時に盗んで飲むことは出来る。又錢さえあれば町に出て一寸と升の角から遣るのも易いが、何時か一度は露顯すると思つて、トウ／＼辛抱して一年の間、正体を現わさずに、翌年の春、長崎を去て諫早に來たとき始めてウント飲んだ事がある。その後程経て文久元年の冬、洋行するとき、長崎に寄港して二日ばかり滞在中、山本の家を尋ねて先年中の礼を述べ、今度洋行の次第を語り、そのとき始めて酒の事を打明け、下戸とは偽り実は大酒飲だと白状して、飲んだも飲んだか、恐ろしく飲んで、先生夫婦を驚かした事を覚えて居ます。血に交わりて赤くならずこの通り幼少の時から酒が数寄で酒の爲めには有らん限りの悪い事をして随分不養生も犯しましたが、又一方から見ると私の性質として品行は正しい。是れだけは少年時代、乱暴書生に交つても、家を成して後、世の中に交際しても、少し人になつて大きな口が利かれる。滔々たる濁水社会にチト変人のように窮屈なようにあるが、左ればとて實際浮気な花柳談と云うことは大抵事細に知て居る。何故と云う

に他人の夢中になつて汚ない事を話して居るのを能く注意して聞いて心に留めて置くから、何でも分らぬことはない。例えば、私は元來囲碁を知らぬ、少しも分らないけれども、塾中の書生仲間に囲碁が始まると、ジャ／＼張り出て巧者なことを云て、ヤア黒のその手は間違いだ、夫れ又やられたではないか、油断をすると此方の方が危いぞ、馬鹿な奴だあれを知らぬかなど、宜い加減に饒舌れば、書生の素人の拙囲碁で、助言は固より勝手次第で、何方が負けそうなと云う事は双方の顔顔を見て能く分るから、勝つ方の手を誉めて負ける方を悪くさえ云えば間違ひはない。ソコで私は中々囲碁が強いように見えて、「福澤一番遣うかと云われると、「馬鹿云うな、君達を相手にするのは手間潰しだ、そんな暇はないと、高くとまつて澄し込んで居るから、いよく上手のように思われて凡そ一年ばかりは胡摩化して居たが、何かの拍子にツイ化の皮が現われて散々罵しられたことがある、と云うようなもので、花柳社会の事も他人の話を聞きその様子を見て大抵こまかに知て居る、知て居ながら自分一身は鉄石の如く大丈夫である。マア申せば血に交わりて赤くならぬとは私の事でしょう。自分でも不思議のようにあるが、是れは如何しても私の家の風だと思ひます。幼少の時から兄弟五人、他人まぜずに母に育てられて、次第に成長しても、汚ない事は仮初にも蔭にも日向にも家の中で聞いたこともなければ話し

た事もない。清しょうじよう淨潔白おのず、自から同藩普通の家族とは色いろを異ことにして、ソレカラ家を去さつて他人に交わつても、その風ふうをチャント守まもつて、別に慎つつしむでもない、当あたりまへ然おもつな事だと思おもて居た。ダカラ緒方の塾に居るその間あいだも、遂ついぞ茶屋遊ちやあそびをするとか云いうような事は決してない、と云いながら前まえにも云う通り何も偏屈へんくつで夫それを嫌きらつて恐おそれて逃にげて廻まわつて蔭かげで理屈りくつらしく不平な顔をして居ると云うような事も頓とんとしなない。遊廓ゆうかくの話、茶屋の話、同窓生どうそうせいと一いつ処しょになつてドシ／＼話をして問答もんたして、而そして私は夫それを又冷ひやかして、「君達きみたちは誠に野暮やばな奴だ。茶屋ちやに行いつて来ると云うような馬鹿があるか。僕は登楼とうろうは為しない。為ないけれども、僕ひとが一度ひとび奮発ふんぱつして楼ろうに登のぼれば、君達の百倍被待もてて見せよう。君等きみらのようなソナ野暮やばな事をするなら止よして仕舞しまえ。ドウセ登楼とうろうなどの出来うれそうな柄がらでない。田舎いなか者ものめが、都会かいに出て来て茶屋遊ちやあそびのABCを学まなんで居るなんて、ソナ鈍いことでは生涯役やくに立たぬぞと云うような調子で哦鳴がなり廻まわつて、實際じっさいに於おいてその哦鳴がなる本人は決して浮氣うきでない。ダカラ人が私を馬鹿にすることは出来ぬ。能よく世間よこにある徳行とくぎやうの君子くんしなんて云う学者が、ムヅ／＼してシント考かんえて、他人た人の為することを悪わるい／＼と心こころの中で思おもて不平ふへいを呑のんで居る者があるが、私は人の言行ごんぎやうを見て不平ふへいもなければ心配しんぱもない、一いっ緒しょに戯たわぶれて洒蛙しゃあしやあ々々として居るから却かえつて面白おもしろい。

書生を懲らしめる酒の話は幾らもあるが、安政二年の春、始めて長崎から出て緒方の塾に入門したその即日そくじつに、在塾の一書生が始めて私に遇てあつ云うには、「君は何処どこから来たか。」「長崎から来た」と云うのが話の始まりで、その書生の云うに、「爾そうか、以来は懇親にお交際つきあいしたい。就ては酒を一献酌いつこんくもうではないかと云うから、私が之これに答えて、「始めてお目に掛つて自分の事を云うようであるが、私は元来の酒客しゅかく、然かも大酒たいしゅだ。一献酌もうとは有難ありがたい、是非ぜひお供致したい、早速さつそくお供致したい。だが念の爲めに申して置くが、私には金はない、実は長崎から出て末たばかりで、塾で修業するその学費はなはさえ甚だ怪しい。有るか無いか分らない。矧いっくんや酒を飲むなど、云う金は一銭もない。是れこだけは念の爲めにお話して置くが、酒を飲みにお誘さそいとは誠に辱かたじけない。是非お供致そうと斯こう出掛けた。所がその書生の云うに、「そんな馬鹿げた事があるものか、酒を飲みに行けば金の要いるのは当あたりまえ然の話だ。夫そればかりの金のない筈はずはないじゃないかと云う。」「何と云われても、ない金はないが、折角せつかく飲みに行こうと云うお誘だから是非行きたいものじやと云うのが物分ものわかれでその日は仕舞しまい、翌日も屋敷から通つて塾に行てその男に出遇であい、「昨日のお話は立消たちぎえになったが、如何どうだろうか。私は今日も酒が飲みたい連れて行て呉くれないか、どうも行きたいと此方こちから促うながした処が、馬鹿云うなと云うような事で、お別れになつて仕

舞^まつた。

ソレカラ 一^{ひと}月^{つき}経^たち 二^{ふた}月^{つき}、三^{みつ}月^{つき}経^つて、此^こ方^ちもチャント塾^{じゆく}の勝^か手^てを心^こ得^とて、人^{ひと}の名^なも知^しれば顔^{かほ}も知^しると云^いうことにな^なつて当^{あた}り前^{まえ}に勉^{べん}強^{きやう}して居^ゐる。一^{ある}日^ひその今^{いま}の男^{おとこ}を引^ひ捕^{つか}まえた。引^ひ捕^{つか}まえて面^{めん}談^{だん}、「お前^{まへ}は覺^{おぼ}えて居^ゐるだろ^う、乃^お公^{こう}が長^{なが}崎^{さき}から来^きて始^{はじ}めて入^い門^{もん}したその日^ひに何^{なん}と云^いた、酒^{しゆ}を飲^のみに行^いこうと云^いたじやないか。その意^い味^みは新^{しん}入^い生^{せい}と云^いうものは多^{おほ}少^{せう}金^{かね}がある、之^{これ}を誘^{さそ}出^{いだ}して酒^{しゆ}を飲^のもうと斯^こう云^いう考^{かん}だろ^う。言^いわずとも分^わて居^ゐる。彼^あの時^{とき}に乃^乃公^{こう}が何^{なん}と云^いた、乃^乃公^{こう}は酒^{しゆ}は飲^のみたくて堪^たま^まらないけれども金^{かね}がないから飲^のむことは出^で来^きないと刎^はね^つ付^けて、その翌^{あした}日^ひは又^{また}此^こ方^ちから促^うした時^{とき}に、お前^{まへ}は半^{はん}句^くの言^い葉^はもなかつたじやないか。能^よく考^{かん}えて見^みろ。憚^{はば}り乍^{はな}ら諭^ご吉^{きち}だからその位^{くらい}に強^{きやう}く云^いたのだ。乃^乃公^{こう}はその時^{とき}には自^{みづ}から決^きする処^{ところ}があつた。お前^{まへ}が愚^ぐ図^ず々^ぐ々^ぐ云^いうなら即^{すなは}席^{せき}に叩^{たた}倒^たして先^{せん}生^{せい}の処^{ところ}に引^ひ摺^ずて行^いて遣^やらうと思^{おも}つたその決^け心^{しん}が顔^{がん}色^{しよく}に顯^{あら}わ^われて怖^{おそ}かつたのか何^{なん}か知^しらぬが、お前^{まへ}はど^うもせ^ぜずに引^ひ込^こんで仕^{しま}舞^まつた。如^{いか}何^{なん}にしても済^すまない奴^{やつ}だ。斯^こう云^いう奴^{やつ}のあるのは塾^{じゆく}の爲^{ため}めには獅^し子^し身^み 中^{ちゆう}の虫^{むし}と云^いうものだ。こんな奴^{やつ}が居^ゐて塾^{じゆく}を卑^ひ劣^{りやく}にするのだ。以^い来^{らい}新^{しん}入^い生^{せい}に遇^あつて仮^{かり}初^{そめ}にも左^さ様^{やう}な事^{こと}を云^いうと、乃^乃公^{こう}は他^た人^{にん}の事^{こと}とは思^{おも}わぬぞ。直^すぐにお前^{まへ}を捕^{つか}まえて、誰^{たれ}とも云^いわず先^{せん}生^{せい}の前^{まえ}に連^れれて行^いて、先^{せん}生^{せい}に裁^{さい}判^{はん}して貰^{もら}うが宜^{よろ}しいか。心^こ得^とて居^ゐると酷^{ひど}く

懲しめて遣た事があつた。

塾長になるその後私の学問も少しは進歩した折柄、先輩の人は国に帰る、塾中無人にて遂に私が塾長になつた。扱塾長になつたからと云て、元来の塾風で塾長に何も権力のあるではなし、唯塾中一番六かしい原書を会読するときその会頭を勤める位のことで、同窓生の交際に少しも軽重はない。塾長殿も以前の通りに読書勉強して、勉強の間にあらん限りの活動ではないどうかと云えば先ず乱暴をして面白がつて居ることだから、その乱暴生が徳義を以て人を感化するなど云う鹿爪らしい事を考える訳もない。又塾風を善くすれば先生に対しての御奉公、御恩報じになると、そんな老人めいた心のあろう筈もないが、唯私の本来仮初にも弱い者いじめをせず、仮初にも人の物を貪らず、人の金を借用せず、唯の百文も借りたることはないその上に、品行は清浄潔白にして俯仰天地に愧ずと云う、自から外の者と違ふ処があるから、一緒になつてワイ／＼云て居ながら、マア一口に云えば、同窓生一人も残らず自分の通りになれ、又自分の通りにして遣らうと云うような血氣の威張りであつたらうと今から思うだけで、決して道徳とか仁義とか又大恩の先生に忠義とか、そんな奥ゆかしい事は更らに覚えはなかつたのです。併し何でも爾う威張り廻つて暴れたのが、塾の為に悪い事もあろう、又自から役に

立つたこともあるだろうと思う。若し役に立て居れば夫れは偶然で、決して私の手柄でも何でもありません。

緒方の塾風

左様云えば何か私が緒方塾の塾長で頻りに威張て自然に塾の風を矯正したように聞ゆるけれども、又一方から見れば酒を飲むことでは随分塾風を荒らした事もあると思う。塾長になつても相替らず元の貧書生なれども、その時の私の身の上は、故郷に在る母と姪と二人は藩から貰う少々ばかりの家禄で暮して居る、私は塾長になつてから表向に先生家の賄を受けて、その上に新書生が入門するとき先生家に束脩を納めて同時に塾長へも金貳朱を呈すと規則があるから、一箇月に入門生が三人あれば塾長には一分二朱の収入、五人あれば二分二朱にもなるから小遣錢には沢山で、是れが大抵酒の代になる。衣服は国の母が手織木綿の品を送て呉れて夫れには心配がないから、少しでも手許に金があれば直に飲むことを考える。是れが為めには同窓生の中で私に誘われてツイ飲んだ者も多かるう。扱その飲みようも至極お粗末、殺風景で、錢の乏しいときは酒屋で三

合あか五合ごがっ買かて来て塾中ひとで独ひとりり飲のむ。夫それから少し都合よの宜よい時には一朱もつか二朱ちよい以もつて一寸ちよいと料理茶屋とりのやに行く、是これは最上おごりの奢おごりで容易やすに出来兼ねるから、先まず度々たびたび行くのは鶏肉屋とりや、夫それよりモット便利みなわばしなのは牛肉屋だ。その時大阪中うしなべで牛鍋うしなべを喰くわせる処たは唯二軒ある。一軒は難波橋なにわばしの南詰みなみづめ、一軒は新町しんまちの廓くわくの側そばにあつて、最下等げの店だから、凡およそ人間でいりらしい人で出入する者は決してない。文身はりものだらけの町の破落戸ぼろつきと緒方の書生ばかりが得意じようきやくの定客どこだ。何処どこから取寄せた肉だか、殺した牛やら、病死した牛やら、そんな事には頓着とんじやくなし、一人前ひとりまえ百五十文ばかりで牛肉と酒と飯と十分の飲食であつたが、牛は随分硬かたくて臭くさかつた。

塾生裸体はだか当時は士族の世の中だから皆大小は挟さして居る、けれども内塾生ないじゆくせい五、六十人の中で、私は元来物を質入ちりれたことがないから、双刀そうとうはチャント持もつて居るその外ほか、塾中ふたこしに二腰みか三腰もあつたが、跡あとは皆質おいに置おいて仕舞しまつて、塾生の誰たれか所持そしして居るその刀はが恰あたも共有物で、是これでも差さ支しつかえのないと云うは、銘々めいめい倉屋敷くらやしきにでも行くときに二本挟あすばかりで、不断は脇差わきざし一本、たゞ丸腰だにならぬ丈だけの事であつたから。夫それから大阪おつたかは暖い処あつたかだから冬は難渋なんじゆな事はないが、夏は真実の裸体はだかふんどし、褌ふんどしも襦袢じゆばんも何もない真裸体まっぱだか。勿論もちろん飯を喫くう時と会読かいどくをする時には自おのずから遠慮するから何か一枚ちよいと引掛ひっかける、

中にも紹の羽織を真裸体の上に着てる者が多い。是れは余程おかしい風で、今の人が見たら、さぞ笑うだろう。食事の時には逆も座つて喰うなんと云うことは出来た話でない。足も踏立てられぬ板敷だから、皆上草履を穿て立て喰う。一度は銘々に別けてやつたところもあるけれども、爾うは続かぬ。お鉢が其処に出してあるから、銘々に茶碗に盛て百鬼立食。ソナナ訳けだから食物の価も勿論安い。お菜は一六が葱と薩摩芋の難波煮、五十が豆腐汁、三八が蜆汁と云うようになって居て、今日は何か出ると云うことは極つて居る。

裸体の奇談失策裸体の事に就て奇談がある。或る夏の夕方、私共五、六名の中に飲む酒が出来た。すると一人の思付に、この酒を彼の高い物干の上で飲みたいと云うに、全会一致で、サア屋根づたいに持出そうとした処が、物干の上に下婢が三、四人涼んで居る。是れは困た、今彼処で飲むと彼奴等が奥に行て何か饒舌に違いない、邪魔な奴じやと云う中に、長州生に松岡勇記と云う男がある。至極元氣の宜い活潑な男で、この松岡の云うに、僕が見事に彼の女共を物干から逐払て見せようと云いながら、真裸体で一人ツカ〜と物干に出て行き、お松どんお竹どん、暑いじゃないかと言葉を掛けて、そのまゝ傾向きに大の字なりに成て倒れた。この風体を見ては流石の下婢も其処に居ることが出

来ぬ。気の毒そうな顔をして皆下りて仕舞た。すると松岡が物干の上から蘭語で上首尾早く来いと云う合図に、塾部屋の酒を持出して涼しく愉快に飲だことがある。

又或るとき是れは私の大失策、或る夜私が二階に寝て居たら、下から女の声で福澤さんくと呼ぶ。私は夕方酒を飲で今寝たばかり。うるさい下女だ、今ごろ何の用があるかと思ふけれども、呼べば起きねばならぬ。夫れから真裸体で飛起て、階子段を飛下りて、何の用だとふんばたかつた所が、案に相違、下女ではあらで奥さんだ。何うにも斯うにも逃げようにも逃げられず、真裸体で座つてお辞儀も出来ず、進退窮して実に身の置処がない。奥さんも気の毒だと思われたのか、物をも云わず奥の方に引込で仕舞た。翌朝御託に出て昨夜は誠に失礼仕りましたと陳べる訳けにも行かず、到頭末代御挨拶なしに済で仕舞た事がある。是ればかりは生涯忘れることが出来ぬ。先年も大阪に行て緒方の家を尋ねて、この階子段の下だつたと四十年前の事を思出して、独り心の中で赤面しました。

不潔に頓着せず塾員は不規則と云わんか不整頓と云わんか乱暴狼藉、丸で物事に無頓着。その無頓着の極は世間で云うように潔不潔、汚ないと言ふことを気に止めない。例えば、塾の事であるから勿論桶だの井だの皿などの、あろう筈はないけれども、緒方の

塾生は学塾の中に居ながら七輪しちりんもあれば鍋もあつて、物を煮て喰うと云うような事を不断遣やつて居る、その趣は恰も手鍋世帯おもむきあたかの台所見たような事を机の周囲まわりで遣やつて居た。けれども道具の足ると云うことのあろう筈はない。ソコで洗手盥ちようずだらも金盥かなだらも一切食物調理の道具になつて、暑中など何処どこからか素麵そうめんを貰うと、その素麵を奥の台所で湯煮ゆでて貰うて、その素麵を冷すには、毎朝、顔を洗う洗手盥もつを持て来て、その中で冷素麵ひやにして、汁つゆを拵こしらへるに調合所の砂糖でも盗み出せば上出来、その外ほか、肴さかなを拵こしらへるにも野菜を洗うにも洗手盥は唯一のお道具で、ソナ事は少しも汚ないと思わなかつた。

夫れ所ではない。虱しらみは塾中永住の動物で、誰れ一人も之これを免まぬかれることは出来ない。一寸よと裸体はだかになれば五疋ごひきも十疋とも捕とるに造作ぞうさはない。春先はるさき少し暖気になると羽織の襟はに匍はい出すいだことがある。或る書生の説に、ドウダ、吾々われわれの虱は大阪の焼芋に似て居る。冬ふゆ中うが真盛まつさかりで、春になり夏になると次第に衰えて、暑中二、三箇月の蚤と交代して引込ひっこみ、九月頃新芋しんいもが町に出ると吾々の虱も復た出て来るのは可笑おかしいと云た事がある。私わたしは一案を工風くふうし、抑も虱を殺すに熱湯を用うるは洗濯婆せんたくばあの旧筆法で面白くない、乃公おれが一発で殺して見せようと云て、嚴冬の霜夜しもよに襦袢じゆばんを物干ものほしに洒さらして虱の親も玉子も一時に枯らしたことがある。この工風は私の新発明ではない、曾かつて誰だれかに聞きいたことがある

から遣て見たのです。

豚を殺すそんな訳けだから塾中の書生に身なりの立派な者は先ず少ない。そのくせ市中の縁日など云えば夜分屹度出て行く。行くと往来の群集、就中娘の子などは、アレ書生が来たと云て脇の方に避けるその様子は、何か穢多でも出て来て夫れを穢ながるようだ。如何も仕方がない。往来の人から見て穢多のように思う筈だ。或るとき難波橋の吾々得意の牛鍋屋の親爺が豚を買出して来て、牛屋商売であるが気の弱い奴で、自分に殺すことが出来ぬからと云て、緒方の書生が目指された。夫れから親爺に逢て、「殺して遣るが、殺す代りに何を呉れるか」——「左様ですな」——「頭を呉れるか」——「頭なら上げましょう。」夫れから殺しに行た。此方は流石に生理学者で、動物を殺すに窒塞させれば訳けはないと云うことを知て居る。幸いその牛屋は河岸端であるから、其処へ連て行て四足を縛て水に突込で直ぐ殺した。そこでお礼として豚の頭を貰つて来て、奥から鉈を借りて来て、先ず解剖的に脳だの眼だの能く調べて、散々いじくつた跡を煮て喰たことがある。是れは牛屋の主人から穢多のように見込れたのでしよう。熊の解剖それから又或時には斯う云う事があつた。道修町の薬種屋に丹波か丹後から熊が来たと云う触込み。或る医者の紹介で、後学の為め解剖を拝見致したいから誰か

来て熊を解剖して呉れぬかと塾に云て来た。「それは面白い」。当時緒方の書生は中々解剖と云うことに熱心であるから、早速行て遣ろうと云うので出掛けて行く。私は医者でないから行かぬが、塾生中七、八人行きました。夫から解剖して是れが心臓で是れが肺、是れが肝と説明して遣た所が、「誠に有難い」と云て薬種屋も医者もふつと帰つて仕舞た。その実は彼等の考に、緒方の書生に解剖して貰えば無疵に熊胆が取れると云うことを知て居るものだから、解剖に託して熊胆が出るや否や帰て仕舞たと云う事がチャンと分たから、書生さん中々了簡しない。是れは一番こねくつて遣ろうと、塾中の衆議一決、直にそれ／＼掛りの手分けをした。塾中に雄弁滔滔々と能く喋舌て誠に剛情なシツコイ男がある、田中発太郎（今は新吾と改名して加賀金沢に居る）と云う、是れが応接掛、それから私が掛合手紙の原案者で、信州飯山から来て居る書生で菱湖風の書を善く書く沼田芸平と云う男が原案の清書する。夫れから先方へ使者に行くのは誰れ、脅迫するのは誰れと、どうにも斯うにも手に余る奴ばかりで、動もすれば手短に打毀しに行くに云うような風を見せる奴もある。又彼方から来れば捏くる奴が控えて居る。何でも六、七人手勢を揃えて拈込で、理屈を述べることは筆にも口にも隙はない。応接掛りは不斷の真裸体に似ず、袴羽織にチャント脇差を挟して緩急剛柔、ツマリ学医の

面目云々を楯にして剛情な理屈を云うから、サア先方の医者も困て仕舞い、そこで平あやまりだと云う。只謝るだけで済めば宜いが、酒を五升に鶏と魚か何かを持て来て、それで手を拍て塾中で大に飲みました。

芝居見物の失策それに引換えて此方から取られたことがある。道頓堀の芝居に与力や同心のような役人が見廻りに行くと、スツト棧敷に通て、芝居の者共が茶を持て来る菓子を持て来るなどして、大威張りで芝居をたゞ見る。兼てその様子を知て居るから、緒方の書生が、気味の悪い話サ、大小を挟して宗十郎頭巾を冠て、その役人の真似をして度々行て、首尾能く芝居見物して居た。所が度重なれば顕われるの諺に洩れず、或る日、本者が来た。サア此方は何とも云われないだろう、詐欺だから、役人を偽造したのだから。その時はこねくられたとも何とも、進退谷まり大騒ぎになって、夫れから玉造の与力に少し由縁を得て、ソレに泣付て内済を頼で、ヤツト無事に収まった。そのとき酒を持て行たり肴を持て行たりして、何でも金にして三歩ばかり取られたと思う。この詐欺の一件は丹後宮津の高橋順益と云う男が頭取であつたが、私は元来芝居を見ない上に、この事を不安心に思つて、「それは余り宜くなかう、マサカの時は大変だからと云たが肯ない。「何に訳けはない、自から方便ありなんてツウ／＼しく遣て居たが、と

う／＼捕つかまったのが可笑おかしい所どころか一時おほ大心配をした。

喧嘩の真似それから時としては斯こう云う事もあった。その乱暴さ加減は今人の思おも寄いよらぬことだ。警察がなかったから云わば何でも勝手次第である。元来大阪の町人は極きわめて臆病だ。江戸で喧嘩をすると野次馬やじうまが出て来て滅茶苦茶にして仕舞しまうが、大阪では野次馬は迎むかても出て来ない。夏の事で夕方飯めしを喰くつてブラ／＼出て行く。申もうし合あわせをして市中で大喧嘩の真似をする。お互に痛くないように大造たいそうな剣幕で大きな声で怒鳴どなつて掴つか合い打うち合うだらう。爾そうするとその辺の店はバタ／＼片付けて戸を締めて仕舞うて寂ひっそりとなる。喧嘩と云いつた所が唯ただそれだけの事で外ほかに意味はない。その法は同類が二、三人ずつ分わかれて一番繁昌な賑にぎやかな処で双方から出逢うような仕組しくみにするから、賑やかな処と云いえば先まず遊廓の近所、新町九軒の辺で常じょうきま極きりに遣やつて居たが、併しかし余り一箇所で遣ばけて化の皮あわが顕あらわれるとイカヌから、今夜は道頓堀で遣やらう、順慶町で遣じゆんけいまちらうと云て遣たこともある。信州の沼田芸平などは余よほど喧嘩の上手じょうずであった。

弁天小僧それから一度は斯こう云う事があった。私と先輩の同窓生で久留米の松下元芳と云う医者みやくちと二人連ふれで、御霊ごりようと云う宮地みやちに行いつて夜見世よみせの植木ひきを冷ひやかしてゐる中に、植木屋が、「旦那さん悪わるきをしてはいけまへんと云いつたのは、吾々われわれの風体ふうていを見て万引をしたと

云う意味だから、サア了簡しない。丸で弁天小僧見たように拈繰返した。「何でもこの野郎を打殺して仕舞え。理屈を云わずに打殺して仕舞えと私が怒鳴る。松下は慰めるような風をして、「マア殺さぬでも宜いじやないか。「ヤア面倒だ、一打に打殺して仕舞うから止めなさんなど、夫れ是れする中に往来の人は黒山のように集まって大混雑になつて来たから、此方は尚お面白がつて威張て居ると、御霊の善哉屋の餅搗か何かして居る角力取が仲裁に這入て来て、「どうか宥して遣て下さいと云うから、「よし貴様が中に這入れば宥して遣る。併し明日の晩此処に見世を出すと打殺して仕舞うぞ。折角中に這入たから今夜は宥して遣るからと云て、翌晩行て見たら、正直な奴だ、植木屋の処だけ土場見世を休んで居た。今のように一寸も警察と云うものがなかつたから乱暴は勝手次第、けれども存外に悪い事をしない、一寸この植木見世位の話で実のある悪事は決してしない。

チボと呼ばれる私が一度大に恐れたことは、是れも御霊の近処で上方に行われる砂持と云う祭礼のような事があつて、町中の若い者が百人も二百人も灯笼を頭に掛けてヤイ／＼云て行列をして町を通る。書生三、四人して之を見物して居る中に、私が如何いう氣であつたか、何れ酒の機嫌でしょう、杖か何かでその頭の灯笼を打落して遣た。

スルトその連中^{れんじゅう}の奴^{やつ}と見える。チボじやくと怒鳴り出した。大阪でチボ（スリ）と云えば、理非^{わか}を分たず打殺して川に投^{ほう}り込む習^{なら}わしだから、私は本当に怖^{おそ}かった。何でも逃^にげるに若^しかずと覚悟^{はだし}をして、跳^はになつて堂島の方に逃^にげた。その時私は脇^{わき}差^さを一本挟^さして居^もたから、若^もし追付^{おいつ}かるようになれば後向^{うしろむき}て進^{すす}で斬^きるより外仕^{ほかしかた}方がない。斬^きては誠^まに不味^{まず}い。仮初^{かりそめ}にも人に疵^{きず}を付^くける了^{りようけん}。簡^{かん}はないから、唯^{ただ}一生懸命^{しっけん}に駈^かけて、堂島五丁目の奥^{おく}、平^{ひら}の倉屋敷^{くらやしき}に飛^{とび}込^{こん}でホツト呼吸^{いき}をした事がある。

無神無仏又大阪の東北^{ほう}の方に葭^{あし}屋橋^{やばし}と云う橋があるその橋手前の処^{ところ}を築地^{いづ}と云て、在昔^{むかし}は誠^いに如何^いな家^{うち}ばかり並^{なら}んで居^ゐて、マア待^{まち}合^あをする地獄屋^{じごくや}とでも云うような内実^{きた}穢^{きた}ない町^{まち}であつたが、その築地^{いづ}の入口^いの角^{かく}に地蔵^{じざう}様^{やう}か金比羅^{こんぴら}様^{やう}か知らん小さな堂^{だう}がある。中々^{ちや}繁^{はん}昌^{しょう}の様子^{ようし}で、其^そ処^{ところ}に色々^{いろ}な額^{がく}が上^あげてある。或^{ある}は男女^{なんにょ}の拝^{はい}んでる処^{ところ}が描^えいてある、何か封書^{ふうしよ}が順^{はり}に貼^は付^つけてある、又^{また}は髻^{もとどり}が切^きて結^ゆい付^けてある。夫^それを昼^{うち}の中^{うち}に見^みて置^おて、夜^よになつとその封書^{ふうしよ}や髻^{もとどり}のあるのを引^ひさらえて塾^{もつ}に持^もて帰^{かへ}て開封^{かいほう}して見^みると、種々^{しゆじゆ}様々の願^{がん}が掛^かけてあるから面白い。「ハ、ア是^これは博奕^{ばくち}を打^うた奴^{やつ}が止^やめると云うのか。是^これは禁酒^{きんしゆ}だ。是^これは難船^{なんせん}に助^{たす}かつたお礼^{れい}。此方^{こつち}のは女^{おんな}、狂^{くる}にこりこした奴^{やつ}だ。夫^それは何歳^{なんざい}の娘^{むすめ}が妙な事を念^{ねん}じて居^ゐるなど、唯^{ただ}それを見^みるのが面白^{おもしろ}くて毎度^{まいど}遣^やつた事^{こと}だが、兎^とに角^{かく}に人の一心^{いっしん}

を籠めた祈願を無茶苦茶にすると罪の深いことだ。無神無仏の蘭学生に逢ては仕方がない。

遊女の贗手紙夫れから塾中の奇談を云うと、そのときの塾生は大抵みな医者の子弟だから、頭は坊主か総髪で国から出て来るけれども、大阪の都会に居る間は半髪になって天下普通の武家の風がして見たい。今の真宗坊主が毛を少し延ばして当前の断髪の真似をするような訳で、内実の医者坊主が半髪になって刀を挟して威張るのを嬉しがって居る。その時、江戸から来て居る手塚と云う書生があつて、この男は或る徳川家の藩医の子であるから、親の拝領した葵の紋付を着て、頭は塾中流行の半髪で太刀作の刀を挟むと云う風だから、如何にも見栄があつて立派な男であるが、如何も身持が善くない。ソコで私が或る日、手塚に向て、「君が本当に勉強すれば僕は毎日でも講釈をして聞かせるから、何は扱置き北の新地に行くことは止しなさいと云たら、当人もその時は何か後悔した事があると思えて「ア、新地か、今思出しても忌だ。決して行かない。「それなら屹度君に教えて遣るけれども、マダ疑わしい。行かないと云う証文を書け。「宜しい如何な事でも書くと云うから、云々今後屹度勉強する、若し違約をすれば坊主にされても苦からずと云う証文を書かせて私の手に取て置いて、約束の通りに毎日別段に教えて居た所が、

その後手塚が真実勉強するから面白くない。斯う云うのは全く此方が悪い。人の勉強するのを面白くないとは怪しからぬ事だけれども、何分興がないから窃と両三人に相談して、「彼奴の馴染の遊女は何と云う奴か知ら。」「それは直ぐに分る、何々という奴。」「よし、それならば一つ手紙を遣うと、夫れから私が遊女風の手紙を書く。片言交りに彼等の云いそんな事を並べて、何でも彼の男は無心を云われて居るに相違ないその無心は、屹度麝香を呉れるとか何とか云われた事があるに違いないと推察して、文句の中に「ソレあのとき役足のじやこはどておますと云うような、判じて読まねば分らぬような事を書いて、鉄川様何々よりと記して手紙は出来たが、併し私の手蹟じや不味いから長州の松岡勇記と云う男が御家流で女の手に紛らわしく書いて、ソレカラ玄関の取次をする書生に云含めて、「是れを新地から来たと云て持て行け。併し事実を云えば打撲るぞ。宜しいかと脅迫して、夫れから取次が本人の処に持て行て、「鉄川と云う人は塾中にない、多分手塚君のこと、思うから持て来たと云て渡した。手紙偽造の共謀者はその前から見え隠れに様子を窺うて居た所が、本人の手塚は一人で頻りにその手紙を見て居る。麝香の無心があつた事か如何か分らないが、手塚の二字を大阪なまりにテツカと云うそのテツカを鉄川と書いたのは、高橋順益の思付で余ほど善く出来てる。そんな事で如何や

ら斯うやら遂に本人をしやくり出して仕舞たのは罪の深い事だ。二、三日は止まって居たが果して行たから、ソリヤ締めたと共に謀者は待て居る。翌朝帰て平気で居るから、此方も平気で、私が鋏を持って行てひよいと引捕えた所が、手塚が驚いて「どうすると云うから、
「どうするも何も無い、坊主にするだけだ。坊主にされて今のような立派な男になるには二年ばかり手間が掛るだろう。往生しろと云て、髻を揃えて鋏をガチャ／＼云わせると、当人は真面目になつて手を合せて拝む。そうすると共謀者中から仲裁人が出て来て、「福澤、余り酷いじゃないか。「何も文句なしじゃないか、坊主になるのは約束だと問答の中に、馴合の中人が段々取持つような風をして、果ては坊主の代りに酒や鶏を買わしめて、一処に飲みながら又冷かして、「お願いだ、もう一度行て呉れんか、又飲めるからとワイワイ云たのは随分乱暴だけれども、それが自から切諫になつて居たこともあろう。御幣担ぎを冷かす同窓生の間には色々な事のあるもので、肥後から来て居た山田謙輔と云う書生は極々の御幣担で、しの字を言わぬ。その時、今の市川団十郎の親の海老蔵が道頓堀の芝居に出て居るときで、芝居の話をする、山田は海老蔵のよばいを見るなんて云う位な御幣担だから、性質は至極立派な人物だけれども、如何も蘭学書生の氣に入らぬ筈だ。何か話の端には之を愚弄して居ると、山田の云うに「福澤々々、君のように無法

な事ばかり云うが、マア能く考えて見給え。正月元日の朝、年礼に出掛けた時に、葬礼に逢うと鶴を台に載せて担で来るのを見ると何方が宜いかと云うから、私は、「夫れは知れた事だ。死人は喰われんから鶴の方が宜い。けれども鶴だつて乃公に喰わせなければ死人も同じ事だと答えたような塩梅式で、何時も冷かして面白がつて居る中に、或るとき長与専斎か誰れかと相談して、彼奴を一番大に遣てやろうじやないかと一工夫して、当人の不在の間にその硯に紙を巻いて位牌を拵えて、長与の書が旨いから立派に何々院何々居士と云う山田の法名を書いて机の上に置いて、当人の飯を喰う茶碗に灰を入れて線香を立て、位牌の前にチャント供えて置た所が、歸て来て之を見て忌な顔をしたとも何とも真青になつて腹を立て、居たが、私共は如何も怖かった。若しも短気な男なら切付けて来たかも知れないから。

欺て河豚を喰わせる夫れから又一度遣た後で怖いと思たのは人をだまして河豚を喰わせた事だ。私は大阪に居るとき颯々と河豚も喰えば河豚の肝も喰て居た。或る時、芸州仁方から来て居た書生、三刀元寛と云う男に、鯛の味噌漬を貰て来たが喰わぬかと云うと、「有難い、成程宜い味がすると、悦んで喰て仕舞て二時間ばかり経てから、「イヤ可愛そうに、今喰たのは鯛でも何でも無い、中津屋敷で貰た河豚の味噌漬だ。食物の消化

時間は^{たいてい}大抵知てるだろう、今吐^と劑^{ざい}を飲^のでも無益だ。河豚の毒が嘔^はかれるなら嘔^{はい}て見ると云^いたら、三刀も医者^{いしや}の事だから能く分^{わか}て居^かる。サア氣を揉^もで私^{わたし}に武者振^{むしやぶり}付くように腹を立^たてたが、私^{わたし}も後^{あと}になつて余^{あま}り洒^{しや}落^れに念^{いり}が入^い過ぎたと思^{おも}て心配^{しんぱ}した。随分間^ま違^{ちが}いの生^やじ易^{やす}い話だから。

料理茶屋の物を盗む前に云^いう通り御^ご靈^{りよう}の植木見^み世^せで万引と疑^うわれたが、疑^うわれる筈^{はず}だ、緒方の書生は本^{ほん}当^{とう}に万引をして居^いたその万引と云^いうは、呉服店^{ごふくや}で反^{たん}物^{もの}なんど云^いう念^いの入^いた事ではない、料理茶屋で飲^のだ歸^きりに猪口^{ちよく}だの小皿^{せうばん}だの色々手^{いろいろ}ごろな品^{しやう}を窃^{そく}と盜^どんで来るような万引である。同窓生互^そに夫^それを手柄^{てしやう}のようにして居^いるから、送別会^{そうべつかい}など、云^いう大会^{たいかい}のときには獲^え物^{もの}も多い。中^{ちゆう}には昨夜^{ゆうべ}の会^{かい}で団扇^{うちあ}の大きなのを背^せ中^{ちゆう}に入れて歸^きる者^{もの}もあれば、平^{へい}たい大皿^{たいばん}を懷^{いだ}中^{ちゆう}し吸^す物^{もの}碗^{わん}の蓋^{ふた}を袂^{たもと}にする者^{もの}もある。又^{また}或^ある奴^{やつ}は、君^{きみ}達^{たち}がそんな半端^{はんぱ}端^{たん}の物を挙^あげて来るのはまだ拙^{つた}ない。乃公^{おれ}の獲^え物^{もの}を拝見^{はいけん}し給^{たま}えと云^いて、小皿^{せうばん}を十人前^{じゅうにんぜん}揃^{そろ}えて手拭^{てぬぐい}に包^くんで來^きたこともある。今思^{おも}えば是^これは茶屋でもトツクに知^して居^いながら黙^{もく}つて通^{とほ}して、實^{じつ}はその盜品^{どうひん}の勘定^{かんてい}も払^はの内に這^{はい}入^いて居^いるに相違^{さいちが}ない、毎度^{まいど}の事^{こと}でお極^{きま}りの盜坊^{どろぼう}だから。

難波橋^{なんばはし}から小皿^{せうばん}を投^なずその小皿^{せうばん}に縁^{えん}のある一奇談^{いっきたん}は、或^ある夏^{なつ}の事^{こと}である、夜十時過^{よじゅうしを}ぎにな

つて酒が飲みたくなつて、嗚呼飲みたいと一人が云うと、僕も爾うだと云う者が直に四、五人出来た。所がチャント門限があつて出ることが出来ぬから、当直の門番を脅迫して無理に開けさせて、鍋島の浜と云う納涼の葭簀張で、不味いけれども芋蛸汁か何かで安い酒を飲んで、歸りに例の通りに小皿を五、六枚挙げて来た。夜十二時過でもあつたか、難波橋の上に来たら、下流の方で茶船に乗ってジャラ／＼三味線を鳴らして騒いで居る奴がある。「あんな事をして居やがる。此方は百五十か其処辺の金を見付出して漸く一盃飲で歸る所だ。忌々敷い奴等だ。あんな奴があるから此方等が貧乏するのだと云いさま、私の持てる小皿を二、三枚投付けたら、一番仕舞の一枚で三味線の音がプツツリ止んだ。その時は急いで逃げたから人が怪我をしたかどうか分らなかつた。所が不思議にも一箇月ばかり経て其れが能く分つた。塾の一書生が北の新天地に行て何処かの席で芸者に逢うたとき、その芸者の話に、「世の中には酷い奴もある。一箇月ばかり前の夜に私がお客さんと舟で難波橋の下で涼んで居たら、橋の上からお皿を投げて、丁度私の三味線に中つて裏表の皮を打抜きましたが、本当に危ない事で、先ず／＼怪我をせんのが仕合でした。何処の奴か四、五人連れでその皿を投げて置て南の方にドン／＼逃げて行きました。実に憎らしい奴もあればあるものと、斯う／＼芸者が話して居たと云うのを、私共

は夫れを聞て下手人げしゅにんにはチャント覚えがあるけれども、云えば面倒だからその同窓の書生にもその時には隠して置いた。

禁酒から煙草又私は酒の為に生涯の大損をして、その損害は今日までも身に附て居ると云うその次第は、緒方の塾に学問修業しながら兎角酒を飲で宜いことは少しもない。是れは済まぬ事だと思ひ、恰も一念こゝに発起したように断然酒を止めた。スルト塾中の大評判ではない大笑で、「ヤア福澤が昨日から禁酒した。コリヤ面白い、コリヤ可笑しい。何時まで続くだろう。連も十日は持てまい。三日禁酒で明日は飲むに違ひないなんて冷かす者ばかりであるが、私も中々剛情に辛抱して十日も十五日も飲まずに居ると、親友の高橋順益が、「君の辛抱はエライ。能くも続く。見上げて遣るぞ。所が凡そ人間の習慣は、仮令い悪い事でも頓に禁ずることは宜しくない。到底出来ない事だから、君がいよく禁酒と決心したらば、酒の代りに煙草を始めろ。何か一方に楽しみが無くては叶わぬと親切らしく云う。所が私は煙草が大嫌いで、是れまでも同塾生の煙草を喫むのを散々に悪く云うて、「こんな無益な不養生な訳の分らぬ物を喫む奴の気が知れない。何は扱置き臭くて穢なくて堪らん。乃公の側では喫んで呉れるなんて、愛想づかしの悪口を云て居たから、今になつて自分が煙草を始めるのは如何もきまりが悪いけれども、高橋の

説を聞けば亦無理でもない。「そんなら遣て見ようかと云てそろ／＼試ると、塾中の者が
烟草を呉れたり、烟管キセルを貸したり、中には是れは極く軽い烟草だと云て態々わざわざ買て来て呉
れる者もあると云うような騒ぎは、何も本当な深切でも何でもない。実は私が不断烟草の
事を悪くばかり云て居たものだから、今度は彼奴を喫烟者タバコのみにして遣ろうと、寄つて掛つ
て私を愚弄ぐろうするのは分つて居るけれども、此方こつちは一生懸命禁酒の熱心だから、忌な烟を無
理に吹かして、十日も十五日もそろ／＼慣らして居る中に、臭い辛いものが自然に臭くも
辛くもなく、段々風味が善くなつて来た。凡そ一箇月ばかり経て本当の喫烟客になつた。
処が例の酒だ。何としても忘れられない。卑怯ひきようとは知りながら一寸と一盃遣て見ると
堪らない。モウ一盃、これでお仕舞しまいと力んでも、徳利を振て見て音がすれば我慢が出来な
い。とう／＼三合さんごうの酒を皆飲で仕舞て、又翌日は五合飲む。五合、三合、従前の通りに
なつて、去らば烟草の方は喫まぬむかしの通りにしようとしても是れも出来ず、馬鹿々々
しいとも何とも訳けが分らない。逆も叶かなぬ禁酒の発心ほっしん、一箇月の大馬鹿をして酒と烟
草タバコと両刀遣づかいに成り果て、六十余歳の今年に至るまで、酒は自然に禁じられたれども烟草は止
みそうにもせず、衛生の為め自から作せる損害と申して一言の弁解はありません。
桃山から帰て火事場に働く塾中兎角貧生が多いので料理茶屋に行て旨い魚を喰うことは

先まずず六むすかしい。夜になると天神橋か天満橋の橋はしづめ詰さかないに魚さかな市いちが立つ。マア云いわば魚いの残ひ
 物もののようなもので直ねが安い。夫それを買かつて来きて洗ちようず水す盥だらで洗あらつて、机こわの毀こわれたのか何かを
 俎まなにして、小柄こづかを以もつて拵こしらえると云いうような事は毎やっ度ど遭あつて居ゐたが、私は兼さて手ての先さきが利き
 てるから何い時つでも魚さかな洗あらいの役やく目めに廻まわつて居ゐた。頃ころは三月、桃ももの花の時節ときふしで、大阪おさかの城とて
 東ももに桃もも山やまと云いふ処ところがあつて、盛さかりだと云いうから花見はなみに行いこうと相談さうだんが出来できた。連つも彼方あつち
 に行いつて茶屋ちやで飲の食くいしようと云いうことは叶かなわぬから、例れいの通り前まへの晩ばんに魚ひけものの残のこ物ものを買かつて
 来きて、その外ほか、氷豆腐ひやうとうだの野や菜さい物ものだの買かいとの調ていえとて、朝あ早くから起ききて忽しう々そうに拵こしらえて、
 それを折しか何なんかに詰づめめて、それから酒さけを買かつて、凡およそ十四、五人も同どう伴ばんがあつたらう、弁当べんたう
 を順じゆん持もちにして桃山とうざんに行いつて、さん／＼飲の食くいして宜いい機嫌きげんになつて居ゐるその時に、不ふ
 図と西しの方ほうを見みると大阪おさかの南みなみに当あたつて大火事たいふしだ。日ひは余程よほど落おちて昔むかしの七しちツ過すぎ。サア大變だいへんだ。丁ちやうど
 度どその日ひに長なが与よ専せん齋さいが道頓堀だうとんぼりの芝居しばを見みに行いつて居ゐる。吾われ々われ花見はなみ連れん中じゆうは何なんも大阪おさか
 の火事かじに利害りがいを感じかんずることはないから、焼やけても焼やけぬでも構かまわないけれども、長なが与よが行い
 て居ゐる。若もしや長なが与よが焼やけ死しはせぬか。何でも長なが与よを救きうい出でさなければならぬと云いうので、
 桃山ももやまから大阪おさか迄まで、二、三里さんりの道みちをどん／＼駈かけて、道頓堀だうとんぼりに駈かけ付つけて見みた所ところが、疾とう
 に焼やけて仕舞しまい、三芝居さんしばあつたが三芝居さんしばとも焼やけて、段々だんだん北きたの方に焼やけ延のびて居ゐる。長なが与よは

如何したろうかと心配したものゝ、迎も捜す訳に行かぬ。間もなく日が暮れて夜になった。もう夜になつては長与の事は仕方がない。「火事を見物しようじゃないかと云て、その火事の中へどん／＼這入て行た。所が荷物を片付けるので大騒ぎ。それからその荷物を運んで遣うと云うので、夜具包か何の包か、風呂敷包を担いだり箆箆を担いだり中々働いて、段々進で行くと、その時大阪では焼ける家の柱に綱を付けて家を引倒すと云うことがあるその綱を引張つて呉れと云う。「よし来たとその綱を引張る。所が握飯を喰せる、酒を飲ませる。如何も堪えられぬ面白い話だ。散々酒を飲み握飯を喰て八時頃にもなりましたろう。夫れから一同塾に歸た。所がマダ焼けて居る。「もう一度行こうではないかと又出掛けた。その時の大阪の火事と云うものは誠に楽なもので、火の周囲だけは大変騒々しいが、火の中へ這入ると誠に静なもので、一人も人が居らぬ位。どうもない。只その周囲の処に人がドヤ／＼群集して居るだけである。夫れゆえ大きな声を出して蹴破つて中へ飛込みさえすれば誠に楽な話だ。中には火消の黒人と緒方の書生だけで大に働いた事があると云うような訳で、随分活潑な事をやったことがありました。

一体塾生の乱暴と云うものは是れまで申した通りであるが、その塾生同士相互の間柄と云うものは至て仲の宜いもので、決して争などをしたことはない。勿論議論は

する、いろ／＼の事に就て互に論じ合うと云うことはあつても、決して喧嘩をするような事は絶てない事で、殊に私は性質として朋友と本氣になつて争うたことはない。仮令い議論をすればとて面白い議論のみをして、例えば赤穂義士の問題が出て、義士は果して義士なるか不義士なるかと議論が始まる。スルト私はどちらでも宜しい、義不義、口の先きで自由自在、君が義士と云えば僕は不義士にする、君が不義士と云えば僕は義士にして見せよう、サア来い、幾度来ても苦くないと云て、敵に為り味方に為り、散々論じて勝たり負けたりするのが面白いと云う位な、毒のない議論は毎度大声で遣て居たが、本当に顔を赧らめて如何あつても是非を分つて了わなければならぬと云う実の入た議論をしたことは決してない。

塾生の勉強凡そ斯う云う風で、外に出てても亦内に居ても、乱暴もすれば議論もする。ソレ故一寸と一目見た所では——今までの話だけを開た所では、如何にも学問どころの事ではなく唯ワイ／＼して居たのかと人が思うでありますうが、其処の一段に至ては決して爾うでない。学問勉強と云うことになつては、当時世の中に緒方塾生の右に出る者はなからうと思われるその一例を申せば、私が安政三年の三月、熱病を煩うて幸に全快に及んだが、病中は括枕で坐蒲団か何かを括つて枕にして居たが、追々元の体に恢復して来た

所で、只ただの枕をして見たいと思い、その時に私は中津の倉屋敷に兄と同居して居たので、兄の家来が一人あるその家来に、只の枕をして見たいから持て来いと云たが、枕がない、どんなに捜してもないと云うので、不図思付いた。是れまで倉屋敷に一年ばかり居たが遂ぞ枕をしたことがない、と云うのは時は何時でも構わぬ、殆んど昼夜の区別はない、日が暮れたからと云て寝ようとも思わず頻りに書を読んで居る。読書に草臥れ眠くなつて来れば、机の上に突臥して眠るか、或は床の間の床側を枕にして眠るか、遂ぞ本当に蒲団を敷いて夜具を掛けて枕をして寝るなど、云うことは只の一度もしたことがない。その時に始めて自分で気が付て、「成程枕はない筈だ、是れまで枕をして寝たことがなかったからと始めて気が付きました。是れでも大抵趣が分りました。是れは私一人が別段に勉強でも何でもない、同窓生は大抵皆そんなもので、凡そ勉強と云うことに就ては實にこの上に為ようはないと云う程に勉強して居ました。

それから緒方の塾に這入てからも私は自分の身に覚えがある。夕方食事の時分に若し酒があれば酒を飲で初更に寝る。一寝して目が覚ると云うのが今で云えば十時か十時過、それからヒヨイと起きて書を読む。夜明まで書を読んで居て、台所の方で塾の飯炊がコト／＼飯を焚く仕度をする音が聞えると、それを相図に又寝る。寝て丁度飯の出来上った

頃起きて、その儘湯屋ままに行て朝湯あさゆに這入て、それから塾かえつに帰て朝飯あさめしを給べて又書を読むと云うのが、大抵緒方の塾に居る間殆んど常じょうきま極りであつた。勿論衛生など、云うことは頓とんと構わない。全体は医者いの塾であるから衛生論も喧やかましく言いそうなるものであるけれども、誰も気が付かなかつたのか或は思おも出さなかつたのか、一寸でも喧やかましく云たことはない。それで平気で居られたと云うのは、考えて見れば身体からだが丈夫であつたのか、或は又衛生々と云うようなことを無闇むやみに喧しく云えば却て身体が弱くなると思て居たのではないかと思われる。

原本写本会読の法それから塾で修行するその時の仕方しかたは如何どう云う塩梅あんばいであつたかと申すと、先まず始めて塾に入門した者は何も知らぬ。何も知らぬ者に如何どうして教えるかと云うと、その時江戸で翻刻ほんこくになつて居る和蘭オランダの文典が二冊ある。一をガランマチ力と云い、一をセインタキスと云う。初学の者には先まずそのガランマチ力を教え、素読そどくを授る傍に講釈きやうしゃくをもして聞かせる。之これを一冊読よみ了るとセインタキスを又その通とおにして教える。如何どうやら斯こうやら二冊の文典が解げせるようになった所で会読かいどくをさせる。会読と云うことは生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に会頭かいとうが一人あつて、その会読するのを聞て居て、出来不出来に依て白玉しろだまを附けたり黒玉くろだまを付けたりと云う趣向で、ソコで文典二冊の

素読も済めば講釈も済み会読も出来るようになる、夫れから以上は専ら自身自力の研究に任せることにして、会読本の不審は一字半句も他人に質問するを許さず、又質問を試みするような卑劣な者もない。緒方の塾の蔵書と云うものは物理書と医書とこの二種類の外に何も無い。ソレモ取集めて僅か十部に足らず、固より和蘭から舶来の原書であるが、一種類唯一部に限つてあるから、文典以上の生徒になれば如何してもその原書を写さなくてはならぬ。銘々に写して、その写本を以て毎月六才位会読をするのであるが、之を写すに十人なら十人一緒に写す訳に行かないから、誰が先に写すかと云うことは籤で定めるので、扱その写しようは如何すると云うに、その時には勿論洋紙と云うものはない、皆日本紙で、紙を能く磨て真書で写す。それはどうも埒が明かないから、その紙に磨水をして、夫れから筆は驚筆で以て写すのが先ず一般の風であつた。その驚筆と云うのは如何云うものであるかと云うと、その時大阪の薬種屋か何かに、鶴か雁かは知らぬが、三寸ばかりに切った鳥の羽の軸を売る所が幾らもある。是れは鯉の釣道具にするものとやら聞て居た。価は至極安い物で、それを買て、磨澄ました小刀で以てその軸をペンのように削つて使えば役に立つ。夫れから墨も西洋インキのあられよう訳はない。日本の墨壺と云うのは、磨た墨汁を綿か毛氈の切布に浸して使うのであるが、私などが原書の写本に

用うるのは、只墨を磨たまゝ墨壺の中に入れて今日のインキのようにして貯えて置きます。斯う云う次第で、塾中誰でも是非写さなければならぬから写本は中々上達して上手である。一例を挙げれば、一人の人が原書を読むその傍で、その読む声がちゃんと耳に這入て、颯々と写してスペルを誤ることがない。斯う云う塩梅に読むと写すと二人掛りで写したり、又一人で原書を見て写したりして、出来上れば原書を次の人に廻す。その人が写すと又その次の人が写すと云うように順番にして、一日の会読分は半紙にして三枚か或は四、五枚より多くはない。

自身自力の研究扱その写本の物理書、医書の会読を如何するかと云うに、講釈の為人もなければ読んで聞かして呉れる人もない。内証で教えることも聞くことも書生間の恥辱として、万々一も之を犯す者はない。唯自分一人で以てそれを読破かなければならぬ。読破くには文典を土台にして辞書に便る外に道はない。その辞書と云うものは、此処にツーフと云う写本の字引が塾に一部ある。是れは中々大部なもので、日本の紙で凡そ三千枚ある。之を一部拵えると云うことは中々大きな騒ぎで容易に出来たものではない。是れは昔長崎の出島に在留して居た和蘭のドクトル・ツーフと云う人が、ハルマと云う独逸和蘭対訳の原書の字引を翻訳したもので、蘭学社会唯一の宝書と崇められ、夫れを日本

人が伝写して、緒方の塾中にもたった一部しかないから、三人も四人もツーフの周圍に寄合りあつて見て居た。夫れからモウ一步立上るとウエーランドと云う和蘭オランダの原書の字引が一部ある。それは六冊物で和蘭の註が入れてある。ツーフで分わからなければウエーランドを見る。所が初学の間はウエーランドを見ても分る氣遣きづかいはない。夫ゆえ便たよる所は只ただツーフのみ。会読かいどくは一六とか三八とか大抵たいてい日が極きまつて居て、いよく明日あすが会読だと云うその晩は、如何いかな懶惰らいだ生でも大抵寝ることはない。ツーフ部屋と云う字引のある部屋に、五人も十人も群ぐんをなして無言で字引を引つゝ勉強して居る。夫れから翌朝よくあさの会読になる。会読をするにも籤くじで以て此処ここから此処までは誰と極きめてする。会頭かいとうは勿論原書を持て居るので、五人なら五人、十人なら十人、自分に割当てられた所を順々に講じて、若しその者が出来なければ次に廻す。又その人も出来なければその次に廻す。その中で解げし得た者は白玉しろたま、解げし傷そこなうた者は黒玉くろたま、夫れから自分の読む領分を一寸でも滞りなく立派に読よみ了しまつたと云う者は白い三角を付ける。是れは只の丸玉まるたまの三倍ぐらい優等な印で、凡そ塾中の等級は七、八級位ぐらいに分けてあつた。而して毎級第一番の上席を三ヶ月占しめて居れば登と級うきゆうすると云う規則で、会読以外の書なれば、先進生が後進生に講釈もして聞かせ不審きいも聞きて遣やり至極深切にして兄弟のようにあるけれども、会読の一段になつては全く当人の

自力に任せて構う者がないから、塾生は毎月六度ずつ試験に逢うようなものだ。爾う云う訳で次第々に昇級すれば、殆んど塾中の原書を読尽して云わば手を空うするような事になる、その時には何か六かしいものはないかと云うので、実用もない原書の緒言とか序文とか云うような者を集めて、最上等の塾生だけで会読をしたり、又は先生に講義を願ったこともある。私などは即ちその講義聴聞者の一人でありしが、之を聴聞する中にも様々先生の説を聞て、その緻密なることその放胆なること実に蘭学界の一大家、名実共に違わぬ大人物であると感心したことは毎度の事で、講義終り、塾に帰て朋友相互に、「今日の先生の彼の卓説は如何だい。何だか吾々は頓に無学無識になったようだなど、話したのは今に覚えて居ます。」

市中に出て大に酒を飲むとか暴れるとか云うのは、大抵会読を仕舞たその晩か翌日あたりで、次の会読までにはマダ四日も五日も暇があると云う時に勝手次第に出て行たので、会読の日に近くなると所謂月に六回の試験だから非常に勉強して居ました。書物を能く読むと否とは人々の才不才にも依りますけれども、兎も角も外面を胡魔化して何年居るから登級するの卒業するのと云うことは絶えてなく、正味の實力を養うと云うのが事実に行われて居たから、大概の塾生は能く原書を読むことに達して居ました。

写本の生活ツーフの事に就て序ながら云うことがある。如何かするとその時でも諸藩の大名がそのツーフを一部写して貰いたいと云う注文を申込で来たことがある。ソコでその写本と云うことが又書生の生活の種子になった。当時の写本代は半紙一枚十行二十字詰で何文と云う相場である。処がツーフ一枚は横文字三十行位のものです、夫れだけの横文字を写すと一枚十六文、夫れから日本文字で入れてある註の方を写すと八文、只の写本に較べると余程割りが宜しい。一枚十六文であるから十枚写せば百六十四文になる。註の方ならばその半値八十文になる。註を写す者もあれば横文字を写す者もあった。ソレを三千枚写すと云うのであるから、合計して見ると中々大きな金高になって、自から書生の生活を手けて居ました。今日より考れば何でもない金のようにだけれども、その時には決してそうでない。一例を申せば白米一石が三分二朱、酒が一升百六十四文から二百文で、書生在塾の入費は一箇月一分貳朱から一分三朱あれば足る。一分貳朱はその時の相場で凡そ二貫四百文であるから、一日が百文より安い。然るにツーフを一日に十枚写せば百六十四文になるから、余る程あるので、凡そ尋常一様の写本をして塾に居られるなど、云うことは世の中にないことであるが、その出来るのは蘭学書生に限る特色の商売であった。ソレに就て一例を挙げれば斯う云うことがある。江戸は流石に大名の居る処で、嘗に

ゾーフ計りばかでなく蘭學書生の爲ために写本の注文は盛さかんにあつたもので自おのずから価あたが高い。大阪と較くらべて見れば大変高い。加賀の金沢の鈴木儀六すずきぎざくと云う男は、江戸から大阪に来て修業した書生であるが、この男が元来一文なしに江戸に居て、辛苦しんくして写本で以もつて自分の身を立たてたその上に金を貯えた。凡およそ一、二年辛抱して金を二十両ばかり拵こしらえて、大阪に出て来て到頭とうとうその二十両の金で緒方の塾で學問をして金沢に歸かえつた。是れなどは全く蘭書写本のお蔭である。その鈴木かんがえの考では、写本をして金を取るのには江戸が宜いいが、修業するには如何うしても大阪でなければ本當な事が出来ないと目的を定めて、ソレでその金を持もつて來たのであると話して居ました。

工芸技術に熱心夫それから又一方では今日のように都すべて工芸技術の種子たねと云うものがなかつた。蒸氣機關などは日本國中で見ようと云いつてもありはせぬ。化学ケミストの道具にせよ、何處どこにも揃そろつたものはありそうにもしない。揃そろうた物どころではない、不完全な物もありはせぬ。けれども爾そう云う中に居ながら、器械の事にせよ化学の事にせよ大体の道理は知しつて居るから、如何どうかして實地を試つみたいものだと云うので、原書を見てその図を写して似寄に寄りの物を拵こしらえると云うことに就つては中々骨を折りました。私が長崎に居るとき塩酸亜鉛あえんがあれば鉄にも錫すずを附けることが出来ると云うことを聞きいて知しつて居る。夫それまで日本では松脂まつやにばかり

を用いて居たが、松脂では銅あかがねの類に錫を流して鍍金めつきすることは出来る。唐金からかねの鍋なべに白みを掛けるようなもので、鑄掛屋いかけやの仕事であるが、塩酸亜鉛があれば鉄にも錫が着くと云うので、同塾生と相談してその塩酸亜鉛を作ろうとした所が、藥店くすりやに行ても塩酸のある氣遣づかいはない。自分で拵えなければならぬ。塩酸を拵える法は書物で分る。その方法に依て何うやら斯うやら塩酸を拵えて、之に亜鉛を溶かして鉄に錫を試みて、鑄掛屋の夢にも知らぬ事が立派に出来たと云うようなことが面白くて堪らぬ。或は又ヨジウムを作つて見ようではないかと、色々書籍を取調べ、天満の八百屋市に行て昆布荒布あらめのような海草類を買て来て、夫れを炮烙ほうろくで煎て如何云う風ふうにすれば出来ると云うので、真黒まっくろになつて遣たけれども是れは到頭とうとう出来ない。それから今度は礪砂製造どうしやの野心を起して、先ず第一の必要は塩酸暗謨尼亞アンモニアであるが、是れも勿論藥店にある品物でない。その暗謨尼亞を造るには如何するかと云えば、骨……骨よりもつと世話なしに出来るのは鼈甲屋べつこうやなどに馬爪ばづの削屑けずりくずがいくらもあつて只呉れる。肥料にするかせぬか分らぬが行きさえすれば呉れるから、それをドツサリ貰て来て徳利に入れて、徳利の外そと面に土を塗り、又素焼の大きな瓶かめを買て七輪にして沢山火たきさんを起し、その瓶の中に三本も四本も徳利を入れて、徳利の口には瀬戸物の管くだを附けて瓶の外に出すなど色々趣向して、ドシ／＼火を扇あうぎ立てる

と管の先きからタラ／＼液が出て来る。即ち是れが暗謨尼亞である。至極旨く取れることは取れるが、爰に難渋はその臭気だ。臭いにも臭くなくないにも何とも云いようがない。那の馬爪、あんな骨類を徳利に入れて蒸焼にするのであるから実に鼻持もならぬ。それを緒方の塾の庭の狭い処で遣るのであるから奥で以て堪らぬ。奥で堪らぬばかりではない。流石の乱暴書生も是れには辟易して逆も居られない。夕方湯屋に行くと着物が臭くつて犬が吠えると云う訳け。仮令い真裸体で遣ても身体が臭いと云て人に忌がられる。勿論製造の本人等は何でも斯うでもして礧砂と云う物を拵えて見ましようと言ふ熱心があるから、臭いのも何も構わぬ、頻りに試みて居るけれども、何分周辺の者が喧しい。下女下男迄も胸が悪くて御飯が給べられないと訴える。其れ是れの中でヤツト妙な物が出来たは出来たが、粉のような物ばかりで結晶しない。如何しても完全な礧砂にならない、加うるに喧しくて／＼堪らぬから一旦罷めにした。けれども氣強い男はマダ罷めない。折角仕掛つた物が出来ないと云ては学者の外聞が悪いとか何とか云うような訳けで、私だの久留米の松下元芳、鶴田仙庵等は思切たが、二、三の人は尚お遣た。如何したかと云うと、淀川の一歩粗末な船を借りて、船頭を一人雇うて、その船に例の瓶の七輪を積込んで、船中で今の通りの臭い仕事を遣るは宜いが、矢張り煙が立て風が吹くと、

その煙が陸の方へ吹付けられるので、陸の方で喧しく云う。喧しく云えば船を動かして、川を上つたり下つたり、川上の天神橋、天満橋から、ズット下の玉江橋辺まで、上^か下^{みしも}に^に逃^{まわつ}げて廻^{やつ}て遣^{やつ}たことがある。その男は中村恭安と云う讃岐の金比羅の医者であつた。この外にも犬猫は勿論、死刑人の解剖その他製薬の試験は毎度の事であつたが、シテ見ると当時の蘭学書生は如何にも乱暴なようであるが、人の知らぬ処に読書研究、又実地の事に就ても中々勉強したものだ。

製薬の事に就ても奇談がある。或るとき硫酸を造ろうと云うので、様々大骨折て不完全ながら色の黒い硫酸が出来たから、之を精製して透明にしなければならぬと云うので、その日は先ず茶碗に入れて棚の上^{おひ}に上げて置^おいた処が、鶴田仙庵が自分で之を忘れて、何かの機にその茶碗を棚から落して硫酸を頭から冠^{かぶ}り、身体に左までの径^{けが}我はなかつたが、丁度旧曆四月の頃で一枚の袷をツタ／＼にした事がある。

製薬には兎角徳利が入用だから、丁度宜しい、塾の近所の井池筋に米藤と云う酒屋が塾の御出入、この酒屋から酒を取寄せて、酒は飲で仕舞て徳利は留置き、何本でもみんな製薬用にして返さぬと云うのだから、酒屋でも少し変に思つたと見え、内々塾僕に聞^{きき}合^あせると、この節書生さんは中実の酒よりも徳利の方に用があると云うので、酒屋

は大に驚き、その後何としても酒を持て来なくなつて困た事がある。

黒田公の原書を引取る又筑前の国主、黒田美濃守と云う大名は、今の華族、黒田のお祖父さんで、緒方洪庵先生は黒田家に入出して、勿論筑前に行くでもなければ江戸に行くでもない、只大阪に居ながら黒田家の御出入医と云うことであつた。故に黒田の殿様が江戸出府、或は帰国の時に大阪を通行する時分には、先生は屹度中ノ嶋の筑前屋敷に伺候して御機嫌を伺うと云う常例であつた。或歳、安政三年か四年と思う。筑前侯が大阪通行になると云うので、先生は例の如く中ノ嶋の屋敷に行き、帰宅早々私を呼ぶから、何事かと思つて行つて見ると、先生が一冊の原書を出して見せて、「今日筑前屋敷に行たら、斯う云う原書が黒田侯の手に這入つたと云て見せて呉れたから、一寸と借りて来た」と云う。之を見ればワンダーベルトと云う原書で、最新の英書を和蘭に翻訳した物理書で、書中は誠に新らしい事ばかり、就中エレキトルの事が如何にも詳に書いてあるように見える。私などが大阪で電気のことを知たと云うのは、只纔に和蘭の学校読本の中にチラホラ論じてあるより以上は知らなかつた。所がこの新舶来の物理書は英国の大家フハラデーの電気説を土台にして、電池の構造法などがちゃんと出来て居るから、新奇とも何とも唯驚くばかりで、一見直に魂を奪われた。夫れから私は先生に向て、「是れは誠に珍らし

い原書で御在ますが、何時まで此処に拝借して居ることが出来ましようかと云うと、「左様さ。何れ黒田侯は二晩とやら大阪に泊ると云う。御出立になるまでは、彼処に入用もあるまい。「左様でございますか、一寸と塾の者にも見せとう御在ますと云て、塾へ持て来て、「如何だ、この原書はと云つたら、塾中の書生は雲霞の如く集つて一冊の本を見て居るから、私は二、三の先輩と相談して、何でもこの本を写して取ろうと云うことに一決して、「この原書を唯見たつて何にも役に立たぬ。見ることは止めにして、サア写すのだ。併し千頁もある大部の書を皆写すことは逆も出来ないから、末段のエレキトルの処丈け写そう。一同筆紙墨の用意して惚掛りだと云た所で茲に一つ困る事には、大切な黒田様の蔵書を毀すことが出来ない。毀して手分て遣れば、三十人も五十人も居るから瞬く間に出来て仕舞うが、それは出来ない。けれども緒方の書生は原書の写本に慣れて妙を得て居るから、一人が原書を読むと一人は之を耳に聞て写すことが出来る。ソコデ一人は読む、一人は写すとして、写す者が少し疲れて筆が鈍て来ると直に外の者が交代してその疲れた者は朝でも昼でも直に寝ると斯う云う仕組にして、昼夜の別なく、飯を喰う間も煙草を喫む間も休まず、一寸とも隙なしに、凡そ二夜三日の間に、エレキトルの処は申すに及ばず、図も写して読合まで出来て仕舞て、紙数は凡そ百五、六十枚もあつたと思

う。ソコデ出来ることなら外の処も写したいと云たが時日が許さない。マア、是れだけでも写したのは有難いと云うばかりで、先生の話に、黒田侯はこの一冊を八十両で買取られたと聞て、貧書生等は唯驚くのみ。固より自分に買うと云う野心も起りはしない。愈よ今夕、侯の御出立と定まり、私共はその原書を撫くり廻し誠に親に暇乞をするように別を惜んで還したことがございました。夫れから後は塾中にエレキトルの説が全く面目を新にして、当時の日本国中最上の点に達して居たと申して憚りません。私などが今日でも電気の話をして凡そその方角の分るのは、全くこの写本の御蔭である。誠に因縁のある珍らしい原書だから、その後度々今の黒田侯の方へ、ひよつと彼の原書はなからうかと問合せましたが、彼方でも混雑の際であつたから如何なつたか見当らぬと云う。可憐い事で御在ます。

大阪書生の特色只今申したような次第で、緒方の書生は学問上の事に就ては一寸とも怠つたことはない。その時の有様を申せば、江戸に居た書生が折節大阪に来て学ぶ者はあつたけれども、大阪から態々江戸に学びに行くものはない。行けば則ち教えると云う方であつた。左れば大阪に限て日本国中粒選のエライ書生の居よう訳けはない。又江戸に限て日本国中の鈍い書生ばかり居よう訳けもない。然るに何故ソレが違うかと云

うことに就ては考えなくてはならぬ。勿論もちろんその時には私なども大阪の書生がエライく、と自慢をして居たけれども、夫れは人物の相違ではない。江戸と大阪と自から事情が違て居る。江戸の方では開国の初はじめとは云いながら、幕府を始め諸藩大名の屋敷と云う者があつて、西洋の新技术を求むることが広く且かつつ急である。従て聊かでも洋書を解げすことの出来る者を雇うとか、或は翻譯をさせればその返礼に金を与えとか云うような事で、書生輩が自から生計の道に近い。極都合の宜い者になれば大名に抱えられて、昨日までの書生が今日は何百石の侍になつたこくさふらいと云うことも稀まれにはあつた。夫れに引換て大阪は丸で町人の世界で、何も武家と云うものはない。従て砲術を遣やらうと云う者もなければ原書を取調べようと云う者もありはせぬ。夫れゆえ緒方の書生が幾年勉強して何程エライ学者になつても、頓とんと実際の仕事に縁がない。即ち衣食に縁がない。縁がないから縁を求めると云うこともと思ひ寄らぬので、然らば何の爲めに苦学するかと云えば一寸と説明はない。前途自分の身体は如何なるであらうかと考えた事もなければ、名を求める気もない。名を求めぬどころか、蘭学書生と云えば世間に悪く云われるばかりで、既に己に焼けに成て居る。唯ただ昼夜苦しんで六むすかしい原書を読んで面白がつて居るようなもので実に訳わけの分らぬ身の有様ありさまとは申しながら、一步を進めて当時の書生の心の底を叩いて見れば、自から楽しみが

ある。之を一言すれば——西洋日進の書を読むことは日本国中の人に出来ない事だ、自分達の仲間に限て斯様事が出来る、貧乏をしても難澁をしても、粗衣粗食、一見看る影もない貧書生でありながら、智力思想の活潑高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すと云う氣位で、唯六かしければ面白い、苦中有樂、苦即樂と云う境遇であつたと思われる。喩えばこの葉は何に利くか知らぬけれども、自分達より外にこんな苦い葉を能く呑む者はなからうと云う見識で、病の在る所も問わずに唯苦ければもつと呑で遣ると云う位の血氣であつたに違ひはない。

漢家を敵視す若しも眞実その苦学の目的如何なんて問う者あるも、返答は唯漠然たる議論ばかり。医師の塾であるから政治談は余り流行せず、国の開鎖論を云えば固より開国なれども、甚だしく之を争う者もなく、唯当の敵は漢法医で、医者が憎ければ儒者までも憎くなつて、何でも蚊でも支那流は一切打払いと云うことは何処となく定まつて居たようだ。儒者が經史の講釈しても聴聞しようと云う者もなく、漢学書生を見れば唯可笑しく思うのみ。殊に漢医書生は之を笑うばかりでなく之を罵詈して少しも許さず、緒方塾の近傍なかのしまに花岡と云う漢医の大家があつて、その塾の書生は孰れも福生と見え服装も立派で、中々以て吾々蘭学生の類でない。毎度往来に出逢うて、固より言葉も交えず互

に睨にら合あうて行ゆ違ちがうその跡あとで、「彼の様さまア如何どうだい。着物ばかり奇麗きれいで何なにをして居ゐるんだ。空々くうくう寂じゃく々じゃく チンプンカンの講釈こうしゃくを聞きて、その中で古てく手垢あかの附つてゐる奴やつが塾長だ。こんな奴等やつらが二千年來ふたせんねんらい垢染あかじみた傷しょう寒かん論ろんを土産どさんにして、国くにに帰かえて人ひとを殺ころすとは恐おそろしいじゃないか。今いまに見みろ、彼奴等あいつらを根絶こんぜつやしにして呼吸いきねの音おとを止とめて遣やるからなんてワイい云いつたのは毎度まいどの事ことであるが、是これとても此方こつちに如斯こうと云いう成算せいさんも何なにもない。唯漢ただ法医流ほふいりゅうの無学無術むがくむじゆつを罵倒ののしして蘭学生らんがくせいの氣焰きえんを吐はくばかりの事ことである。

目的もくなしの勉強と兎かくに角かくに当時緒方かえつの書生しあわせは十中の七、八、目的もくなしに苦学くがくした者ものであるが、その目的もくのなかつたのが却かえつて仕合しあわせで、江戸えどの書生しやうせいよりも能よく勉強べんきやうが出来たのであろう。ソレカラ考かんがへて見みると、今日の書生しやうせいにしても余あまり学問がくもんを勉強べんきやうすると同時に始終しじう我身わくみの行ゆく先さきばかり考かんがへて居ゐるようでは、修業しゆぎやうは出来なかつたと思おもう。左さればと云いつた迂闊たうかつに本ほんばかり見みて居ゐるのは最よも宜よろしくない。宜よろしくないとは云いいながら、又始終しじう今いまも云いう通り自分自分の身みの行末ゆくすえのみ考かんがへて、如何どうしたらば立身りっしんが出来たであらうか、如何どうしたらば金かねが手てに這は入いるであらうか、立派りっぺな家に往むかふことが出来るであらうか、如何どうすれば旨うまいい物を喰くい好いい着物着物を着きられるであらうかと云いうような事ことにばかり心こころを引ひかれて、齷齪あくせく勉強べんきやうすると云いうことでは決して真まの勉強べんきやうは出来なかつたと思おもう。就学しゆがく勉強べんきやう中ちゆうは自みづかから静しずかにして居ゐらなければなら

らぬと云う理屈が茲^{ここ}に出て来ようと思う。

大阪を去て江戸に行く

私が大阪から江戸へ来たのは安政五年、二十五歳の時である。同年、江戸の奥^{おく}平^{だいら}の邸^{やしき}から、御用^{ごよう}があるから来いと云^いて、私^{わたし}を呼^{よび}に來た。それは江戸の邸^{おかみひこぞう}に岡見彦曹^いと云^いう蘭学^{ずき}好^{すき}の人があつて、この人は立派な身分のある上士族で、如何^{どう}かして江戸藩邸^{どころ}に蘭学^{ずき}の塾を開きたいと云うので、様々に周旋して、書生を集めて原書を読む世話をして居た。所^{ところ}で奥平家が私をその教師に使うので、その前、松木^{まつき}弘庵^{こうあん}、杉亨^{すぎこうじ}二と云うような学者を雇^{やと}うて居たような訳^{わけ}で、私が大阪に居ると云うことが分^{わか}つたものだから、他国の者を雇^{やと}うこととはない、藩中にある福澤を呼べと云うことになって、ソレで私を呼びに來たので、その時江戸詰^{づめ}の家老には奥平^{おくだいら}壹岐^{いちぎ}が來て居る。壹岐と私との關係に就^つては、私は自^{みづ}から自慢をしても宜^よいことがある。是^これは如何^{どう}しても悪感情がなければならぬ筈^{はず}、衝突^{ぐつう}がなければならぬ筈、けれども私はその人と一寸^{ちよい}とも戦^{たたか}つたことがない。彼は私を敵視し愚弄^{ぐろう}して居ると云うことは長崎を出た時の様^{さま}でチャント分^{わか}つて居る。長崎を立つ時に、「貴様は中津に

帰れ。帰たら誰にこの手紙を渡せ。誰に斯う伝言せよと命ずるからハイ／＼と畏りながら、心の中では舌を出して、「馬鹿言え、乃公は国に帰りはせぬぞ、江戸に行くぞと云わぬばかりに、席を蹴立てゝ出たことも、後になれば先方でも知て居る。けれどもその後私は毎度本人に逢うて仮初にも怨言を云た事のない所ではない、態と旧恩を謝すると云う趣ばかり装うて居る中に、又もやその大切な原書を盗写したこともある。先方も悪ければ此方も十分悪い。けれども唯私がその事を人に語らず顔色にも見せずに、御家老様と尊敬して居たから、所謂国家老のお坊さんで、今度私を江戸に呼寄せる事に就ても、家老に異議なく直に決して幸であつたが、実を申せば壹岐よりも私の方が却て罪が深いようだ。

三人同行大阪から江戸に来るに就ては、何は扱置き中津に帰て一度母に逢うて別を告げて来ましよう云うので、中津に帰たその時は虎列拉の真盛りで、私の家の近処まで病人だらけ、バタ／＼死にました。その流行病最中、船に乗て大阪に着て暫時逗留、ソレカラ江戸に向て出立と云うことにした所が、凡そ藩の公用で勤番するに、私などの身分なれば道中並に在勤中家来を一人呉れるのが定例で、今度も私の江戸勤番に付て家来一人振の金を渡して呉れた。けれども家来なんぞと云うことは思いも寄らぬ事で

何も要らぬ。けれども茲（こゝ）に旅費がある。待て、塾中に誰か江戸に行きたいと云う者はないか、江戸に行きたければ連れて行くが如何だ、実は斯（こ）う云う訳（わけ）で金はあるぞと云うと、即席にどうぞ連れて行て呉（い）れと云たが岡本周吉、即ち古川節藏である（広島の人）。よし連れて行て遣（や）らう。連れて行くが、君は飯（めし）を炊（た）かなければならぬが宜（よろ）しいか。江戸へ行けば米もあれば長屋もある。鍋釜（なべかま）も貸して呉れるが、本当の家来を止め（や）にすれば飯炊（めしたき）がない。その代（かわり）に連れて行くのだが如何だ。「飯を炊く位の事は何でもない、飯を炊こう。「それじや一緒に来いと云て、夫れから私の荷物は同藩の人に頼んで、道連（みちづれ）は私と岡本、もう一人備中の者で原田磊藏（はらだらいぞう）と云う矢張り緒方の塾生、都合三人の道中で、勿論（もちろん）歩く。その時は丁度十月下旬で少々寒かったが小春の時節、一日も川止（かわどめ）など云う災難（あ）に遇（あ）わず滞（とど）りなく江戸に着て、先ず木挽町汐留（こびきちようしおどめ）の奥平屋敷（おくへいおく）に行た所が、鉄砲洲（てっぽうず）に中屋敷がある、其処（そこ）の長屋を貸すと云うので、早速岡本と私とその長屋に住（す）み込（こ）込で、兩人自炊の世帯持（しやたいもち）になった、夫れから同行の原田は下谷練堀小路の大医大槻（したやねりべいこうじ　たいいおおつき　しゅんさい）俊斎先生の処へ入込（いりこん）だ。江戸へ参れば知己朋友は幾人も居て、段々面白くなつて来た。江戸に学ぶに非ず教るなり扱（さ）私（わ）が江戸に参て鉄砲洲の奥平中屋敷に住（す）まつて居ると云う中に、藩中の子弟が三人、五人ずつ学びに来るようになり、又他から五、六人も来るものが出来

たので、その子弟に教授して居たが、前にも云う通り大阪の書生は修業する為^{ため}に江戸に行くのではない、行けば教えに行くのだと云う自^{おの}から自負心があつた。私も江戸に来て見た処で、全体江戸の蘭学社会は如何^{どう}云うものであるか知りたいものだと思^{おも}て居^{うち}の中に、或^ある日島村^{しまむら}鼎甫^{ていふ}の家に尋ねて行たことがある。勿^{もちろん}論緒方門下の医者で、江戸に来て蘭書の翻譯などして居た。私も甚^{はな}だ能^よく知^して居るので、尋ねて参れば何時^{いつ}も學問の話ばかりで、その時に主人は生理書の翻譯最^{さい}中^{ちゆう}、その原書を持出^{もちだ}して云うには、この文の一節が如何^どしても分^{わか}らないと云う。夫^それから私が之^{これ}を見た所が、成^{なる}程^{ほど}解^げし悪い所だ。依^{よつ}て主人に向^{むか}て、是^これは外^{ほか}の朋友にも相談して見たかと云^いえば、イヤもう親友誰々四、五人にも相談をして見たが如何^{どう}しても分^{わか}らぬと云うから、面白い、ソレじゃ僕^{わが}が之^{これ}を解^げして見せようと云^いて、本^{ほん}当^{どう}に見た所が中々六^むかしい。凡^{およ}そ半時間ばかりも無言で考^{かん}えた所で、チャント分^{ぶん}つた。一^{いっ}体^{たい}是^これは斯^こう云う意味であるが如何^{どう}だ、物事^{ぶつじ}は分^{わか}て見ると造^{ぞう}作^{さく}のないものだと云^いて、主^{しゅ}客^{かく}共^{ども}に喜^{よろこ}びました。何^{なん}でもその一節は光線と視力との關係を論じ、蠟^{ろう}燭^{そく}を二本点^つけてその灯光^{あかり}をどうかすると影法師が如何^{どう}とかなると云う随分六^むかしい処で、島村の翻譯^{せいは}生理^{はつ}發^{はつ}蒙^{もう}と云う訳書中にある筈^{はず}です。この一事で私も窃^{ひそ}かに安心して、先^まず是^これならば江戸の學者も左^さまで恐^{おそ}れることはないと思^{おも}うたことがある。

それから又原書の不審な処を諸先輩に質問して窃にその力量を試したこともある。大阪に居る中に毎度人の読損うた処か人の読損いそうな処を選出して、そうして其れを私に分らない顔して不審を聞きに行くと、毎度の事で、学者先生と称して居る人が読損うて居るから、此方は却て満足だ。実は欺て人を試験するようなもので、徳義上に於て相済まぬ罪なれども、壮年血氣の熱心、自から禁ずることが出来ない。畢竟私が大阪に居る間は同窓生と共に江戸の学者を見下だして取るに足らないものだと思つて居ながらも、只ソレを空に信じて宜い氣になつて居ては大間違が起るから、大抵江戸の学者の力量を試さなければならぬと思つて、悪いこととは知りながら試験を遣て見たのです。

英学発心ソコデ以て蘭学社会の相場は大抵分て先ず安心ではあつたが、扨又此処に大不安心な事が生じて来た。私が江戸に来たその翌年、即ち安政六年、五国条約と云うものが発布になつたので、横浜は正しく開けた計りの処、ソコデ私は横浜に見物に行つた。その時の横浜と云うものは外国人がチラホラ来て居る丈けで、堀立小屋見たような家が諸方にチヨイ／＼出来て、外国人が其処に住で店を出して居る。其処へ行て見た所が一寸とも言葉が通じない。此方の云うことも分らなければ、彼方の云うことも勿論分らない。店の看板も読めなければ、ビンの貼紙も分らぬ。何を見ても私の知て居る文字と云うものはない。

英語だか仏語だか一向計らない。居留地をブラ／＼歩く中に独逸人^{ドイツ}でキニツフルと云う商人の店に打^{ぶち}当^{あた}つた。その商人は独逸人でこそあれ蘭語蘭文^{蘭文}が分る。此方^{こつち}の言葉は口々に分らないけれども、蘭文を書けばどうか意味が通ずると云うので、ソコで色々な話をしたり、一寸^{ちよい}と買物をしたりして江戸に帰^{かえ}て来た。御苦労な話で、ソレも屋敷に門限があるの^で、前の晩の十二時から行てその晩の十二時に帰たから、丁度^{ちようど}一昼夜歩いて居た訳^わけだ。小石川に通う横浜から帰^{かえ}て、私は足の疲れではない、実に落胆して仕舞^{しま}つた。是れは／＼どうも仕方^{しかた}がない、今まで数年^{すねん}の間、死物^{あいた}狂^{しにものぐる}いになって和蘭^{オランダ}の書を読むことを勉強した、その勉強したものが、今は何にもならない、商売人の看板を見ても読むことが出来ない、左^さりとは誠に詰らぬ事をしたわいと、実に落胆して仕舞^{しま}つた。けれども決して落胆して居られる場合でない。彼処^{あそこ}に行^いく行^いく居る言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。所で今世界に英語の普通に行^いく居ると云うことは予て知^して居る。何でもあれは英語に違いない、今我国は条約を結んで開^{ひら}けかゝつて居る、左^さすればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければ迎^{むか}へも何にも通^とうことが出来ない、この後は英語を読むより外^{ほか}に仕方^{しかた}がないと、横浜から帰た翌日だ、一度は落胆したが同時に又新^{あらた}に志を發^はして、夫^それから以来は一切万事英語と覺悟を極^きめて、扱^さてその英語を学ぶと云うことに

就て如何して宜か取付端がない。江戸中に何処で英語を教えて居ると云う所のあろう訳けもない。けれども段々聞て見ると、その時に条約を結ぶと云うが為めに、長崎の通詞の森山多吉郎と云う人が、江戸に来て幕府の御用を勤めて居る。その人が英語を知て居ると云う噂を聞出したから、ソコで森山の家に行て習いましょうと斯う思うて、その森山と云う人は小石川の水道町に住居して居たから、早速その家に行て英語教授の事を頼入ると、森山の云うに、昨今御用が多くて大変に忙しい、けれども折角習おうと云うならば教えて進ぜよう、就ては毎日出勤前、朝早く来いと云うことになって、その時私は鉄砲洲に住て居て、鉄砲洲から小石川まで頓て二里余もありましょう、毎朝早く起きて行く。所が今日はもう出勤前だから又明朝来て呉れ、明くる朝早く行くと、人が来て居て行かないと云う。如何しても教えて呉れる暇がない。ソレは森山の不親切と云う訳けではない、条約を結ぼうと云う時だから中々忙くて實際に教える暇がありはしない。そうすると、こんな毎朝来て何も教えることが出来んでは氣の毒だ、晩に来て呉れぬかと云う。ソレじや晩に参りましょうと云て、今度は日暮から出掛けて行く。あの往来は丁度今の神田橋一橋外の高等商業学校のある辺で、素と護持院ヶ原と云う大きな松の樹などが生繁つて居る恐ろしい淋しい処で、追剥でも出そうな処だ。其処を小石川から帰途に夜の十

一時十二時ごろ通る時の怖さと云うものは今でも能く覚えて居る。所がこの夜稽古も矢張り同じ事で、今晚は客がある、イヤ急に外国方（外務省）から呼びに來たから出て行かなければならぬと云うような訳で、頓と仕方がない。凡そ其処に二月か三月通うたけれども、どうにも暇がない。迎もこんな事では何も覚えることも出来ない。加うるに森山と云う先生も何も英語を大層知て居る人ではない、漸く少し発音を心得て居ると云う位迎も是れは仕方ないと、余儀なく断念。

蕃書調所に入門その前に私が横浜に行た時にキニツフルの店で薄い蘭英会話書を二冊買て來た。ソレを独で読とした所で字書がない。英蘭対訳の字書があれば先生なしで自分一人で解することが出来るから、どうか字書を欲しいものだと思つた所で横浜に字書などを売る処はない。何とも仕方がない。所がその時に九段下に蕃書調所と云う幕府の洋学校がある。其処には色々な字書があると云うことを聞出したから、如何かしてその字書を借りたものだ、借りるには入門しなければならぬ、けれども藩士が出拔けに公儀（幕府）の調所に入門したいと云ても許すものでない、藩士の入門願にはその藩の留守居と云うものが願書に奥印をして然る後に入門を許すと云う。夫れから藩の留守居の処に行て奥印の事を頼み、私は着て蕃書調所に行て入門を願うた。その時には箕作麟祥の

お祖父^{じい}さんの箕作阮甫^{げんぽ}と云う人が調所の頭^{とうどり}取^とで、早速^{さつそく}入門^{にゅうもん}を許^くして呉^くれて、入門^{にゅうもん}すれば字書^{じしょ}を借^かることが出来る。直^{すぐ}に拝借^{はいせき}を願^{ねが}うて、英蘭対訳^{えいらんたいせき}の字書^{じしょ}を手に請取^{うけとつ}て、通学生^{つうがくせい}の居る部屋^{へや}があるから其処^{そこ}で暫^{しばら}く見て、夫れから懷中の風呂敷^{ふろしき}を出^でしてその字書^{じしょ}を包^{つつ}んで帰^{かえ}ろうとすると、ソレはならぬ、此処^{ここ}で見^みるならば許^くして苦^{くる}しくないが、家に持^も帰^{かえ}ることは出来^でませぬと、その係^{けい}の者が云^いう。こりや仕^し方がない、鉄砲洲^{てつぽうず}から九段阪下^{くさだん}まで毎日^{まいにち}字^じ引^ひを引きに行^いくと云^いうことは迎^{むか}え間に合^あひ話^わだ。ソレも漸^{ようや}く入門^{にゅうもん}してたつた一日^{いちにち}行^いつた切^{きり}で断念^{だつねん}。

扨^{さて}如何^{どう}したら宜^よかろうかと考^{かん}えた。所で段々^{だんだん}横濱^{よこばた}に行^いく商人^{しょうじん}がある。何か英蘭対訳^{えいらんたいせき}の字^じ書^{しょ}はないかと頼^{たの}んで置^おいた所^{ところ}が、ホルトロツプと云^いう英蘭対訳^{えいらんたいせき}発音^{はつおん}付^つの辞書^{じしょ}一部^{いちぶ}二冊^{にさく}物^{ぶつ}がある。誠^{まこと}に小さな字引^{じりき}だけれども価^{あたい}五兩^{ごりやう}と云^いう。夫れから私^{わたし}は奥^{おく}平^{へい}の藩^{はん}に歎願^{たんがん}して買^{かい}取^とつて貰^{もら}つて、サアもう是^これで宜^{よろ}しい、この字引^{じりき}さえあればもう先生^{せんせい}は要^いらないと、自力^{じりき}研究^{けんきゅう}の念^{ねん}を固^{かた}くして、唯^{ただ}その字引^{じりき}と首^{くび}引^{びき}で、毎日^{まいにち}毎夜^{まいや}独^{ひと}り勉強^{べんきやう}、又^{また}或^{ある}は英文^{えいぶん}の書^{しよ}を蘭語^{らんご}に翻譯^{へんぎ}して見^みて、英文^{えいぶん}に慣^なれる事^{こと}ばかり心掛^{こころか}けて居^ゐました。英学^{えいがく}の友^{とも}を求^{もと}むそこで自^{みづか}分の一^{ひと}身^みは爾^そう定^きめた所^{ところ}で、是^これは如何^{どう}しても朋友^{とも}がなくてはな^らぬ。私^{わたし}が自^{みづか}分で不^ふ便^{べん}を感じ^{かん}ずる通^とりに、今^{いま}の蘭学^{らんがく}者^{しや}は悉^{ことごと}く不^ふ便^{べん}を感じ^{かん}じて居^ゐるに違^{ちが}ひない。

迎も今まで学だのは役に立たない。何でも朋友に相談をして見ようと斯う思うたが、この事も中々易くないと云うのは、その時の蘭学者全体の考は、私を始として皆、数年の間刻苦勉強した蘭学が役に立たないから、丸で之を棄て、仕舞て英学に移ろうとすれば、新に元の通りの苦みをもう一度しなければならぬ、誠に情ない、つらい話である、譬えば五年も三年も水練を勉強して漸く泳ぐことが出来るようになった所で、その水練を罷めて今度は木登りを始めようと云うのと同じ事で、以前の勉強が丸で空になると、斯う考えたものだから如何にも決断が六かしい。ソコデ学友の神田孝平に面会して、如何しても英語を遣うじやないかと相談を掛けると、神田の云うに、イヤもう僕も疾うから考えて居て実は少し試みた。試みたが如何にも取付端がない。何処から取付て宜いか実に訳が分らない。併し年月を経れば何か英書を読むと云う小口が立つに違いないが、今の処では何とも仕方がない。マア君達は元氣が宜いから遣て呉れ、大抵方角が付くと僕も屹と遣るから、ダガ今の処では何分自分で遣ろうと思わないと云う。夫れから番町の村田造六（後に大村益次郎）の処へ行て、その通りに勧めた所が、是れは如何しても遣らぬと云う考で、神田とは丸で説が違う。「無益な事をするな。僕はそんな物は読まぬ。要らざる事だ。何もそんな困難な英書を辛苦して読むがものはないじやないか。必要な書は皆和蘭人が

翻訳するから、その翻訳書を読めばソレで沢山じやないかと云う。「成程それも一説だが、けれども和蘭人が何も角も一々翻訳するものじやない。僕は先頃横浜に行て呆れ仕舞た。この塩梅では迎も蘭学は役に立たぬ。是非英書を読まなくてはならぬではないかと勧むれども、村田は中々同意せず、「イヤ読まぬ。僕は一切読まぬ。遣るなら君達は遣り給え。僕は必要があれば蘭人の翻訳したのを読むから構わぬと威張て居る。是れは迎も仕方がないと云うので今度は小石川に居る原田敬策にその話をする、原田は極熱心で、何でも遣ろう。誰がどう云うても構わぬ。是非遣ろうと云うから、「爾うか、ソレは面白い。そんなら二人で遣ろう。どんな事があつても遣遂げようではないかと云うので、原田とは極説が合うて、愈よ英書を読むと云う時に、長崎から来て居た小供があつて、その小供が英語を知て居ると云うので、そんな小供を呼来て発音を習うたり、又或は漂流人で折節帰るものがある、長く彼方へ漂流して居た者が、開国になつて船の便があるものだから、折節帰る者があるから、そんな漂流人が着くとその宿屋に訪ねて行て聞いたこともある。その時に英学で一番六かしいと云うのは発音で、私共は何もその意味を学ぼうと云うのではない、只スペルリングを学ぶのであるから、小供でも宜ければ漂流人でも構わぬ、爾う云う者を捜し廻ては学んで居ました。始めは先ず英文を蘭文に翻訳することを試

み、一字々々字を引てソレを蘭文に書直せば、ちゃんと蘭文になって文章の意味を取ることに苦勞はない。唯その英文の語音を正しくするのに苦んだが、是れも次第に緒が開けて来れば夫れはどの難渋でもなし、詰る処は最初私共が蘭学を棄て、英学に移ろうとすることに、真実に蘭学を棄て、仕舞い、数年勉強の結果を空うして生涯二度の艱難辛苦と思いはしは大間違の話で、実際を見れば蘭と云い英と云うも等しく横文にして、その文法も略相同じければ、蘭書読む力は自から英書にも適用して決して無益でない。水を泳ぐと木に登ると全く別のように考えたのは一時の迷であつたと云うことを発明しました。

始めて亜米利加に渡る

咸臨丸ソレカラ私が江戸に來た翌年、即ち安政六年冬、徳川政府から亜米利加に軍艦を遣ると云う日本開闢以来、未曾有の事を決断しました。扨その軍艦と申しても至極小さなもので、蒸氣は百馬力、ヒュルプマシーネと申して、港の出入に蒸氣を焚くばかり、航海中は唯風を便りに運轉せねばならぬ。二、三年前、和蘭から買入れ、価は小判で二万五千両、船の名を咸臨丸と云う。その前、安政二年の頃から幕府の人が長崎に行て、蘭

人に航海術を伝習してその技術も漸く進歩したから、この度使節がワシントンに行くに付き、日本の軍艦もサンフランシスコまで航海と斯う云う訳けで幕議一決、艦長は時の軍艦奉行 木村摂津守、これに随従する指揮官は勝麟太郎、運用方は佐々倉桐太郎、浜口興右衛門、鈴藤勇次郎、測量は小野友五郎、伴鉄太郎、松岡磐吉、蒸気は肥田浜五郎、山本金次郎、公用方には吉岡勇平、小永井五八郎、通弁官は中浜万次郎、少年士官には根津欽次郎、赤松大三郎、岡田井蔵、小杉雅之進と、医師二人、水夫火夫六十五人、艦長の従者を併せて九十六人。船の割にしては多勢の乗組人でありしが、この航海の事に就ては色々お話がある。

今度咸臨丸の航海は日本開闢以来、初めての大事業で、乗組士官の面々は固より日本人ばかりで事に当ると覚悟して居た処が、その時亜米利加の甲比丹ブルックと云う人が、太平洋の海底測量の為に小帆前船ヘネモコパラ号に乗て航海中、薩摩の大島沖で難船して幸に助かり、横浜に来て徳川政府の保護を受けて、甲比丹以下、士官一人、医師一人、水夫四、五人、久しく滞留の折柄、日本の軍艦がサンフランシスコに航海と聞き、幸便だから之に乗て帰国したいと云うので、その事が定まろうとすると、日本乗組員は米国人と一緒に乗るのは厭だと云う。何故かと云うに、若しその人達を連れ

て帰れば、却て銘々共が亜米利加人に連れて行て貰たように思われて、日本人の名譽に係るから乗せないと剛情を張る。夫れ是れで政府も余程困た様子でありしが、到頭ソレを無理圧付けにして同船させたのは、政府の長老も内実は日本士官の伎倆を覚束なく思ひ、一人でも米国の航海士が同船したらばマサカの時に何かの便利になろうと云う老婆心であつたと思われる。

木村摂津守艦長 木村摂津守と云う人は軍艦奉行の職を奉じて海軍の長上官であるから、身分相当に従者を連れて行くに違いない。夫れから私はどうもその船に乗て亜米利加に行て見たい志はあるけれども、木村と云う人は一向知らない。去年大阪から出て来た計りで、そんな幕府の役人などに縁のある訳けはない。所が幸に江戸に桂川と云う幕府の蘭家の侍医がある。その家は日本國中蘭学医の総本山とでも名を命けて宜しい名家であるから、江戸は扱置き日本國中、蘭学社会の人で桂川と云う名前を知らない者はない。ソレ故私なども江戸に来れば何は扱置き桂川の家には訪問するので、度々その家に出入して居る。その桂川の家と木村の家とは親類——極近い親類である。夫れから私は桂川に頼で、如何かして木村さんの御供をして亜米利加に行きたいが紹介して下さることは出来まいかと懇願して、桂川の手紙を貰て木村の家に行てその願意を述べた所が、木村では即刻許し

て呉れて、連れて行て遣らうと斯う云うことになった。と云うのは、案ずるに、その時の世態人情に於て、外国航海など云えば、開闢以来の珍事と云おうか、寧ろ恐ろしい命の掛けの事で、木村は勿論軍艦奉行であるから家来はある、あるけれどもその家来と云う者も余り行く気はない所に、仮初にも自分から進で行きたいと云うのであるから、実は彼方でも妙な奴だ、幸と云う位なことであつたろうと思う。直に許されて私は御供をすることになった。

浦賀に上陸して酒を飲む咸臨丸の出帆は万延元年の正月で、品川沖を出て先ず浦賀に行た。同時に日本から亜米利加に使節が立て行くので、亜米利加からその使節の迎船が来た。ポーハタンと云うその軍艦に乗て行くのであるが、そのポーハタンは後から来ることになつて、咸臨丸は先に出帆して先ず浦賀に泊た。浦賀に居て面白い事がある。船に乗組で居る人は皆若い人で、もう是れが日本の訣別であるから浦賀に上陸して酒を飲むうではないかと云出した者がある。何れも同説で、夫れから陸に上て茶屋見たような処に行て、散々酒を飲でサア船に帰ると云う時に、誠に手癖の悪い話で、その茶屋の廊下の棚の上に嗽茶碗が一つあつた、是れは船の中で役に立ちそうな物だと思て、一寸と私それぬすんが夫を盗で来た。その時は冬の事で、サア出帆した所が大嵐、毎日々々の大嵐、なか

く茶碗に飯めしを盛もつて本式に喫たべるなんと云うことは容易な事ではない。所が私の盗だ嗽茶碗が役に立て、その中に一杯飯を入れて、その上に汁でも何でも皆掛けて、立たつて喰くう。誠に世話のない話で、大層便利を得て、亜米利加まで行て、帰りの航海中も毎日用いて、到頭日本まで持もつて帰かえつて、久しく私の家にゴロチャラして居た。程経て聞けばその浦賀で上陸して飲食のみくいた処は遊女屋だと云う。夫れはその当時私は知らなかったが、そうして見ると彼の大きな茶碗は女郎の嗽茶碗であつたろう。思えば穢きたないようだが、航海中は誠に調法、唯一ゆいいちの宝物であつたのが可笑しい。

銀貨狼藉さて扱さつてそれから船が出てずっと北の方に乗出した。その咸臨丸かんりんまると云うのは百馬力の船であるから、航府中、始終石炭を焚たくと云うことは出来ない。只港ただを出るとき這入はいるときに焚く丈だけで、沖に出れば丸で帆前船ほまえせん、と云うのは石炭が積まれますまい、石炭がなければ帆で行かなければならぬ。その帆前船に乗のつて太平洋を渡るのであるから、それは、毎日の暴風で、舢舨はしけぶね船が四艘しそうあつたが激浪げきろうの為に二艘取られて仕舞しまうた。その時は私は艦長の家来であるから、艦長の為に始終左右の用を弁じて居た。艦長は船の艦ともの方の部屋に居るので、或る日、朝起きていつもの通り用を弁じましようと思て艦の部屋に行た、所がその部屋に弗ドルラルが何百枚か何千枚か知れぬ程散乱して居る。如何どうしたのかと思う

と、前夜の^{おおあらし}大嵐で、袋に入れて押入の中に積上げてあつた弗、定めし錠も卸してあつたに違いないが、劇しい^{はげ}船の動揺で、弗の袋が戸を押破て外に散乱したものと見える。是れは大変な事と思て、直に^{すく}引返して舳の方に居る公用方の^{よしおかゆうへい}吉岡勇平にその次第を告げると、同人も大に驚き、場所に^{かけつ}駈付け、私も加勢してその弗を^{ひろいあつ}拾集めて袋に入れて元の通り戸棚に入れたことがあるが、元来船中にこんな事の起るその次第は、当時外国為替と云う事に就一寸とも考えがないので、旅をすれば金が要る、金が要れば金を持て行くと云う極簡単な話で、何万弗だか知れない弗を、袋などに入れて艦長の部屋に蔵めて置たその金が、嵐の^たために溢れ出たと云うような奇談を生じたのである。夫れでも大抵四十年前の事情が分りました。今ならば一向^{いっこう}訳けはない。為替で一寸と送て遣れば、何も正^{しょうきん}金を船に積で行く必要はないが、商売思想のない昔の武家は大抵こんなものである。航海中は毎日の嵐で、始終船中に波を打上げる。今でも私は覚えて居るが、甲板の下に居ると上に四角な窓があるので、船が傾くとその窓から^{たいよう}大洋の立浪が能く見える。それは大層な波で、船体が三十七、八度傾くと云うことは毎度の事であつた。四十五度傾くと沈むと云うけれども、幸に^{さいわい}大きな災もなく只その航路を進で行く。進で行く中に、何も見えるものはないその中で以て、一度帆前船に遇うたことがあつた。ソレは亜

米利加の船で、支那人を乗せて行くのだと云うその船を一艘見た切り、外には何も見ない。牢屋に大地震の如し所で三十七日掛て桑港に着た。航海中私は身体が丈夫だと見えて怖いと思うたことは一度もない。始終私は同船の人に戯れて、「是れは何の事はない、生れてからマダ試みたことはないが、牢屋に這入て毎日毎夜大地震に遇て居ると思えば宜いじゃないかと笑て居る位な事で、船が沈もうと云うことは一寸とも思わない。と云うのは私が西洋を信ずるの念が骨に徹して居たものと見えて、一寸とも怖いと思たことがない。夫れから途中で水が乏しくなつたので布哇に寄るか寄らぬかと云う説が起た。辛抱して行けば布哇に寄らないでも間に合うであろうが、極用心をすれば寄港して水を取て行く、如何しようかと云うが、遂に布哇に寄らずに桑港に直航と斯う決定して、夫れから水の儉約だ。何でも飲むより外は一切水を使うことはならぬと云うことになった。所でその時に大に人感激せしめた事がある、と云うのは船中に亜米利加の水夫が四、五人居ましたその水夫等が、動もすると水を使うので、甲比丹ブルックに、どうも水夫が水を使うて困ると云たら甲比丹の云うには、水を使うたら直に鉄砲で撃殺して呉れ、是れは共同の敵じやから説論も要らなければ理由を質問するにも及ばぬ、即刻銃殺して下さいと云う。理屈を云えば、その通りに違いない。夫れから水夫を呼で、水を使えは鉄砲で撃殺すから

爾^そう思えと云うような訳^わけで水を儉約したから、如何^{どう}やら斯^さうやら水の尽きると云うことがなくて、同^{どう}勢^{せい}合^あせて九十六人無事に亜米利加に着^ついた。船中の混雑は中々容易ならぬ事で、水夫共は皆筒^{つつ}袖^{そで}の着物は着て居るけれども穿^はき物^{もの}は草鞋^{わらじ}だ。草鞋が何百何千足^{そく}も貯えてあつたものと見える。船中はもうビショ／＼で、カリリとした天気は三十七日の間に四日か五日あつたと思います。誠に船の中は大変な混雑であつた（桑港着船の上、艦長の奮発で水夫共に長靴を一足ずつ買^かつて遣^やつて夫れから大に体裁が好^よくなつた）。

日本国人の大胆^{しか}併^ししこの航海に就^つては大^{おお}に日本^おの爲^{ため}に誇^たることがある、と云^いうのは抑^そも日本の人が始めて蒸氣船なるものを見たのは嘉永六年、航海を学び始めたのは安政二年の事で、安政二年に長崎に於^おいて和^オ蘭^{ランダ}人から伝習したのが抑^そも事^{こと}の始^はまりで、その業^ぎ成^なつて外国に船を乗出^{のりだ}そうと云うことを決したのは安政六年の冬^{ふゆ}、即^{すな}ち目^めに蒸氣船を見てから足掛^{あしか}け七年目、航海術の伝習を始めてから五年目にして、夫^それで万延元年の正月に出帆しよう^しと云うその時、少しも他人の手を藉^からずに出掛けて行こうと決断したその勇氣と云いその伎倆^{ぎりょう}と云い、是^これだけは日本国の名誉として、世界に誇るに足るべき事實だろうと思う。前にも申した通り、航海中は一切外国人の甲比丹^{カピテン}ブルックの助力は仮^からないと云うので、測量するにも日本人自身で測量する。亜米利加^{アメリカ}の人^{ひと}も亦^{また}自分で測量して居る。互に測量し

たものを後で見合わせる丈けの話で、決して亜米利加人に助けて貰うと云うことは一寸でもなかった。ソレ丈けは大に誇ても宜い事だと思ふ。今の朝鮮人、支那人、東洋全体を見渡した所で、航海術を五年学で太平洋を乗越そうと云うその事業、その勇氣のある者は決してありはしない。ソレ所ではない。昔々露西亞のペートル帝が和蘭に行て航海術を学んだと云うが、ペートル大帝でもこの事は出来なからう。仮令い大帝は一種絶倫の人傑なりとするも、当時の露西亞に於て日本人の如く大胆にして且つ学問思想の緻密なる国民は容易になからうと思われる。

米国人の歓迎祝砲海上恙なく桑港に着た。着くやいなや土地の重立たる人々は船まで来て祝意を表し、之を歓迎の始めとして、陸上の見物人は黒山の如し。次で陸から祝砲を打つと云うことになつて、彼方から打てば威臨丸から応砲せねばならぬと、この事に就て一奇談がある。勝麟太郎と云う人は艦長木村の次に居て指揮官であるが、至極船に弱い人で、航海中は病人同様、自分の部屋の外に出ることは出来なかつたが、着港になれば指揮官の職として万端差図する中に、彼の祝砲の事が起た。所で勝の説に、ソレは迎も出来る事でない、ナマジ応砲などして遣り傷うよりも此方は打たぬ方が宜いと云う。爾うすると運用方の佐々倉桐太郎は、イヤ打てないことはない、乃公が打て見せ

る。「馬鹿云え、貴様達に出来たら乃公おれの首を遣やると冷ひやかされて、佐々倉はいよく承知しない。何でも応砲もつして見せると云うので、夫それから水夫共どもを差図さずして大砲の掃除、火薬の用意して、砂時計を以て時を計り、物の見事に応砲が出来た。サア佐々倉が威張り出した。首尾克よくく出来たから勝の首は乃公おれの物だ。併しかし航海中、用も多おほいから暫しばく彼の首を当人に預けて置くと云て、大に船中を笑わした事がある。兎も角もマア祝砲だけは立派に出来た。

ソコで無事に港に着ついたらば、サアどうも彼方あつちの人の歓迎と云うものは、それはく實に至れり尽せり、この上の仕様がなしいと云う程の歓迎。亜米利加人の身になつて見れば、亜米利加人が日本に来て始めて始めて国を開いたと云うその日本人が、ペルリの日本行より八年目に自分の国に航海して来たと云う訳であるから、丁度自分の学校から出た生徒が実業について自分と同じ事をすると同様、乃公おれがその端緒たんちよを開いたと云わぬ計の心持であつたに違ちがひない。ソコでもう日本人を掌てのひらの上に乗せて、不自由をさせぬように不自由をさせぬようにとばかり、桑サンフランシスコ港に上陸するや否いなや馬車を以て迎もついに来て、取敢えず市中のホテルに休息と云うそのホテルには、市中の役人か何かは知りませぬが、市中の重おもだ立たつた人が雲霞うんかの如く出掛けて来た。様々の接待饗きやう応。ソレカラ桑港の近傍に、メー

ルアイランドと云う処に海軍港附属の官舎を威臨丸一行の止宿所に貸して呉れ、船は航海中なか／＼損所が出来たからとて、船渠に入れて修覆をして呉れる。逗留中は勿論彼方で賄も何もそつくり為て呉れる筈であるが、水夫を始め日本人が洋食に慣れない、矢張り日本の飯でなければ喰えないと云うので、自分賄と云う訳けにした所が、亜米利加の人は兼て日本人の魚類を好むと云うことを能く知て居るので、毎日々々魚を持て来て呉れたり、或は日本人は風呂に這入ることが好きだと云うので、毎日風呂を立て、呉れると云うような訳け。所でメールアイランドと云う処は町でないものですから、折節今日は桑港に來いと云て誘う。夫れから船に乘て行くと、ホテルに案内して饗応すると云うような事が毎度ある。

敷物に驚く所が此方は一切万事不慣れで、例えば馬車を見ても始めてだから実に驚いた。其処に車があつて馬が付て居れば乗物だと云うことは分りそうなものだが、一見したばかりでは一寸と考が付かぬ。所で戸を開けて這入ると馬が駈出す。成程是れは馬の挽く車だと始めて発明するような訳け。何れも日本人は大小を挟して穿物は麻裏草履を穿て居る。ソレでホテルに案内されて行て見ると、絨氈が敷詰めてあるその絨氈はどんな物かと云うと、先ず日本で云えば余程の贅沢者が一寸四方幾干と云て金を出して買うて、

紙入かみいれにするとか 蓑入たばこいれにするとか云うようなソナ珍らしい品物を、八畳も十畳も恐ろしい広い処に敷詰めてあつて、その上を靴で歩くとは、扱さて々途方もない事だと実に驚いた。けれども亜米利加人アメリカカが往来を歩いた靴の儘ままで颯々さつさつと上るから此方こつちも麻裏草履でその上あがつに上た。上ると突いきなり然酒が出る。徳利の口を明けると恐ろしい音がして、先まず変な事だと思ふたのはシャンパンだ。そのコップの中に何か浮うて居るのも分らない。三、四月暖気の時節に氷があろうとは思ひも寄らぬ話で、ズーツと銘々めいめいの前にコップが並んで、その酒を飲む時の有様ありさまを申せば、列座の日本人中で、先まずコップに浮いて居るものを口の中に入れて胆きもを潰つぶして吹出す者もあれば、口から出さずにガリ／＼か噛む者もあると云うような訳わけで、漸く氷が這入はいて居ると云うことが分わかつた。ソコで又煙草タバコを一服おもつと思ふ所で、煙草盆がない、灰吹はいふきがないから、そのとき私はストーヴの火で一才ちよいと点つけた。マツチも出て居たろうけれどもマツチも何も知りはせぬから、ストーヴで吸付すいけた所が、どうも灰吹がないので吸殻すいを棄すてる所がない。夫れそから懷中の紙を出してその紙の中に吸殻を吹出ふきだして、念を入れて揉もで／＼火の氣のないように振付ねじけて袂たもとに入れて、暫くして又後あとの一服を遣やろうとするその時に、袂けぶりから煙けぶりが出て居る。何ぞ図はらん、能く消したと思ふたその吸殻の火が紙に移うつつて煙が出て来たとは大に胆おおいを潰した。

磊落書生も花嫁の如し都てこんな事ばかりで、私は生れてから嫁入をしたことはないが、花嫁が勝手の分らぬ家に住込んで、見ず知らずの人に取巻かれてチャフヤ云われて、笑う者もあれば雑談を云う者もあるその中で、お嫁さんばかり独り静にしてお行儀を繕い、人に笑われぬようにしようとして却てマゴツイて顔を赤くするその苦しさはこんなものであろうと、凡そ推察が出来ました。日本を出るまでは天下独歩、眼中人なし怖い者なしと威張て居た磊落書生も、始めて亜米利加に来て花嫁のように小さくなって仕舞たのは、自分でも可笑しかった。夫れから彼方の貴女紳士が打寄りダンシングとか云て踊りをして見せると云うのは毎度の事で、扨行て見た処が少しも分らず、妙な風をして男女が座敷中を飛廻るその様子は、どうにも斯うにも唯可笑くて堪らない、けれども笑ては悪いと思うから成るだけ我慢して笑わないようにして見て居たが、是れも初めの中は随分苦勞であつた。

女尊男卑の風俗に驚一寸した事でも右の通りの始末で、社会上の習慣風俗は少しも分らない。或る時にメールアイランドの近処にバレーフォと云う処があつて、其処に和蘭の医者が居る。和蘭人は如何しても日本人と縁が近いので、その医者が艦長の木村さんを招待したいから来て呉れないかと云うので、その医者の家に行た所が、田舎相応の流行家

と見えて、中々の御馳走^{ごちそう}が出る中に、如何にも不審な事には、お内儀^{かみ}さんが出て来て座敷に坐り込んで頻りに客の取持^{とりもち}をすると、御亭主が周旋奔走して居る。是れは可笑しい。丸で日本とアベコベな事をして居る。御亭主が客の相手になってお内儀さんが周旋奔走するのが、当然^{あたりまえ}であるに、左りとはどうも可笑しい。ソコで御馳走は何かと云うと、豚の子の丸煮が出た。是れにも胆^{きも}を潰^{つぶ}した。如何だ、マア呆返^{あきれかえ}たな、丸で安達ヶ原^{あたち}に行たような訳^{わけ}けど、斯う思^こうた。散々馳走を受けて、その帰りに馬に乘らないかと云^いう。ソレは面白い、久振^{ひさびさ}りだから乗ろうと云て、その馬を借りて乗て来た。艦長木村は江戸の旗本^{はたもと}だから、馬に乘ることは上手^{じょうず}だ。江戸に居れば毎日馬に乘らぬことはない。夫れからその馬に乘てどん／＼駆^かけて来ると、亜米利加^{アメリカ}人が驚いて、日本人が馬に乘ることを知^して居ると云うて不思議の顔をして居る。爾^そう云う訳^{わけ}で双方共に事情が少しも分らない。事物の説明に隔靴の歎あり夫れから又、亜米利加^{アメリカ}人が案内して諸方の製作所などを見せて呉れた。その時は桑^{サンフランシスコ}港^{カウ}地方にマダ鉄道が出来ない時代である。工業は様々の製作所があつて、ソレを見せて呉れた。其処^{そこ}がどうも不思議な訳^{わけ}で、電気利用の電灯はないけれども、電信はある。夫れからガルヴァニの鍍金法^{めっき}と云うものも實際^{おこな}に行れて居た。亜米利加人の考^{かんが}えに、そう云うものは日本人の夢にも知らない事だろうと思^{おも}て見せて呉^{くれ}れた所が、

此方はチャント知て居る。是れはテレグラフだ。是れはガルヴァニの力で斯う云うことをして居るのだ。又砂糖の製造所があつて、大きな釜を真空にして沸騰を早くすると云うことを遣て居る。ソレを懇々と説くけれども、此方は知て居る、真空にすれば沸騰が早くなると云うことは。且つその砂糖を清浄にするには骨炭で濾せば清浄になると云うこともチャント知て居る。先方では爾う云う事は思いも寄らぬ事だと斯う察して、懇ろに数えて呉れるのであろうが、此方は日本に居る中に数年の間そんな事ばかり穿鑿して居たのであるから、ソレは少しも驚くに足らない。只驚いたのは、掃溜に行て見ても浜辺に行て見ても、鉄の多いには驚いた。申さば石油の箱見たような物とか、色々な缶詰の空などが沢山棄てゝある。是れは不思議だ。江戸に火事があると焼跡に釘拾いがウヤ／＼出て居る。所で亜米利加に行て見ると、鉄は丸で塵埃同様に棄てゝあるので、どうも不思議だと思つたことがある。

夫れから物価の高いにも驚いた。牡蠣を一罎買うと、半弗、幾つあるかと思つと二十粒か三十粒位しかない。日本では二十四文か三十文と云うその牡蠣が、亜米利加では一分二朱もする勘定で、恐ろしい物の高い所だ、呆れた話だと思つたような次第で、社会上、政治上、経済上の事は一向分らなかつた。

ワシントンの子孫如何と問う所で私が不図胸に浮かんで或人に聞いて見たのは外でない、今華盛頓の子孫は如何なつて居るかと思ねた所が、その人の云うに、華盛頓の子孫には女がある筈だ、今如何して居るか知らないが、何でも誰かの内室になつて居る容子だと如何にも冷淡な答で、何とも思つて居らぬ。是れは不思議だ。勿論私も亜米利加は共和国、大統領は四年交代と云うことは百も承知のことながら、華盛頓の子孫と云えば大変な者に違いないと思うたのは、此方の脳中には源頼朝、徳川家康と云うような考があつて、ソレから割出して聞た所が、今の通りの答に驚いて、是れは不思議と思うたことは今でも能く覚えて居る。理學上の事に就ては少しも胆を潰すと云うことはなかつたが、一方の社會上の事に就ては全く方角が付かなかつた。或時にメールアイランドの海軍港に居る甲比丹のマツキツガルと云う人が、日本の貨幣を見たいと云うので、艦長は予てそんな事の爲めに用意したものと見え、新古金銀が数々あるから、慶長小判を始めとして万延年中迄の貨幣を揃えて甲比丹の処へ送て遣た。所が珍らしいと計りで、宝を貰つた云う考は一寸とも顔色に見えない。昨日は誠に有難うと云てその翌朝お内儀さんが花を持て来て呉れた。私はその取次をして独り窃に感服した。人間と云うものはア、ありたい如何にも心の置き所が高尚だ、金や銀を貰たからと云てキョトト悦ぶと云うのは卑劣な

話だ、ア、ありがたいものだ、大きに感心したことがある。

軍艦の修繕に価を求めず前に云うた通り亜米利加人は誠に能く世話をして呉れた。軍艦をドックに入れて修覆して呉れたのみならず、乗組員の手元に入用な箱を拵えて呉れると

か云うことまでも親切にして呉れた。いよく船の仕度も出来て帰ると云う時に、軍艦の

修覆その他の入用を払いたいと云うと、彼方の人は笑て居る。代金などゝは何の事だ

と云うような調子で一寸とも話にならない。何と云うても勘定を取りそうにもしない。

始めて日本に英辞書を入れるその時に私と通弁の中浜万次郎と云う人と兩人がウエブス

トルの字引を一冊ずつ買て来た。是れが日本にウエブスと云う字引の輸入の第一番、

それを買てモウ外には何も残ることなく、首尾克く出帆して来た。

義勇兵所で私が二度目に亜米利加に行たとき、甲比丹ブルックに再会して八年目に聞た話

がある。それは最初日本の咸臨丸が亜米利加に着たとき、桑港で中々議論があ

った。今度日本の軍艦が来たからその接待を盛にしなければならぬと云うので、彼処に陸

軍の出張所を見たようなものがある。其処へ甲比丹ブルックが行て、大に歓迎しようでは

ないかと相談を掛けると、華盛頓に伺うた上でなければ出来ないと云う。「そんな事を

して居ては間に合わないから、何でも出張所の独断で遣れと談じて、兎角埒が明かない

から、甲比丹は少し立腹して、いよく政府の筋で出来なければ此方に仕様ががあると云て、夫れから方向を転じて桑港サンフランシスコの義勇兵に持込んで、どうだ斯う云う訳けであるから接待せぬかと云うと、義勇兵はぐんえき大悦びで直に用意が出来た。全体この義勇兵と云うものは不斷軍役のあるではなし、大將は御医者様で、少將は染物屋の主人と云うような者で組立てゝあるけれども、チャント軍服も持て居れば鉄砲も何もすっかり備えて居て、日曜か何か暇な時か又は月夜などに操練をして、イザ戦争と云う時に出て行くと云うばかりで、太平の時は先ず若い者の道楽仕事であるから、折角拵えた軍服も滅多に着るこ
とがない所に、今度甲比丹ブルックの話を聞て千歳一遇の好機会と思ひ、晴れの軍服を光
らして日本の軍艦咸臨丸を歓迎したのであると、甲比丹が話して居ました。
布哇寄港祝砲と共に目出度桑港を出帆して、今度は布哇寄港と定まり、水夫は二、
三人亜米利加から連れて来たけれども、甲比丹ブルックは居らず、本当の日本人ばかりで、
何やら斯うやら布哇を捜出して、其処へ寄港して三、四日逗留した。逗留中、布哇の風
俗に就ては物珍しく云う程の要用はないだろう、と思うのは、三十年前の布哇も今も変た
ことはなからう、その土人の風俗は汚ない有様で、一見蛮民と云うより外仕方がない。
王様にも遇うたが、是れも国王陛下と云えば大層なようだけれども、其処へ行て見れば

驚く程の事はない。夫婦連で出て来て、国王は只羅紗ただらしゃの服を着て居ると云う位な事、家も日本で云えば中位ちゆうぐらいの西洋造り、宝物たからものを見せると云うから何かと思たら、鳥の羽で拵こしらえた敷物しきものを持って来て、是れが一番のお宝物だと云う。あれが皇弟か、その皇弟が箆ざるを提さげて買物に行くような訳で、マア村の漁師の親方ぐらいの者であつた。

少女の写真それから布哇で石炭を積込んで出帆した。その時に一寸した事だが奇談がある。私は予て申す通り一体の性質が花柳かりゆうに戯たわぶれるなど、云うことは仮初かりそめにも身に犯した事のないのみならず、口でもそんな如何いかわしい話をした事もない。ソレゆえ同行の人は妙な男だと云う位には思うて居たろう。夫れから布哇を出帆したその日に、船中の人に写真を出して見せた。是れはどうだ（その写真は此処に在りと、福澤先生が筆記者に示されたるものを見るに、四十年前の福澤先生の傍に立ち居るは十五、六の少女なり）。その写真と云うのはこの通りの写真だろう。ソコでこの少女が芸者か女郎か娘かは勿論その時に見さかいのある訳けはない——お前達は桑港サンフランシスコに長く逗留して居たが、婦人と親しく相並んで写真を撮るなぞと云うことは出来なかつたろう、サアどうだ、朝夕口でばかり下らない事を云て居るが、実行しなければ話にならないじゃないかと、大に冷かして遣た。是れは写真屋の娘で、歳は十五とか云た。その写真屋には前にも行たことがあるが、

丁度^{ちやうど}雨の降る日だ、その時私^{ひと}独りで行た所が娘が居たから、お前さん一緒に取ろうではないかと云うと、亜米利加^{アメリカ}の娘だから何とも思ひはしない、取りましよう云うて一緒に取たのである。この写真を見せた所が、船中の若い士官達は大に驚いたけれども、口惜^{くや}しくも出来なかつ、と云うのは桑港でこの事を云出^いすと直^{すぐ}に真似^{まね}をする者があるから黙^{だまつ}て隠^{おひ}して置いて、いよく布哇を離れてもう亜米利加にも何処^{どこ}にも縁のないと云う時に見せて遣^やて、一時の戯^{たわぶ}れに人を冷かしたことがある。

不在中桜田の事變歸る時は南の方を通^{とおつ}たと思う。行くときは違^{ちが}つて至極海上は穩かで、何でもその歳^{とし}には閏^{うるう}があつて、閏^{うるう}を罩^こめて五月五日の午前に浦賀に着^{ちやく}した。浦賀には是非^{ぜい}錨^{いかり}を卸^{おろ}すと云^いうのがお極^{きま}りで、浦賀に着^つするや否^{いな}や、船中数十日のその間は勿論^{もちろん}湯に這入^{はい}ると云^いうことの出来る訳^{わけ}もない、口嗽^{うがい}をする水がヤツト出来ると云^いう位な事で、身体^{からだ}は汚れて居るし、髪はクシャ／＼になつて居る、何は扱置^{さてお}き一番先に月代^{さかい}をして夫れ^そから風呂に這入ろうと思つて、小舟^{こぶね}に乗^{のつ}て陸に着くと、木村のお迎^{むかえ}が数日前から浦賀に詰掛^{つめか}けて居て、木村の家来に島安太郎^{しまやすたろう}と云う用人^{ようじん}がある、ソレが海岸まで迎いに來て、私が一番先に陸^{あがつ}に上^あつてその島に遇^あうた。正月の初^{はじめ}に亜米利加^{アメリカ}に出帆して浦賀に着^つくまでと云うものは風の便りもない、郵便もなければ船の交通と云うものもない。その間^{あいだ}は僅^{わず}かに六箇

月の間あいだであるが、故郷の様子は何も聞かないから、殆ほとんど六ケ年も遇わぬような心こころもち地。
ヒヨイと浦賀の海岸で島に遇あつて、イヤ誠にお久振ひさしぶり、時に何か日本に變かわつた事はないかと尋
ねた所が、島安太郎が顔色かおいろを変えて、イヤあつたともく大變な事が日本にあつたと云う
その時、私が、一寸ちよいと島さん待まちて呉くれ、云うて呉れるな、私が中あてゝ見せよう、大變と云
えば何でも是れは水戸の浪人が掃部様かもんさまの邸やしきに暴あばれ込んだと云うような事ではないかと云
うと、島は更さらに驚き、どうしてお前さんはそんな事を知して居る、何處どこで誰だれに聞きいた、聞
たつて聞きかないたつて分るじやないか、私はマア雲氣うんきを考かんえて見るに、そんな事ではないか
と思う、イヤ是これはどうも驚いた、邸やしきに暴込んだ所ではない、斯こうく云いう訳わけだと云て、
桜田騒動の話をした。その歳としの三月三日に桜田に大騒動おおおのあつた時であるから、その事を
話したので、天下の治安と云うものは大凡おおよそ分るもので、私が出立する前から世の中の様
子を考かんえて見るとどうせ騒動がありそうな事だと思おもて居たから、偶然あたらにも中たので誠に面
白おもしろかつた。

その前年そのぞうから徐々おこなわ攘夷説おこなが行れると云う世の中になつて来て、亞米利加アメリカに逗留中、艦
長おもちゃが玩具はんぐ半分に蝙蝠傘かわけりがさを一本買かつた。珍しいものだと云いつて皆寄よつて拈ひねくつて見ながら、
如何どうだろう之これを日本に持もつて歸かえつて廻まわつたら、イヤそれは分わかりきつ切きて居る、新錢座の艦長

の屋敷から日本橋まで行く間に浪人者に斬られて仕舞うに違いない、先ず屋敷の中で折節しひろげて見るより外ほかに用のない品物だと云たことがある。凡およそこのくらしいな世の中で、帰国の後は日々に攘夷論が盛さかんになつて来た。

幕府に雇アメリカわる亜米利加から帰かえつてから塾生も次第に増して相替あいからず教授して居うちる中に、私は亜米利加渡航を幸さいわいに彼の国こくじん人に直接して英語ばかり研究して、帰てからも出来るだけ英書を読むようにして、生徒の教授にも蘭書は教えないで悉ことごとく英書を教える。所がマダなか／＼英書が六むすかしくて自由自在に読めない。読めないから便たよる所は英蘭対訳の字書のみ。教授とは云いながら、実は教うるが如くごと学ぶが如く、共に勉強して居る中に、私は幕府の外国方がいこくがた（今で云えば外務省）に雇こわれた。その次第は外国の公使領事から政府の閣老かくろう又は外国奉行へ差出す書翰しよかんを翻譯する為めである。当時の日本に英仏等の文を読む者もなければ書く者もないから、諸外国の公使領事より来る公文には必ず和蘭オランダの翻譯文を添そへうるの慣例にてありしが、幕府人に横文字よこもじ読よむ者としては一人ひとりもなく、止やむを得ず吾々われわれ如ごとき陪臣ばいしん（大名の家来）の蘭書読よむ者を雇こうて用を弁じたことであるが、雇こわれたに就つては自おのから利益のあると云うのは、例えば英公使、米公使と云うような者から来る書翰の原文が英文で、ソレに和蘭の訳文が添そへうてある。如何どうかしてこの翻譯文を見ずに直接じかに英文

を翻譯してやりたいものだと思て試みる、試みて居る間に分らぬ処がある、分らぬと蘭訳文を見る、見ると分ると云うような訳けで、なか／＼英文研究の爲めになりました。ソレからもう一つには幕府の外務省には自から書物がある、種々様々な英文の原書がある。役所に出て居て読むのは勿論、借りて自家へ持て来ることも出来るから、ソんな事で幕府に雇われたのは身の爲めに大に便利になりました。

欧羅巴各国に行く

私が亜米利加から歸たのは万延元年、その年に華英通語と云うものを翻譯して出版したことがある。是れが抑も私が出版の始まり、先ずこの両三年間と云うものは、人に教うると云うよりも自分で以て英語研究が専業であつた。所が文久二年の冬、日本から欧羅巴諸国に使節派遣と云うことがあつて、その時に又私はその使節に附て行かれる機会を得ました。この前亜米利加に行く時には私に木村損津守に懇願して、その従僕と云うことにして連れて行て貰たが、今度は幕府に雇われて居て欧羅巴行を命ぜられたのであるから、自から一人前の役人のような者になつて、金も四百兩ばかり貰たかと思う。旅中は一切官

費で、只手当として四百両の金を貰たから、誠に世話なし。ソコで私は平生頓と金の要らない男で、徒に金を費すと云うことは決してない。四百両貰たその中で百両だけ国に居る母に送てやった。如何にも母に對して氣の毒だと云うのは、亜米利加から歸てマダ国へ親の機嫌を聞きに行きもせず、重ねて歐羅巴ヨーロッパに行くと言うのだから、如何にも濟まない。而已ならず私が亜米利加旅行中にも、郷里中津の者共が色々様々な風聞を立て、亜米利加に行て彼の地で死んだと云い、甚だしきに至れば現在の親類の中の一人が私共の母に向て、誠に氣の毒な事じや、諭吉さんもうゝ亜米利加で死んで、身体は鹽けにして江戸に持て歸たそうだと、威すのか冷すのかソんな事まで云て母を撈て居たと云うような事で、是れも時節柄で我慢して黙て居るより外に仕方がないとして居ながら、母に對しては如何にも氣が濟まない。金をやったからと云てソレで償える訳のものではないけれども、マアゝゝ百両だの二百両だのと云う金は生れてから見たこともない金だから、ソレでも送て遣ろうと思て、幕府から請取た金を分けて送りました。

それから歐羅巴に行くと言ふことになつて、船の出発したのは文久元年十二月の事であつた。この度の船は日本の使節が行くと云う為めに、英吉利から迎船のようにして來たオリヂンと云う軍艦で、その軍艦に乗て香港、新嘉堡と云うような印度洋の港々に

立寄り、紅海に這入て、蘇士から上陸して蒸氣車に乗て、埃及のカイロ府に着て二晩ばかり泊り、それから地中海に出て、其処から又船に乗て仏蘭西の馬塞耳、ソコデ蒸氣車に乗て里昂に一泊、巴里に着て滞在凡そ二十日、使節の事を終り、巴里を去て英吉利に渡り、英吉利から和蘭、和蘭から普魯西の都の柏林に行き、柏林から露西亜のペートルスボルグ、夫れから再び巴里に歸て来て、仏蘭西から船に乗て、葡萄牙に行き、ソレカラ地中海に這入て、元の通りの順路を経て歸て来たその間の年月は凡そ一箇年、即ち文久二年一杯、推詰してから日本に歸て来ました。

扱今度の旅行に就て申せば、私もこの時にはモウ英書を読み英語を語ると云うことが徐々々出来て、夫れから前に申す通りに金も聊か持て居るその金は何も遣い所はないから、只日本を出る時に尋常一様の旅装をした丈で、その当時は物価の安い時だから何もそんなに金の要る訳がない、その余た金は皆携えて行て竜動に逗留中、外に買物もない、唯英書ばかりを買て来た。是れが抑も日本へ輸入の始まりで、英書の自由に使われるようになったと云うのも是れからの事である。

夫れから彼の国の巡回中色々観察見聞したことも多いが、是れは後の話にして、先ず使節一行の有様を申さんに、その人員は、

たけのうちしもつけのかみ
 竹内下野守 正使松平石見守 副使京極能登守 御目付柴田貞太郎 組頭
 ひたかけいざぶろう
 日高圭三郎 御勘定 福田作太郎 御徒士目付 水品樂太郎 調役 岡崎藤左衛門 同高
 まゆうけい
 嶋祐啓 御医師但し漢方医なり 川崎道民 雇医 益頭駿次郎 御普請役上田友助
 もりはちたろう
 定役元締森鉢太郎 定役 福地源一郎 通弁立広作 同 太田源三郎 同 斎藤大之進 同
 たかまつひこさぶろう
 心 高松彦三郎 御小人目付山田八郎 同松木弘安 反訳方箕作 秋坪 同福澤諭
 吉同

右の外に三使節の家来両三人ずつと、賄小使六、七人、この小使の中には内証で諸藩
 から頼んで乗込んだ立派な士人もある。松木、箕作、福澤等は先ず役人のような者ではあ
 るが、大名の家来、所謂陪臣の身分であるから、一行中の一番下席で惣人数凡そ四
 十人足らず、孰れも日本服に大小を横えて巴里、竜動を闊歩したも可笑しい。
 旅行中用意の品々失策又失策日本出発前に外国は何でも食物が不自由だからと云うので、
 白米を箱に詰めて何百箱の兵糧を貯え、又旅中止宿の用意と云うので、廊下に灯す
 かなあんどんにしゃく
 金行灯 二尺四方もある鉄網作りの行灯を何十台も作り、その外提灯、手燭、
 ろうそく
 ボンボリ、蠟燭等に至るまで一切取揃えて船に積込んだその趣向は、大名が東海道を
 通行して宿駅の本陣に止宿する位の胸算に違いない。夫れからいよく巴里に着

して、先方から接待員が迎いに出て来ると、一応の挨拶終りて先ず此方よりの所望は、随行員も多勢なり荷物も多いことゆえ、下宿は成るべく本陣に近い処に頼むと云うのは、万事不取締不安心だから、一行の者を使節の近処に置きたいと云う意味でしょう。スルト接待員はいさい承知して、先ず人数を聞糺し、惣勢三十何人と分て、「是ればかりの人数なれば一軒の旅館に十組や二十組は引受けますとの答に、何の事やら訳けが分らぬ。ソレカラ案内に連れられて止宿した旅館は、巴里の王宮の門外にあるホテルデロウブルと云う広大な家で、五階造り六百室、婢僕五百余人、旅客は千人以上差支なしと云うので、日本の使節などは何処に居るやら分らぬ。唯旅館中の廊下の道に迷わぬように、当分はソレガ心配でした。各室には温めた空氣が流通するから、ストーヴもなければ蒸気もなし、無数の瓦斯灯は室内廊下を照らして日の暮るゝを知らず、食堂には山海の珍味を並べて、如何なる西洋嫌いも口腹に攘夷の念はない、皆喜んで之を味うから、爰に手持不沙汰なるは日本から脊負て来た用意の品物で、ホテルの廊下に金行灯を点けるにも及ばず、ホテルの台所で米の飯を炊くことも出来ず、とう／＼仕舞には米を始め諸道具一切の雑物を、接待掛りの下役のランベヤと云う男に進上して、唯貰て貰うたのも可笑しかった。

先まずこんな塩梅あんばい式しきだから、吾われ々一行の失策物笑ものわらいは数限かずりもない。シガーとシユガーを間違まちがえて烟草タバコを買いに遣やつて砂糖もつを持もつて来るもあり、医者いんじんは人參じんじんと思おもつて買かつて生し姜しょうの粉こであつたこともある。又或あるときに三使節中の一人が便所に行く、家来がボンボリを持もつて御供おともをして、便所の二重の戸を明放あけはなしにして、殿様が奥の方で日本流に用を達すその間、家来は袴着はかまぢやく用、殿様の御腰おこしの物を持もつて、便所の外の廊下に平ひらき直なおつてチャント番をして居るその廊下は旅館中の公道で、男女往来織おるが如ごとくにして、便所の内外瓦斯ガスの光明こうめい昼あきよりも明あきなりと云いうから堪たまらない。私は丁度ちやうど其処そこを通かつて掛かつて、驚いたとも驚くまいとも、先まず表に立塞たちふさがつて物も言いわずに戸を打締ぶちしめて、夫それからそろ／＼その家来殿に話したことがある。

歐洲の政風人情政治上の事に就つては竜動ロンドン、巴里等パリとうに在留中、色々な人に逢あうて色々な事を聞きいたが、固もとよりその事柄の由来を知らぬから能く分わかる訳わけもない。當時は仏蘭西の第三世ナポレオンが歐洲第一の政治家と持もてはや囃はされてエライ勢力であつたが、隣国の普魯士プロスも日の出の新進国で油断はならぬ。奥地利との戦争、又アルサス、ローレンスの事なども国交際の問題として、何いれ後年には云々の変乱が生ずるであらうなると云いうことは朝ちやう野政通の予言する所で、私の日記覚書おぼえがきにもチヨイ／＼記してある。又竜動に居る

とき、或る社中の人が社名を以て議院に建言したと云うて、その草稿を日本使節に送て来た。建言の趣意は、在日本英国の公使アールコックが新開国たる日本に居て乱暴無狀、恰も武力を以て征服したる国民に臨むが如し云々とて、種々様々の証拠を挙げて公使の罪を責るその証拠の一つに、公使アールコックが日本国民の霊場として尊拝する芝の山内に騎馬にて乗込たるが如き言語に絶えたる無礼なりと痛論したる節もある。私はこの建言書を見て大に胸が下つた。成るほど世界は鬼ばかりでない、是れまで外国政府の仕振を見れば、日本の弱身に付込み日本人の不文殺伐なるに乗じて無理難題を仕掛けて眞実困て居たが、その本国に来て見れば「自から」公明正大、優しき人もあるものだと思て、ます／＼平生の主義たる開国一偏の説を堅固にしたことがある。

土地の売買勝手次第又各国巡回中、待遇の最も濃なるは和蘭の右に出るものはない。是れは三百年來特別の關係で爾うなければならぬ。殊に私を始め同行中に横文字読む人で蘭文を知らぬ者はないから、文書言語で云えば欧羅巴中第二の故郷に帰たような訳けで自然に居心が宜い。夫れは扨置き和蘭滞留中に奇談がある。或るとき使節がアムストルダムに行て地方の紳士紳商に面会、四方八方の話の序に、使節の間に、「このアムストルダム府の土地は売買勝手なるかと云うに、彼の人答えて、「固より自由自在。」「外国人へも

売るか。「値段次第、誰にでも、又何ほどにても。「左れば爰に外国人が大資本を投じて
広く上地を買占め、之に城廓砲台でも築くことがあつたら、夫れでも勝手次第かと云うに、
彼の人も妙な顔をして、「ソナ事は是れまで考えたことはない。如何に英仏その他の国
々に金満家が多いとて、他国の地面を買て城を築くような馬鹿氣た商人はありますまい
と答えて、双方共に要領を得ぬ様子で、私共は之を見て実に可笑しかったが、当時日本の
外交政略は凡そこの辺から割出したものであるから堪らない訳けさ。

見物自由の中又不自由夫れは扱居き、私がこの前垂米利加に行たときには、カリフォルニ
ヤ地方にマダ鉄道がなかつたから、勿論鉄道を見たことがない、けれども今度は蘇土に
上て始めて鉄道に乗り、ソレカラ歐羅巴各国を彼方此方と行くにも皆鉄道ばかり、到る
処に歓迎せられて、海陸軍の場所を始めとして、官私の諸工場、銀行会社、寺院、学校、
倶楽部等は勿論、病院に行けば解剖も見せる、外科手術も見せる、或は名ある人の家に晩
餐の饗応、舞踏の見物など、誠に親切に案内せられて、却て招待の多いのに草臥れ
ると云う程の次第であつたが、唯こゝに一つ可笑しいと云うのは、日本はその時丸で鎖国
の世の中で、外国に居ながら兎角外国人に遇うことを止めようとするのが可笑しい。使節
は竹内、松平、京極の三使節、その中の京極は御目附と云う役目で、ソレに

は又相応の属官が幾人も附て居る。ソレが一切の同行人を目ツ張子めぱりこで見て居るので、なか／＼外国人に遇うことが六むすかしい。同行者は何れも幕府の役人連で、その中に先まず同志同感、互に目的を共にすると云うのは眞みづくり作秋坪しゅうへいと松木弘安まつきこうあんと私と、この三人は年来の学友で互に往来して居たので、彼方あちらに居てもこの三人だけは自然別なものにならぬ。何でも有らん限りの物を見ようと計りして居る、ソレが役人連の目に面白くないと見え、殊ことに三人とも陪臣ばいしんで、然しかも洋書を読むと云うから中々油断をしない。何か見物に出掛けようとすると、必ず御目附方おめつけがたの下役したやくが附いて行かなければならぬと云う御定まりおさだまりで始終つひ廻まわる。此方こつちは固もとより密売しうではなし、国の秘密を洩もらす氣遣きづかいもないが、妙な役人が附て来れば只蒼蠅ただづるさい。蒼蠅いのはマダ宜よいが、その下役が何か外ほかに差さしつかえ支えがあると、私共も出ることが出来ない。ソレは甚はなはだ不自由ふじゆうでした。私はその時にⅡⅡ是れはマア何の事はない、日本の鎖国をそのまゝ担かついで来て、歐羅巴ヨーロッパ各国を巡回するようなものだいと云て、三人で笑わらつたことがあります。

血を恐れるソレでも私共は見ようと思うものは見、聞きこうと思う事は聞きいたが、序ついでながらこの見聞けんもんのことに就つて私の身の恥を云いわねばならぬ。私は少年の時から至極元氣しごくげんきの宜いい男で、時として大言壮語たいげんそうごしたことも多いが、天稟氣うまれつきの弱い性質で、殺生が嫌い、人の血を

見ることが大嫌い。例えば緒方の塾に居るときは刺^{しらく} 流行の時代で、同窓生は勿論^{もちろん}私も腕の脈に針をして血を取^{とつ}たことがある。所が私は自分でも他人でもその血の出るのを見て心持^{こころもち}が善^よくないから、刺と云えばチャント眼^めを閉じて見ないようにして居る。腫^{しゅも}物が出来ても針をすることは先^まず見合せたいと云い、一寸^{ちよつ}とした怪我でも血が出ると顔^{がん}色が青くなる。毎度都会の地にある行倒^{ゆきだおれ}、首縊^{くびくくり}、変死人などは何としても見ることが出来ない。見物どころか、死人の話^あを聞ても逃げて廻ると云うような臆病者である。所が露西亞^{ロシア}に滞留中、或る病院に外科手術があるから見物せよとの案内に箕作^{みつくり}も松木^{まつき}も医者だから直ぐに出掛ける。私にも一処に行けと無理に勧めて連れて行かれて、外科室に這入^{はいつ}て見れば石淋^{せきりん}を取出す手術で、執刀の医師は合羽^{かつぱ}を着て、病人をば俎^{まないた}のような台の上に寝かして、コロ、ホルムを臭^かがせて先^まず之^{これ}を殺して、夫れからその医師が光り燿^{かがや}く刀を執^{とつ}てグツト制すと、大造^{たいぞう}な血が迸^{ほとばし}つて医者^{りぐち}の合羽は真赤になる、夫れから刀の切^き口に釘^{くぎぬき}拔^はのようなものを入れて膀胱^{ぼうこう}の中にある石を取出すとか云^いう様子であつたが、その中に私は変な心持になつて何だか気が遠くなつた。スルト同行の山田^{やまだ}八郎^{はちろう}と云^いう男が私を助けて室外に連出^{つれだ}し、水など呑^のまして呉^くれてヤツト正氣^{かえつ}に返た。その前独逸^{ドイツ}の伯林^{ベルリン}の眼病院でも、敬^{やぶにらみ} 目の手術とて子供の眼^めに刀を刺^{とう}す処を半分ばかり見て、私は急

いでその場を逃出してその時には無事に済んだことがある。松木も箕作も私に意気地がないと云て頻りに冷かすけれども、持て生れた性質は仕方がない、生涯これで死ぬことでしよう。

事情探索の胸算夫れは扱置き私の欧羅巴巡回中の胸算は、凡そ書籍上で調べられる事は日本に居ても原書を読んで分らぬ処は字引を引て調べさえすれば分らぬ事はないが、外国の人に一番分り易い事で殆んど字引にも載せないと云うような事が此方では一番六かしい。だから原書を調べてソレで分らないと云う事だけをこの逗留中に調べて置きたいものだと思つて、その方向で以て是れは相当の人だと思えばその人に就て調べると云うことに力を尽して、聞くに従て一寸々斯う云うように（この時先生細長くして古々しき一小冊子を示す）記して置て、夫れから日本に帰てからソレを台にして尚お色々な原書を調べ又記憶する所を綴合せて西洋事情と云うものが出来ました。凡そ理化学、器械学の事に於て、或はエレクトルの事、蒸汽の事、印刷の事、諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云うのは、元来私が専門学者ではなし、聞いた所が真実深い意味の分る訳けはない、唯一通りの話を聞けばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分るから、コンナ事の詮索は先ず二の次にして、外に知りたいことが沢山ある。例え

ばコゝに病院と云うものがある、所でその入費にゅうひの金はどんな塩梅あんばいにして誰が出して居るのか、又銀行バンクと云うものがあつてその金の支出入は如何どうして居るか、郵便法おこなわが行れて居てその法は如何どう云う趣向きやうにしてあるのか、仏蘭西フランスでは徴兵令れいこうを厲行れいこうして居るが英吉利イギリスには徴兵令がないと云う、その徴兵令と云うのは、抑そも如何どう云う趣向きやうにしてあるのか、その辺の事情が頓とんと分らない。ソレカラ又政治上の選挙法と云うような事が皆無かいむ分らない。分らないから選挙法とは如何どんな法律で議院とは如何どんな役所かと尋ねると、彼方あつちの人は只笑たわらつて居る、何を聞くのか分り切きつた事だと云う様な訳わけ。ソレが此方こつちでは分らなくてどうにも始末が付かない。又党派には保守党と自由党と徒党しのぎのような者があつて、双方負けず劣らず鎬げを削けずて争うて居ると云う。何の事だ、太平無事の天下に政治上の喧嘩けんかをして居ると云う。サア分らない。コリヤ大変なことだ、何をして居るのか知らん。少しも考かんがの付はずこう筈はずがない。彼あの人と此この人とは敵だなんと云うて、同じテーブルで酒を飲のんで飯を喰くて居る。少しも分らない。ソレが略分ほぼるようになろうと云うまでには骨の折れた話で、その謂いわれ因縁いんえんが少しずつ分るようになって来て、入組いりくんだ事柄になると五日も十日も掛かつてヤツト胸に落ると云うような訳わけで、ソレが今度洋行の利益でした。

樺太の境界談判それからその逗留中に誠に情けなく感じたことがあると申すは、私共の出

立前からして日本國中、次第々々に攘夷論が盛になつて、外交は次第々々に不始末だらけ、今度の使節が露西亞に行た時に此方から樺太の境論を持出して、その談判の席には私も出て居たので、日本の使節がソレを云出すと先方は少しも取合わない。或は地図などを持出して、地図の色は斯うく云う色ではないか、自から此処が境だと云うと、露西亞人の云うには、地図の色で境が極れば、この地図を皆赤くすれば世界中露西亞の領分になつて仕舞うだろう、又これを青くすれば世界中日本領になるだろうと云うような調子で漫語放言、迎も寄付かれない。マア兎にも角にもお互に実地を調べたその上の事に為ようと言うので、樺太の境は極めずに宜加減にして談判は罷になりましたが、ソレを私が傍から聞て居て、是れは迎も仕様がな、一切万事便る所なし、日本の不文不明の奴等が威張りして攘夷論が盛になればなる程、日本の国力は段々弱くなる丈けの話で、仕舞には如何云うようになり果てるだろうかと思つて、実に情けなくなりました。

露政府の厚遇 国交際の談判は右の通りに水臭い次第であるが、使節に対する私の待遇は爾うでない。ペートルスブルグ滞在中は日本使節一行の爲めに特に官舎を貸渡して、接待委員と云う者が四、五人あつてその官舎に詰切りで、いろく饗応するその饗応の仕方と云うは頗る手厚く、何に一つ遺憾はないと云う有様。ソレで御用がない時は名所

旧跡を始め諸所の工場と云うような所に案内して見せて呉れる。その中に段々接待委員の人々と懇意になつて種々様々な話もしたが、その節露西亞に日本人が一人居ると云う噂を聞いたその噂は、どうも間違ない事実であらうと思われる。名はヤマトフと唱えて、日本人に違いないと云う。勿論その噂は接待委員から聞いたのではない。その外の人から洩れたのであるが、先ず公然の秘密と云う位な事で、チャント分て居た。そのヤマトフに遇て見たいと思うけれどもなかなか遇われない。到頭逗留中出て来ない。出て来ないがその接待中の模様に至ては動もすると日本風の事がある。例えば室内に刀掛があり、寢床には日本流の木の枕があり、湯殿には糟を入れた糟袋があり、食物も勉めて日本調理の風にして箸茶碗なども日本の物に似て居る。どうしても露西亞人の思付く物でない。シテ見ると噂の通り何処にか日本人の居るのは間違いない、明に分て居るけれども、到頭分らずに帰て仕舞いました。私の西航日記にこの事を記して、その傍に詩のようなものが一寸と書てある。

起来就食々終眠、飽食安眠過一年、

他日若遇相識問、欧天不異故鄉天

今日になつて一々記憶もないが、余程日本流の事が多かつたと思われます。

露国に止まることを勧む夫れから或日の事で、その接待委員の一人が私の処に来て、一寸こちらに来て呉れろと云て、一間に私を連れて行た。何だと云て話をする、私の一身上の事に及んで、お前はこの度使節に付て来たが、是れから先は日本に帰て何をする所存かソリヤ勿論知らないが、お前は大層金持かと尋ねるから、「イヤ決して金持ではない、マア幾らか日本の政府の用をして居る、用をして居れば自らその報酬と云うものがあるから衣食の道に差支はないものだ、斯う私は答えた。所が接待委員の云うに、「日本の事だから我々に委しい事情の分る訳けはない、分りはしないけれども、どうも大體を考えて見た所で日本は小国だ、ア、云う小さな国に居て男子の仕事の出来るものじゃない。ソレよりかお前はヒヨイと茲に心を変えてこの露西亞に止まらないかと云うから、私は答えて、「自分の身は使節に随従して来て居るものであるから、爾う勝手に止まられる訳けのものじゃないと有りのまゝに云うと、「イヤ夫れは造作もない話だ、お前さえ今から決断して隠れる氣になれば直ぐに私が隠して遣る。どうせ使節は長く此処に居る氣遣はない、間もなく帰る。帰ればソレ切だ。そうしてお前は露西亞人になつて仕舞いなさい。この露西亞には外国の人は幾らも来て居る、就中独逸の人などは大變に多い、その外和蘭人も来て居れば英吉利人も来て居る。だから日本人が来て居たからと云て何

も珍しい事はない、是非此処に止まれ。いよく止ると決すれば、その上はどんな仕事でも為ようと思えば面白い愉快な仕事は沢山ある。衣食住の安心は勿論、随分金持になる事も出来るから止まれと懇に説いたのは、決して尋常の戯れでない。チャント一間の中に差向いで真面目になつて話したのである。けれども私がその時に止まると云う必要もなければ、又止まろうと云う気もない。宜い加減に返答をして置くと、その後二、三度同じような事を云て来たが、固より話は纏らず。その時に私は大に心付きました、成程露西亜は歐羅巴の中で一種風俗の変た国だと云うが、ソレに違いない。例えば今度英仏にも暫く滞留し、又前年亜米利加に行たときにも、人に逢いさえすれば日本に行こうと云う者が多い。何か日本に仕事はないか、どうかして一緒に連れて行て呉れないかと、ソリヤもう行く先々でうるさいように云う者はあれども、遂ぞ止まれと云うことを只の一度も云た人はない。露西亜に来て始めて止まれと云う話を聞た、その趣を推察すれば、決して是れは商売上の話ではない、如何しても政治上又国交際上の意味を含んで居るに違いない。こりやどうも気の知れない国だ、言葉に意味を含んで止まれと云う所を見れば、或は陰険の手段を施す為めではないか知らんと思うた事があつた。けれどもそんな事を聞たと云うことを同行の人に語ることも出来ない、語ればどんな嫌疑を蒙るまいもので

もないから、その時に語らぬのは勿論、日本に帰て来ても人に云わずに黙て居ました。
或は爾う云うことを云われたのは私一人でなく、同行の者も同じ事を云われて、私と同じ
考えで黙て居た者があつたかも知れない。兎に角に氣の知れぬ国だと思われる。

生麦の報道到来して使節苦しむ夫れから露西亜を去て仏蘭西に帰り、いよく出発と云う
その時は生麦の大騒動、即ち生麦で英人のリチャードソンと云うものを薩摩の侍が斬た
と云うことが丁度彼方に報告になった時で、サア仏蘭西のナポレオン政府が吾々日本
人に対して氣不味くなつて来た。人民はどうか知らないが政府の待遇の冷淡不愛相にな
つた事は甚だしい。主人の方でその通りだから、客たる吾々日本人のキマリの悪いこと如
何にも云い様がない。日本の使節が港から船に乘ろうと云うその道は十町余りもあつたか
と思う、道の両側に兵隊をずっと并べて見送らした。是れは敬礼を尽すのではなくして日
本人を威かしたに違いない。兵士を幾ら并べたつて鉄砲を撃つ訳けでないから、怖くも何
ともありはしないけれども、その苦々しい有様と云うものは実に堪らない訳けであつた。
私の西航記中の一節に、

閏八月十三日文久二年朝八時ロシフアルトに着。ロシフアルトは巴里より仏里にて
九十里の処にある仏蘭西の海軍港なり。蒸氣車より下り船に乘るまでの路十余町、こ

の間盛あいだかんに護衛の兵卒千余人を列せり。敬礼を表するに似て或あるいは威を示すなり。日本人は昨夜蒸氣車に乗り車中安眠するを得ず大に疲れたるに、此処ここに着して暫時も休息せしめず車より下りて直おに又船ただちに乘らしむ。且かつ船に乘るまで十余町の道、日本の一行には馬車を与えず徒歩にて船まで云々。

ソレカラ仏蘭西を出発して葡萄ポルトガル牙のリスボンに寄港し、使節の公用を済すまして又船に乗り、地中海に入り、印度インド洋に出て、海上無事、日本に帰かえつて見れば攘夷論の真盛りだ。

攘夷論

攘夷論の鋒先洋学者に向う 井伊掃部頭いいかものかみはこの前殺されて、今度は老中の安藤あんどう対馬守つしまのかみが浪人に疵きずを付けられた。その乱暴者の一人が長州の屋敷に駈込かけこんだとか何とか云う話を聞て、私はその時始めて心付いた、成るほど長州藩も矢張り攘夷の仲間はいっに這入はいて居るのかと斯こう思たことがある。兎とにも角かくにも日本國中攘夷の真盛まつさかりでどうにも手の着けようがない。所で私の身にして見ると、是これまでは世間に攘夷論があると云う丈だけの事で、自分の身に就つて危あやういことは覚えなかつた。大阪の塾に居る中に勿論暗殺など、云うことのある

う筈はない。又江戸に出て来たからとて怖い敵もなければ何でもないと計り思て居た所が、
サア今度欧羅巴ヨーロッパから帰て来たその上はなか／＼爾うそでない。段々喧しくなつて、外国貿易をする商人が俄に店を片付けて仕舞うなど、云うような事で、浪人と名くる者が盛に出て来て、何処どこに居て何をして居るのか分らない。丁度今の壮士そうしと云うようなもので、ヒョコ／＼妙な処から出て来る。外国の貿易をする商人さえ店を仕舞うと云うのであるから、況して外国の書よんを読よんで欧羅巴の制度文物を夫れ是れと論ずるような者は、どうも彼輩は不埒な奴じや、畢ひつきよう竟彼奴等は虚言を吐て世の中を瞞まん着する売国奴だと云うような評判がソロ／＼行れて来て、ソレから浪士の鋒ほこしぎ先が洋学者の方に向いて来た。是れは誠に恐おそれい入た話で、何も私共は罪を犯した覚えはない。是れはマア何処まで小さくなれば免るゝかと云うと、幾ら小さくなつても免れない。到頭仕舞には洋書を読むことを罷やめて仕舞うて攘夷論でも唱えたらば、ソレはお詫わびが済むだろうが、マサカそんな事も出来ない。此方こつちが無頓着に思ふ事を遣やらうとすれば、浪人共は段々きつくなつて来る。既に私共と同様幕府に雇われて居る翻譯方ほんやくがたの中に手塚律蔵てづかりつぞうと云う人があつて、その男が長州の屋敷いっに行て何か外国の話をしたら、屋敷の若者等が斬て仕舞うと云うので、手塚はドン／＼駈出す、若者等は刀を抜て追蒐る、手塚は一生懸命に逃げたけれども逃切れずに、

寒い時だが日比谷外そとの濠の中へ飛込んで漸ようやく助かった事もある。夫れから同じ長州の藩士で東条礼蔵とうじょうれいぞうと云う人も矢張り私わと同僚ほんやくがた翻譯方ほんやくがたで、小石川の素もと蜀山人しよくさんじんの住居すまいと云う家に住すんで居た。所がその家に所謂いわゆる浮浪の徒が暴あばれこ込んで、東条は裏口から逃出して漸やと助つたと云うような訳わけで、いよく洋学者の身が甚はなはだ危あやうくなつて来て油断がならぬ。左さればとて自分の思おもう所、為なす仕事は罷やめられるものじゃない。夫れから私は構かわらない、構かおうと云いた所が構かわれもせず、罷やめようと云いた所が罷やめられる訳わけでない、マア／＼言げ語ぎ挙動ぎやうどうを柔やわらかにして決きして人に逆さかわらないように、社会の利害と云うような事は先まず氣きの知れない人には云いわれないようにして、慎つつしめる丈だけ自分の身を慎つつしんで、ソレと同時に私わたしは専もっぱら著書翻譯の事を始はめた。その著訳の一条に就つては今コゝで別段に云う事はない、私の今年こゝ開かい版はんした福澤全集の緒言ちよげんに詳つまびらかに書いてあるから是これは見合みあせるとして、その著訳事業中すなわ、即ち攘夷論全盛の時代に、洋学生徒の数は次第々々に殖ふえるからその教授法に力つを尽つくし、又家の活計は幕府に雇くわれて扶持米ふちまいを貰もらうてソレで結構暮くらせるから、世間の事には頓とんと頓とん着ちやくせず、怖こい半分、面白おもしろい半分に歳月としつきを送おくつて居る。或時あるとき可笑おかしい事があつた。私が新銭座に一寸住居ちよいとすまいの時（新銭座塾に非あらず）、誰方どなたか知らないが御目に掛かりたいと云いてお侍さむらいが参まゐりましたと下女とりつぎが取次するから、「ドンナ人だと聞くと、「大きな人で、眼

が片眼で、長い刀を挟して居ますと云うから、コリヤ物騒な奴だ、名は何と云う。「名はお尋ね申したが、お目に掛れば分ると云て被仰しやいませんⅡⅡどうも気味の悪い奴だとおもつて、夫れから私は窃と覗いて見ると、何でもない、筑前の医学生で原田水山、緒方の塾と一緒に居た親友だ。思わず罵た。この馬鹿野郎、貴様は何だ、何ぜ名を云て呉れんか、乃公は怖くて堪らなかつたと云て、奥に通して色々世間話をして、共々に大笑した事がある。爾う云う世の中で洋学者もつまらぬ事に驚かされて居ました。

英艦来る夫れから攘夷論と云うものは次第々々に増長して、徳川將軍家茂公の上洛となり、続いて御親発として長州征伐に出掛けると云うような事になって、全く攘夷一偏の世の中となつた。ソコで文久三年の春、英吉利の軍艦が来て、去年生麦にて日本の薩摩の侍が英人を殺したその罪は全く日本政府にある、英人は只懇親を以て交ろうと思うて是れまでも有らん限り柔かな手段ばかりを執て居た、然るに日本の国民が乱暴をして剰え人を殺した、如何にしてもその責は日本政府に在て免るべからざる罪であるから、この後二十日を期して決答せよと云う次第は、政府から十万磅の償金を取り、尚お二万五千磅は薩摩の大名から取り、その上罪人を召捕て眼の前で刑に処せよとの要求、その手紙の来たのがその歳の二月十九日、長々とした公使の公文が来た。その時に私共が翻譯する役

目に^{あたつ}当て居るので、夜中に呼びに来て、赤坂に住^{すん}で居る外国奉行 松平石見守の宅に
 行^いたのが、私と杉田玄端、高畑五郎、その三人で出掛けて行て、夜の明けるまで翻譯
 したが、是^これはマアどうなる事だろうか、大変な事だと窃^{ひそか}に心配した所が、その翌々二
 十一日には將軍が危^{ききゆう}急存亡の大事を眼前に見ながら其^それを棄^すて、置^{おい}て上洛して仕舞^{しま}う
 た。爾^そうするとサア二十日の期限がチャント来た。十九日に手紙が来たのだから丁度翌月
 十日、所^{そこ}がもう二十日待^{まつ}て呉^くれろ、ソレは待つ^{まつ}の待^{まち}たないと 捫^{もん}着^{ちゃく}の末、どうやら斯^こ
 うやら待て貰^{もら}うことになった。所でいよく償金を払うか払わないかと云^いう幕府の評議が
 なかく決^けしない。その時の騒動と云うものは、江戸市中そりやモウ今に戦争が始まるに
 違^{ちが}いない、何日に戦争がある抔^{なと}と云う評判、その二十日の期間も既^{すで}に過^{すぎ}去^{さつ}て、又十日と
 云うことになつて、始^{しじゆう}終^{しゆう}十日と二十日の期限を以て次第々々に返^{へんじ}辞^じを延^のびして行く。私は
 その時に新銭座に住^{すん}で居たから、逆^{とて}もこりや戦争になりそうだ、なればどうも逃^にげるより
 外^{ほか}に仕^し様^{よう}がないと、ソロ^ろく^ろく^ろ迷^に仕^し度^どをすると云うような事で、ソコで愈^いよ^い期^き日も差^さ迫^{せま}
 て、今度はもう掛^{かけ}値^ねなし、一日も負^まからないと云う日になった、と云うのを私は政府の翻譯^ほ
 訳^{やく}局^{きよく}に居^つて詳^{まづ}に知^ちて居^つるから尚^なお堪^たま^まらない。

仏国公使無法に威張^あるその翻譯^あをする間に、時の仏蘭西のミニストル・ベレクルと云う者

が、どう云う気前だか知らないが大層な手紙を政府に出して、今度の事に就て仏蘭西は全く英吉利イギリスと同説だ、愈よ戦端せんたんを開く時には英国と共に軍艦を以て品川沖を暴れ廻ると、乱暴な事を云うて来た。誠に謂れのない話で、丸でその趣おもむきは今の西洋諸国の政府が支那人を威すと同じ事で、政府は唯英仏人の劍幕を見て心配する計りばか。私には能くその事情が分る、分れば分るほど気味が悪い。

事態いよゝゝ迫る是れはいよゝゝ遣るに違いないと鑑定して、内の方の政府を見れば何時迄も説が決しない。事が喧やかしくなれば閣老は皆病氣と称して出仕する者が無いから、政府の中心は何処どこに在るか訳が分らず、唯役人達が思ひただに小田原評議のグヅゝで、愈よ期日が明後日と云うような日になつて、サア荷物を片付けなければならぬ。今でも私の処に疵きずの付た筆筭がある。愈よ荷物を片付けようと云うので筆筭を細引で縛て、青山の方へ持て行けば大丈夫だろう、何も只の人間を害する氣遣きづかいはないからと云うので、青山の穂田おんでんと云う処に呉黄石と云う芸州げいしゅうの医者があつて、その人は箕作の親類で、私は兼て知て居るから、呉の処に行てどうか暫く此処に立退場を頼むと相談も調い、愈よ青山の方と思うて荷物は一切拵こしらえて名札を付けて担出かつぎだす計りにして、そうして新錢座の海浜にある江川の調練場に行て見れば、大砲の口を海の方に向けて撃つような構えにして

ある。是れはこんみょうにち今日の中いよにいよ／＼事は始まると覺悟を定めた。その前に幕府から布令れが出てある。愈いよ兵端へいたんを開く時には浜御殿はまごてん、今の延遼館えんりょうかんで、火矢ひやを挙あげるから、ソレを相図あいずに用意致せと云う市中に布令が出た。江戸ツ子は口の悪いもので、「瓢箪ひょうたん兵端の開け初めは冷火矢でやる」と川柳があつたが、是れでも時の事情は分る。

米と味噌と大失策夫れから又可お笑かしい事がある。私の考えに、是れは何でも戦争になるに違ちがいないから、マア米を買おうと思おもつて、出入でいりの米屋に申もうしつ付けて米を三十俵買かつて米屋に預け、仙台味噌を一樽買もつて納屋のに入れて置おいた。所が期日が切迫するに従したがつて、切迫すればするほど役に立たないものは米と味噌、その三十俵の米を如何どうすると云うた所が、担かいで行かれるものでもなければ、味噌樽を背負せおつて駈けることも出来なからう。是れは可笑しい、昔は戦争のとき米と味噌があれば宜いいと云いつたが、戦争の時ぐらい米と味噌の邪魔になるものはない、是れはマア逃げる時はこの米と味噌樽は棄すてゝ行くより外ほかはないと云て、その騒動の真盛まっさかりに大笑もよおいを催した事がある。その時にも新銭座の家に学生が幾人か居て、私はその時二分金にぶきんで百両か百五十両持もつて居たから、この金を独ひとりで持て居ても策でない、イザと云いえば誰どが何処どこにどう行くか分らない、金があれば先まず餒かつえることはないから、この金は私が一人で持て居るよりか、家内が一人で持もつて居るよりか、是れこは銘々めいめいに分けて

持つが宜^よかろうと云うので、その金を四つか五つに分けて、頭^{あたま}割^{わり}にして銘々ソレを腰に巻^まて行こうと、用意金の分配まで出来て、明日か明後日は愈^いよ戦争の始まり、外^{ほか}に道はないと覚悟した所が、茲^{ここ}に幸な事があると云うのは、その時に唐津の殿様で、小笠原壹岐守^{おがさわらいきのかみ}と云う閣老がある。夫^それから横浜に浅野備前守^{あさのびぜんのかみ}と云う奉行がある。

小笠原壹岐守ソレ等の人が極秘密に云^い合^あわせた事と見えて、五月の初旬、十日前後と思いますが、愈^いよ今日と云う日に、前日まで大病だと云^いて寝て居た小笠原壹岐守がヒヨイとその朝起きて、日本の軍艦に乘^のて品川沖を出て行く。スルト英吉利の砲艦^{イギリス ガンボート}が壹岐守の船の尻に尾^ついて走ると云うのは、壹岐守は上^{かみ}方^{がた}に行くと云て品川湾を出発したから、若^もし本^{ほん}当^{もく}にその方針を取^とて本^{ほん}牧^{もく}の鼻を廻^{まわ}れば英人は後から砲撃する筈^{はず}であつたと云う。所^{ところ}が壹岐守は本^{ほん}牧^{もく}を廻^{まわ}らずに横浜の方へ這^{はい}入^いて、自分の独断で即^{そつ}刻^{こく}に償金を払^{はら}うて仕舞^{しま}つた。十^{じゅう}万^{まん}磅^{ポンド}を時の相場にすればメキシコ^{ドル}弗^{ドル}で四十万になるその正^{しょう}銀^{ぎん}を、英公使セント・ジョン・ニールに渡^まして先^まず一段落を終わりました。

鹿兒島湾の戦争幕府に要求した十^{じゅう}万^{まん}磅^{ポンド}の償金は五月十日に片^{かた}付^{つけ}て、夫^それから今度はその英軍艦が鹿兒島^{いっ}に行^いて、被害者遺族の手当として二万五千磅を要求し、且^{かつ}つその罪人を英国人の見て居る所で死刑に処^いせよと云^いう掛合^かの爲^{ため}に、六艘の軍艦は鹿兒島湾に廻^{まわ}つて錨^{かり}を

卸した。スルト薩摩藩から直ちに來意訪問の使者が来る。英の旗艦の水師提督はクーパー、司令長官はウエルモット、船長はジヨスリングと云う人で、書翰を薩摩の役人に渡し、応否の返答如何と待て居る。所がなか／＼容易な事に返辞が出来ない。ソレコレする中に薩摩に西洋形の船、即ち西洋から薩摩藩に買取た船が二艘あるその二艘の船を談判の抵当に取ると云う趣意で、桜島の側に碇泊してあつた二艘の船を英の軍艦が引張て来ると云う手詰の場合になつた。スルト陸の方からこの様子を見ていよく発砲し始めて、陸から発砲すれば海からも発砲して、ドン／＼大合戦になつた、と云うのが丁度文久三年五月下旬、何でも二十八、九日頃である。その時に英の旗艦はマダ陸からは発砲しないことゝ思て錨を挙げずに居た所が、俄に陸の方で撃始めたものだから、サア錨を上げようとするゝと生憎その時は大變な暴風、加うるに海が最も深いからドウも錨を上げる違がないと云うので、錨の鎖を切て夫れから運動するようになった。是れが例の英吉利の軍艦の錨が薩摩の手に入た由來である。ソコで陸から打つ鉄砲もなか／＼エライ、専ら旗艦を狙うて命中するものも多いその中に、大きな丸い破裂弾が旨く発して怪我人が出来た中に、司令長官と甲比丹と二人の将官が即死して船中の騒動、又船から陸に向ての砲撃もなか／＼劇しく、海岸の建物は火抵焼、払うて是れも容易ならぬ損害であつたが、詰る所、勝負

なしの戦争と云うのは、薩摩の方は英吉利の軍艦を撃て二人の将官まで殺したけれどもその船を如何することも出来ない、又軍艦の方でも陸を焼払うて随分荒したことは荒したけれども上陸することは出来ない、双方共に勝ちも負けもせずに、英の軍艦が横浜に歸たのは六月十日前の頃であつたが、その時に面白い話がある。戦争の済んだ後で彼の旗艦に命中した破裂弾の碎片を見て、船中の英人等が頻りに語り合ふに、「こんな弾丸が日本で出来る訳はない。イヤ能く見れば露西亞製のものじゃ。露西亞から日本に送つたのであろうなど、評議区々なりしと云う。当時クリミヤ戦争の当分ではあるし、元来英吉利と露西亞との間柄は犬と猿のようで、相互に色々な猜疑心がある。今日に至るまでも仲は好くないように見える。

松木、五代、英艦に投ずそれは扨置き茲に薩摩の船を二艘此方に引張て来ると云う時に、その船長の松木弘安（後に寺嶋陶蔵又後に宗則）、五代才助（後に五代友厚）の兩人が、船奉行と云う名義で云わば船長である。ソコで英の軍艦が二艘の船を引張て来ようと云うその時に、乗込の水夫などは其処から上陸させたが、船長二人だけは英艦の方に投じた。投じたけれども自分の船から出るときに、実は松木と五代と申し談じて窃にその船の火薬車に導火を点けて置いたから、間もなく船は二艘とも焼けて仕舞た。夫れは夫

れとして、扱松木に五代と云うものは捕虜ほりよでもなければ御客おきやくでもない、何しろ英の軍艦に乗込んで横浜に來たに違ちがはない。その事は横浜の新聞紙にも出て居たのであるが、ソレ切り少しも消息が分らない。私はその前年松木と歐羅巴ヨーロッパに一緒にいたのみならず、以前から私と箕作みつくりと松木と云うものは甚だ親しい朋友の間柄で、ソコで松木が英船に乗たと云うが如何どうしたろうかと只その噂うわさをするばかりで尋ねる所もない。英人が若もしこの兩人を薩摩の方へ還かえせば、ソリヤもう若武者共が直ぐに殺すに極て居る。然ればと云て之を幕府の方に渡せば、殺さぬまでもマア嫌疑けんぎの筋があるとか取調べる廉かどがあるとか云て取敢えず牢には入れるだろう。所が今日まで薩摩に還かえしたと云う沙汰もなければ、幕府に引渡したと云う様子もない。如何どうしたろうか、如何にも不審な事じやと唯箕作と私と始終その話をして居た。所が凡およそこの事が済んで一年ばかり経てから、不意とその松木を見付け出したこそ不思議の因縁である。

薩人、英人と談判松木の話は次にして置いて、横浜に英吉利の軍艦が帰て來た跡で、薩摩から談判の爲めに江戸に人が出て來た。その江戸に人の出て來たと云うのは、岩下佐治右衛門もん、重野孝之丞しげのこうのじよう（後に安繹あんえき）、その外に黒幕見たような役目を帯びて來たのが大久保市蔵いちざう（後に利通としみち）、その三人が出て來た処で、第一番に薩摩の望む所は兎にも角に

もこの戦争を暫く延引して貰いたいと云う注文なれども、その周旋を誰に頼むと云う手掛りもなく当惑の折柄、こゝに一人の人があるその一人と云うのは清水卯三郎（瑞穂屋卯三郎）と云う人で、この人は商人ではあるけれども英書も少し読み西洋の事に付ては至極熱心、先ず當時に於てはその身分に不似合な有志者である。初め英艦が薩摩に行こうと云うときに、若し薩摩の方から日本文の書翰を出されたときには之を読むに困る。通弁にはアレキサンドル・シーボルトがあるから差支ないけれども、日本文の書翰を颯々と読む人がない、と云うので英人から同行を頼まれた。清水は平生勇氣もあり随分そんな事の好きな人で、夫れは面白い行て見ようと容易承諾し、横浜税関の免状を申し受けて旗艦に乗込み、先方に着して親しく戦争をも見物したその縁があるので、今度薩州の人が江戸に来て英人との談判に付き、黒幕の大久保市蔵は取敢えず清本卯三郎を頼み、兎に角にこの戦争を暫く延引して貰いたいと云う事を、在横浜の英公使ジョン・ニールに掛合うことにした。ソコで清水は大久保の依託を受けて横浜の英公使館に出掛けてその話を申込んだ所が、取次の者の言うに、斯る重大事件を談ずるに商人などでは都合なり、モット大きな人が来たら宜かろうと云うから、清水は之を押し返し、人に大小軽重はない、談判の委任を受けて居れば沢山だ、夫れでも拙者と話は出来ないかと

少しく理屈を云た所が、そう云う訳けなら直ぐに遇うと云うので、夫れから公使に面会して戦争中止の事を話掛けると、なか／＼聞きそうにも為ない。イヤもう既に印度洋から軍艦を増発して何千の兵士は唯今支度最中、然るにこの戦争の時期を延して待つなどは謂れない話だ云々と、思うさま威嚇して聞きそうな顔色がなない。ソコで清水はその挨拶を承つて薩人に報告すると、重野が、逆もこりや六かしそうだ、兎に角に自分達が自から談判して見ようと云て、遂に薩英談判会を開き、種々様々問答の末、とう／＼要求通りの償金を払う事になり、高は二万五千磅、時の相場にして凡そ七万両ぐらいに当り、その七万両の金は内実幕府から借用して、そうして島津薩摩守の名義では払われないと云うので、分家の島津淡路守の名を以て金を渡すことにして、且つ又リチャルドソンを殺した罪人は何分にも何処にか逃げて分らないから、若し分たらば死刑と云うことで以て事が収まった。その談判の席には大久保市蔵は出ない。岩下と重野の兩人、それから幕府の外国方から鶴飼弥市、監察方から斎藤金吾と云う人が立会い、いよ／＼書面を取換して事のすつかり収まったのが、文久三年の十一月の朔日か二日頃であつた。松木、五代、埼玉郡に潜む扱夫れから私の氣になる松木、即ち寺島の話は斯う云う次第である。松木、五代が薩摩の船から英の軍艦に乗移た所が、清水が居たので松木も驚

いた。清水と云う男は以前江戸にて英書の不審を松木に聞きて居たこともある至極懇意しごくこんいな間柄で、その清水が英の軍艦に居るから松木の驚くも無理はない。「イヤ如何どうして此処ここに居るか。「お前さんは如何して又此処に來たと云うような訳わけで、大變好都合であつた。ソコで横浜に來たけれども、この儘ままに何時迄いつまでもこの船の中に居られるものでない。マア如何どうかして上陸したい、と云うその事に付つては清水卯三郎が一切引受ける。それは松木と五代は極々日蔭者ひかげもので、青天白日の身と云うのは清水一人、そこで清水が先ず横浜あがつに上て、夫れから亜米利加人アメリカのヴェンリートと云う人にその話をした所が、如何どうでも周旋しよう、兎とに角かくに舢艀はしけぶね船のつに乗て神奈川の方に上る趣向しに為よう、その船も何も世話をして遣やらうと云うことになつた。所でアドミラルが如何どう云うかソレに聞きて見なければならぬので、アドミラルにその事を話すと至極寛大で、上陸差さしつかえ支なしと云うので、ソレカラ一切万事、清水とヴェンリートと謀しめ合せて、落人おちうど兩人の者は夜分窃ひそかにその舢艀はしけ船に乗り移り、神奈川以東の海岸から上る積りに用意した所が、その時には横浜から江戸に來る街道一町か二町目毎ごとに今の巡查交番所見たようなものがずっと建て居て、一人でも徑よこしいものは通行とがを咎めると云うことになつて居るから、なか／＼大小などを挾さして行かれるものでない。ソコで大小も陣笠じんがさも一切いっさいの物はヴェンリートの家に預あずけて、丸で船頭か百姓のような

風をして、小舟に乗込み、舟は段々東に下てとう／＼羽根田の浜から上陸して、ソレカラ道中は忍び忍んで江戸に這入るとした所で、マダ幕府の探偵が甚だ恐ろしい。只の宿屋には泊られないから、江戸に這入たらば堀留の鈴木と云う船宿に清水が先へ行て待て居るから其処へ来いと云う約束がしてある。ソコで兩人は夜中勝手も知れぬ海浜に上陸して、探り／＼に江戸の方に向て足を進める中に夜が明けて仕舞い、コリヤ大變と夫れから駕籠に乗て面を隠して堀留の船宿に来たのがその翌日の昼であつた。清水は昨夜から待て居るので万事の都合宜く、その船宿に二晩竊に泊て、夫れから清水の故郷武州埼玉郡羽生村まで二人を連れて来て、其処も何だか氣味が悪いと云うので、又その清水の親類で奈良村に吉田一右衛門と云う人がある、その別荘に移して、此処は極淋しい処で見付かるような氣遣いはないと安心して二人とも収め込んで仕舞い、五代はその後五、六ヶ月して竊に長崎の方に行き、松木は凡そ一年ばかりも其処に居る中に、本藩の方でも松木の事を心頭に掛けてその所在を探索し、大久保、岩下、重野を始めとして、江戸の薩州屋敷には肥後七左衛門、南部弥八など云う人が様々周旋の末、これは清水卯三郎が知て居はしないかと思ひ付て、清水の処に尋ねに来た。所が清水はドウも怖くて云われない、不意と捕まえられて首を斬られるのではなからうかと思て眞実が吐かれない。一応は唯知らぬ

と答えたれども、薩摩の方では中々疑て居る様子。爾うかと思つと時としては幕府の方からも清水の家に尋ねに来る。ソコで清水も当惑して、如何しようとも考えが付かない。殺さないなら早く出して遣りたいが、殺すような事なら今まで助けて置いたものだから出したくないと、自分の思案に余て、夫れから江戸の洋学の大家川本幸民先生は松木の恩師であるから、この大先生の意見に任せようと思つて相談に行つた所が、先生の説に、「ソリヤ出すが宜かろう、薩藩人が爾う云うなら有のまゝに明して渡して遣るが宜かろう、マサカ殺しもしなかつと云うので、ソコで始めて決断して清水の方から薩人に通知して、実は初めから何も斯も自分が世話をした事で一切知て居る、早速御引渡し申すが、只約束は決して本人を殺さぬようにと念を押して、ソコで松木が始めて薩人に面会して、この時から松木弘安を改めて寺島陶蔵と化けたのです。右の一条は薩州の方でも甚だ秘密にして、事実を知て居る者は藩中に唯七人しかないと清水が聞たそうだが、その七人とは多分大久保、岩下などでしよう。

始めて松木に逢うその時は既に文久四年となり、四年の何月かドウモ覚ええない、寒い時ではなかつた、夏か秋だと思いますが、或日肥後七左衛門が不意と私方に来て、松木が居るが、お前の処に来て差支はないかと云う。私は実に驚いた。去年からモウ氣になつ

て居て、箕作と遇いさえすればその噂をして居たが、生きて居たか。「確かに生きて居る。「何処に居るか。「江戸に居る、兎に角に此処に来て宜いか。「宜いとも、大宜しだ。何も憚ることはない、少しも構わない、直ぐに逢いたいと云うと、その翌日松木が出て来た。誠に冥土の人に遭たような気がして、ソレカラいろ／＼な話を聞て、清水と一緒になつたと云うことも分れば何も箇も分て仕舞た。その時、私は新錢座に居ましたが、マア久振りで飲食を共にして、何処に居るかと聞けば、白銀台町に曹某と云う医者がある、その家は寺島の内君の里なので、その縁で曹の家に潜んで居ると云う。その日は先ずその儘分れて、夫れから私は直ぐに箕作の処に事の次第を云て遣て、箕作も直ぐその翌日出て来て兩人同道して白銀の曹の家に行き、三友団座昼から晩までいろ／＼な話を話すその中に、例の覺島戦争の話などもあつて、その戦争の事に就てはマダ／＼いろ／＼面白事があるけれども、長くなるから此処で之を略し、扱寺島の身の上は如何だと云うに、薩摩の方は大抵是れで宜しいがマダ幕府の意向が分らない、けれども是れとても別段に幕府の罪人でもないから爾う恐れる事もない訳け。ソコで寺島は何をして喰て居るかと聞けば、今は本藩の翻譯などして居ると云う。それこれの話の中に寺島が云うには、モウノ鉄砲は嫌だ／＼、今でも乃公は鉄砲の音がドーンと鳴ると頭の中がズーンとして来る、

モウ嫌だぜく、乃公は思い出しても身がブルくツとする、夫れから又その船の火薬庫に導火を点けるときは随分気味の悪い話だった、だが命拾いをしたその時、懷中に金が二十五両あつたからその金を持って上陸したと云う。いろくの話の中に英人が薩摩灣に碇泊中菓物が欲しいと云うと、薩摩人が之を進上する風をしてその機に乗じて斬込もうとして出来なかつたと云うような種々様々な話がありますが、それはマア止めにして錨の話。

夢中で錨を還すその錨を切たと云うことは清水卯三郎が船に乗て見て居たばかりで薩摩の人は多分知らない。ソレカラ清水が薩摩の人に遇て、那の時に英艦の方では錨を切ただから拾い挙げて置たら宜かろうと云た所が、薩摩でも余り氣に留めなかつたと見えて、その錨は何でも漁夫が挙げたと云う話だ。ソレで錨は薩摩の手に這入たが、二万五千磅の金を渡して和睦をしたその時に、英人が手輕に錨を還して貰いたいと云うと、易い事だといつて何とも思わずに古鉄でも渡す積りで返して仕舞た様子だが、前にも云う通り戦争の負け勝ち負勝は分らなかつたのでしよう、何方が勝たでもない、錨を切て将官が二人死んで水兵は上陸も出来ずに帰たと云えばマア負師、夫れから又薩摩の方も陸を荒されて居ながら帰て行く船を追蒐けて行くこともせず打遣つて置たのみならず、戦争の翌朝英艦から陸

むかつ
に向て発砲しても陸から応砲もせぬと云えばこりや薩摩の負師のように当る、勝たと云え
ば何方どちらも勝た、負けたと云えば何方どちらも負けた、詰り勝負なしとした所で、何でも錨と云う
ものは大事な物である、ソレを浮か／＼と還して仕舞しまつたと云うのは誠に馬鹿げた話だけ
ども、当時の日本人が国際法と云うことを知らないのはマアこの位なもので、加しか之のみなら
ず本来今度の生麦事件で英国が一人殺害の爲ために大層な事を日本政府に云掛いひかけて、到とうと
頭う十二万五千磅取たと云うのは理か非か、甚はなはだ疑わしい。三十余年前の時節柄とは云え、
吾われ々日本人は今日に至るまでも不平である。夫それから薩摩から戦の日延べを云出いひだしたそ
の時に、英公使の云振いひふりが威嚇おどしたにも威嚇おどさぬにもマア大変な劍幕で、悪く云えば日本
人はその威嚇おどしを喰たようなもので、必竟何も知らずに夢中でこの事が終おわつて仕舞しまつた。今なら
ばこんな馬鹿げた事は勿論もちろんなかるうが、既にその時にも亜米利加人などは日本政府で払
わなければ宜いいがと云いて居たことがある。英公使は威嚇おどし拔ぬいて、その上に仏蘭西のミニス
トルなどが横合から出て威張るなんと云うのは、丸で狂氣の沙汰で訳わけが分らない。ソレ
で事が済んだのは今更いまさら何とも評論のしようがない。
緒方先生の急病村田蔵六の変態所で京都の方では愈いよ五月十日（文久三年）が攘夷の期限
だと云う。ソレで和蘭オランダの商船が下ノ関を通ると、下ノ関から鉄砲を打掛うちかけた。けれども

幸に和蘭船は沈みもせずに通たが、ソレがなか／＼大騒ぎになつて、世の中は益々恐ろしい事になつて来た。所でその歳の六月十日に緒方洪庵先生の不幸。その前から江戸に出て来て下谷に居た緒方先生が、急病で大層吐血したと云う急使に、私は実に胆を潰した。その二、三日前に先生の処へ行てチャント様子を知て居るのに、急病とは何事であらうと、取るものも取敢えず即刻宅を駈出して、その時分には人力車も何もありませんから、新錢座から下谷まで駈詰で緒方の内に飛込んだ所が、もう緯切れて仕舞た跡。是れはマア如何したら宜かろうかと丸で夢を見たような訳け。道の近い門人共は疾く先に来て、後から来る者も多い。三十人も五十人も詰掛けて、外に用事もなし、今夜は先ずお通夜として皆起きて居る。所が狭い家だから大勢坐る処もないような次第で、その時は恐ろしい暑い時節で、坐敷から玄関から台所まで一杯人が詰て、私は夜半玄関の敷台の処に腰を掛けて居たら、その時に村田蔵六（後に大村益次郎）が私の隣に来て居たから、「オイ村田君——君は何時長州から歸て来たか。「この間歸た。「ドウダエ馬関では大変な事を遣たじやないか。何をするのか氣狂共が、呆返た話じやないかと云うと、村田が眼に角を立て、「何だと、遣たら如何だ。「如何だツて、この世の中に攘夷なんて丸で氣狂いの沙汰じやないか。「氣狂いとは何だ、怪しからん事を云うな。長州ではチャント国

是くぜが極くまつてある。あんな奴やつばら原はらに我わが儘ままをされて堪たまるものか。殊ことに和蘭オランダの奴やつが何なんだ、小さい癖くせに横風つらな面つらして居る。之これを打うち攘はらうのは当あたり然まへだ。モウ防長ぼうちやうの士民こゝとこは悉ことごとく死し尽くしても許ゆるしはせぬ、何処どこまでも遣やるのだと云うその劍幕けんまくは以前の村田むらたではない。実に思掛おもけもない事で、是れは変なことだ、妙なことだと思つたから、私は宜加減いいかげんに話を結んで、夫それから箕作みきくの処ところに来て、大變だ、村田の劍幕けんまくは是これゝゝの話だ、実に驚いた、と云うのはその前から村田が長州ちやうしゅうに行いつたと云うことを聞きて、朋友ともは皆心配して、あの攘夷まじやうの真盛まっさかりに村田がその中なかにに呼よび込まれては身あやうが危あやうい、どうか怪我けがのないようにしたいものだ、寄ると触うわさると噂うわさをして居る其処そこに、本人ほんじんの村田の話を聞て見れば今の次第しだい、実に訳わけけが分わらぬ。一体村田は長州ちやうしゅうに行いつたと如何いかにも怖こいと云うことを知て、そうして攘夷まじやうの仮面めんを冠かぶつてききんで居るのだろうか、本心ほんしんからあんな馬鹿ばかを云いう氣遣きづかいはあるまい、どうも彼あれの氣が知れない。「そうだ、実に分らない事だ。兎とにも角かくにも一切彼あの男おとこの相手あてになるな。下手な事を云うとどんな間違まちがいになるか知れぬから、暫しばらく別べつものにして置くが宜いいと、箕作みきくと私わたしと二人ふたり云い合あひして、夫それから外ほかの朋友ともにも、村田は變だ、滅多めったな事を云うな、何をするか知れないからと氣を付けた。是これがその時の實事談で、今でも不審ふしんが晴れぬ。當時村田は自身防禦ぼうちやうの爲ために攘夷まじやうの仮面めんを冠かぶて居たのか、又は長州ちやうしゅうに行て、どうせ

毒を舐めれば皿までと云うような訳けで、本当に攘夷主義になったのか分りませぬが、何しろ私を始め箕作秋坪その外の者は、一時彼に驚かされてその儘ソーツと棄置たことがあります。

外交機密を写取る文久三年癸亥の歳は一番喧しい歳で、日本では攘夷をするとい、又英の軍艦は生麦一件に就て大造な償金を申出して幕府に迫ると云う、外交の難局と云うたらば、恐ろしい怖い事であつた。その時に私は幕府の外務省の翻譯局に居たら、その外国との往復書翰は皆見て悉く知て居る。即ち英仏その他の国々から斯う云う書翰が来た、ソレに対して幕府から斯う返辞を遣た。又此方から斯う云う事を諸外国の公使に掛合付けると、彼方から斯う返答して来たと云う次第、即ち外交機密が明に分て居なければならぬ筈。勿論その外交秘密の書翰を宅に持て帰ることは出来ない、けれども役所に出て翻譯するか或は又外国奉行の宅に行て翻譯するときに、私はちゃんとソレを諳記して置いて、宅に帰てからその大意を書いて置く。例えば生麦の一件に就て英の公使から来たその書翰の大意は斯様々々、ソレに向て此方から斯う返辞を遣わしたと云うその大意、一切外交上往復した書翰の大意を、宅に帰ては薄葉の罫紙に書記して置た。ソレは勿論ザラに人に見せられるものでない。唯親友間の話の種にする位の事にして置たが、随

面白いものである。所が私はその書付を一日不意と焼て仕舞た。

脇屋卯三郎の切腹焼て仕舞たと云うことに就て話がある。その時に何とも云われぬ恐ろしい事が起た、と云うのは神奈川奉行組頭、今で云えば次官と云うような役で、脇屋卯三郎と云う人があつた。その人は次官であるから随分身分のある人で、その人の親類が長州に在て、之に手紙を遣た所が、その手紙を不意と探偵に取られた。その手紙は普通の親類に遣る手紙であるから何でもない事で、その文句の中に、誠に穩かならぬ御時節柄で心配の事だ、どうか明君賢相が出て来て何とか始末をしなければならぬ云々と書てあつた。ソコで幕府の役人がこの手紙を見て、何々、天下が騒々敷い、ドウカ明君が出て始末を付けて貰うようにしたいと云えば、是れは公方様を蔑ろにしたものだ、即ち公方様を無きものにして明君を欲すると云う所謂謀反人だと云う説になつて、直ぐに脇屋を幕府の城中で捕縛して仕舞た。丁度私が城中の外務省に出て居た日で、大変だ、今脇屋が捕縛されたと云う中に、縛られては居ないが同心を見たような者が付て脇屋が廊下を通て行た。何れも皆驚いて、神奈川の組頭が捕まえられたと云うは何事だと云て、その翌日になつて聞た所が、今の手紙の一件で斯う云う嫌疑だそうだと云う。夫れから脇屋を捕まえると同時に家捜しをして、そうしてその儘当人は伝馬町に入牢を申付けられ、

何かタワイもない吟味ぎんみの末、牢中で切腹を申付られた。その時に検視いっに行た高松彦三郎たかまつひこさぶろうと云う人は御小人目付おこびとめつけで私の知人だ。伝馬町へ検視には行たが誠に氣の毒であつたと、後で彦三郎が私に話しました。ソコで私も脇屋卯三郎うさぶろうがいよく殺されたと言ふことを聞て酷く恐れた、その恐れたと云うのは外ほかではない、明君云々うんぬんと云た丈けの話で彼が伝馬町の牢に入れられて殺されて仕舞た、爾そうすると私の書記かきしるして置たものは外交の機密に係る恐ろしいものである、若しこれが分りでもすれば直ぐに牢に打込まれて首を斬られて仕舞うに違ちがいと斯う思たから、その時は私は鉄砲洲に居たが、早々その書付かきつけを焼て仕舞たけれども、何分氣になつて堪らぬと云うのは、私がその書付の写しか何かを親類の者に遣たことがある、夫れから又肥後の細川藩の人にソレを貸したことがある、貸したその時にアレを写しはしなかつたらうかと如何も氣になつて堪らない、と云て今頃からソレを荒立て、聞きに遣れば又その手紙が邪魔になる、既に原本は焼て仕舞たがその写しなどが出て呉れなければ宜いが、出て来られた日には大変な事になると思て誠に氣懸りであつた。所が幸に何事もなく王政維新になつたので、大きに安堵して、今では颯々さっさつとそんな事を人に話したりこの通りに速記することも出来るようになったけれども、幕府の末年には決して爾そうでない、自分から作た災で、文久三年亥歳いとしから明治元年まで五、六年の

間と云うものは、時の政府に対して恰も首の負債を背負ながら、他人に言われず家内にも語らず、自分で自分の身を窘めて居たのは随分悪い心持でした。脇屋の罪に較べて五十歩百歩でない、外交機密を漏した奴の方が余程の重罪なるに、その罪の重い方は旨く免かれて、何でもない親類に文通した者は首を取られたこそ気の毒ではないか、無惨ではないか。人間の不幸は何処に在るか分らない、所謂因縁でしょう。この一事でも王政維新は私の身の為に難有い。夫れは扱置き、今日でも彼の書いたものを見れば、文久三年の事情はよく分て、外交歴史の材料にもなり、頗る面白いものであるが、何分にも首には易えられず焼て仕舞たが、若しも今の世の中に誰か持て居る人があるなら見たいものと思います。

下ノ関の攘夷夫れから世の中はもう引続いて攘夷論ばかり、長州の下ノ関では只和蘭船を撃つばかりでなく、その後亜米利加の軍艦にも発砲すれば、英吉利の軍艦にも発砲すると云うような訳で、到頭その尻と云うものは英仏蘭米四ヶ国から幕府に振込んで、三百万円の償金を出せと云うことになって、捫着の末、遂にその償金を払うことになった。けれども国内の攘夷論はなかく収まりが付かないで、到頭仕舞には鎖国攘夷と云うことを云わずに新に鎖港と云う名を案じ出して、ソレで幕府から態々池田播磨守と云

う外国奉行を使節として仏蘭西まで鎖港の談判に遣わすと云うような騒ぎで、一切滅茶苦茶、暗殺は殆んど毎日の如く、実に恐ろしい世の中になって仕舞た。爾う云う時勢であるから、私は唯一身を慎んでドウでもして災を、れさえすれば宜いと云うことに心掛けて居ました。

剣術の全盛兎に角に癸亥の前後と云うものは、世の中は唯無闇に武張るばかり。その武張ると云うのも自から由来がある。徳川政府は行政外交の局に当て居るから拠るなく開港説

——開国論を云わなければならぬ、又行わなければならぬ、けれどもその幕臣全体の有様はドウだと云うと、ソリヤ鎖国家の巢窟と云ても宜い有様で、四面八方ドツチを見て

も洋学者などの頭を擡げる時代でない。当時少しく世間に向くような人間は悉く長大

小を横える。夫れから江戸市中の剣術家は幕府に召出されて巾を利かせて、剣術大流行

の世の中になると、その風は八方に伝染して坊主までも体度を改めて来た。元来その坊

主と云うものは城内に出仕して大名旗本の給仕役を勤める所謂茶道坊主であるから、

平生は短い脇差を挟して大名に貰た縮緬の羽織を着てチョコ／＼歩くと云うのが是

れが坊主の本分であるのに、世間が武張るとこの茶道坊主までが妙な風になって、長い脇

差を挟して坊主頭を振り立て、居る奴がある。又当時流行の羽織はどうだと云うと、御家

人旗本の間には黄平の羽織に漆紋、それは昔し〳〵家康公が関ヶ原合戦の時に着て夫れから水戸の老公が始終ソレを召して居たとかと云うような云伝えで、ソレが武家社会一面の大流行。ソレカラ江戸市中七夕の飾りには、笹に短冊を付けて西瓜の切とか瓜の張子とか団扇とか云うものを吊すのが江戸の風である。所が武道一偏、攘夷の世の中であるから、張子の太刀とか兜とか云うようなものを吊すようになって、全体の人氣がすっかり昔の武士風になつて仕舞た。迎も是れでは寄付きようがない。

刀剣を売払うソコで私は只独りの身を慎むと同時に、是れはドウしたつて刀は要らない、馬鹿々々しい、刀は売て仕舞えと決断して、私の処にはそんなに大小などは大層もありはしないが、ソレでも五本や十本はあつたと思う、神明前の田中重兵衛と云う刀屋を呼で、悉く売払て仕舞た。けれどもその時分はマダ双刀を挟さなければならぬ時であるから、私の父の挟して居た小刀、即ちを着るとき挟す脇差の鞘を少し長くして刀に仕立て、夫れから神明前の金物屋で小刀を買て短刀作りに拵えて、唯印し丈けの脇差に挟すことにして、アトは残らず売払て、その代金は何でも二度に六、七十兩請取たことは今でも覚えて居る。即ち家に伝わる長い脇差の刀に化けたのが一本、小刀で拵えた短い脇差が一本、それ切で外には何も無い。そうして小さくなつて居るばかり。私は少年の時から大阪の緒

方の塾に居るときも、戯に居合を抜て、随分好きであつたけれども、世の中に武芸の話が流行すると同時に、居合刀はすっかり奥に仕舞い込んで、刀なんぞは生れてから挟すばかりで抜たこともなければ抜く法も知らぬと云うような風をして、唯用心に用心して夜分は決して外に出ず、凡そ文久年間から明治五、六年まで十三、四年の間と云うものは、夜分外出したことはない。その間の仕事は何だと云うと、唯著書翻譯にのみ屈託して歲月を送て居ました。

再度米国行

夫から慶応三年になつて又私は亜米利加に رفت。是れで三度目の外国行。慶応三年の正月二十三日に横浜を出帆して、今度の亜米利加行に就ても亦なか／＼話がある。と云うのは、先年亜米利加の公使ロペルト・エーチ・プラインと云う人が来て居て、その時に幕府で軍艦を拵えなければならぬと云うことで、亜米利加の公使にその買入方を頼んで、数度に渡したその金高は八十万弗、そうして追々にその軍艦が出来て来る筈。ソレで文久三、四年の頃、富士山と云う船が一艘出来て来て、その価は四十万弗。所がその後幕府は

なかく混雑、又亜米利加にも南北戦争と云う内乱が起たと云うような訳で、その後一向便りもない。何しろ金は八十万弗渡したその中で、四十万弗の船が来た丈けでその後は何も来ない。左りとは埒が明かぬから、アトの軍艦は此方から行て請取る。その序に鉄砲も買て来ようと云うような事で、そのとき派遣の委員長に命ぜられたのは小野友五郎、この人は御勘定吟味役と云う役目で御勘定奉行の次席、なかく時の政府に於ては権力もあり地位も高い役人である。その人が委員長を命ぜられて、その副長には松本寿太夫と云う人が命ぜられたと云うことは、その前年の冬に定まった。夫れから私もモウ一度行て見たいものだと思て、小野の家に度々行て頼んだ。何卒一緒に連れて行て呉れないかと云た所が、連れて行こうと云うことになつて、私は小野に随従して行くことになりました。その外同行の人は、船を請取るのですから海軍の人も兩人ばかり、又通弁の人も行きました。

太平洋の郵便汽船始めて通ずこの時には亜米利加と日本との間に太平洋の郵便船が始めて開通したその歳で、第一着に日本に来たのがコロラドと云う船で、その船に乗込む。前年亜米利加に行た時には小さな船で海上三十七日も掛たと云うのが、今度のコロラドは四千噸の飛脚船、船中の一切万事、実に極楽世界で、廿二一日目に桑フランシスコ港に着た。

着たけれども今とは違てその時分はマダ鉄道のなきときで、パナマに廻らなければならぬから、桑港に二週間ばかり逗留して、其処で太平洋汽船会社の別の船に乗替えてパナマに行て、蒸氣車に乗てあの地峽を踰えて、向側に又船に乗て、丁度三月十九日に紐育に着き、華聖頓に落付て、取敢えず亜米利加の國務卿に遇て例の金の話を始めた。その時の始末でも幕府の模様が能く分る。此方を出立する時から、先方の談判には八十万弗渡したと云う請取がなければならぬと云うことは能く分て居る。所がどうも丸で一寸とした紙切に十万とか五万とか書てあるものが何でも十枚もある、その中には而かも三角の紙切に僅に何万弗請取りと記して唯ブラインと云う名ばかり書てあるのが何枚もある。何の爲めにどうして請取たと云う約定もなければ何にもない。只金を請取たと云う丈の印ばかりである。代言流義に行けば誠に薄弱な殆んど無証拠と云ても宜い位。ソコでその事に就ては出発前に随分議論しました。却て是れが宜しい、此方では一切万事、亜米利加の公使と云うものを信じ抜て、イヤ亜米利加の公使を信じたのではない、日本の政府が亜米利加の政府を信じたのだ、書付も要らなければ条約も要らない、只口で請取たら請取たと云うた丈で沢山だ、是れは只覺書に数を記した丈の事、固よりこんな物は証拠にしないと云う風に出ようと相談を極めて、彼方へ行てからその話に及

ぶと、直ぐに前の公使^すラインが出て来た。出て来て何とも云わない、ドウですか船を渡すなり金を渡すなりドウでも宜いと、文句なしに立派に出掛けて来た。

吾妻艦を買う先^まず是れで安心であるとした所で、此方^{こつち}では軍艦一艘欲しい。夫れ^そから諸方の軍艦を見て廻^{まわ}て、是れが宜^よかろうと云^いて、ストーンウォールと云う船、ソレが日本に来て東^{あづま}艦^{かん}となりましたらう、この甲鉄艦を買うことにして、その外^{ほか}小銃^{ちよう}何百挺か何千挺か買入れたけれども、ソレでもマダ金が彼方^{あつち}に七、八万弗^{ドル}残^らる。是れは亜米利加^{アメリカ}の政府に預けて置^おて、その船を廻^{かい}航^{こう}するに付^つて、私共は先に歸^{かえ}たが、海軍省から行^いた人はアトに残^{のこ}て、そうして亜米利加の船長を一人雇^{やと}うて此方^{こつち}に廻^{かい}航^{こう}することになって、夫れで事が済^すんだ。丁度船の日本に着^ついたのは王政維新の明治政府になってから、即ち明治元年であるが、その事に就^つて当時會計を司^{つかさど}つて居た由利公正^{ゆりきみまさ}さんに遇^{あつ}て後に聞^きいた所が、ドウもあの時金を払うには誠に困^{こま}つた、明治政府には金がない。如何^{どう}やら斯^こうやらヤツト何十万弗^{こしら}拵^はて払^はたと云う話を私が聞^きて、ソレは大間違^{たいさう}いだ、マダ幾らか金が余^{あまつ}て彼方^{あつち}に預けてある筈^{はず}だと云うたら、爾^そうかと云^いつて、由利は大造驚^{たいそう}いて居ました。何処^{どこ}にドウなつたか、二重に金を払^はたことがある。亜米利加^{アメリカ}人が取る訳^{わけ}けはない、何処^{どこ}かに舞^{まい}込んで仕舞^{しま}うたに違^{ちが}い

幕府人の無法を厭う、安いドルラルそれは扱置き、私の一身に就てその時甚だ穩かならぬ事があつた、と云うのは私は幕府の用をして居るけれども、如何なこと幕府を佐けなければならぬとか云うような事を考えたことがない。私の主義にすれば第一鎖国が嫌い、古風の門閥無理圧制が大嫌いで、何でもこの主義に背く者は皆敵のように思うから、此方が思う通りに、先方の鎖国家古風家も亦洋学者を外道のように悪むだろう。所で私が幕府の様子を見るに、全く古風のそのまゝで、少しも開国主義と思われない、自由主義と見えない。例えば年来、政府の御用達は三井八郎右衛門で、政府の用を聞くのみならず、役人等の私用をも周旋するの慣行でした。ソコで今度の米国行に付ても、役人が幕府から手当の金を一步銀で請取れば、亜米利加に行くときには之を洋銀の弗に替えなければならぬ。然るにその時は弗相場の毎日變化する最中で、両替が甚だ面倒である。スルト一行中の或る役人が三井の手代を横浜の旅店に呼出し、色々弗の相場を聞糺して扱云うよう、「成程昨今の弗は安くはない、併し三井にはズツトその前安い時に買入れた弗もあるだろう、拙者のこの一步銀はその安い弗と両替して貰いたいと云うと、三井の手代は平伏して、畏りました、お安い弗と両替いたしますようと云て、幾らか割合を安くして弗を持て来た。私は傍に居てこの様子を見て居て「ドウモ無鉄砲な事を言う奴だ、金の両替をするに、安いと

きに買入れた金と云て、ドウ云う印があるか、安いも高いもその日の相場に定^きまったものを、夫れを相場外^{はず}れにせよと云いながら、愧^{はず}る気色もなく平氣な顔をして居るのみならず、その人の平生^{へいぜい}も賤^{いや}しからぬ立派な士君子であるとは驚いた。又三井の手代も算盤^{そろばん}を知るまいことか、チャント知^{しつ}て居ながら平氣で損をして何とも云わぬ。畢^{ひつきよう} 竟^{ひつきよう} 人の罪でない、時の氣風の然^{しか}らしむる所、腐敗の極度だ、こんな政府の立行^{たちゆ}こう筈^{はず}はないと思^{おもつ}たことがある。

御国益論に抵抗^そす夫れから私共^{アメリカ}が亜米利加^{いっ}に行^いた所で、その時に日本は国事多端の折柄、徳川政府の方針に万事儉約は勿論、仮令^{たと}い政府であらうとも利益あることには着手せねばならぬと云うので、その掛の役人を命じて御国^{べこく}益^{えき}掛^{がかり}と云うものが出来た。種々^{しゆじゆ}様々な新工夫の新策^{たてまつ}を奉^{たてまつ}る者があれば、ソレを政府に採用していろ／＼な工夫をする。例えば江戸市中^{どこ}の何処^{どこ}の所に掘割^{ほりわり}をして通船^{かよいせん}の運上^{うんじよう}を取るが宜^{よろ}しいと云う者もあり、又或^{ある}は新川^{しんかわ}に這入^{はい}る酒に税を課したら宜^よかろうとか、何処^{どこ}の原野の開墾^{かいこん}を引受けてソレで幾らかの運上を納めよう^いと云^いう者もあり、又或^ある時江戸市中^{しもごえ}の下肥^{しもごえ}を一手に任せてその利益を政府に占^しめようではないかと云う説^{おこつ}が起^{おこ}つた。スルト或^ある洋学者が大に氣^{きえん}を吐^{はい}て、政府が差配^{さはい}人を無視^{いん}して下肥^{しもごえ}の利を専^{もつぱ}らにせんとは、是^これは所謂^{いわゆる}压制政府である、

昔し、^{アメリカ}亜米利加国民はその本国英の政府より輸入の茶に課税したるを憤り、貴婦人達は一切茶を喫^{のま}ずして茶話会^{ちやわ}の楽しみをも廃したと云うことを聞^きた、左れば吾々もこの度は米国人の輦^{ひん}に倣^{なら}い、一切上^{じやうせい}圍^いを廃して政府を困^{こま}らして遣^やらうではないか、この発案の可否如何^{いかん}とて、一座大笑^{たいしやうもよお}を催^{もよお}したことがある。政府の事情^{じやうぎ}が凡^{およ}そ斯^こう云う風であるから、今度の一行中にも例の御^ご国^{こく}益^{えき}掛^{がかり}の人が居て、その人の腹案に、今後日本にも次第に洋学が開けて原書の価^{あた}いは次第に高くなるに違いない、依^{より}て今この原書を買^かつて持^もて帰^{かえ}つて売^うたら何分かの御国益になろうと云うので、私にその買入方を内命^{うちめい}したから、私が容易に承知しない。「原書買入は甚^{はなは}だ宜^{よろ}しい。日本には原書が払^ふ底^{てい}であるから一冊でも余計に輸入したいと思う所に、幸^{さい}なる哉^{かな}、今度米国に来て官金を以^{もつ}て沢^{たく}山^{さん}に買入れ、日本に持^{もつ}て帰^{かえ}つて原価でドシ、^う売^うて遣^やらう、左様なれば誠^{まこと}に難^{あた}り有^あい。如何^{いか}ようにも勉強^{べんきやう}して、安いもの適^ふ当^{たう}なものを買入れよう。この儀は如何^{どう}で御座^{ござ}ると尋^{たず}ねば、「イヤ左様^{さう}でない、自^{おの}から御^ご国^{こく}益^{えき}にする積^{こくえき}りだと云^いう。「左^さすれば政府は商売をするのだ。私は商売の宰^{さい}取^とりをする為^{ため}に來たのではない、けれども政府が既^{すで}に商売をすると切^{きつ}て出れば、私も商人になりましょう。左る代りにコンミツション（手数料）を思^{おも}うさま取^とるがドウだ。何^いれでも宜^{よろ}しい、政府が買^かつた儘^{まま}の価^{あた}いで売^うて呉^くれると云^いえば、私はどんなにでも骨^{おつ}を折^おて、本を吟味^{ぎんみ}して値切

り値切て安く買うて売て遣るようにするが、政府が儲けると云えば、政府にばかり儲けさせない、私も一緒に儲ける。サア爰が官商分れ目だ。如何で御座ると振り込んで、大變喧しい事になつて、大に重役の歡心を失うて仕舞たが、今日より考えれば事の是非に拘わらず、隨行の身分にして甚だ宜くない事だと思ひます。

幕府を倒せ夫れから又斯う云う事がある。同行の尺振八などゝ飲みながら壯語快談、ソリヤもう官費の酒だから、船中の事で安くはないが何に構うものか、ドシ／＼飲み次第喰い次第で、颯々と酒を注文して部屋に取て飲む。サアそれからいろ／＼な事を語出して、「ドウしたつてこの幕府と云うものは潰さなくてはならぬ。抑も今の幕政の様を見る。政府の御用と云えば、何品を買うにも御用だ。酒や魚を買うにも自分で勝手な値を付けて買て居るではないか、上総房州から船が這入ると、幕府の御用だと云て一番先にその魚を只持て行くようなことをして居る。ソレも將軍様が喰うならばマア宜いとするが、爾うではない、料理人とか云うような奴が只取て来て、その魚を又売て居るではないか。この一事推して他を知るべし、実に鼻持のならぬ政府だ。ソレも宜いとして置いて、この攘夷はドウだ。自分がその局に当て居るから抛るなく洩々開国論を唱えて居ながら、その実を叩いて見ると攘夷論の張本だ。彼の品川、海鼠台場、マダあれでも足りない」と云て拵え掛け

て居るではないか。夫れから又勝麟太郎が兵庫に行て、七輪見たような丸い白い台場を築くなんて何だ。攘夷の用意をするのではないか。そんな政府なら叩き潰して仕舞うが宜いじゃないかと云うと、尺振八が、爾うだ、その通りに違いない。けれども斯うして船にのつアメリカに乗て亜米利加に往来するのも、幕府から入用を出して居ればこそだ。御同前に喰て居るものも着て居るものも幕府の物ではないか。夫れを衣食して居ながら、ソレを潰すと云うのは何だか少し氣に濟まないようではないか。「それは構わぬ。御同前に此身等が政府の御用をすると云うのは、何も人物がエライと云て用いられて居るのではない、是れは横文字を知て居るからと云うに過ぎない。

穢多に革細工之を喩え、革細工だから穢多にさせると云うと同じ事で、マア御同前は雪駄直しを見たような者だ。幕府の殿様方は汚い事が出来ない、幸い此処に革細工をする奴が居るからソレにさせると云うので、デイ／＼が大きな屋敷の御出入になつたのと少しも變つたことはない。ソレに遠慮会釈も糸瓜も要るものか、颯々と打毀して遣れ。只此処で困るのは、誰が之を打毀すか、ソレに当惑して居る。乃公等は自分でその先棒になろうとは思わぬ。誰が之を打毀すか、之が大問題である。今の世間を見るに、之を毀そうと云て騒いで居るのは所謂浮浪の徒、即ち長州とか薩州とか云う攘夷藩の浪人共である

が、若しも彼の浪人共が天下を自由にしようになつたら、ソレこそ徳川政府の攘夷に上塗りをする奴じやないか。ソレよりもマダ今の幕府の方が勝しだ。けれども如何したって幕府は早晩倒さなければならぬ、唯差当り倒す人間がないから仕方なしに見て居るのだ。困た話ではないかなど、且つ飲み且つ語り、部屋の中とは云いながら、人の出入りを止めるでもなし、傍若無人、大きな声でドシ／＼論じて居たのだから、爾う云うような話もチラホラ重役の耳に聞えたことがあるに違いない。

謹慎を命ぜらるサア夫れから江戸に帰た所が、前にも云う通り私は幕府の外務省に出て翻譯をして居たのであるが、外国奉行から咎められた。ドウも貴様は亜米利加行の御用中不都合があるから引込んで謹慎せよと云う。勿論幕府の引込めと云うのは誠に楽なもので、外に出るのは一向構わぬ。只役所に出さえしなれば宜しいのであるから、一身の爲めには何ともない。却て暇になつて難有い位のことだから、命令の通り直ぐ引込んで、その時に西洋旅案内と云う本を書いて居ました。

福澤の実兄薩州に在り亜米利加から帰て日本に着たのはその歳の六月下旬、天下の形勢は次第に切迫してなか／＼喧しい。私は唯家に引籠て生徒に教えたり著書翻譯したりして何も騒ぎはしないが、世間ではいろ／＼な評判をして居る。段々聞くと、福澤の実兄は

鹿兒島に行て居るとか何とか云う途方もない評判をして居る。兄が薩藩に与^くみして居るから弟も変だと云うのは、私が動^やもすれば幕府の攘夷論を冷評して、こんな政府は潰^{つぶ}すが宜^いい杯^{など}云うから、自^{おの}からそんな評判も立つのであろうが、何は扱^{さて}置き十余年前にこの世を去^{さつ}た兄が鹿兒島に居る訳^わけもなし、俗世界の流言として聊^{いさ}か弁解もせず、又幕府に對しても所謂^い有志者中^いには種々^{しゆ}様々の奇策妙案を建言する者が多い様子なれども、私は一切^い關係せず、唯^た独り世の中を眺めて居る中^{うち}に、段々時勢が切迫して来て、或日^{あるひ}中嶋三郎助^{さぶろうすけ}と云^いう人が私の処に来て、ドウして引込^{ひっこ}んで居るか。「斯^こうく云う次第で引込で居る。「ソリヤアどうも飛んだ事だ、この忙しい世の中にお前達が引込で居ると云うことがあるか、直^すぐ出ろ。「出ろッたつて出さぬものを出られないじゃないか。「宜^{よろ}しい、拙者がすぐに出して遣^やると云て、夫^それからその時に稲葉美濃守^{いなばみののかみ}と云う老中があつて、ソコへ中嶋^{なかつ}が行^いて、福澤を引込^{ひっこ}まして置かないで出すようにしたら宜^よかろうと云うような事になつて、夫れから再び出ることになつた。その美濃守と云うのは旧淀藩士で、今日は箱根塔^{とう}沢^{さわ}に隠居して居るあの老爺^{おじい}さんのことで、中嶋三郎助は旧浦賀の与力^{よりき}、箱館の戦争に父子共に討死した立派な武士で、その碑は今浦賀の公園に立^たてである。

長官に對して不從順全体今度の亜米利加^{アメリカ}行^{こう}に就^ついて斯^かく私が擯^{ひん}斥^{せき}されたと云うのは、何か

私が独り宜いようにあるけれども、実を申せば左様でない、と云うのは元と私は亜米利加に行きたいと云て小野友五郎に頼み、同人の信用を得て随行員となった一人であれば、一切万事長者の命令に従いその思う通りの事をしなければ済まない訳けだ。所が實際は爾うでなく、始終逆らうような事をするのみか、明に命令に背いたこともある。例えば彼の在留中、小野も立腹したと見え、私に向て、最早や御用も済みたればお前は今から先きに帰国するが宜しいと云うと、私が不服だ。「此処まで連れて来て散々御用を勤めさせて、用が少なくなつたからと云て途中で帰れと云う権力は長官にもなからう。私は日本を出るとき閣老にお暇乞をして出て来た者である、早く云えば御老中から云付けられて来たのだ。お前さんが帰れと云ても私は帰らないとリキンダのは、私の方が無法であらう。又或日食事の時に私が何か話の序に、全体今の幕府の気が知れない、攘夷鎖港とは何の趣意だ、之が為めに品川の台場の増築とは何の戯れだ、その台場を築いた者はこのテーブルの中にも居るではないか、こんな事で日本国が保てると思うか、日本は大切な国だぞなど、公衆の前で公言したような事は、私の方こそ氣違ひの沙汰である。成程小野は頑固な人に違ひない、けれども私の不従順と云うことも十分であるから、始終嫌われたのは尤も至極、少しも怨む所はない。

王政維新

その歳も段々迫て、とう／＼慶応三年の暮になつて、世の中が物騒になつて来たから、生徒も自然にその影響を蒙らなければならぬ。国に帰るもあれば方々に行くもあると云うような訳で、学生は次第々々に少くなると同時に、今まで私の住て居た鉄砲洲の奥平の邸は、外国人の居留地になるので幕府から上地を命ぜられ、既に居留地になれば私も其処に居られなくなる。ソコで慶応三年十二月の押詰めに、新錢座の有馬と云う大名の中屋敷を買受けて、引移るや否や鉄砲洲は居留地になり、明くれば慶応四年、即ち明治元年の正月早々、伏見の戦争が始まつて、將軍慶喜公は江戸へ逃げて帰り、サアそこで又大きな騒ぎになつて仕舞た。即ち是れが王政維新の始まり、その時に私は少しも政治上に関係しない。抑も王政維新が政治の始まりであるから、話が少し前に戻つて長くなりますけれども、一通り私が少年のときからの話をして、政治に関係しない顛末を明らかにしなければならぬ。

維新の際に一身の進退素と私は小士族の家に生れ、その頃は封建時代の事で日本国中何れ

も同様、藩の制度は守旧一偏の有様で、藩士銘々の分限がチャント定まつて、上士は上士、下士は下士と、箱に入れたようにして、その間に少しも融通があられない。ソコで上士族の家に生れた物は親も上士族であれば子も上士族、百年経てもその分限は変わらない。従て小士族の家に生れた者は、自から上流士族の者から常に輕蔑を受ける。人々の智愚賢不肖に拘わらず、上士は下士を目下に見下すと云う風が専ら行われて、私は少年の時からソレに就て如何にも不平で堪らない。

門閥の人を惡まずしてその惡習を惡む所がその不平の極は、人から侮辱されるその侮辱の事柄を惡み、遂には人を忘れて唯その事柄を見苦しきことゝ思い、門閥の故を以て漫に威張るは男子の愧ずべき事である、見苦しきことであると云う觀念を生じ、例えば上士下士相對して上士が横風である、私は之を見てその上士の傲慢無礼を憤ると同時に、心の中では思直して、この馬鹿者めが、何も知らずに夢中に威張て居る、見苦しい奴だと却て氣の毒に思つて、心中却て此方から輕蔑して居ました。私がその時老成人であるか又は仏者であつたら、人道世教の爲めに如何とか、又は平等を愛して差別を排するとか何とか云う説もあるうが、十歳以上十九か二十歳の少年にそんな六かしい奥ゆかしい考のあるべき筈はない。唯人間の殼威張は見苦しいものだ、威張る奴は恥知らずの馬

鹿だとはかり思て居たから、夫れゆえ藩中に居て人に輕蔑されても侮辱されても、その立腹を他に移して他人を辱かしめると云うことはドウしても出来ない。例えば私が小士族の身分で上流に対しては小さくなつて居なければならぬけれども、順を云えば又私より以下の者が幾らもあるから、その以下の者に向て自分が輕蔑された丈けソレ丈け輕蔑して遣れば、所謂江戸の敵を長崎で討て、勘定の立つようなものだが、ソレが出来ない。出来ない所ではない、その反対に私は下の方に向て大變丁寧にして居ました。

父母の遺伝是れは私独りの發明でない、私の父母共に爾う云う風があつたと推察が出来ます。前にも云た通り、私の父は勿論漢学者で、身分は私と同じ事であるから、定めて上流士族から蔑視されて居たでしよう。所が私の父は決して他人を輕蔑しない。例えば江州水口の碩学中村栗園は父の実弟のように親しくして居ましたが、元来栗園の身分は豊前中津の染物屋の息子で、所謂素町人の子だから、藩中士族は誰も相手になるものがない、けれども私の父はその人物を愛して、身分の相違を問わず大層丁寧に扱うて、大阪の倉屋敷の家に寄寓させて尚お種々に周旋して、とう／＼水口の儒者になるように取持ち、その間柄と云うものは真に骨肉の兄弟にも劣らず、父の死後私の代になつて、栗園先生は福澤の家を第二の実家のような塩梅にして、死ぬまで交際して居

ました。シテ見ると是れは決して私の発明でない、父母から譲られた性質であると思う。ソレで私は中津なかつに居て上流士族から蔑視べつしされて居ながら、私の身分以下の藩士は勿論もちろん、町人百姓むかつに向ても、仮初かりそめにも横風おうふうに構えてその人々を目下に見下して、威張るなど、云うことは一寸ちよいともしたことがない。勿論上の者に向て威張りたくも威張ることが出来ない、出来ないから唯ただモウ触さわらぬように相手にならぬようと、独り自みずから安心決定して居る。本藩に対して功名心なし既に心に決定して居れば、藩に居て功名心こうめいしんと云うものは更さらない、立身出世して高い身分になつて錦を故郷に着て人を驚かすと云うような野心は少しもないのみか、私にはその錦が却かえつて恥かしくて着ることが出来ない。グヅ／＼云えば唯この藩を出て仕舞しまう丈ただけの事だと云うのが若い時からの考えで、人にこそ云わね、私の心では眼中藩なしと斯こう安心を極めて居ましたので、夫れそから長崎に行き大阪に出て修業して居るその中に、藩の御用で江戸と呼ばれて藩中の子弟を教うると云うことをして居ながらも、藩の政庁に対しては誠に淡泊たんぱくで、長い歳月の間只あいだけの一度も建白けんぱくなんと云うことをしたことはない。能く世間にある事で、イヤどうも藩政を改革して洋学を盛さかんにするが宜よいとか、兵制を改革するが宜よいとか云うことは書生の能く遣やることだ、けれども私に限り只の一度も云出いしたことがない。ソレと同時に自分の立身出世を藩に向て求めたことがない。

ドウ云うように身分を取立て、貰もらいたい、ドウ云うようにして禄を増して貰もらいたいと云うような事は、陰いんにも陽ようにもどんな事があつても藩の長老に内願などしたことがない。ソコで江戸に参まいつてからも、本藩の様子を見れば種しゅ々な事を試こころみて居る。兵制で申せば西洋流の操練を採用したことがある。けれども私はソレを宜よいと云いつて誉ほめもしなければ悪いと云て止とめたこともなし、又或あるは大に漢学を盛さかんにすると云いつて頻しきりに学校の改革などを企てたこともある。或あるは兵制は甲州流が宜いいと云いつて法螺ほらの貝を吹ふいて藩中で調練をしたこともある。ソレも私は只目ただめ前くぜんに見て居るばかりで、善よいとも悪いとも一寸いちとも云たことがない。或あるるときに家老の隠居があつて、大層政治論の好きな人で、私が家老の家に行いたらば、その隠居が、ドウも公武こうぶの間が甚あだはなは、全体どうも近衛このえ様が爾そうも有りそうもない事だとか、或は江戸の御老中が詰つまらないとか云うような慷慨こうがい談を頻しきりに云て居る。爾そう云われると私も何か云いそうな事だ、所が私は決して云わない。如何いかにも爾そうでしょう、ソリヤ成程近衛様も爾そうだろう、御老中も爾そうだろうが、扱さつてソレが実地になると傍觀者の思うようにはならぬもので、近くはこの奥平様の屋敷でも、マダして宜いいこともあるだろう、為しなくて宜いいこともあるだろう、傍觀者から之これを見たらば嘸さぞ堪たえ難がたいことに思うでありますようにけれども、当局の御家老の身になつて見れば又爾またそう思う通りに行かないもので、矢

張り今の通りより外に仕様がな^{ほか}い。余り人の事を批評しても詰らぬ事です。私は一体そんな事に就ては何を議論しようとも思わぬと云て、少しも相手にならなかった。

拝領の紋服をその日に売る爾う云う風に構えて、一切政治の事に就て口を出そうと思わない。思わないから奥平の邸で立身出世しようとも思わない。立身出世の野心がなければ人に依頼する必要もない。眼中人もなければ藩もなし、左ればとて藩の邪魔をしようとも思わず、唯屋敷の長屋を借りて安気に住居するばかり、誠に淡泊なもので、或時私が何かの事に就て御用があるから出て来いと云うから、上屋敷の御小納戸の処へ参た所が、之を貴様に下さると云て、奥平家の御紋の付て居る縮緬の羽織を呉れた。即ち御紋服拝領だ。左まで喜びもしなければ、品物が粗末だと云て苦情も云わず、只難有うござい^{たありがと}ますと云て拝領して、その帰りに屋敷内に国から来て居る亡兄の朋友菅沼孫右衛門と云う人の勤番長屋に何か用があつて寄た所が、其処に出入りの呉服屋が知らん古着屋か知らん呉服商人が来て何か話をして居る。ソレを聞て居ると羽織を拵えると云うような様子。夫れから私が、ア、孫右衛門さん、羽織をお拵えか。「左様さ。「爾うか、羽織に^そは宜い縮緬の売物があるが買いなさらんか。「爾うかソリヤ幸いだが、紋所は。「紋所は御紋付だから誰にでも着られる羽織だがドウだ。「ソリヤ宜い、爾う云う売物がある

なら兎も角も見たいものだ。「買うと云いなされば此処に持て居るこの羽織がドウだ。

「成程御紋付だから差支ない、買おう。就ては此処に呉服屋が来て居るが、価はドウだ。「値は呉服屋に付けて貰えば宜いと云て、夫れからの位の価かと云たら、単羽織の事だから一両三分だと云う。スグ相談が出来て、その羽織を売て一両三分の金を持て、私は鉄砲洲の中屋敷に帰たことがあると云うような次第で、全体藩の一般の習慣にすれば、拝領の御紋服と云うものはその拝領した年月を系図にまで認めて家の名誉にすると云う位のものなれども、私はその御紋服の羽織を着ても着なくても何ともない。夫れよりか金の方が宜い。一両三分あれば昨日見た彼の原書も買われる、原書を買わなければ酒を飲むと云うような、至極無邪気な事であつた。

主従の間も売言葉に買言葉爾う云う風であるから藩に対して甚だ淡泊、淡泊と云えば言葉が宜いけれども、同藩士族の眼から見れば不親切な薄情な奴と見えるも道理で、藩中の若い者等が酒席などで毎度議論を吹掛けることがあるその時に、私は答えて「不親切薄情と云うけれども、私は何も奥平様に向て悪い事をしたことはない、一寸とでも藩政の邪魔をしたことはない、只命令の儘に堅く守て居るのだ。この上に親切と云てドウ云うことをするのか。私は厚かましい事は出来ない、之を不親切と云えば仕方がない。今も申す通り私

は藩に向て悪い事をしないのみか、一寸とでも求めたことがなからう、或は身分を取立て呉れろ、禄を増して呉れろと云うような事は、蔭にも日向にも一言でも云たことがあるか。その言葉を聞いた人がこの藩中に在るかドウか、御家老以下の役人に聞て見るが宜い。厚かましく親切を尽して、厚かましく泣付くと云うことは、自分の性質に於て出来ない。是れで悪いと云うならば追出すより外に仕方はあるまい。追出せば謹んで命を奉じて出て行く丈けの話だ。凡そ人間の交際は売言葉に買言葉で、藩の方から数代御奉公を仰付けられて難有い仕合せであろうと酷く恩に被せれば、失敬ながら此方にも言葉がある、数代家来になつて正直に勤めたぞ、そんなに恩に被せなくても宜からうと云わねばならぬ。之に反して藩の方から手前達のような家来が数代神妙に奉公して呉れたからこの藩も行立つと斯う云えば、此方も亦言葉を改め、数代御恩を蒙て難有い仕合せに存じ奉ります、累代の間には役に立たぬ小供もありました、病人もありました、ソレにも拘わらず下さる丈けの家禄はチャンと下さつて家族一同安樂に生活しました、主恩海より深し山より高しと、此方も小さくなつてお礼を申上げる。是れが即ち売言葉に買言葉だ。ソレ丈けの事は私も能く知て居る。爾う無闇に恩に被せる事ばかり云て、只漠然と不親切と云うような事を云て貰いたくないと云うような調子で、始終問答をして居ました。

長州征伐に学生の帰藩を留める夫れから長州藩が穩かでない。朝敵と銘が付て、ソコで將軍御親発となり、又幕府から九州の諸大名にも長州に向て兵を出せと云う命令が下て、豊前中津藩からも兵を出す。就ては江戸に留学して居る学生、小幡篤次郎を始め十人も居ました、ソレを出兵の御用だから帰れと云て呼還しに來たその時にも、私は不承知だ。この若い者が戦争に出るとは誠に危ない話で、流丸に中ても死んで仕舞わなければならぬ、こんな分らない戦争に鉄砲を担がせると云うならば、領分中の百姓に担がせても同じ事だ、この大事な留学生に歸て鉄砲を担げなんて、ソんな不似合な事をするには及ばぬ、仮令い弾丸に中らないでも、足に踏抜きしても損だ、構うことはない病氣と云て断て仕舞え、一人も還さない、ソレが罷り間違えば藩から放逐丈けの話だ、長州征伐と云う事の理非曲直はどうでも宜しい、兎に角に學者書生の關係すべき事でないから決して歸らせないと頑張た所が、藩の方でも因循であつたのか、強いて呼返すと云うこともせず、その罪は中津に居る父兄の身に降り來て、その方共の子弟が命に背いて歸藩せぬのは平生の教訓宜しからざるに由る云々の文句で、何でも五十日か六十日の閉門を申付けられたことがある。凡そ私の心事はこんな風で、藩に仕えて藩政を如何しようとも思わず、立身出世して威張ろうとも思わず、世間で云う功名心は腹の底から洗たように何にも

なかつた。

幕府にも感服せず藩に対しての身の成行、心の置どころは右の通りで、扨江戸に来て居る中に幕府に雇われて、後にはいよく幕府の家来になつて仕舞えと云うので、高百五十俵、正味百俵ばかりの米を貰て一寸と旗本のようになつて居たことがある。けれども是れ亦、藩に居るときと同様、幕臣になつて功名手柄をしようと云うような野心はないから、随て自分の身分が何であらうとも氣に留めたことがない。一寸とした事だが可笑しい話があるその次第は、江戸で御家人の事を旦那と云い、旗本の事を殿様と云うのが一般の慣例である、所が私が旗本になつたけれども、固より自分で殿様なんて馬鹿氣たことを考える訳にもなければ、家内の者もその通りで、平生と少しも變た事はない。爾うすると或日知己の幕人たしか福地源一郎であつたかと覺ゆが玄關に来て殿様はお内か。「イーエそんな者は居ません。」「お内においでなさらぬか、殿様は御不在か。」「そんな人は居ませんと、取次の下女と頻に問答して居る様子、狭い家だからスグ私が聞付けて、玄關に出てその客を座敷に通したことがあるが、成るほど殿様と云て下女に分る訳はない、私の家の中で云う者もなければ聞た者もない言葉だから。

洋行船中の談話夫れでも私に全く政治思想のないではない。例えば文久二年欧行の船中で

松木弘安と箕作秋坪と私と三人、色々日本の時勢論を論じて、その時私が「ドウだ
とて 迎も幕府の一手持は六かしい、先ず諸大名を集めて独逸聯邦のようにしては如何と云
うに、松木も箕作も、マアそんな事が穩かだろうと云う。夫れから段々身の上話に及ん
で、今日吾々共の思う通りを云えば、正米を年に二百俵貰うて親玉（將軍の事）
の御師匠番になつて、思う様に文明開国の説を吹込んで大變革をさして見たいと云うと、
松木が手を拍て、左様だ、是れは遣て見たいと云たのは、松木の功名心もその時には
二百俵の米を貰うて將軍に文明説を吹込むぐらいの事で、當時の洋学者の考は大抵皆大同
小異、一身の爲めに大きな事は考えない。後にその松木が寺島宗則となつて、参議と
か外務卿とか云う實際の国事に当たつたのは、実は本人の柄に於て商売違ひであつたと思ひ
ます。

夫れは扱置き世の中の形勢を見れば、天下の浮浪即ち有志者は京都に集て居る。夫れか
ら江戸の方では又幕府と云うものが勿論時の政府でリキンで居ると云う訳で、日本の
政治が東西二派に相分れて、勤王佐幕と云う二派の名が出来た。出来た所で、サア其処に
至て私が如何するかと云うに、

第一、私は幕府の門閥压制、鎖国士族が極々嫌いで之に力を尽す気はない。

第二、左ればとて彼の勤王家と云う一類を見れば、幕府より尚お一層甚だしい攘夷論で、こんな乱暴者を助ける気は固よりない。

第三、東西二派の理非曲直は姑く忖置き、男子が所謂宿昔青雲の志を達するは乱世に在り、勤王でも佐幕でも試みに当て碎けると云うが書生の事であるが、私にはその性質習慣がない。

今その次第を語りましょう。抑も私が始めて江戸に來た時からして幕府の人には感服しない。一寸と旗本御家人に出遇う所が、応接振りは上品で、田舎者と違い弁舌も好く行儀も立派であるが、何分にも外辺ばかりで、物事を微密に考える脳力もなければ又腕力も弱そうに見える、けれども先方は幕府の御直参、此方は又る影もない陪臣だから手の着けようもなく、旗本などに対してはその人の居ない処でも何様々々と尊敬して居るその塩梅式は、京都の御公卿様を取扱うように、唯見た所ばかりを丁寧にして心の中では見縊り拔て居た。

葵の紋の御威光所がその無脳力、無腕力と思ふ幕府人の劍幕は中々大造のものである。些細な事のようにだが、当時最も癪に障るのは旅行の道中で、幕人の威張り方と云うものはとて迎も今時の人に想像は出来ない。私などは譜代大名の家来だから丸で人種違いの蛆虫同

様、幕府の役人は勿論、凡そ葵の紋所の付て居る御三家と云い、夫れから徳川親藩の越前家と云うような大名か又はその家来が道中をして居る処に打付かろうものならソリヤ堪らない。寒中朝寒い時に宿屋を出て、河を渡ろうと思て寒風の吹く処に立て一時間も船の来るのを待て居る、ヤツと船が着て、やれ嬉しやこの船に乘ろうと云う時に、不意と後ろから葵の紋の侍が来るとその者が先きへその船に乘て仕舞う、又アト一時間も待たなければならぬ。駕籠を昇ぐ人足でも無人のときには吾々は問屋場に行て頼んでヤツと出来た処に、アトから例の葵の紋が来ると、出来たその人足を横合から取られて仕舞う。如何なお心善でも腹を立てずには居られない。凡そ幕府の压制殻威張りは際限のない事ながら、私共が若い時に直接に侮辱輕蔑を受けたのは、道中の一事でも血氣の熱心は自から禁ずることが出来ず、前後左右に深い考えもなく、唯癩癩の余りに、こんな悪政府は世界中にあるまいと腹の底から観念して居た。

幕府の攘夷主義幕政の殻威張りが癩癩に障ると云うのは、是れは此方の血氣の熱心であるとして姑く差置き、扨この日本を開いて外国交際をドウするかと云うことになつては、如何も見て居られない、と云うのは私は若い時から洋書を讀で、夫れから亜米利加に行き、その次には歐羅巴に行き、又亜米利加に行て、只学問ばかりでなく実地を見聞して見

れば、如何しても対外国是は斯う云うように仕向けなければならぬと、ボンヤリした処でも外国交際法と云うことに気の付くは当然の話であろう。ソコでその私の考から割出して、この徳川政府を見ると殆んど取所のない有様で、当時日本中の輿論は都て攘夷で、諸藩残らず攘夷藩で徳川幕府ばかりが開国論のように見えもすれば聞えもするようでありますけれども、正味の精神を吟味すれば天下随一の攘夷藩、西洋嫌いは徳川であると云て間違いはあるまい。或は後年に至て大老 井伊掃部頭は開国論を唱えた人であるとか開国主義であつたとか云うような事を、世間で吹聴する人もあれば書に著わした者もあるが、開国主義なんて大嘘の皮、何が開国論なものか、存じ掛けない話だ。井伊掃部頭と云う人は純粹無雑、申分のない参河武士だ。江戸の大城炎上するとき幼君を守護して紅葉山に立退き、周囲に枯草の繁りたるを見て非常の最中不用心なりとて、親から腰の一刀を抜てその草を切払い、手に幼君を擁して終夜家外に立詰めなりしと云う話がある。又この人が京都辺の攘夷論者を捕縛して刑に処したことはあれども、是れは攘夷論を惡む為めではない、浮浪の処士が横議して徳川政府の政權を犯すが故にその罪人を殺したのである。是等の事実を見ても、井伊大老は眞実間違ひもない徳川家の譜代、豪勇無二の忠臣ではあるが、開鎖の議論に至ては、眞闇な攘夷家と云うより外に評論は

ない。唯^{ただ}その徳川が開国であると云うのは、外国交際の衝^{しょう}に当て居^{あた}るから余儀なく涉^{しづ}々^{しづ}開国論^{しかくろん}に従^{したが}て居^{いだ}た丈^{だけ}の話で、一幕捲^{まくくつ}て正味^{しょうみ}の楽屋^{がくや}を見たらば大變な攘夷藩^{じやういばん}だ。こんな政府に私が同情を表することが出来ない^いと云^いうのも無理はなからう。先^まずその時の徳川政府の頑固な一例を申せば斯^こう云^いうことがある。私がチエーンバーの經濟論を一冊^{もつ}持^もて居^いて、何か話^{ついで}の序^{ついで}に御勘定方の有力な人、即^{すなわ}ち今で申せば大藏省中の重要な職に居る人にその經濟書の事を語ると、大造悦^{たいそようこ}んで、ドウか目録だけでも宜^いいから是非見たいと所望するから、早速^{ほんやく}翻譯^{ほんやく}する中に、コンペクションと云う原語に出遭^{であ}い、色々考えた末、競争と云う訳字を造り出して之^{これ}に当^{あて}箝^はめ、前後二十条ばかりの目録を翻譯して之を見せた所が、その人が之を見て頻^{しき}りに感心して居たようだが、「イヤ茲^{ここ}に争^{あらそい}と云う字がある、ドウも是^これが穩かでない、どんな事であるか。「どんな事ツて是れは何も珍らしいことはない、日本の商人のして居る通り、隣で物を安く売ると云えば此方^{こつち}の店ではソレよりも安くしよう、又^{また}甲の商人が品物を宜^よくすると云^いえば、乙はソレよりも一層宜^よくして客を呼ぼうと斯^こう云^いうので、又^あ或^{ある}る金貸が利息を下げれば、隣^あの金貸も割合を安くして店の繁昌^{はか}を謀^{はか}めると云うような事で、互^{たがい}に競^いい争^いうて、ソレで以^{もつ}てちゃんと物価も定^きまれば金利も極^きまる、之^{これ}を名^{なづ}けて競争と云うので御座^{ござ}る。「成程、爾^そうか、西洋の流儀はキツイものだね。「何もキツ

イ事はない、ソレで都て商売世界の大本が定まるのである。「成程、爾う云えば分らないことはないが、何分ドウも争と云う文字が穩かならぬ。是れではドウモ御老中方へ御覽に入れることが出来ないと、妙な事を云うその様子を見るに、經濟書中に人間互に相譲るとか云うような文字が見たいのであろう。例えば商売をしながらも忠君愛国、国家の爲めには無代価でも売るとか云うような意味が記してあつたらば氣に入るのであろうが、夫れは出来ないから、「ドウも争と云う字が御差支ならば、外に翻譯の致しようもないから、丸では削りましよう」と云て、競争の文字を真黒に消して目錄書を渡したことがある。この一事でも幕府全体の氣風は推察が出来ましよう。夫れから又長州征伐のとき外国人は中々注意して居て、或時英人であつたか米人であつたか幕府に書翰を出し、長州の大名にドウ云う罪があつて征伐するのだろうか、ソレを承りたいと云て來た。爾うするとその時の閣老役人達がいろ／＼評議をしたと見え、長々と返辞を遣たその返辞の中に、開鎖論と云うことを頓と云わない。当りまえならば國を開いた今日、長州の大名は政府の命令を奉ぜずに外国人を敵視するとか、下ノ関で外國の船艦に発砲したからとか云い、そのものであるに、ソんな事は一言半句も云わないで、イヤどうも京都に暴れ込んだとか、或は勅命に戻り台命に背き、その罪南山の竹を尽すも数えがたしと云うような、漢学

者流の文句をゴテ／＼書て遣た。私はその返辞を見て、コリヤどうも仕様がない、表面には開国を装うて居るも、幕府は真実自分も攘夷が為たくて堪らないのだ、逆もモウ手の着けようのない政府だと、実に愛想が尽きて同情を表する気がない。

然らば則ち之に取て代ろうと云う上方の勤王家はドウだと云うに、彼等が代たら却てお釣の出るような攘夷家だ。コリヤ又幕府よりか一層悪い。勤王攘夷と佐幕攘夷と名こそ変れ、その実は双方共に純粹無難な攘夷家でその攘夷に深淺厚薄の別はあるも、詰る所は双方共に尊攘の仕振りが善いとか悪いとか云うのが争論の点で、その争論喧嘩が遂に上方の攘夷家と関東の攘夷家と鉄砲を打合うような事になるであらう。ドチラも頼むに足らず、その中にも上方の勤王家は、事実に於て人殺しもすれば放火もして居る、その目的を尋ねて見ると、仮令いこの国を焦土にしても飽くまで攘夷をしなければならぬと云う触込みで、一切万事一挙一動悉く攘夷ならざるはなし。然るに日本国中の人がワツとソレに応じて騒ぎ立て居るのであるから、何としても之に同情を表して仲間になるような事は出来られない。是れこそ実に国を滅す奴等だ、こんな不文不明な分らぬ乱暴人に国を渡せば亡国は限前に見える、情けない事だと云う考が始終胸に染込んで居たから、何としても上方の者に左袒する気にならぬ。その前後に緒方の隠居は江戸に居る。是れは故緒方洪庵先生

の夫人で、私は阿母おつかさんのようにして居る恩人である。或時あるに隠居が私と箕作みつくりを呼んで、ドウじゃい、お前さん方は幕府に雇われて勤めて居るけれども、馬鹿ばか々々しい止よしなさい、ソレよりか上方いっに行て御覽。ソリヤどうもいろ／＼な面白いことかあるぜ、と云う。段々きい聞て見ると村田造六むらた即ちすなわ大村益次郎おおむらますじろうとか佐野榮寿さのえいしゅ（常民つねたみ）とか云うような有志者が、皆緒方の家に出入をして居る。ソレを隠居さんが知して居て、私と箕作の事は自分の子のようにして居たものだから、江戸に居るな、上方に行けと勧めたのも無理はない。その時に私は、誠に難有ありがとうございます、大阪に行けば必ず面白い仕事がありましようけれども、私はドウも首をもがれたツて攘夷のお供は出来ません、爾そうじゃないかと、箕作と云いて断わったことがありましたが、その位の訳わけで、どうしてもその上方勢に与くみすることは出来なかつた。

夫それからモウ一つ私の身に就つて云えば、少年の時から中津の藩を出て仕舞しまつたので、所謂い藩の役人らしい公用を勤めたことがない。夫それから前にも云う通り、江戸に来て徳川の政府に雇われたからと云いつた所が、是これは云いわば筆執るほんやく職人しやくで、政治に与あずかる訳わけもない。只ただ職人の積りで居るのだから、政治の考かんがえと云うものは少しもない。自分でも仕しようとも思わなければ、又また私は出来ようとも思わない。仮令たとい又私が奮発ふんぱつして、幕府なり上か

方^{みがた}なり何でも都合の宜^い方に飛出すとした処^{ところ}が、人の下流^{ついで}に就^つて仕事をすることは固^{もと}より出来ず、中津藩の小士族で他人に侮^ぶ辱^{じよく}輕^{けい}蔑^{べつ}されたその不平不愉快は骨^{てつ}に徹^{てつ}して忘れられないから、今更^さら他人に屈^{くつ}してお辞儀をするのは禁物である。左^されば大^{おお}に立身^{たてみ}して所^い謂^わ政治界の大人^{たいじん}とならんか、是れも甚^{はなは}だ面白くない。前にも申した通り私は儀式的の箱^{はこ}に入れられて小さくなるのを嫌う通りに、その通りに儀式張^{ばつ}て横^{おう}風^{ふう}な顔をして人を目下^{もくか}に見下^{みくだ}すことも亦^{また}甚^{はなは}だ嫌いである。例えば私は少年の時から人を呼^{よび}棄^{すて}にしたことがない。車夫^{ばてい}、馬丁^{にんそく}、人足^{こあきんど}、小商人^{べいし}の如き下等社会の者は別にして、苟^{いやしく}も話の出来る人間らしい人に対して無礼な言葉を用いたことはない。青年書生は勿^{もちろん}論、家内の子供を取扱^{とく}うにもその名を呼^{よび}棄^{すて}にすることは出来ない。左^さる代^{かわ}りに政治社会の歴々とか何とか云^いう人を見ても何ともない。夫^それも白髪^{はく}の老人^{れいじん}とでも云^いえば老人相応に待遇はすれども、その人の官爵^{くわんかく}が高いなんて高慢な風をすれば唯^{ただ}可^か笑^かしいばかりで、話をするのも面白くない。是^これは私^{わたし}が持^{もつ}て生れた性質か、又は書生流儀の習慣か、老年の今日に至るまでも同じ事で、之^{これ}を要するに如何^{どう}しても青雲の雲の上には向きの悪い男であるから、維新前後にも独^{ひと}り別物になつて居たことゝ、自分で自分の事を推察して居ます。ソレはソレとして、

扨^{さて}慶喜^{けいき}さんが京都から江戸^{かえつ}に帰て来たと云^いうその時には、サア大變。朝^{ちやうや}野共^やに物論沸

騰して、武家は勿論、長袖の学者も医者も坊主も皆政治論に忙しく、酔えるが如く狂するが如く、人が人の顔を見れば唯その話ばかりで、幕府の城内に規律もなければ礼儀もない。平生なれば大広間、溜の間、雁の間、柳の間なんて、大小名の居る処で中々喧ましいのが、丸で無住のお寺を見たようになって、ゴロ／＼箕坐を搔て、怒鳴る者もあれば、ソツト袂から小さいビンを出してブランデーを飲んでる者もあると云うような乱脈になり果てたけれども、私は時勢を見る必要がある、城中の外国方に翻譯杯の用はないけれども、見物半分に毎日のように城中に出て居ましたが、その政論流行の一例を云て見ると、或日加藤弘之と今一人、誰であつたか名を覚えませぬが、二人がを着て出て来て外国方の役所に休息して居るから、私が其処へ行て、「イヤ加藤君、今日はおで何事に出て来たのかと云うと、「何事だツて、お逢いを願うと云うのは、此の時に慶喜さんが帰て来て城中に居るでしょう、ソコで色々な策士論客忠臣義士が躍氣となつて、上方の賊軍が出発したから何でも是れは富士川で防がなければならぬとか、イヤ爾うでない、箱根の嶮阻に拠て二子山の処で賊を塵殺しにするが宜い、東照神君三百年の洪業は一朝にして棄つべからず、吾々臣子の分として義を知るの王臣となつて生けるは恩を知るの忠臣となつて死するに若かずなんて、種々様々の奇策妙案を献じ、悲憤慷慨の氣

焰^{えん}を吐く者が多いから、云^いわずと知れた加藤等もその連^{れんじゆう}中で、慶喜さんにお逢いを願う者に違いない。ソコデ私が、「今度の一件はドウなるだろう、いよく戦争になるか、ならないか、君達には大^{たいてい}抵^{たい}分^{ぶん}るだろうから、ドウぞ夫^それを僕に知らして呉^くれ給^{たま}え、是非聞きたいものだ。」ソレを聞いて何にするか。「何にするツて分^{わか}てるではないか、是れがいよく戦争に極^きまれば僕は荷物を拵^{こしら}えて逃げなくてはならぬ、戦争にならぬと云えば落^おち^ち付^つて居る。その和戦如何^{いかん}はなか／＼容易ならぬ大切な事であるから、ドウぞ知らして貰^{もら}いたいと云うと、加藤は眼を丸くして、「ソんな気楽な事を云^いて居る時勢ではないぞ、馬^ば鹿^か々々しい。「イヤ／＼気楽な所ではない、僕は命掛けだ。君達は戦うとも和睦しようとも勝手にしなさい、僕は始まると即^{そつ}刻^{こく}逃^にげて行くのだからと云^いたら、加藤がプリ／＼怒^{おこ}て居たことがあります。」

夫^それから又^{また}或^{ある}日^ひに外^{がい}国^{こく}方^{がた}の小役人が出て来て、時に福澤さんは家来は何人お召^{めし}連れになるかと問^とうから、「家来とは何だと云^いうと、「イヤ事急なれば皆この城中に詰^つめる方々にお賄^{まかない}を下^{くだ}さるので人^{にん}数^ずを調^{てい}べて居る処です。「爾^そうかソレは誠^{まこと}に難^{ありがた}有^い、難^{ありがた}有^いが私は勿^{もちろん}論^{ろん}家来もなければ主人もない。ドウぞ福澤のお賄^{まかない}だけはお止^やめにして下さい。弥^いよいよ戦争が始まると云うのに、この城の中に来て悠々と弁^く当^{たう}など喰^くて居られるものか、始

まろうと云う氣振りが見えれば何処かへ直ぐに逃出して行きます。先ず私のお賄は要らないものとして下さいと、笑て茶を呑んで居た。全体を云うと眞実徳川の人に戦う氣があれば、私がそんな放語漫言したのを許す訳けはない、直ぐ一刀の下に首が夫くなる筈だけれども、是れが所謂幕末の形勢で、逆も本式に戦争などの出来る人氣でなかつた。

その前に慶喜さんが東歸して来たときに、政治上の改革とでも云うか種々様々な役人が出来た。可笑しくて堪らない。新潟奉行に誰が命ぜられて、何処の代官に誰がなる。甚だしきに至ては逃去て来た後の兵庫奉行になつた人さえあつて、名義上の奉行だけは此方に出て居る。夫れから又御目附になるもあれば、御使番になるものもある。何でも加藤弘之、津田真一（眞道）なども御目附か御使番かになつて居たと思う。私にも御使番になれと云う。奉書到来と云う儀式で、夜中差紙が来たが、眞平御免だ、私は病氣で御座ると云て取合わない。夫れから段々切迫して官軍（上方勢）が這入り込んで、ソロ／＼鎮将府と云うようなものが江戸に出来て、慶喜さんは水戸の方に行くと思つたので、是れは慶応四年即ち明治元年春からの騒ぎで、その時に私は芝の新銭座に屋敷が買つてあつたから引越さなければならぬ。その屋敷の地坪は四百坪、長屋が一棟に土蔵が一つある切りだから、生徒の爲めに塾舎も拵えなければならず、又私の住居も拵えな

ければならぬ。扨^{さて}その普請^{ふしん}の一段になつた所で、江戸市中^{おほ}大騒動^{かえつ}の最中、却て都合が宜い。八百八町只^{ただ}の一軒でも普請をする家はない。ソレどころではない、荷物を擲^{から}げて田舎に引^ひ越^{つこ}すと云うような者ばかり、手廻^{まわ}しの宜い家では竈^{かまど}の銅壺^{どうこ}まで外^{はず}して仕舞^{しまつ}て、自分は土^{どべつ}竈^{つい}を拵^{こしら}へて飯を焚^{たい}て居る者もある。この最中に私が普請^{ふしん}を始めた処が、大工や左官^{ようこ}の悦びと云うものは一方^{ひとかた}ならぬ。安いにもく、何でも飯が喰^くわれさえすれば宜い、米の代さえあれば働くと云う訳^{わけ}で、安い手間料で人手は幾らでもあるから、普請は颯々^{さつさつ}と出来る。その建物も新たに拵^こえるのではない。奥平屋敷の古長屋を貰^{もらつ}て来て、凡そ百五十坪も普請したが、入費^{にゆうひ}は僅^{わず}か四百両ばかりで一切^{いっさい}仕上げました。いよく普請の出来たのはその年（明治元年）四月頃と覚ゆ。その時私の朋友などは態々^{わざ}止め^とに來て、「今頃普請をするものがあるか、何処^{どこ}でも家を毀^こわして立退くと云う時節に、君独り普請をしてドウする積^{つも}りだと云うから、私は答えて、「ソリヤ爾^そうでない、今僕^{あたら}が新に普請するから可笑^{おか}しいように見えるけれども、去年普請をして置^おいたらドウする。いよく戦争になつて逃^にげる時にその家を担^{かつ}いで行かれるものでない。成程^{なるほど}今戦争になれば焼けるかも知れない、又焼けないかも知れない、仮令^{たと}焼けても去年の家が焼けたと思えば後悔も何もしない、少しも惜しくない」と云^いて颯々と普請をして、果して何の災^{わざわい}もなかつたのは投機商売^{あたつ}の中た

ようなものです。何でも私の処で普請をしたために、新銭座^{しんせんざ}辺は余程立退きが寡^{すくな}かった。彼^{あすこ}処^この内^{うち}で普請をする位だから戦争にならぬであらう、マア引越^{ひきこし}を見合せようと云^いて思^{おも}止^とまった者も大分^{だいぶん}あつたようだ。けれども実は私も心の中では怖いさ。何処^{どこ}から焼け始^{はじ}まつてドンな事になるか知れぬと思うから、何処^{どこ}かに逃^にげる用意はして置かなければならぬ。屋敷の中に穴を掘^ほて隠^{かく}れて居ようか、ソレでは雨の降るときに困る。土蔵^{えん}の椽^{えん}の下に這^{はい}入^いて居ようか、若^もし大砲で撃れると困る。ドウしようかと思う中に、近所^{きしやう}に紀州^{きしゅう}の屋敷^し（今の芝離宮^{しばりきゆう}）があつて、その紀州藩から幾人も生徒が来て居るを幸い、その人達^{ひとたち}に頼^{たの}んで屋敷を見^みに行^いた所が、広い庭で土手が二重に喰^く違^{ちが}いになつて居る処がある。此^{ここ}処^こが宜^よかろう、罷^まり違^{ちが}ていよく／＼^や遣^やるようにならば、此^{ここ}処^こへ逃^にげて来よう、けれども表から行^いかれない、行^いかれないから海岸から行くより外^{ほか}ないと云^いうので、いよく／＼セツ^つパ^つ詰^つたその時に、私は伝馬船^{でんまふね}を五、六日の間^{やとつ}雇^{やと}つて、新銭座^{しんせんざ}の浜^{はま}辺^べに繋^{つな}いで置^おいたことがある。サアいよく／＼と云うときに、家内の者をその船に乗せて海の方からその紀州^{きしゅう}の屋敷^しへ行^いて、土手の間に隠^{かく}れて居ようと云う覚悟^{かくご}。その時に私の処^この子供^{こども}が二人、一^{いち}（総領^{そうりやう}の一^{いち}太郎^{たろう}氏^しなり）と捨^{すて}（次男^{じなん}の捨次郎^{すてじやう}氏^しなり）、家内^{かない}と子供^{こども}を連^れて其^{そこ}処^こへ行^いこうと云^いう覚悟^{かくご}をして居^ゐた所が、ソレ程心配^{しんぱい}にも及^{およ}ばず、追々^{しゆしゆ}官軍^{くわんぐん}が入^い込^こんで来^きた所が存外^{ぞんがい}優^{やさ}し

い、決して乱暴な事をしない。既に奥平の屋敷が汐留にあつて、彼処に居る（別室に居る年寄を指して）一太郎のお祖母さんがその屋敷に居るので、五歳ばかりの一太郎が前夜からお祖母さんの処に泊て居た所が、奥平屋敷のツヒ近所に増山と云う大名屋敷があつて、その屋敷へ不逞の徒が何人とか籠て居ると云うので、長州の兵が取囲んで、サア戦争だ、ドン／＼遣て居る。夫れから捕まえられたとか斬られたとか、或は奥平屋敷の溝の中に人が斬倒されて、ソレを又上から鎗で突たと云うような大騒動。所で私の倅はお祖母さんの処に居る、奥平の屋敷も焼かれて仕舞うだろう、あの子とお祖母さんはドウなろうかと大変な心配で、迎いに遣らうと云ても遣ることも出来ない。夫れ是れする中に夕方になった所で事は鎮まつて仕舞たが、その時でも大変に優しくて、ジツとして居ればドウもしない、何もこの内に居る者に怪我をさせようとしなければ乱暴もしない、チヤンと軍令と云うものがあつて締りが付て居るから安心しなさいと頻りに和めて一寸とも手を触れないと云う一例でも、官軍の存外優しかったことが分る。前に思たとは大違い、何ともない。

義塾次第に繁昌扱四月になつた所で普請も出来上り、塾生は丁度慶応三年と四年の境が一番諸方に散じて仕舞て、残た者は僅に十八人、夫れから四月になつた所が段々歸て来て、

追々塾の姿を成して次第に盛になる。又盛になる訳でもある、と云うのは今度私が亜米利加^カに行^カた時には、其以前、亜米利加に行^カた時よりも多く金を貰^{もら}いました。所で旅行中の費用^{すべ}は都て官費であるから、政府から請取^{うけと}つた金は皆手元に残^{のこ}る故、その金を以て今度こそは有らん限りの原書を買^かつて来ました。大中小の辞書、地理書、歴史等は勿論、その外法律書、経済書、数学書などもその時始めて日本に輸入して、塾の何十人と云う生徒に銘々^{めいめい}その版本を持^もたして立派に修業の出来るようにしたのは、実に無上の便利でした。ソコでその当分十年余も亜米利加出版の学校読本が日本国中に行^いわれて居たのも、畢竟^{ひつきよう}私が始めて持^もつて歸^{かえ}つたのが因縁^{いんえん}になつたことです。その次第は生徒が始めて塾で学ぶ、その学んで卒業した者が方々^{ほうほう}に出て教師になる、教師になれば自分が今まで学んだものをその学校に用^{もち}るのも自然の順序であるから、日本国中に慶應義塾に用いた原書が流布^{るふ}して広く行^いわれたと云うのも、事の順序はよく分て居^{わかつ}ます。

官賊の間に偏せず党せずそれで先ず官軍は存外柔かなものであつて、何も心配はない。併し政治上の事は極めて鋭敏なもので、嫌疑^{けんぎ}と云うことがあつては是れは容易ならぬ訳^{わけ}であるから、ソレを明にする為めに、私は一切^{いっさい}万事何も斯^かも打明けて、一口に云^いえば塾も住居^{すまい}も殻明^{からあ}きにして仕舞^{しま}い、何処^{どこ}を搜した所で鉄砲は勿論^{もちろん}一挺^{いっちよう}もなし、刃物^{はもの}もなけ

れば飛道具とびどうぐもない、一目明白、直すくに分るようになりました。始終爾しじゅうそう云う身構えにして居るから、私の処には官軍方の人も颯々さつさと来れば、賊軍の人も颯々さつさと出入りして居て、私は官でも賊でも一切いっさい構わぬ、何方どちらに向ても依怙えこひ鬚いなしに扱あつかて居るから、双方共に朋友でした。その時に斯こう云う面白い事がありました。官軍が江戸に乗込んでマダ賊軍が上野に籠こもらぬ前に、市川辺に小競合こぜりあいがありました。爾うすると賊軍方の者が夜は其処そこに行て戦たたかつ、昼は睡ねむいからと云て塾いっに来て寝て居た者があつたが、根ねから構わぬ。私はその人の話を聞て、「君はソナ事をして居るのか、危ない事だ、マア止よにした方が宜よかろうと云たくらいのことである。

古川節藏脱走夫それから古川節藏は長崎丸と云う船の艦長であつたが、榎本釜次郎えのもとかまじろうよりも先駆けして脱走すると云うので、私にその事を話した。所が節藏は先年私が大阪から連れて来た男で、弟のようにして居たから、私はその話を聞て親切に止めとました。「ソリヤ止よすが宜いい、逆とても叶わぬ、戦争すれば必ず負けるに違いない。東西ドチラが正しいとか正しくないとか云うような理非曲直は云わないが、何しろ斯う云う勢いきおいになったからは、モウ船ふねに乗て脱走したからとて勝てそうにもしないから、ソレは思い止とまるが宜いいと云た所が、節藏はマダなか／＼強氣つよきで、「ナアに屹度勝きつとつ、是これから出掛けて行て、諸方に出

没して居る同志者をこの船に乗せて便利の地に挙げて、官軍が江戸の方に遣て来るその裏を衡て、夫れから大阪灣に行て掻廻せば官軍が狼狽すると云うような事になつて、屹度勝算はありますと云て、中々私の云うことを聞かないから、「爾うか、ソレならば勝手にするが宜い、乃公はモウ負けても勝ても知らないぞ。だが乃公は足下を助けようとは思わぬ。唯可哀そうなのはお政さんだ（節蔵氏の内君）、ソレ丈けは生きて居られるように世話をして遣る、足下は何としても云う事を聞かないから仕方がない、ドウでもしなさいと云て別れたことがあります。

発狂病人一条米国より帰来もう一條。この時に仙台の書生で、以前この塾に居て夫れから亜米利加に留学して居た一條某と云うものがあつて、ソレが亜米利加から歸て來た所がこの男が発狂して居ると云う。ソレを船中で親切に看病して呉れたと云うのは、矢張り一條と同時に塾に居た柳本直太郎、是れはこの間まで愛知県の書記官をして居たが、今では市長か何かになつて居るそうだ。この柳本直太郎が親切に看病して、横浜に着船した。その時は丁度仙台藩がいよく朝敵になつたときで、江戸中で仙台人と見れば見付次第捕縛と云うことになつて居る。ソコで横浜に來た所が、正しく仙台人だ、捕縛しようかと云うに、紛う方なき発狂人だ、ドウにも手の着けようがない。その時に寺島（宗則）

が横浜の奉行をして居て、発狂人は仕方がないから打遣て置けと云うような事でその儘に
してあるその中に、病人は人を疑う病症を發して、飲食物に毒があると云て一切受け
ず、凡そ一週間余り何も飲食しない。飲食しないからその儘棄て、置けば餓死する。ソコ
でいろ／＼と和めて勧めたけれども何としても喰わない。爾うすると、不意としたことで、
その病人が福澤先生に遇いたいと云うことを云出した。福澤は江戸に居ましょう、ソコで
横浜に置くなら宜いが江戸に連れて行くのはドウかと思て、御奉行（寺島）に伺た所が、
御奉行様も福澤に行くと言うなら颯々と連れて行けと云うので、ソレから新銭座に連れ
て来た。ソレが面白い、来た所で先ず取敢えず久振りと言て茶を出して、茶も飲め、序に
飯も喰えと勧めて、夫れから握飯を出して、私も喫べるから君も一つ喫べなさい、ソレが
喫べられなければ私の喫べ掛けを半分喫べなさい、毒はないじゃないかと云うようなこと
で試みた所が、ソコで喰出した。喰て見れば氣狂いの事だから、今まで思て居たことは忘
れて仕舞い、新銭座に来て安心したと見え、食氣は回復して、ソレは宜いが、マダ／＼
病人が何を遣り出すか知れない、昼夜番が要る。所が可笑しい。その時に薩州の者も居れ
ば土州の者も居る、その官軍一味の者が居て、朝敵だから捕縛しようと云う位な病人を扶
けて看柄して居る。爾うすると仙台の者が忍んで来る。大槻の倅なども内々見舞に来て、

官軍と賊軍と塾の中で混り合^{あつ}て、朝敵藩の病人を看病して居ながら、何も風波^{ふうは}もなければ苦味^{にがみ}もない。ソナ事が塾の安全であつた訳^{わけ}けでしよう。眞実平等区別なし、疑わんとするも疑うべき種^{たね}がない。一方には脱走して賊軍に投ずるがあるかと思えば、一方にはチャンと塾に這入^{はいっ}て居る官軍もあると云うような不思議な次第柄で、斯^こう云う事は造^{つく}つたのじゃ出来ぬ、装うても出来ぬ、私は腹の底から偏頗^{へんぱ}な考がない、少しも幕府の事を感服しなれば、官軍の事をも感服しない、戦争するなら銘々^{めいめい}勝手にしろと、裏も表もなくその趣^し意^いで貫^ぬいて居たから、私の身も塾も危^{あやう}い所を無難^{ぶなん}に過したことを思う。

新政府の御用召夫^それからいよく王政維新と定^きまつて、大阪に明治政府の仮政府が出来て、その仮政府から命令^{くんだつ}が下^{くだ}つた。御用があるから出て来いと一番始めに沙汰^{さた}のあつたのが、神田孝平^{んだたかひら}と柳川春三^{やながわしゅんさん}と私と三人。所が柳川春三はドウも大阪に行くのは嫌^{いや}だ、だから命は奉ずるけれども御用があればドウゾ江戸に居て勤めたいと云^いう注文。神田孝平は命に應じて行くと云う。私は一も二もなく病気で出られませぬと断り。その後大阪の仮政府は江戸に遷^{うつ}て来て、江戸の新政府から又御用召^{ごようめし}で度々^{たびたび}呼びに來ましたけれども、始終^{しじゅう}断^{はか}る計^{あるとき}り。或時^{あるとき}神田孝平が私の処^ぜへ是非出ると云^いつて勧めに來たから、私は之^{これ}に答えて、「一体君は何^どう思うか、男子の出処進退は銘々^{めいめい}の好む通りにするが宜^いいではないか、世

間一般そうありたいものではないか、之に異論はなからう。ソコで僕の目から見ると、君が新政府に出たのは君の平生好む所を實行して居るのだから僕は甚だ賛成するけれども、僕の身には夫れが嫌いだ、嫌いであるから出ないと云うものも是亦自分の好む所を實行するのだから、君の出て居るのと同じ趣意ではないか。左れば今僕は君の進退を賛成して居るから、君も亦僕の進退を賛成して、福澤は能く引込んで居る、旨いと云て誉めてこそ呉れそうなものだ。夫れを誉めもせずに呼出しに来るとは友達甲斐がないじゃないかと大に論じて、親友の間であるから遠慮会釈もなく刎付けたことがある。

学者を誉めるなら豆腐屋も誉める夫れから幾ら呼びに來ても政府へはモウ一切出ないと説を極めて居た所が、或日細川潤次郎が私の処へ來たことがある。その時はマダ文部省と云うものゝない時で、何でもこの政府の学校の世話をしろと云う。イヤそれは往けない、自分は何もそんな事はしないと答え、夫れからいろいろの話もあつたが、細川の云うに、ドウしても政府に於て只棄てゝ置くと云う理屈はないのだから、政府から君が国家に尽した功勞を誉めるようにしなければならぬと云うから、私は自分の説を主張して、誉めるの誉められぬのと全体ソリヤ何の事だ、人間が人間當前の仕事をして居るに何も不思議はない、車屋は車を挽き豆腐屋は豆腐を拵えて書生は書を読むと云うのは人間當前

前の仕事として居るのだ、その仕事をして居るのを政府が誉めると云うなら、先ず隣の豆腐屋から誉めて貰わなければならぬ、ソんな事は一切止しなさいと云て断たことがある。是れも随分暴論である。

マア斯う云うような調子で、私は酷く政府を嫌うようにあるけれども、その真実の大本を云えば、前に申した通りドウしても今度の明治政府は古風一天張りの攘夷政府と思込んで仕舞たからである。攘夷は私の何より嫌いな事で、コンな始末では仮令い政府は替ても迎も国は持てない、大切な日本国を滅茶苦茶にして仕舞うだろう本当に爾う思た所が、後に至てその政府が段々文明開化の道に進んで今日に及んだと云うのは、実に難有い目出たい次第であるが、その目出たかろうと云うことが私には始めから測量が出来ずに、唯その時に現れた実の有様に値を付けて、コンな古臭い攘夷政府を造て馬鹿な事を働いて居る諸藩の分らず屋は、国を亡ぼし兼ねぬ奴等じやと思て、身は政府に近づかずに、唯日本に居て何か勉めて見ようと安心決定したことである。

英国王子に潔身の祓私が明治政府を攘夷政府と思たのは、決して空に信じたのではない、自から憂うべき証拠がある。先ず爰に一奇談を申せば、王政維新となつて明治元年であつたか二年であつたか歳は覚えませぬが、英吉利の王子が日本に來遊、東京城に参内する

ことになり、表面は外国の貴賓を接待することであるから固より故障はなけれども、何分にも穢れた外国人を皇城に入れると云うのはドウも不本意だと云うような説が政府部内に行われたものと見えて、王子入城の時に二重橋の上で潔身の祓をして内に入れたことがある、と云うのは夷狄の奴は不浄の者であるからお祓をして体を清めて入れると云う意味でしょう。所がソレが宜い物笑いの種サ。その時に亜米利加の代理公使にポルトメンと云う人が居まして、毎度ワシントン政府に自分の任所の模様を報知して遣る、けれども余り必要でない事は大統領がその報告書を見ない、此方では又ソレを見て貰うのが公使の名譽としてある。ソコで公使が今度英の王子入城に付き潔身の祓云々の事を探り出して大に悦び、是れは締めた、この大奇談を報告すれば大統領が見て呉れるに違いないと云うので、その表書に即ちエツチンボルフ王子の清めと云う可笑しな不思議な文字を書いて、中の文句はドウかと云うに、この日本は真実、自尊自大の一小鎖国にして、外国人をば畜生同様に取扱うの常なり、既にこの程英吉利の王子入城謁見のとき、城門外に於て潔身の祓を王子の身邊に施したり、抑も潔身の祓とは上古穢れたる者を清めるに灌水法を行いしが、中世、紙の発明以来紙を以て御幣なるものを作り、その御幣を以て人の身体を撫で、水の代用として一切の不浄不潔を払うの故実あり、故に今度英の王子に施したるはその例に由

ることにして、日本人の眼を以て見れば王子も亦唯不浄の畜生たるに過ぎず云々とて、筆を巧に事細かに書いて遣たことがある。ソレは私が尺振八から詳に聞きました。この尺振八と云う人はその時、亜米利加公使館の通弁をして居たので、尺が私の処に来てこの間はれくの話、大笑いではないかと云て、その事実もその書面の文句も私に親しく話して聞かせましたが、実に苦々しい事で、私は之を聞いて笑い所ではない泣きたく思いました。米国前の國務卿又日本を評す又その頃、亜米利加の前國務卿シーワルトと云う人が、令嬢と同伴して日本に來遊したことがある。この人は米国有名の政治家で、彼の南北戦争のとき専ら事に当て、リンコルの遭難と同時に兇徒に傷けられたこともある。元來英國人とは反りが合わずに、云わば日本最良の人でありながら、今度來遊、その日本の實際を見て何分にも最良が出来ぬ、こんな根性の人民では氣の毒ながら自立は六かしいと断言したこともある。ソコで私の見る所で、新政府人の挙動は都て儒教の糟粕を嘗め、古学の固陋主義より割出して空威張りするのみ。顧みて外國人の評論を聞けば右の通り。逆も是れは仕方がないと眞実落胆したれども、左りとて自分は日本人なり、無為にしては居られず、政治は兎も角も之を成行に任せて、自分は自分にて聊か身に覚えたる洋学を後進生に教え、又根氣のあらん限り著書翻譯の事を勉めて、万が一にも斯民を文明に導くの僥倖も

あらんかと、便り少なくも独り身構えした事である。

子供の行末を思うその時の私の心事は実に淋しい有様で、人に話したことはないが今打明けて懺悔しましょう。維新前後、無茶苦茶の形勢を見て、逆もこの有様では国の独立は六かしい、他年一日外国人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ、左ればとて今日全国中の東西南北何れを見ても共に語るべき人はない、自分一人では勿論何事も出来ず亦その勇氣もない、実に情ない事であるが、いよく外人が手を出して跋扈乱暴と云うときには、自分は何とかしてその禍を避けるとするも、行く先きの永い子供は可愛そうだ、一命に掛けても外国人の奴隷にはしたくない、或は耶蘇宗の坊主にして政事人事の外に独立させでは如何、自力自食して他人の厄介にならず、その身は宗教の坊主と云えば自から辱しめを免かるゝこともあらんかと、自分に宗教の信心はなくて、子を思うの心より坊主にしようなどゝ種々無量に考えたことがあるが、三十年の今日より回想すれば恍として夢の如し、唯今日は世運の文明開化を難有く拝するばかりです。

授業料の濫觴挊鉄砲洲の塾を芝の新銭座に移したのは明治元年即ち慶応四年、明治改元の前でありしゆえ、塾の名を時の年号に取て慶應義塾と名づけ、一時散じた生徒も次第に帰来して塾は次第に盛になる。塾が盛になつて生徒が多くなれば塾舎の取締も必要にな

るからして、塾則のようなものを書いて、是れも写本は手間が取れると云うので版本にして、一冊ずつ生徒に渡し、ソレには色々箇条のある中に、生徒から毎月金を取ると云うことも慶應義塾が創めた新案である。従前、日本の私塾では支那風を真似たのか、生徒入学の時には束脩そくしゅうを納めて、教授する人を先生と仰ぎ奉り、入学の後も盆暮ぼんくれ両度ぐらいに生徒銘々めいめいの分に応じて金子なり品物なり熨斗のしを附けて先生家に進上する習わしでありしが、私共の考えに、迎むかもこんな事では活澆かつぱうに働く者はない、教授も矢張り人間の仕事だ、人間が人間の仕事をして金を取るに何の不都合がある、構うことはないから公然あたい価を極めて取るが宜いと云うので、授業料と云う名を作つくて、生徒一人から毎月金二分きんにぶずつ取立て、その生徒には塾中の先進生が教えることにしました。その時塾に眠食する先進長者は、月に金四両あれば喰うことが出来たので、ソコで毎月生徒の持もつて来た授業料を掻かき集めて、教師の頭に四両ずつ行渡いきれば死しはせぬと大本だいほんを定めて、その上に尚なお余りがあれば塾舎の入用にすることにして居ました。今では授業料なんぞは普通とうぜん当然のようにあるが、ソレを始めて行いうた時は実に天下の耳目を驚かしました。生徒に向むかて金二分持もつて来い、水引みずひきも要いらなければ熨斗のしも要らない、一両もつ持もつて来れば釣つりを遣やるぞと云うように触ふれ込んで、ソレでもちやんと水引を掛けて持もつて来るものもある。スルとこんな物があると札さつを檢あらためる邪魔に

なると云て、態と上包を還して遣るなどは随分殺風景なことで、世間の人の驚いたのも無理はないが、今日それが日本国中の風俗習慣になつて、何ともなくなつたのは面白い。何事に由らず新工風を運らして之を实地に行うと云うのは、その事の大小を問わず余程の無鉄砲でなければ出来たことではない。左る代りに夫れが首尾能く参て、何時の間にか世間一般の風になれば、私の為めには恰も心願成就で、こんな愉快なことはありません。上野の戦争新銭座の塾は幸に兵火の為に焼けもせず、教場もどうやらこうやら整理したが、世間は中々喧しい。明治元年の五月、上野に大戦争が始まつて、その前後は江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋も皆休んで仕舞て、八百八町は真の闇、何が何やら分らない程の混乱なれども、私はその戦争の日も塾の課業を罷めない。上野ではどん／＼鉄砲を打て居る、けれども上野と新銭座とは二里も離れて居て、鉄砲玉の飛で来る氣遣はないと云うので、丁度あの時私は英書で経済の講釈をして居ました。大分騒々敷い容子だが烟でも見えるかと云うので、生徒等は面白がつて梯子に登て屋根の上から見物する。何でも昼から暮過ぎまでの戦争でしたが、此方に關係がなければ怖い事もない。日本国中唯慶應義塾のみ此方がこの通りに落付払て居れば、世の中は広いもので又妙なもので、兵馬騒乱の中にも西洋の事を知りたいと云う氣風は何処かに流行して、上野の

騒動が済むと奥州の戦争と為り、その最中にも生徒は続々入学して来て、塾はますます盛
なりました。顧みて世間を見れば、徳川の学校は勿論潰れて仕舞い、その教師さえも行
衛が分らぬ位、況して維新政府は学校どころの場合でない、日本国中苟も書を読で居る処
は唯慶應義塾ばかりと云う有様で、その時に私が塾の者に語たことがある。昔しく拿
破翁の乱に和蘭国の運命は断絶して、本国は申すに及ばず印度地方まで悉く取られて
仕舞て、国旗を挙げる場所がなくなつた。所が、世界中纔に一箇処を遺した。ソレは即ち
日本長崎の出島である。出島は年来和蘭人の居留地で、歐洲兵乱の影響も日本には及ばず
して、出島の国旗は常に百尺竿頭に翻々して和蘭王国は曾て滅亡したることなし
と、今でも和蘭人が誇て居る。シテ見るとこの慶應義塾は日本の洋学の為めには和蘭の出
島と同様、世の中に如何なる騒動があつても変乱があつても未だ曾て洋学の命脈を断やし
たことはないぞよ、慶應義塾は一日も休業したことはない、この塾のあらん限り大日本は
世界の文明国である、世間に頓着するなど申して、大勢の少年を励ましたことがあり
ます。

塾の始末に困る、楽書無用夫れはそれとして又一方から見れば、塾生の始末には誠に骨が
折れました。戦争後意外に人の数は増したが、その人はどんな種類の者かと云うに、去年

から出陣してさん／＼奥州地方で戦て漸く除隊になつて、国には帰らずに鉄砲を棄て、その儘塾に來たと云うような少年生が中々多い。中にも土佐の若武者などは長い朱鞘の大小を挟して、鉄砲こそ持たないが今にも斬て掛ろうと云うような恐ろしい顔色をして居る。爾うかと思うとその若武者が紅い女の着物を着て居る。是れはドウしたのかと云うと、会津で分捕りした着物だと云て威張て居る。実に血腥い怖い人物で、一見先ず手の着けようがない。ソコデ私は前申す通り新錢座の塾を立てると同時に極めて簡単な塾則を拵えて、塾中金の貸借は一切相成らぬ、寝るときは寝て、起るときは起き、喰うときには定め時間に食堂に出る、夫れから樂書一切相成らぬ、壁や障子に樂書を禁ずるは勿論、自分所有の行灯にも机にも一切の品物に樂書は相成らぬと云うくらいの箇条で、既に規則を極めた以上はソレを實行しなくてはならぬ。ソコで障子に樂書してあれば私は小刀を以て其処だけ切破て、この部屋に居る者が元の通りに張れと申付け。夫れから行灯に書てあれば、誰の行灯でも構わぬ、その持主を咎めると、時としてはその者が、「是れは自分でない、人の書たのですと云ても私は許さぬ。人が書たと云うのは云訳けにならぬ、自分の行灯に樂書されてソレを見て居ると云うのは馬鹿だ、馬鹿の罰に早々張替えるが宜しい、樂書した行灯は塾に置かぬ、破るからアトを張て置きなさいと

云うようにして、寸毫すんごうも仮かさない。如何いかに血ち腥なまぐさい若武者が何と云おうとも、そんな事を恐れて居られない。ミシ／＼遣付やつけて遣やる。名は忘れたが、不図ふと見た所が桐の枕いに如何かな樂書がしてある。「コリヤ何だ。銘々めいめいの私有品でも樂書は一切相成らぬと云たではないか、ドウ云う訳けだ、一句の返答も出来なからう。この枕は私は削りたいけれども削ることが出来ない、打毀ぶちこわすから代りを取て来なさいと云て、その枕を取上げて足で踏ふみ潰ぶして、サアどうでもしろ、攫つかみ掛かつて来るなら相手になろうと云わぬばかりの思惑を示した所で、決して掛らぬ。全体私は骨格からだは少し大きいが、本当は柔術も何も知らない、生れてから人を打たうたこともない男だけれども、その権幕はドウも撃ちそうな攫つかみ掛りつけな気色で、口の法螺ほらでなくして身体からだの法螺で吹倒ふさした。所が皆小さくなつて言うことを聞くようになつて来て、ソレでマア戦争帰りの血腥なまぐさい奴も自おのずから静になつて塾の治まりが付き、その中には真ほん成とな大人おとなしい学者風の少年も多く、至極勉強してます／＼塾風を高尚にして、明治四年まで新銭座しんせんざに居ました。

始めて文部省維新の騒乱も程なく治まつて天下太平に向むて来たが、新政府はマダマダ跡かたづけ片付が容易な事でなくして、明治五、六年までは教育に手を着けることが出来ないで、専もつら洋学を教えるは矢張り慶應義塾ばかりであつた。何でも廃藩置県の後に至るまでは、

慶應義塾ばかりが洋学を専らにして、ソレから文部省と云うものが出来て、政府も大層教育に力を用うることになって来た。義塾は相変らず元の通りに生徒を教えて居て、生徒の数も段々殖えて、塾生の数は常に二百から三百ばかり、教うる所の事は一切英学と定め、英書を読み英語を解するようにとばかり教導して、古来日本に行われる漢学には重きを置かぬと云う風にしたから、その時の生徒の中には漢書を読むことの出来ぬ者が随分あります。漢書を読まずに英語ばかりを勉強するから、英書は何でも読めるが日本の手紙が読めないと云うような少年が出来て来た。物事がアベコベになって、世間では漢書を読めから英書を学ぶと云うのを、此方には英書を学んでから漢書を学ぶと云う者もあった。波多野承五郎などは小供の時から英書ばかり勉強して居たので、日本の手紙が読めなかったが、生れ付き文才があり氣力のある少年だから、英学の跡で漢書を学べば造作もなく漢学が出来て、今では彼の通り何でも不自由なく立派な学者に成て居ます。

教育の方針は数理と独立畢。竟私がこの日本に洋学を盛にして、如何でもして西洋流の文明富強国にしたいと云う熱心で、その趣は慶應義塾を西洋文明の案内者にして、恰も東道の主人と為り、西洋流の一手販売、特別エゼントとでも云うような役を勤めて、外国人に頼まれもせぬ事を遣て居たから、古風な頑固な日本人に嫌われたのも無理はない。元

来、私の教育主義は自然の原則に重きを置いて、数と理とこの二つのものを本にして、人間万事有形の経営は都てソレから割出して行きたい。又一方の道德論に於ては、人生を万物中の至尊至靈のものなりと認め、自尊自重苟も卑劣な事は出来ない、不品行な事は出来ない、不仁不義、不忠不孝ソンの浅ましい事は誰に頼まれても、何事に切迫しても出来ない、一身を高尚至極にし所謂独立の点に安心するようにしたいものと、先ず土台を定めて、一心不乱に唯この主義にのみ心を用いたと云うその訳は、古来東洋西洋相對してその進歩の前後遅速を見れば、実に大造な相違である。双方共に道德の教もあり、經濟の議論もあり、文に武におのゝ長所短所ありながら、扱国勢の大体より見れば富国強兵、最大多数、最大幸福の一段に至れば、東洋国は西洋国の下に居らればならぬ。国勢の如何は果して国民の教育より来るものとすれば、双方の教育法に相違がなくてはならぬ。ソコで東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに、東洋になきものは、有形に於て数学と、無形に於て独立心と、この二点である。彼の政治家が国事を料理するも、実業家が商売工業を働くも、国民が報国の念に富み、家族が団欒の情に濃なるも、その大本を尋れば自から由来する所が分る。近く論ずれば今の所謂立国の有らん限り、遠く思えば人類のあらん限り、人間万事、数理の外に逸することは叶わず、独立の外に依る

所なしと云うべきこの大切な一義を、我日本国に於ては軽く視て居る。是れでは差向き国を開て西洋諸強国と肩を並べることは出来そうにもしない。全く漢学教育の罪であると深く自から信じて、資本もない不完全な私塾に専門科を設けるなどは逆も及ばぬ事ながら、出来る限りは数理を本にして教育の方針を定め、一方には独立論の主義を唱えて、朝夕一寸した話の端にもその必要を語り、或は演説に説き或は筆記に記しなどしてその方針に導き、又自分にも様々工風して躬行実践を勉め、ますく漢学が不信仰になりました。今日にても本塾の旧生徒が社会の實地に乗出して、その身分職業の如何に拘らず物の数理に迂闊ならず、氣品高尚にして能く独立の趣意を全うする者ありと聞けば、是れが老余の一大樂事です。

右の通り私は唯漢学が不信仰で、漢学に重きを置かぬ計りでない、一步を進めて所謂腐儒の腐説を一掃して遣うと若い時から心掛けました。ソコで尋常一様の洋学者や通詞など云うような者が漢学者の事を悪く云うのは普通の話で、余り毒にもならぬ。所が私は随分漢書を読んで居る。読で居ながら知らない風をして毒々敷い事を言うから憎まれずに居られない。他人に対しては眞実素人のような風をして居るけれども、漢学者の使う故事などは大抵知て居る、と云うのは前にも申した通り、少年の時から六かしい経史をやか

ましい先生に授けられて本当に勉強しました。左国史漢は勿論、詩經、書經のような經義でも、又は老子莊子のような妙な面白いものでも、先生の講義を聞き又自分に研究しました。是れは豊前中津の大儒白石先生の賜である。どの經史の義を知て、知らぬ風をして折々漢学の急処のような所を押えて、話にも書たものにも無遠慮に攻撃するから、是れぞ所謂獅子身中の虫で、漢学の為めには私は実に悪い外道である。斯くまでに私が漢学を敵にしたのは、今の開国の時節に、陳腐れた漢説が後進少年生の脳中に蟠まつては、迎も西洋の文明は国に入ることが出来ない飽くまでも信じて疑わず、如何にもして彼等を救出して我が信ずる所に導かんと、有らん限りの力を尽し、私の真面目を申せば、日本国中の漢学者は皆来い、乃公が一人で相手になろうと云うような決心であつた。ソコで政府を始め世間一般の有様を見れば、文明の教育稍々普ねしと雖も、中年以上の重なる人は迎も洋学の佳境に這入ることは出来ず、何か事を謀り事を断ずる時には余儀なく漢書を便にして、万事ソレから割出すと云う風潮の中に居て、その大切な靈妙不思議な漢学の主義を頭から見下して敵にして居るから、私の身の為めには随分危ない事である。著書翻譯一切独立又維新前後は私が著書翻譯を勉めた時代で、その著訳書の由来は福澤全集の緒言に記してあるから之を略しますが、元来私の著訳は眞実私一人の発意で、

他人の差図も受けねば他人に相談もせず、自分の思う通りに執筆して、時の漢学者は無論、朋友たる洋学者へ草稿を見せたこともなければ、況して序文題字など頼んだこともない。是れも余り殺風景で、実は当時の故老先生とか云う人に序文でも書かせた方が宜かつたかも知れないが、私は夫れが嫌いだ。ソんな事かた／＼で、私の著訳書は事実の如何に拘わらず古風な人の氣に入る筈はない。ソレでもその書が殊更らに大に流行したのは、文明開国の勢に乗じたことでありましょう。

義塾三田に移る慶應義塾が芝の新錢座を去て三田の只今の処に移たのは明治四年、是れも塾の一大改革ですから一通り語りましょう。その前年五月私が酷い熱病に罹り、病後神経が過敏になった所為か、新錢座の地所が何か臭いように鼻に感じる。又事実湿地でもあるから何処かに引移りたいと思い、飯倉の方に相当の売家を捜出して略相談を極めようとするときに、塾の人の申すに、福澤が塾を棄て、他に移るなら塾も一緒に移ろうと云う説が起て、その時には東京中に大名屋敷が幾らもあるので、塾の人は毎日のように方々の明屋敷を捜して廻わり、彼処でもない此処でもない優勝次第に宜さそうな地所を見立て、いよく芝の三田にある島原藩の中屋敷が高燥の地で海浜の眺望も良し、塾には適當だと衆論一決はしたれども、此方の説が決した計りで、その屋敷は他人の

屋敷であるから、之これを手に入れるには東京府に頼み、政府から島原藩に上地じょうちを命じて、改めて福澤に貸渡すと云う趣向にしなければならぬ。ソレには政府の筋に内談して出来るように拵こしらえねばならぬと云うので、時の東京府知事に頼たのみ込むは勿論、私の平生知て居る佐野常民その他の人にも事の次第を語りて助力を求め、塾の先進生そうが※掛りにて運動する中に、或日私は岩倉公あるひ いわくらの家に参り、初めて推参なれども御目おめに掛りたいと申込んで公に面会、色々塾の事情を話して、詰り島原藩の屋敷を拝借したいと云う事を内願して、是れも快く引受けて呉れる。何処も此処も至極都合の好い折柄、幸いにも東京府から私に頼む事が出来て来たと云うは、当時東京の取締には邏卒らそつとか何とか云う名を付けて、諸藩の兵士が鉄砲を担いで市中を巡廻じゅんかいして居るその有様の殺風景とも何とも、丸で戦地のように見える。政府も之を宜くないことゝ思い、西洋風にポリスの仕組しくみに改革しようと心付きはしたが、扨さてそのポリスとは全体ドンなものであるか、概略でも宜しい、取調べて呉れぬかと、役人が私方に来て懇々内談するその様子は、この取調査え出来れば何か礼をするいと云うように見えるから、此方は得たり賢し、お易い御用で御座る、早速取調べて上げましょうが、私の方からも願の筋がある、兼て長官へ内々御話いたしたこともある通り、三田の島原の屋敷地を拝借いたしたい、是れ丈だけは厚く御含おふくみを願うと云うは、巡

査法の取調と屋敷地の拝借と交易にしようと云うような塩梅に持掛けて、役人も否と云わずに黙諾して帰る。ソレから私は色々な原書を集めて警察法に関する部分を翻訳し、綴り合せて一冊に認め早々清書して差出した所が、東京府ではこの翻訳を種にして尚お市中の實際を斟酌し様々に工風して、断然彼の兵士の巡廻を廃し、改めて巡邏と云うものを組織し、後に之を巡查と改名して東京市中に平和穩当の取締法が出来ました。ソコで東京府も私に対して自から義理が出来たような訳で、屋敷地の一条もスラ／＼行われて、島原の屋敷を上地させて福澤に拝借と公然命令書が下り、地所一万何千坪は拝借、建物六百何十坪は一坪一円の割合にて所謂大名の御殿二棟、長屋幾棟の代価六百何十円を納めて、いよ／＼塾を移したのが明治四年の春でした。

敬礼を止める引越して見れば誠に広々とした屋敷で申分なし。御殿を教場にし、長局を書生部屋にして、尚お足らぬ処は諸方諸屋敷の古長屋を安く買取寄宿舍を作りなどして、俄に大きな学塾に為ると同時に入学生の数も次第に多く、この移転の一举を以て慶應義塾の面目を新にしました。序ながら一奇談を語りましょう。新銭座入塾から三田に引越し、屋敷地の広さは三十倍にもなり、建物の広大な事も新旧較べものにならぬ。新塾の教場即ち御殿の廊下などは九尺巾もある。私は毎日塾中を見廻り、日曜は殊

に掃除日と定めて書生部屋の隅まで一々検め、大小便所の内まで私が自分で戸を明けて細に見ると云うようにして居たから、一日に幾度び廊下を通して幾人の書生に逢うか知れない。所がその行逢う毎に、新入生などは勝手を知らずに、私の顔を見ると丁寧な辞儀をする。先方から丁寧な遣れば、此方も之に応じて辞儀をしなければならぬ。忙しい中にウルサクて堪まらぬ。ソレから先進の教師連に尋ねて、「廊下で書生のお辞儀に困りはせぬか、双方の手間潰だがと云うと、何れも同様、塾が広くなつて家の内の御辞儀には閉口と云うから、「よし来た、乃公が広告を掲示して遣ると云て、

塾中の生徒は長者に対するのみならず相互の間にも粗暴無礼は固より禁ずる所なれども、講堂の廊下その他塾舎の内外往来頻繁の場所にては、仮令い教師先進者に行逢うとも丁寧に辞儀するは無用の沙汰なり、互に相見て互に目礼を以て足るべし。益もなき虚飾に時を費すは学生の本色に非ず。この段心得の爲めに掲示す。

と張紙して、生徒のお辞儀を止めた事がある。長者に対して辞儀をするなど云えば、横風になれ、礼儀を忘れよと云うように聞えて、奇なように思われるが、その時の事情は決して爾うでない。百年来压制の下に養われて官民共に一般の習慣を成したるこの国民の氣風を活潑に導かんとするには、お辞儀の廃止も自から一時の方便で、その機能は慥

に見えました。今でも塾にはコンな風が遺て、生徒取扱いの法は塾の規則に従い、不法の者があれば会釈なくミシ／＼遣付けて寸毫も仮さず、生徒に不平があれば皆出て行け、此方は何ともないと、チャンと説を極めて思う様に制御して居れども、教師その他に對して入らざる事に敬礼なんかと云うような田舎らしい事は塾の習慣に於て許さない。左ればとて本塾の生徒に限りて粗暴な者が多いでもなし、一方から見ても幾分かその氣品の高尚にして男らしいのは、虚礼虚飾を脱したその功德であろうと思われる。

地所払下三田の屋敷は福澤諭吉の拝借地になつて、地租もなければ借地料もなし恰も私有地のようではあるが、何分にも拝借と云えば何時立退を命じられるかも知れず、東京市を見れば私同様官地を拝借して居る者は甚だ多い、孰れも不安心に違いないと推察が出来る。如何かして之を御払下にして貰いたいと様々思案の折柄、当時政府に左院と称して議政局のようなものが立て居て、その左院の議員中に懇意の人があるからその人に面会、何か話の序には拝借地の有名無実なるを説き、等しく官地を使用せしむるならば之を私有地にして銘々に地所保存の謀を為さしむるに若かずと、頻りに利害を論じてその人の建言を促したるは毎度の事で、その他政府の筋の人にさえ逢えば同様の事を語るの常なりしが、明治四年の頃、それかあらぬか、政府は市中の拝借地をその借地人又は縁故ある者に

払下げるとの風聞ふうぶんが聞える。是れは妙なりと大に喜び、その時東京府の課長に福田と云う人が専らもっぱ地所の事を取扱うと云う事を聞き伝え、早速福田の私宅を尋ねて委細の事実を確かめ、いよゝゝ発令の時には知らして呉くれることに約束して、帰宅して日々便りを待まつて居ると、数日の後に至り、今日発令したと報知が来たから、暫時しばしも猶予は出来ず、翌朝東京府に代理の者を差出し御払下おほらいさげを願うて、代金を上納せんと金を出した処が、府庁にも昨日発令した計りばかで出願者は一人もなし、マダ帳簿も出来ず、上納金請取の書式も出来ずと云うから、その正式の請取は後日の事として今日は唯金子丈ただぎんすだけの御収納を願うと云いて、強いて金を渡して仮り御払下の姿を成し、その後、地所代価收領の本証書も下りて、いよゝゝ私の私有地と為り、地券ちけんめん面本邸の外に附属の町地面を合して一万三千何百坪、本邸の方は千坪に付き価あた十五円、町地まちちの方は割合に高く、両様共算して五百何十円とは、殆んど無代価と申して宜よろしい。その代価の事は兎も角もとして、斯く私が事を性急にしたのは、この屋敷に久しく住居じゆうきよすればするほどいよゝますゝ宜い屋敷になつて来て、実に東京第一、他に匹敵するものはないと自みづから感心して、塾員と共に満足すると同時に、之を私これ有地にすると云いえば何か故障の起りそうな事だと、俗に云う虫が知らせるような塩梅あんばいで、何だか氣になるから無暗に急いで埒らちを明けた所が、果して然しかり、東京の諸屋敷地を払下げ

ると云う風聞が段々世間に知れ渡たその時に、島原藩士何某が私方に遣て来て、当屋敷は由緒ある拝領屋敷なるゆえ、主人島原藩主より御払下を願う、此方へ御譲渡し下されいと振込んで来たから、私は一切知らず、この地所のむかしが誰のものでありしや夫れさえ心得て居ない、兎に角に私は東京府から御払の地所を買請けたまでの事なれば、府の命に服従するのみ、何か思召もあらば府庁へ御談じ然るべしと刎付ける。スルと先方も中々渋とい。再三再四遣て来て、とう／＼仕舞には屋敷を半折して半分ずつ持とうと云うから、是れも不承知。地所の事は島原藩と福澤と直談すべき性質のものでないから御返答は致さぬ、一切万事君夫れ之を東京府に聞けと云う調子に構えて居て、六かしい談判も立消になったのは難有い。今日になって見れば、東京中を尋ね廻ても慶應義塾の地所と甲乙を争う屋敷は一箇所もない。正味一万四千坪、土地は高燥にして平面、海に面して前に遮るものなし、空气清新眺望佳なり、義塾唯一の資産にして、今これ売ろうとしたらば、むかし御払下の原価五百何十円は、百倍でない千倍になりましょう。義塾の慾張り、時節を待て千倍にも二千倍にもして遣ろうと、若い塾員達はリキンで居ます。教員金の多少を争う右の通り三田の新塾は万事都合能く行われて、塾の資本金こそ皆無なれ、生徒から毎月の授業料を取集めて之を教師に分配して、如何やら斯うやら立行くその

中にも、教師は皆本塾の先進生であるから、この塾に居て余計な金を取ろうと云う考かんがえはない。第一私が一銭でも塾の金を取らぬのみか、普請ふしんの時などには毎度此方こつちから金を出して遣やる。教師達もその通りで、外に出れば随分ずいぶん給料の取れるのを取らずに塾の事を勤めるから、是れも私金を出すと同じ事である。凡そコンナ風で無資金の塾も維持が出来たが、その時の真面目しんめんもくを申せば、月末などに金を分配するとき、動もすれば教師の間に議論が起るその議論は即ち金すなわの多少を争う議論で、僕はコンなに多く取る訳わけはない、君の方が少ないと云うと、「イヤ爾うそでない、僕は是れで沢山だ、イヤ多い、少ないと、喧嘩のように云てるから、私は側そばから見て、「ソリや又始まった、大概にして置きなさい、ドウせ足りない金だから宜い加減いにして分けて仕舞しまえ、争う程の事でもない」と毎度笑て居ゐました。この通りで慶應義塾の成立なりたちは、教師の人々がこの塾を自分のものと思うて勉強したからの事です。決して私一人の力に叶う事ではない。人間万事余り世話をせず放任主義の方が宜いかと思われれます。その後時勢も次第に進歩するに従い、塾の維持金を集め、又大学部の為ためにも募り、近來は又重ねて募集金を始めましたが、是れも私は余り深く関係せず、一切いっさいの事を塾出身の若い人に任せて居ます。

暗殺の心配

是れまで御話し申した通り、私の言行は有心故造態と敵を求める訳けでは固よりないが、鎖国風の日本に居て一際目立つ様に開国文明論を主張すれば、自然に敵の出来るのも仕方がない。その敵も口で彼是喧しく云うて罵詈する位は何でもないが、唯怖くて堪らぬのは襲撃暗殺の一事です。是れから少しその事を述べましょうが、凡そ世の中に我身に取て好かない、不愉快な、気味の悪い、恐ろしいものは、暗殺が第一番である。この味は狙われた者より外に分るまいと思う。実に何とも口にも言われず筆にも書かれませんが是れが病気を煩うとか、痛所があるとか何とか云えば、家内に相談し朋友に謀ると云う様なこともあるが、暗殺ばかりは家内の者へ云えば当人よりは却て家の者が心配しよう、心配して呉れてソレが何にも役に立たぬ、ダカラ私はそんな事を家内の者に云た事もなければ親友に告げた事もない。固よりこの身に罪はない、仮令粗われても恥かしい事ではないと云うことは分切て居ても、人に語て無益の事であるから、心配するのは自分一人である。私が暗殺を心配したのは毎度の事で、或は風声鶴唳にも驚きました。丁度今の狂犬を見たようなもので、おとなしい犬でも気味が悪いと云うような訳けで、ど

うも人を見ると気味がわるい。

床の下から逃げる積りソレに就ては色々面白い話がある。今この三田の屋敷の門を這入て右の方にある塾の家は、明治初年私の住居で、その普請をするとき、私は大工に命じて家の床を少し高くして、押入の処に揚板を造て置たと云うのは、若し例の奴等に踏込まれた時に、旨く逃げられ、ば宜いが、逃げられなければ揚板から床の下に這入て其処から逃出そうと云う私の秘計で、今でも彼処の家は爾うなつて居ましよう。

暗殺の歴史その大工に命ずる時に何故と云うことは云われない、又家内の者にも根ツから面白い話でないから何とも云うことが出来ぬ、詰り私独りの苦勞で、実に馬鹿氣た事です、が、夫れは差置き、私の見る処で、我開国以来世に行われた暗殺の歴史を申さんに、最初は唯新開国の人民が外国人を嫌うと云うまでの事で、深い意味はない。外国人は穢れた者だ、日本の地には足踏みもさせられぬと云うことが国民全体の氣風で、その中に武家は双刀を腰にして氣力もあるから、血氣の若武者は折々外国人を暗打にしたこともある。併しその若武者も日本人を憎む訳けはないから、私などが仮令い時の洋学書生であつても災に罹る筈はない。大阪修業中は勿論、江戸に来ても当分は誠に安心、何も心配したことはない。例えば開国の初に、横浜で露西亞人の斬られたことなどは、唯その事變に驚く

ばかりで自分の身には何とも思わざりしに、その後間もなく外人嫌いの精神は俄に進歩して殺^{ひところし}人の法が綿密になり、筋道^{すじみち}が分り、区域^{わか}が広くなり、之に加うるに政治上の意味をも調査して、万延元年、井伊大老の事変後は世上何となく殺気を催^{もよお}して、手塚律蔵^{てづかりつぞう}とうじようれいぞう東条礼蔵は洋学者なるが故にとて長州人に襲撃せられ、塙^{はなわじろう}二郎は国学者として不臣なりとて何者かに首を斬^きられ、江戸市中の唐物屋は外国品を売買して国の損害するとして苦しめらるゝと云うような風潮になつて来ました。是れが即ち尊王攘夷の始りで、幕府が王室に対する法は多年来何も相替ることはなけれども、京都の御趣意は攘夷一天張りであるのに、然るに幕府の攘夷論は兎角^{とかく}因循^{いんじゆん}姑息^{こそく}に流れて埒^{らち}が明かぬ、即ち京都の御趣意^{ごしゆい}に背くものである、尊王の大義を弁^{わきま}えぬものである、外国人に媚びるものである、と斯^こう云^いえば、その次には洋学者流を売国奴と云うのも無理はない。サア洋学者も怖くなつて来た。殊^{こと}に私などは同僚親友の手塚東条兩人まで侵されたと云うのであるから、怖がらずには居られない。

廻国巡礼を羨む又真実怖い事もある。凡^{およ}そ維新前、文久二、三年から維新後、明治六、七年の頃まで、十二、三年の間が最も物騒な世の中で、この間私は東京に居て夜分は決して外出せず、余儀^{よぎ}なく旅行するときは姓名を偽^{いつわ}り、荷物にも福澤と記さず、コソ／＼して往

来するその有様は、欠落者が人目を忍び、泥坊が逃げて廻るような風で、誠に面白くない。そのとき途中で廻国巡礼に出逢い、その笠を見れば何の国何都何村の何某と明白に書てある。「扱々羨ましい事だ、乃公もア、云う身分になつて見たいと、自分の身を思い又世の有様を考えて、妙な心持になつて、ソレからその巡礼に銭など与えて、貴様達は夫婦か、故郷に子はないか、親はあるか、など色々話し、問答して別れたことは今に覚えて居ます。

長州室津の心配是れも私が姓名を隠して豊前中津から江戸に帰て来た時の事です。元治元年、私が中津に行て、小幡篤次郎兄弟を始め同藩子弟七、八名に洋学修業を勧めて共に出府するときに、中津から先ず船に乗て出帆すると、二、三日天氣が悪くて、風次第で何処の港に入るか知れない、スルと南無三宝、攘夷最中の長州室津と云う港に船が着た。そのとき私は同行少年の名を借りて三輪光五郎（今日は府下目黒のビール会社に居る）と名乗て居たが、一寸上陸して髪結床に行た所が、床の親仁が喋々述べて居る、「幕府を打潰す——毛唐人を追巻くると云い、女子供の唄の文句は忘れたが、「やがて長門は江戸になるとか何とか云うことを面白そうに唄うて居る、そのあたりを見れば兵隊が色々な服装をして鉄砲を担いで威張て居るから、若しも福澤と云う正体が現われては、

たつた一発と、安い気はしないが、爰が大事と思ひ態と平氣な顔をして、唯順風を祈て船の出られるのを待て居るその間の怖さと云うものは、何の事はない、蹙者が病犬に囲まれたようなものでした。

箱根の心配ソレから船は大阪に着て上陸、東海道をして箱根に掛り、峠の宿の破不屋と云う宿屋に泊ると、奥の座敷に戸田何某と云う人が江戸の方から来て先きに泊て居る。この人は当時、山陵奉行とか云う京都の御用を勤めて居て、供の者も大勢附て居る様子、問わずと知れた攘夷の一類と推察して氣味が悪い、終夜ろくに寝もせず、夜の明ける前に早々宿屋を駈出してコソ／＼逃げたことがある。

中村栗園先生の門を素通りその時の道中であつたか、江州水口、中村栗園先生の門前を素通りしましたが、是れは甚だ氣に濟まぬ。栗園の事は前にも申す通り私の家と浅からぬ縁のある人で、前年、私が始めて江戸に出るとき水口を通行して其処へ尋ねた所が、先生は非常に喜んで、過ぎし昔の事共を私に話して聞かせ、「お前の御親父の大阪で御不幸の時は、私は直ぐ大阪に行て、ソレからお前達が船に乗て中津に歸るその時には、私がお前を抱いて安治川口の船まで行て別れた。そのときお前は年弱の三つで、何も知らなからうなど、云う話で、私も実にほんとうの親に逢たような心持がして、今晚は是非

泊れと云て、中村の家に一泊しました。斯くまでの間柄であるから、今度も是非とも訪問しなければならぬ。所がその前に人の噂を聞けば、水口の中村先生は近來専ら孫子の講釈をして、玄関には具足などが飾であると云う、問うに及ばず立派な攘夷家である、人情としては是非とも立寄て訪問せねばならぬが、ドウも寄ることが出来ぬ。栗園先生は頼んでも私を害する人ではないが、血氣の門弟子が沢山居るから、立寄れば逆も助からぬと思つて、不本意ながらその門前を素通りしました。その後先生には面会の機会がなくて、遂に故人になられました。今日に至るまでも甚だ心残りで不愉快に思います、

増田宗太郎に窺わる以上は維新前の事で、直に私の身に害を及ぼしたでもなし、唯無暗に私が怖く思たばかり、所謂世間の風声鶴唳に臆病心を起したのかも知れないが、維新後になつても忌な風聞は絶えず行われて、何分にも不安心のみか、歳月を経て後に聞けば、實際恐るべき事も毎度のことでした。頃は明治三年、私が豊前中津へ老母の迎いに参つて、母と姪と兩人を守護して東京に歸たことがあります。その時は中津滞留も左まで怖いとも思わず、先ず安心して居ましたが、数年の後に至て實際の話を聞けば、恐ろしいとも何とも、実に命拾いをしたような事です。私の再従弟に増田宗太郎と云う男があります。この男は後に九州西南の役に賊軍に投じて城山で死に就た一種の人物で、世間にも名を知

られて居ますが、私が中津に行たときはマダ年も若く、私より十三、四歳も下ですから、私は之を子供のように思い、且つ住居の家も近処で朝夕往来して交際は前年の通り、宗さんくんと云て親しくして居ましたが、元来この宗太郎の母は神官の家の妹で、その神官の倅即ち宗太郎の従兄に水戸学風の学者があつて、宗太郎はその従兄を先生にして勉強したから中々エライ、その上に増田の家は年来堅固なる家風で、封建の武家としては一点も愧る所はない。宗太郎の実父は私の母の従兄ですから、私もその風采を知て居ますが、ソレハソレハ立派な侍と申して宜しい。この父母に養育せられた宗太郎が水戸国学を勉強したとあれば、所謂尊攘家に違いはあるまい。ソコで私は今度中津に歸ても宗太郎をば乳臭の小児と思ひ、相替らず宗さんくんで待遇して居た処が、何ぞ料らん、この宗さんが胸に一物、恐ろしい事をたくらんで居て、そのニコく優しい顔をして私方に出入したのは全く探偵の爲めであつたと云う。扨探偵も届いたか、いよく今夜は福澤を片付けると云うので、忍びくんに動静を窺ひに来た、田舎の事で外廻りの囲いもなければ戸締りもない、所が丁度その夜は私の処に客があつて、その客は服部五郎兵衛と云う私の先進先生、至極磊落な人で、主客相對して酒を飲みながら談論は尽きぬ。その間宗太郎は外に立て居たが、十二時になつても寝そうにもしない、一時になつても寝そうに

もしない、何時までも二人差向いで飲んで話をして居るので、余儀なくお罷めになったと云う。是れは私が大酒夜更しの功名ではない、僥倖である。

一夜の危険ソレから家の始末も大抵出来て、いよく中津の廻米船に乗て神戸まで行き、神戸から東京までの間は外国の郵船に乗る積りで、サア乗船と云う所が、中津の海は浅くて都合が悪い。中津の西一里ばかりの処に鵜ノ島と云う港があつて、其処に船が掛つて居ると云うから、私はそのとき大病後ではあるし、老人、子供の連れであるから、前日から鵜ノ島に行て一泊して翌朝ゆるりと乗船する趣向にして、その晩鵜ノ島の船宿のような家に泊りましたが、知らぬが仏とは申しながら、後に聞けばこの夜が私の万死一生、恐ろしい時であつたと云うは、その船宿の若い主人が例の有志者の仲間であるとは恐ろしい、私の一行は老母と姪とその外に近親今泉の後室と小児（小児は秀太郎六歳）役に立ちそうな男は私一人、是れも病後のヒヨロ／＼と云うその人数を留めて置いて、宿の奴が中津の同志者に使を走らして、「今夜は上都合云々と内通したから堪らない。ソコデ以て中津の有志者即ち暗殺者は、金谷と云う処に集会を催して、今夜いよく鵜ノ島に押掛けて福澤を殺すことに議決した、その理由は、福澤が近來奥平の若殿様を誘引して亜米利加に遣うなんと云う大反れた計画をして居るのは怪しからぬ、不臣な奴だと云う罪状

であるから、満座同音、国賊の誅罰に異論はない。

福澤の運命はいよく切迫した、老人子供の寝て居る処に血氣の壮士が暴れ込んで連（とて）も助かる道はない、所が爰（こゝ）に不思議とや云（い）わん、天の恵（めぐみ）とや云（い）わん、壮士連の中に争論を生じたと云うのは、如何（いか）にも今夜は好機會で、行（ゆ）きさえすれば必ず上首尾（きまつ）と極（きまつ）て居るから、功名手柄を争うは武士の習いで、仲間中の両（りやう）三人が、「乃公（おれ）が魁（さきがけ）すると云えば、又一方の者は、「爾（そ）う甘くは行かん、乃公（おれ）の腕前で遣（やっ）て見せると言出して、負けず劣らず、とう／＼仲間喧嘩が始まつて、深更に及ぶまで如何（どう）しても決しない、余り喧嘩が騒々しく、大きな声が近（きんじよ）処（こ）まで聞えると、その隣家に中西（なかにし）与太夫（よだいふ）と云う人の住居がある、この人は私などより余程年を取（とつ）て居る、その人が何の事か知らんと行（いっ）て見た所が、斯（こ）う／＼云（い）う訳（わ）けだと云う。中西（なかにし）は流石（さすが）に老成の士族だけあつて、「人を殺すと云うのは宜（よろ）しくない事だ、思止（おも）まるが宜（い）いと云うと、壮士等は中々聞入れず、「イヤ思（おも）い止（と）まらぬと威張（いば）る、ヤレ止（と）まれ、イヤ止（と）まらぬと、今度は老人を相手に大議論を始めて、彼（か）れ此（こ）れと悶（もん）着（ちやく）して居る間に夜（よ）が明（あ）けて仕舞（しま）い、私は何にも知らずにその朝船（あさぶね）に乗（の）つて海上無事神戸に着（つ）きました。老母の大坂見物も叶（かな）わず扱（さ）て神戸（こうべ）に着（つ）いた処で、母は天保七年、大阪（おさか）を去（さ）つてから三十何年になる、誠に久し振りの事であるから、今度こそ大阪、京都（きょうと）方（ほう）々（ばう）を思（おも）うさま見物（けんぶつ）させて悦（よろこ）ば

せようと、中津出帆なかつ しゅつぱんの時から楽しんで居た処が、神戸に上陸して旅宿やどやに着て見ると、東京の小幡篤次郎おばたとくじろうから手紙が来てあるその手紙に、昨今京阪の間甚だ穩かならず、少々聞込みし事もあれば、神戸に着船したらば成るたけ人に知られぬように注意して、早々郵船にて帰京せよとある。ヤレ／＼又しても面白くない報だ、左ればとてこんな忌な事を老母の耳に入れるでもなしと思ひ、何かつまらぬ口実こうじつを作て、折角楽しみにした上方見物も罷めにしして、空しく東京に歸て来ました。

警戒却て無益なり前の鵜ノ島うしまの話に引替えて、誠に馬鹿々々しい事もあります。明治五年かと思う。私が中津なかつの学校を視察に行き、その時旧藩主に勧めて一家挙つて東京に引越ひきこし、私が供をして参ると云うことになった。処で藩主が藩地を去るは固より士族の悦ぶことではない。私も能くその情実は知て居るけれども、昔の大名風で藩地に居れば奥平家の維持が出来ない、思切て断行せよと云うので、疾雷耳しつらいを掩おほうに暇あらず、僅か六、七日間の支度で、御隠居様も御姫様も中津の浜から船に乗て馬関ばかんに行き、馬関で蒸氣船に乗替えて神戸と、都ての用意調ととのい、いよく中津の船に乗て夕刻沖の方に掛けた処が生憎風がない、夜中水尾木の処にボチャ／＼して少しも前に進まない。ソコで私は考えた。「コリヤ大変だ、爰こゝにグ／＼して居ると例の若武者が屹きつと遣て来るに違ひない、来ればその

目指す敵は自分一人だ、幸い夜の明けぬ中に船を上て陸行するに若くはなしと決断して、
極暑の時であつたが、払暁マダ暗い中に中津の城下に引返して、その足で小倉まで
駆けて行きました。所が大きに御苦労、後に聞けばこの時には藩士も至極穩かで何の議論
もなかつたと云う。此方が邪推を運らして用心する時は何でもなく、ポカンとして居る時
は一番危い、実に困たものです。

疑心暗鬼互に走る時は違うが維新前、文久三、四年の頃、江戸深川六軒堀に藤沢志摩守
と云う旗本がある。是れは時の陸軍の将官を勤め、極の西洋家で、或日その人の家に集
会を催し、客は小出播磨守、成島柳北を始め、その外皆むかしの大家と唱うる蘭学
医者、私とも合して七、八名でした。その時の一体の事情を申せば、前に申した通り、私
は十二、三年間、夜外出しないと云う時分で、最も自から警めて、内々刀にも心を用
い、能く研がせて斬れるようにして居ます。敢て之を頼みにするではなけれども、集会の
話が面白く、ツイ／＼怖い事を忘れて思わず夜を更かして、十二時にもなつた所で、座中
みな気が付て、サア帰りが怖い。疵持つ身と云う訳けではないが、いずれも洋学臭い連中
だから皆な怖がつて、「大分晩うなつたが如何だろうと云うと、主人が氣を利かして屋根
舟を用意し、七、八人の客を乗せて、六軒堀の川岸から市中の川、即ち堀割を通り、行

くく成島は柳橋から上り、それから近いものくと段々に上げて、仕舞に戸塚と云う老医と私と二人になり、新橋の川岸に着て、戸塚は麻布に帰り私は新銭座に帰らねばならぬ。新橋から新銭座まで凡そ十丁もある。時刻はハヤ一時過ぎ、然かもその夜は寒い晩で、冬の月が誠に能く照して何となく物凄。新橋の川岸へ上って大通りを通り、自から新銭座の方へ行くのだから、此方側即ち大通り東側の方を通して四辺を見れば人は唯の一人も居ない。その頃は浪人者が徘徊して、其処にも此処にも毎夜のように辻斬とて容易に人を斬ることがあつて、物騒とも何とも云うに云われぬ、夫れから袴の股立を取て進退に都合の好いように趣向して、颯々と歩いて行くと丁度源助町の央あたりと思う、向から一人やつて来るその男は大層大きく見えた。実は如何だか知らぬが、大男に見えた。「ソリや来た、どうもこれは逃げた所がおつ付ない。今ならば巡査が居るとか人の家に駆込むとか云うこともあるが、如何して騒々しい時だから不意に人の家に入られるものでない、却て戸を閉て仕舞て、出て加勢しようなんと云うものゝないのは分り切てる。「コリヤ困た、今から引返すと却て引身になつて追駆けられて後から遣られる、寧そ大胆に此方から進むに若かず、進むからには臆病な風を見せると付上るから、衝当るように遣ろうと決心して、今まで私は往來の左の方を通して居たのを、斯う斜に道の

真中へ出掛けると、彼方の奴も斜^{ななめ}に出て来た。コリヤ大変だと思^{おも}たが、最^もう寸歩も後に引かれぬ。いよゝとなれば兼^{かね}て少し居合の心得もあるから、如何^{どう}して呉^くれようか、これは一ツ下から刎^はねて遣^やりましようと言^{かんがえ}う考で、一生懸命、イザと云^いえば真^{ほん}実^{とう}に遣^やる所存で行くと、先方もノソノソ遣^やつて来る。私は実に人を斬^{きる}と云うことは大嫌^{きら}い、見るのも嫌いだ、けれども逃げれば斬られる、仕方がない、愈^{いよいよ}先^{むこう}方が抜^{ぬき}掛^かれば背に腹は換えられぬ、此方も抜^{ぬい}て先を取らねばならん、その頃は裁判もなければ警察もない、人を斬^{きつ}たからと云^いて咎^{とが}められもせぬ、只^{ただ}その場を逃げさえすれば宜^{よろ}しいと覺悟して、段々行くと一^{ひと}歩^{あし}々々近くなつて、到^{とう}頭^{とう}すれ違^{ちが}いになつた、所^{あつち}が先^{こつち}方の奴も抜^ぬかん、此^{こつち}方は勿^{もちろん}論^{ろん}抜^ぬかん、所^{すれちが}で擦^す違^{ちが}たから、それを拍子に私はドン／＼逃^にげた。どの位足^{くら}が早^{はや}かつたか覺えはない、五、六間^{けん}先^いへ行^いて振^{ふり}返^{かえ}て見ると、その男もドン／＼逃^にげて行く。如何^{どう}も何^{なん}とも云われぬ、実に怖^{おそ}かつたが、双方逃^にげた跡^{あと}で、先^まずホツと呼吸^{いき}をついて安心^{あんしん}して可^お笑^かしかつた。双方共に臆^{おそ}病^{びょう}者と臆^{おそ}病^{びょう}者との出逢^いひ、拵^{こしら}えた芝居^{しやぎ}のようで、先^ま方の奴の心中も推察^たが出来る。コンな可^お笑^かしい芝居はない。初^はめから此^{こつち}方は斬^きる氣はない、唯^{ただ}逃^にげては不^ま味^ずい、屹^{きつ}と殺^やられると思^{おも}たから進^{すす}んだ所^{ところ}が、先^ま方も中々心得^{こころえ}て居る、内^{うち}心^こ怖^こわ／＼表^{ひら}面^め颯^{さつ}々^さと出^でて来^きて、丁^{ちやうど}度^ど抜^ぬきさえすれば切^{きつ}き先^{さき}の届^きく位^{くらい}すれ／＼になつた處^{ところ}で、身^みを翻^{ひるがえ}して逃^にげ出^だし

たのは誠にエライ。こんな処で殺されるのは真実の犬死だから、此方こつちも怖かったが、彼方あつちもさぞ／＼怖かつたろうと思う。今その人は何処どこに居るやら、三十何年前若い男だから、まだ生きて居られる年だが、生きて居るなら逢うて見たい。その時の怖さ加減たがいを互に話したら面白い事でしょう。

雑記

暗殺の患は政治家の方に廻およわる凡そ私共の暗殺を恐れたのは、前に申す通り文久二、三年から明治六、七年頃までのことでしたが、世間の風潮は妙なもので、新政府の組織が次第に整頓したがつして、随したがつて執政者の権力も重きを成して、自おのずから威福の行われるようになってと同時に、天下の耳目じもくは政府の一方に集り、私の不平も公衆の苦情も何も蚊かもその原因を政府の当局者に歸して、之これに加くわうるに羨望せんぼう嫉妬しつとの念を以てして、今度は政府の役人達が狙ねらわれるようになって来て、洋学者の方は大おおに樂になりました。喰違くいちがいに岩倉公襲撃の頃からソロ／＼始まって、明治十一年、大久保内務卿の暗殺以来、毎度の兇きよう変へんは皆政治上の意味を含んで居るから、云いわば学者の方は御留主おるすになって、政治家の為ためには誠に氣の毒で

万々推察しますが、私共は人に羨うらやまれる事がないから、先まず以て今日は安心と 생각합니다。劍を棄て、劍を揮う私が芝しばの源助町げんすけで人を斬きろうと決心した、居合いあいも少し心得て居るなんて云いえば、何か武人めいて刀劍でも大切にするように見えるけれども、その実は全く反対で、爾そうではないどころか、日本武士の大小を丸で罷やめて仕舞しまいたいとは私の宿願でした。源助町げんすけのときには成程なるほど双刀を挟さして、刀は金剛兵衛盛高こんごうびやうえもりたか、脇差は備前祐定びぜんすけさだ、先まず相應に切れそうな物であつたが、その後、間もなく盛高も祐定も家にある刀劍類はみんな売うつて仕舞しまつて、短かい脇差のような物を刀にして御印おしるしに挟さして居たが、是これに就つても話がある。或日あるひ、本郷に居る親友高畑五郎たかばたけごろうを訪問していろ／＼話をして居る中に、不図ふと氣が付つて見ると恐ろしい長い刀が床の間に一本飾かざつてあるから、私が高畑むいに向て、あれは居合刀のようだが何にするのかと問いえば、主人の云うに、近來世の中に劍術さかんが盛になつて刀劍が行われる、十二洋学者だからと云いつて負けることはない、僕も一本求めたのだとリキンで居るから、私は之これを打消し、「ソレは詰つまらない、君は之これを以て威おどすつもりだろうが、長い刀を家に置おいて今の浪人者を威おどそうと云いつても、威嚇おどかしの道具になりはしない。詰つまらぬ話だ、止よしなさい。僕は家にある刀劍はみんな売うつて仕舞しまつて、今挟さして居るこの大小二本きりしかない。然しかもその大の方は長い脇差を刀にしたので、小の方は鯉節かつおぶし小刀こがたなを鞘さやに藏おさめて

お飾かざりに挟さして居るのだ。ソレに君がこんな大造たいそうな長い刀を弄いじくると云うのは、君に不似合きあだ、止よすが宜よい、御願おねがいだから止よして呉くれ。論より証拠、君にはこの刀は抜けないに極きまつて居る、それとも抜くことが出来るか。「ソレは抜くことは出来ない、逆とてもこんな長い物を。「ソリヤ見たことか、抜けもせぬものを飾かざつて置く」と云う馬鹿者があるか。僕は一切刀を罷やめて居るが、憚はばかりながら抜くことは知しつて居るぞ、抜ぬいて見せようと云て、四尺ばかりもある重い刀を取て庭に下りて、兼かねて少し覚え居る居合の術で二、三本抜て見せて、「サア見給たまえ、この通りだ。どうだ、君には抜けなからう。その抜ける者は疾とくに刀を売て仕舞しまつたのに、抜けない者が飾て置くとは間違まちがいではないか。是これは独り吾々われわれ洋学者ばかりでない、日本中の刀を皆みんななうつつやつて仕舞しまうと云うことにしなければならぬ、だからこんなものは颯々さつさと片付けて仕舞しまうが宜よろしい。君も今から魔刀と決心して、いよく飾かざりに挟ささなければならんと云うなら、小刀でも何でも宜よろしいと云て、大きに論じた事がある。扇子から懐剣が出る是これも大抵たいてい同時代と思う。幕府の翻譯局ほんやくきょくに雇よめれて其処そこに出て居た時、或人あるひとが私に話すに、「近來なかく面白おもしろい扇子せんすが流行はやる。鉄扇てつせんと云うものは昔から行われて居たが、今はソレが大おおに進歩して、唯ただの扇子と見せて置おいて、その実はヒョイと抜くと懐剣が出て来る、なか／＼面白い事を発明したと噂うわさして居る。ソコで私が大にま

ぜかえして遣^{やつ}た。「扇子の中から懷劍の出るのが何が賞^ほめた話だ。それよりも懷劍として置いて、ヒョイト抜くと中から扇子の出るのが本当だ、倒^{さか}まにしる、爾^そうしたら賞^やめて遣^やる、そんな馬鹿な殺伐な事をする奴があるものか、面白くもないと云^いて、打^{うち}毀^{こわ}した事を覺えて居ます。

幕府が倒れると私はスグ帰農して、夫^それ切^ぎり双刀を廃して丸腰になると、塾の中でも段々廃刀者が出来る。所がこの廃刀と云う事は中々容易な事でない。実を申せば持兇器を罷^やめるのだから、世間の人は悦^{よろこ}びそうなものだが、決して爾^そうでない。私が始めて腰の物な^しで汐^し留^{おどめ}の奥平屋敷^{いっ}に行^いた所が、同藩士は大に驚き、丸腰で御屋敷^{おぼたじんぎぶろう}に出入^{しゅつにゅう}するとは殿様^{とが}に不敬ではないかなど、議論する者もありました。又或^あるとき塾の^{おぼたじんぎぶろう}小幡仁三郎と誰か二、三人で散歩中、その廃刀を何処^{どこ}かの壮士に見咎^{とが}められて怖い思いをした事もある、けれど私は断然廃刀と決心して、少しも世の中に頓^{とん}着^{じゃく}せず、「文明開国の世の中に難^{あり}有^{がた}そうに兇器^{きようき}を腰にして居る奴は馬鹿だ、その刀の長いほど大馬鹿であるから、武家の刀^{これ}は之^{これ}を名けて馬鹿メートルと云^いうが好^{おのず}かうなど、放言して居れば、塾中にも自^{おのず}から同志がある。

和田与四郎壮士を挑む明治四年、新銭座^{しんせんざ}から今の三田^{みた}に移転した当分の事と思う、或日^{あるひ}

和田義郎（今は故人になりました）と云う人が、思切た戯をして壮士を驚かしたことがある。この人は後に慶應義塾幼稚舎の舎長として性質極めて温和、大勢の幼稚生を実子のよう

に優しく取扱い、生徒も亦舎長夫婦を實の父母のように思うと云う程の人物であるが、

本来は和歌山藩の士族で、少年の時から武芸に志して体格も屈強、殊に柔術は最も得意で、所謂怖いものなしと云う武士であるが、一夕例の丸腰で二、三人連れ、芝の松本町を

散歩して行くと、向うから大勢の壮士が長い大小を横たえて大道狭しと遣て来る。スルと

和田が小便をしながら往来の真中を歩いて行く。サアこの小便を避けて左右に道を開くか、

何か咎め立てして喰て掛るか、爰が喧嘩の間一髪、いよ／＼掛て来れば五人でも十人でも

投げ出して殺して仕舞うと云う意気込が、先方の若武者共に分たか、何にも云わずに避けて

通たと云う。大道で小便とは今から考えれば随分乱暴であるが、乱世の時代には何で

もない、こんな乱暴が却て塾の独立を保つ為めになりました。

百姓に乗馬を強ゆ相手は壮士ばかりでない、唯の百姓町人に対しても色々試みた事がある。

その頃私が子供を連れて江ノ島鎌倉に遊び、七里ヶ浜を通るとき、向うから馬に乗て来る

百姓があつて、私共を見るや否や馬から飛下りたから、私が咎めて、「是れ、貴様は何だ

と云て、馬の口を押えて止めると、百姓が怖わそうな顔をして頻りに詫るから、私が、

「馬鹿云え、爾うじやない、この馬は貴様の馬だろう」「へい」「自分の馬に自分が乗たら何だ、馬鹿な事するな、乗て行けと云ても中々乗らない。「乗らなけりや打撲るぞ、早く乗て行け、貴様は爾う云う奴だからいけない。今政府の法律では百姓町人、乗馬勝手次第、誰が馬に乗て誰に逢うても構わぬ、早く乗て行けと云て、無理無体に乗せて遣りましたが、その時私の心の中で独り思うに、古来の習慣は恐ろしいものだ、この百姓等が教育のない計りで物が分らずに法律のあることも知らない。下々の人民がこんなでは仕方がないと余計な事を案じた事がある。

路傍の人の硬軟を試る夫れから又斯う云う面白い事がありました。明治四年の頃でした。撰州三田藩の九鬼と云う大名は兼て懇意の間柄で、一度は三田に遊びに来いと云う話もあり、私もその節病後の身で有馬の温泉にも行て見たし、かた／＼先ず大阪まで出掛けて、大阪から三田まで凡そ十五里、途中名塩に一泊する積りにして、ソコで大阪に行けば何時でも緒方の家を訪問しないことはない、故先生は居ないでも未亡夫人が私を子のようにして愛して呉れるから、大阪に着くと取敢えず緒方に行て、三田に遊び有馬に行くことなども話しました所が、私は病後でどうも歩けそうにない、駕籠を貸して遣ろうと云われるので、その駕籠をつらせて大阪を出立した。頃は旧暦の三、四月、誠に好い時候で、

私はパツチを穿て羽織か何か着て蝙蝠傘かわほりを持て、駕籠のりに乗て行くつもりであつたが、少し歩いて見るとなか／＼歩ける。「コリヤ駕籠は要らぬ、駕籠屋、先へ行け、乃公おれは一人で行くからと云て、たつた一人で供もなければ連れもない、話相手がなくて面白くない所から、何でも人に逢うて言葉を交えて見たいと思ひ、往来の向うから来る百姓のような男に向て道みちを聞たら、そのとき私の素振りが何か横風おうふうで、むかしの土族の正体が現われて言葉も荒らかつたと見える、するとその百姓が誠に丁寧に道を数えて呉れてお辞儀じぎをして行く、こりや面白いと思ひ、自分の身を見れば持て居るものは蝙蝠傘一本きりで何にもない、も一度遣て見ようと思つて、その次ぎに来る奴に向て怒鳴り付け、「コリや待て、向うに見える村は何と申す村だ、シテ村の家数は凡そ何軒ある、あの瓦屋の大きな家は百姓か町人か、主人の名は何と申すなど、下らぬ事をたゝみ掛けて土族丸出しの口調で尋ねると、その奴は道の側に小さくなつて恐れながら御答おこたえ申上げますと云うような様子だ。此方こつちはます／＼面白くなつて、今度は逆に遣て見ようと思付き、又向うから来る奴に向て、「モシモシ憚りながら一寸ものをお尋ね申しますと云うような口調に出掛けて、相替あいかわらず下らぬ問答を始め、私は大阪生れで又大阪にも久しく寄留して居たから、その時には大抵たいてい大阪の言葉も知て居たから、都て奴の調子に合せてゴテ／＼話をする、奴は私を大

阪の町人が掛取にでも行く者と思うたか、中々横風でろくに会釈もせずに颯々と別れて行く、底で今度は又その次ぎの奴に横風をきめ込み、又その次ぎには丁寧に出掛け、一切先方の面色に取捨なく誰でも唯向うから来る人間一匹ずつ一つ置きと極めて遣て見た所が、凡そ三里ばかり歩く間、思う通りに成たが、ソコ私の心中は甚だ面白くない。如何にも是れは仕様のない奴等だ、誰も彼も小さくなるなら小さくなり、横風ならば横風で可し、斯う何うも先方の人を見て自分の身を伸縮するような事では仕様がな、推して知るべし地方小役人等の威張るのも無理はない、世間に压制政府と云う説があるが、是れは政府の压制ではない人民の方から压制を招くのだ、之を何うして呉れようか、捨てようと云て固より見捨てられる者でない、左ればとて之を導いて俄に教えようもない、如何に百千年来の余弊とは云いながら、無教育の土百姓が唯無闇に人に託るばかりなら宜しいが、先き次第で驕傲になつたり柔和になつたり、丸でゴムの人形見るようだ、如何にも頼母しくないと大に落胆したことがあるが、変れば変る世の中で、マアこの節はそのゴム人形も立派な国民と成て学問もすれば商工業も働き、兵士にすれば一命を軽んじて国のために水火にも飛込む。福澤が蝙蝠傘一本で如何に士族の仮色を使うても、之に恐るゝ者は全国一人もあるまい。是れぞ文明開化の賜でしよう。

独立敢て新事例を開く私の考は塾に少年を集めて原書を読ませる計りが目的ではない。如何様にもしてこの鎖国の日本を開て西洋流の文明に導き、富国強兵以て世界中に後れを取らぬようにしたい。左りとて唯これを口に言うばかりでなく、近く自分の身より始めて、仮初めにも言行齟齬しては済まぬ事だと、先ず一身の私を慎しみ、一家の生活法を謀り、他人の世話にならぬようにと心掛けて、扨一方に世の中を見て文明改進の爲めに施して見たいと思う事があれば、世論に頓着せず思切て試みました。例えば前にも申した通り、学生から授業料の金を取立てる事なり、武士の魂と云う双刀を棄て、丸腰になる事なり、演説の新法を人に説て之を實地に施す事なり、又は著訳書に古来の文章法を破て平易なる通俗文を用うる事なり、凡そ是等は當時の古風家に嫌われる事であるが、幸に私の著訳は世間の人氣に役じて渴する者に水を与え、大旱に夕立のしたようなもので、その売れたことは實に驚く程の数でした。時節の悪いときに、ドンな文章家ドンな学者が何を著述したって何を翻訳したって、私の出版書のように売れよう訳けはない。畢竟私の才力がエライと云うよりも、時節柄がエラかったのである。又その時代の学者達が筆不調法であつたか、馬鹿に青雲熱に浮かされて身の程を知らず時勢を見ることを知らなかつたか、マアそのくらいの事だと思われる。兎にも角にも著訳書が私の身を立て家を成す唯一の基

本になつて、ソレで私塾ひらいを開ても、生徒から僅わずばかりの授業料を掻集かきめて私の身に着けるようなケチな事をせずに、全く教師等らの所得にすることが出来たその上に、折々おりおり私の財ざい囊いのうから金を出して塾用を弁ずることも出来ました。

所で私の性質は全体放任主義と云いおうか、又は小慾にして大無慾とでも云おうか、塾の事に就つて朝夕心を用いて一生懸命、些細ささいの事まで種々無量に心配しながら、又一方ではこの塾にブラサガツて居る身ではない、是非ぜひとも慶應義塾を永久に遺のこして置かなければならぬと云いう義務もなければ名誉心もないと、初めから安心あんしん決定けつじようして居るから、随したがて世の中に怖いものがない。同志の後進生と相談して思う通りに事を行えば、塾中おのず自から独立の氣風を生じて世間の反そりに合あわぬことも多いのと、又一つには私が政治社会に出ることを好まずに在野の身でありながら、口もあれば筆もあるから颯々さつさつと言論して、時としてはその言論が政府の癢しやくに障さることもあろう。実を云いえば私は政府に対して不平はない、役人達の以前が、無鉄砲な攘夷家であらうとも、人を困こらせた奴であらうとも、一切いっさい既往を云いわず、唯ただ今日の文明主義に変化して開国一偏に国事を經營して呉くれ、ば遺憾なしと思えども、何かの氣まぐれに官民とか朝野ちやうやとか忌いやに區別を立て、私塾を疏外し邪魔にして、甚はなはだしきは之これを妨げんなんとケチな事をされたのには少々困りました。今これを云えば話

も長し言葉も穢きたなくなるから抜きにして、近年帝國議会の開設以来は官かん辺べんの風も大に改まりて、余り酷ひどい事はない。何れ遠からぬ中に双方打解けるように成るでしょう。

又私は知る人のために尽力したことがあります。是れは唯私の物数寄ものずきばかり、決して政治上の意味を含んで居るのも何でもない。真実一身の道楽と云いおうか、慈悲と云いおうか、癩かん癩しやくと云いおうか、マアそんな所から大に働いたことがあります。仙台藩の留守居役を

勤めて居た大童信太夫と云いう人があつて、旧幕府時代から私はその人と極ごく、懇意こんいにして居ました、と云いてその人が蘭学者でもなければ英学者でもない、けれども兎とに角かくに西洋文明の風を好み洋学書生を愛して楽しみにして居る所は、氣品の高い名士と申して宜よろしい。

当事諸藩の留守居役でも勤めて居れば、芸者を上げて騒ぐとか、茶屋に集まるとか、相撲を鼯ひいき肩かたにするとか云うのが江戸普通の風俗で、大童も大藩の留守居だから随分金廻ずいぶんわりも宜よかつたろうと思われるに、絶えてそんな馬鹿な遊びをせず、唯何ただでも書生を養やしなつて遣はなつと云うことが面白くて、書生の世話ばかりして、凡そ当時仙台の書生で大童の家の飯を喰くわなない者はなからう。今の富田鉄之助とみたてつのすけを始め一人として世話にならない者はない。所が幕末の時勢段々切迫して、王政維新の際に仙台は佐幕論に加担かたんして忽ち失敗して、その謀主は但木土佐と云いう家老であると定まつて、その人は腹を切きつて仕舞しまつたその後で、但木土

佐が謀主だと云うけれども、その実は謀主の謀主がある、ソレは誰だと云うに、大童信太おわらしんだ夫、松倉良助まつくらしょうすけの兩人だと斯う云う訳わけで、維新後その兩人は仙台かえつに歸て居た所が、サアその仙台の同藩中の者から妙な事を饒舌しゃべり出した、既に政府は朝敵の処分をして事ことず済みになつては居るが、内からそんなことを云出いして、マダ罪人が幾人もあると訴えたからには、マサか捨てゝも置かれぬと云う所から、久我大納言こがだいなごんを勅使として下向を命じた、と云う政府の趣意しゆいは甚だ旨い、この時に政府は既に処分済の後だから、成る丈なけ平穩を主として事を好まぬ。ソコで久我と仙台家とは親類であるから、久我が行けば定めて大目に見るであらう、左すれば怪我人も少ないだらうと云う為ために、態わざと久我を挾えらんだと云うことは、その時私も窃ひそかに聞きました。政府の略は中々行届いて居る、所が仙台の藩士が有るうことか有るまいことか、御上使の御下向と聞て景氣ききを催もよし、生首を七ツとやら持て出たので久我も驚いたと云う、そんな事まで仙台藩士が遣やつた。その時に松倉も大童も、居れば危ないから脊戸口せどぐちから駈出かけだして、東京まで逃げて来た、と云うのは兩人ともモウちゃんと首を斬きられる中に数えられて居たその次第を、誰か告げて呉くれる者があつて、その儘家ままを飛出して東京へ来て潜ひそんで居るその中にも、仙台藩の人が在京の同藩人に対して様々残酷な事をして、既に熱海貞爾あつみていじと云う男は或夜今其処そこで同藩士に追駈けられたと申して、私方

に飛込んで助かった事さえありましたが、この物騒な危ない中にも、大童と松倉はど
うやら斯うやら久しく免かれて居て、私は素より懇意だからその居処も知て居れば私の
家にも来る。政府の人から見られるのは苦しくない、政府はそんな野暮はしない、そんな
者を見ようもしないが、何分にも同藩の者が遣るので誠に危ない。引捕えて、是れが罪
人でございと云えば、如何に優しい大目な政府でも唯見ては居られない。実に困た身の有
様だと、毎度兩人と話す中に、私は兩人の為に同情を表すると云うよりも、寧ろこの
仙台藩士の無情残酷と云うことに酷く腹が立ちました。弱武者の意気地のない癖に酷い事
をする奴だ、ドウかして呉れたいものだと思ふ考えた所で、夫れから私が大童に面会して、
ドウか青天白日の身になる工夫がありそうなものだ、私が一つ試みて見よう、何でも是れ
が一番、藩主を引捕えて談ずるが上策だろうと相談して、私は大きに御苦勞な訳だけ
ども、日比谷内にある仙台的屋敷に行て、藩主に懸りたいと触込んで、藩主に面会
した。ソコで私がこの藩主に向て大に談じられる由縁のあると云うのは、その藩主と云う
者は伊達家の分家宇和島藩から養子に來た人で、前年養子になると云うその時に、私が与
て大に力がある、と云うのは当時大童が江戸屋敷の留守居で世間の交際が広いと云うの
で、養子選択の事を一人で担任して居て、或時私に談じて、「お前さんの処（奥平

家）の殿様は宇和島から来て居る、その兄さんが国（宇和島）に居る、その人の強弱智愚如何いかにきいもちらを聞いて貰もらいたいと云うから、早速取調べて返事をして、先まず大童の胸に落ちて、今度は宇和島家の方に相談をして貰もらいたいと云うので、夫それから又私は麻布あざふりゆうど竜土の宇和島の屋敷いつに行て、家老の桜田大炊さくらだおおいと云う人に面会してその話をする、一も二もなく、本家の養子になろうと云うのだから唯難ただありがた有がいと即答、一切大童と私と二人で周旋して、夫それから表向きになつて貰もらつたその人が、その時の藩主になつて居るので、ソコで私あつちがその藩主あに遇うて、時に尊藩の大童、松倉まつくらの兩人が、この間仙台から逃げて参まいつたのは、彼方に居れば殺されるから此方こつちに飛出して来たのであるが、彼あの兩人は今でも見付け出せば藩主おに於て本當に殺す気があるのか、但し殺したくないのか、ソレを承うけりたい。「イヤ決して殺したいなど、云う意味はない。「然しからばモウ一步進めて、お前さんはソレを助けると云う工夫をして、ドウかして、命の繋つながるようにして遣やつては如何いかにで御座る。実はお前さんはお大童おおわらむかつおおいに向て大に報いなければならぬことがある。知るや知らずや、お前さんが仙台の御家おいえに養子に來たのは斯こう云う由來、是れこの次第であつたが、夫それを思つても殺すこととは出来まい。屹度御決答を伺きいたいと、顔がん色しよくを正しくして談じた処が、「決して殺す気はないが、是れこは大参事に任まかしてあるから、大参事さえ助けると云う気になれば、

私には勿論異論はないと云う。マダ若い小供でしたから何事も大参事に任かしてあつたのでしよう。「然らばお前さんは確かだな。「確かだ。「ソレならば宜しい、大参事に遇おうと云て、直ぐ側の長屋に居たから其処へ捻込んだ。サア今藩主に話をして来たがドウだ。藩主は大参事次第だと確かに申された。然らば則ち生殺はお前さんの手中にある、殺す気か、殺さぬ気か。仮しや殺す積りで捜し出そうと云ても決して出る氣遣いはない。私はちゃんと居処を知て居る、捜せるなら試みに捜して見るが宜い、捕縛すると云うなら私の力の有らん限り隠蔽して見せよう、出来るだけ摘発して見なさい、何時まで経ても無益だ。そんな事をして人を苦しめないでも宜いだろうと、裏表から色々話すと、大参事にも言葉がない。いよく助ける、助けるけれども薩州辺りから何とか口を添えて呉れると都合が宜いなんて又弱い事を云うから、宜しいと云い棄てゝ、夫れから私は薩州の屋敷に行て、斯うく云う次第柄だから助けて遣て呉れぬかと云うと、大藩とか強藩とか云うので口を出すのは実は迷惑な話だが、何も六かしい事はない、宮内省に弁事と云うものがあるから、その者に就て政府の内意を聞て上げるからと云て、薩摩の公用人が政府の内意を聞て、私の処に報知して呉れたには、兎も角も自訴させるが宜しい、自訴すれば八十日の禁錮ですつかり罪は滅びて仕舞うと云うことが分た。夫れから念の爲め私は又仙台の屋敷

に行て大参事に面会して、政府の方は自訴すれば八十日と極て居るが、之にお負けが付きはしないか、自訴と云えばこの屋敷に自訴するのであるが、この屋敷で本藩の私を以て八十日を八年にして遣うなんと云うお負けを遣ひはしないか、ソレを確かに約束しなければ玉は出されないと、念に念を入れて問答を重ね、最後には若し違約すれば復讐するとまで脅迫して、いよく大丈夫と安心して、ソレからその翌日兩人を連れて日比谷の屋敷に行た、所が屋敷の役所見たような処には罪人、大童、松倉の旧時の属官ばかりが列んで居るだろう、罪人の方が余程エライ、オイ貴様はドウして居るのだと云うような調子で、私は側から見て可笑しかった。夫れから宇田川町の仙台屋敷の長屋の二階に八十日居て、ソレで事が済んで、ソレから二人は晴天白日、外を歩くようになって、その後は今日に至るまでも旧の通りに交際して互に文通して居ます。生涯変らぬ事でしょう。只この事たるや仙台藩の無氣力残酷を憤ると同時に、藩中稀有の名士が不幸に陥りたるを氣の毒に感じたからのもので、随分彼方此方と歩き廻りましたが、口で云えば何でもないけれども、人力車のある時節ではなし、一切歩いて行かなければならぬから中々骨が折れました。夫れから榎本（当年の釜次郎、今の武揚）の話をしましょう。前に申す通りに古川節蔵は私の家から脱走したようなもので、後で聞て見れば榎本よりか先きに脱走し

たそうで、房州鋸山とか何処とかに居た佐幕党の人を長崎丸に乗せて、ソレを箱根山に上げて、ソレで箱根の騒動が起たので、あれは古川節蔵が遣たのだと申します。節蔵が脱走した後で以て、脱走艦は追々函館に行て、夫れから古川の長崎丸と一処に又此方へ侵しに來た、と云うのは官軍方の東艦、即ち私などが亜米利加から持て來た東艦が官軍の船になつて居る、ソレを分捕りしようと云うことを企てゝ、そうして奥州宮古と云う港で散々戦た所が、負けて仕舞て到頭降参して、夫れから東京へ護送せられて、その時は法律も裁判所も何もないときで、糺問所と云う牢屋のようなものがあつて、その糺問所の手に掛つて古川節蔵と、前年、私が米国に同行した小笠原賢蔵と云う海軍士官と、二人連れで霞ヶ関の芸州の屋敷に監禁されて居る。ソコで私は前には馬鹿をするなど云て止めたのであるけれども、監禁されて居ると云えば可哀想だ。幸い芸州の屋敷に懇意な医者^{こんい}が居るから、その医者^{こんい}の処に行て、ドウかして古川に遇^あいたいものだ^あが遇^あわして呉れぬかと云たらば、番人も何も居ないようであつたが、その医者^{こんい}の取計^{はい}いで、遇^あわして呉れました。夫れから長屋の暗いような処に行て見ると二人がチャンと這入て居るから、私が先ず言葉を掛けて、「ザマア見ろ、何だ、仕様がないじゃないか。止めまいことか、あれ程乃公が止めたじやないか。今更ら云たつて仕方はないが、何しろ喰物が

不自由だろう、着物が足りなからうと云て、夫れから宅に帰て毛布ケットを持て行て遣たり、牛肉の煮たのを持て行て遣たり、戦争中の様子や監禁の苦しさ加減きいを聞たりした事があるの
で、私は「能く」糺問所の有様ありさまを知て居ます。

所が榎本釜次郎だ。釜次郎は節蔵せつぞうよりか少し遅れて此方に帰て来て同じく糺問

所の手に掛て居る。所が頓とんと音づれが分らない、と云うのは私は榎本と云う男は知て居

ることは知て居る、途中で遇て一寸挨拶したぐらいな事はあるが、一緒に相対あいたいして共に

語り共に論ずると云うような深い交際はない。だから余り氣に止めて居なかつた。所がこ

の榎本と云う一体の大本おおもとを云うと、あの阿母おつかさんと云う人は素と一橋家の御馬方おんまかたで林

代次郎やしだいじろうと云う日本第一乗馬の名人と云われた大家の娘で、この婦人が幕府の御徒士おかちの

榎本田兵衛えんべえと云う人に嫁して設けた次男が榎本釜次郎です。ソコでその林の家と私の妻の

里の家とは回縁かいえんの遠い続合つづきあいになつて居るから、ソレで前年中は榎本の家内の者も此

方に來たことがある。又私の妻も小娘のときには祖母おばあさんに連れられて榎本の家に行たこ

とがあるえのもとと云うので、少し往來の道筋とおつが通て居て全く知らぬ人でない。所が榎本が今度

糺問所の手に掛て居て、その節せつ、榎本の阿母おつかさんも姉あねさんもお内儀かみさんも静岡に居る

が、一向釜次郎かまじろうの処から便りがないので大に案じて居ると、丁度ちやうどその時に榎本の妹の

良人おととに江連えづれ加賀守かがのかみと云う人いがあつて、この人は素もと幕府の外国奉行を勤めて居て私は外が国人いこくがたの翻譯方であつたから能く知しつて居る。ソコで江連が静岡から私の処に手紙を寄越よこして、榎本はこの節どうして居るだろうか、頼とんと便りがないので母も姉も家内も日夜案じて居る、何でも江戸に来て居ると云う噂うわさは風の便りに聞きいたけれども、ソレも確めることが出来きない、其それに就つて江戸に親戚身寄みよりの者に問とい合あわせたけれども、嫌疑けんぎを恐れてか只ただの一度も返辞へんじを寄越した者が無い、ソコで君の処に聞ききに遣やたら何か様子が分るだろうと思うが、ドウぞ知らして呉くれぬかと云うことを縷こま々こまと書かいて来きました。所で私はその手紙を見て先まず立腹りつしたと申すは、榎本は兎とも角かくも、その親戚身寄の者が江戸に居ながら嫌疑を恐れて便りをしないとは卑劣な奴だ、薄情な奴だ、実に幕府の人間は皆こんな者だ、好よし乃公おれが一人で引受けて遣やると云う心が頭に浮んで来て、加うるに私は古川ふるかわ節藏せつぞうの一件で糺問はいつ所の様子を知て居るから、スグ江連の方へ返辞を出し、榎本は今糺問所に這入はいて居る、殺されるか助かるかソリヤどうも分らない、分らないけれども何しろ煩わづらいもしなければ何もせずに無事に居るので御座ござる、その事を阿母さん始め皆さんへ伝えて呉くれよと云て遣やると、又重ねて手紙を寄越して、老母と姉が東京に出たいと云うが上京しても宜よろしかろうかと云いて来たから、颯々さつさつと御出おいでなさい、私方に嫌疑けんぎもなんにもない、公然と出て御出おいででなさい

と返辞へんじをすると、間もなく老人と姉さんと母子二人出京して、ソレから糺問所きゆうもんじよの様子も分り差入物わかさしいれものなどして居る中に、阿母おつかさんが是非釜次郎ぜひかまじろうに逢いたいと云出したいいだ。所が法律も何もない世の中で、何処どこに訴えて如何どうしようと言いう方角が分らない。ソコで私が一案を工風くふうして、老母から哀願書を差出すことにして、私が認めた案文したたのその次第は、云々うんぬ今般倅釜次郎犯罪の儀、誠に以て恐れ入ります、同人事は実父円兵衛存命中斯様々こんぱせがれ、至極孝心深き者で、父に事えて平生は云々、又その病中の看病は云々、私は現在ソレを見て居ます、この孝行者にこの不忠を犯す筈はずはない、彼れあに限り根性の者では御在ござません、ドウゾ御慈悲に御助けを願います、私はモウ余命もない者で御座るから、いよ／＼釜次郎を刑罰とならばこの母を身代りとして殺して下さいと云う趣意しゆいで、分らない理窟を片言交りにゴテ／＼厚かましく書かいて、姉さんのお楽さんに清書をさせて、ソレからお婆ばあさんが杖つえについて哀願書もつを持って糺問所に出掛けた処が、コレは余程監守よほどの人を感動きんどうさせたと見え、固もとよりこんな事で罪人の助かる訳わけはないが、とう／＼仕舞しまいに獄窓ごくそうを隔て、母子面会しだけは叶いました。夫れ是れそこする中に爰に妙な都合よの宜い事が出来ましたその次第は、榎本えのもとが箱館はこだてで降参のとき、自分が嘗て和蘭オランダ在留中学び得たる航海術の講義筆記を秘蔵して居るその筆記の蘭文の書を、国の為ためにとて官軍に贈て、その書が官軍の将官

黒田良助（黒田清隆）の手にあると云うことを聞きました。所で人は誰か忘れたが、或日その書を私方に持参して、何の書だか分らぬがこの蘭文を翻譯して貰いたいと云うから、之を見れば兼て噂に聞た榎本の講義筆記に違いない。是れは面白いと思ひ、蘭文翻譯は易いことであるのを、私は先方に氣を揉ませる積りで態と手を着けない。初めの方四、五枚だけ丁寧に分るように翻譯して、原本に添えて返して遣て、是れは如何にも航海にはなくてはならぬ有益な書に違いない、巻初の四、五枚を見ても分る、所が版本の原書なれば翻譯も出来るが、講義筆記であるからその講義を聴聞した本人でなければ何分にも分り兼ねる、誠に可憐い宝書で御座ると云て、私は榎本の筆記と知りながら知らぬ風をして唯翻譯の云々で氣を揉まして、自然に榎本の命の助かるように、云わば伏線の計略を運らした積りである。又その時代には黒田も私方に来れば、私も黒田の家に行たこともある。何時か何処か時も処も忘れましたが、私が黒田に写真を贈たことがあるその写真は、亜米利加の南北戦争、南部敗北のとき、南部の大統領か大将か何でも有名の人が婦人の着物を着て逃げ掛けて居る写真で、私がその前年、亜米利加から持て帰て一枚あつたから黒田に贈て、是れは亜米利加の南部の何と云う人で、逃げる時に斯う云う姿で逃げたと云う、敢て命を惜むでもなからうけれども、又一方から云えば命は大切な者だ、何としても助からう

と思えば斯く見苦しい姿をしても逃げるのが当然の道である。人間と云うものは一度
び命を取れば後で幾ら後悔しても取返しが付かない。ドウも榎本は大変な騒ぎをした男
であるが、命だけは取らぬようにした方が得じやないか、何しろこの写真を進上するから
御覧なさいと云て、濃に話したこともある。爾うした所で、ドウやら斯うやらする間にい
よく助かることになった、けれどもその助かると云うのは固より私の周旋したばかりで
助かったと云う訳けではない、その時の真実内情の噂を聞けば長州勢はドウも榎本等を殺
すような勢があつた、ソコで薩州の藩士がソレを助けようと云う意味があつたと云うから、
長州勢に任せたら或は殺されたかも知れぬ。何れ大西郷などがリキンでとう／＼助か
るようになったのでしよう。是れは私の為めには大童信太夫よりか余程骨の折れた仕事
でした。彼れ此れする中に私が煩い付て、その事は病後まで引張て居て、病氣全快に及
ぶと云うときだから、明治三年にいよく放免になりましたが、唯残念で気の毒なのは、
阿母さんは愛子の出獄前に病死しました。

所が前申す通り、榎本金次郎と私とは刎頸の交と云う訳けではなし、何もそんなに力
を入れる程の親切のあろう訳けもない、只仙台藩士の腰抜けを憤つたと同じ事で、幕府の
奴の如何にも無氣力不人情と云うことが癪に障たので、ソコでどうでも斯うでも助けて遣

ろうと思て駈廻かけまわりましたが、その節せつ、毎度妻と話をして今でも覚えて居ます、私の申すに、扱さて榎本の為ために今日はこの通りに骨を折おつて居るが、是これは唯ただ人間一人の命を助けるばかりの志で外ほかになんにも趣意しゆいはない、元来がんらい榎本と云う男は深く知らないが随ずい分ぶん何かの役に立つ人物に違いはない、少し気色けいろの変かわつた男ではあるが、何分にも出身でが幕府の御家人ごけにんだから殿様好きだ、今こそ牢ろうに這入はいて居るけれども、是これが助かつて出るようになれば、後日あるい或は役人になるかも知れぬ、その時は例の通りの殿様風でぴん／＼するような事があるかも知れない、その時になつて殿様のぴん／＼を見たり聞きたりして、ヤレ昔を忘れて厚かましいだの可笑おかしいだのと云う念が兎うの毛ほども腹の底にあつては、是れは榎本の悪いのでなく此方こつちの卑劣と云うものだから、そんな事なら私は今日唯ただ今から一切いっさいの周旋しゆせんを止めるがドウだと妻に語れば、妻も私と同説で、左様そんな浅ましい卑しい了簡は決してないと申して、夫妻固く約束したことがあるが、後日ごにちに至て私の云いつた通りになつたのが面白い。えのもと

榎本が段々立身して公使になつたり大臣になつたりして立派な殿様になつたのは、私がうらないはつけ

占八卦ほくの名人のようだけれども、私の処にはチャント説が極きまつて居て、一切いっさいの事情を知る者は私と妻と兩人より外ほかにないから、榎本がドウなろうと私の家で噂うわさをする者もない、子供などは今度のこの速記録を見て始めて合点がてんするでしょう。

一身一家經濟の由来

頼母子の金貳朱を返す是れから私が一身一家の經濟の事を陳べましょう。凡そ世の中に何が怖いと云ても、暗殺は別にして、借金ぐらい怖いものはない。他人に対して金錢の不義理は相済まぬ事と決けつじよう定すれば、借金はます／＼怖くなります。私共の兄弟姉妹は幼少の時から貧乏の味を嘗め尽して、母の苦労した様子を見ても生涯忘れられません。貧小士族の衣食住その艱難かんなんの中に、母の精神を以て自もつから私共を感化した事の数々あるその一例を申せば、私が十三、四歳のとき母に云付けられて金子返済きんすの使つかいをしたことがあります。その次第柄しだいがらは斯こう云うことです。天保七年、大阪に於おいて私共が亡父の不幸で母に従したがて故郷なかつの中津に帰りましたとき、家の普請ふしんをするとか何とか云うに、勝手向かつてむきは勿論不如意もちろんふによいです。人なかつの世話で頼母子講たのもしこうを拵こしらえて一口金ひとくち きんにしゆ二朱ずつで何両とやら纏まとまった金が出た。来て一時の用を弁じて、その後、毎年幾度か講中が二朱ずつの金を持もち寄り、鬭くじ引びきにて満座に至りて皆済かいさいになる仕組しくみであるが、大家の人は二朱計ばかりの金の為ために何年もこんな事に関係して居るのは面倒だと云う所から、一時二朱の掛金かけきんを出したまゝに手を引く者が

ある。之これを掛棄かけすてと云います。その実は講主が人に金を唯貰ただうような事なれども、一般の風俗で左さまで世間に怪しむ者もない。所が福澤の頼母子たのもしに大阪屋五郎兵衛と云う廻船かいせん屋やが一口二朱を掛棄かけすてにしたそうです。勿論もちろん私の三、四歳頃か幼少の時の事で何も知りませんでしたが、十三、四歳のとき或日あるひ母が私に申すに、「お前は何も知らぬ事だが、十年前に斯うく云う事があつて大阪屋が掛棄かけすてにして、福澤の家は大阪屋に金二朱を貰うたようなものだ。誠に氣に済すまぬ。武家が町人から金を恵まれて夫れそを唯貰ただうて黙だまて居ることは出来ません。疾とうから返したいくと思ては居たがドウも爾そう行かずに、ヤツと今年は少し融通が付いたから、この二朱のお金を大阪屋に持もつて行いつて厚あつう札を述べて返して来いと申して、その金を紙に包んで私に渡しました。ソレから私は大阪屋おおさかやに参まいりて金の包みを出すと、先方では意外に思うたか、「御返済ごへんしきなど却かえつて痛いたみ入ります。最早もはや古い事です。決してそんな御心配には及びませんと云て頻いりに辞退しきすれども、私は母の云いうことを聞きて居るから、是非ぜひ渡さねばならぬと、互たがいに押し返して口喧嘩くけんのように争うて、金を置おいて歸かえつてことがあります。今はハヤ五十二、三年も過ぎてむかしくの事であるが、そのとき母に云い付けられた口上も、先方の大阪屋の事も、チャンと記憶に存して忘れません。年月日は覚えなすが何でも朝のこと、と思う、豊前中津下小路の西南の角屋敷、大阪屋五郎兵衛の

家に行て主人五郎兵衛は留守で、弟の源七に金を渡したと云うことまで覚えて居ます。こんなことが少年の時から私の脳中に遺て居るから、金銭の事に就ては何としても大胆な横着な挙動は出来られません。

金がなければ出来る時まで待つソレから段々成長して、中津に居る間は漢学修業の傍に内職のような事をして多少でも家の活計を助け、畑もすれば米も搗き飯も炊き、鄙事多能、あらん限りの辛苦して貧小士族の家に居り、年二十一のとき始めて長崎に行て、勿論学費のあろう訳でもない、寺の留守番をしたり砲術家の食客になつたりして、不自由ながら蘭学を学んで、その後大阪に出て、大阪の緒方先生の塾に修業中も、相替らず金の事は恐ろしくて唯の一度でも他人に借りたことはない。人に借用すれば必ず返済せねばならぬ。当然のことで分り切て居るから、その返済する金が出来る位ならば、出来る時節まで待て居て借金はいないと、斯う覚悟を極めて、ソコで二朱や一分は扱置き、百文の錢でも人に借りたことはない。チャンと自分の金の出来るまで待て居る。夫れから又私は質に置たことがない。着物は塾に居るときも故郷の母が夏冬手織木綿の品を送て呉れましたが、ソレを質に置くと云えば何時か一度は請還さなければならぬ。請還す金があるならその金の出来るまで待て居るが宜いと斯う思うから、金の入用はあつても只の

一度も質に入れたことがない。けれどもいよく金に迫て如何してもなくてはならぬと云うときか、恥かしい事だが酒が飲みたくて堪らないと云うようなことがあれば、思切てその着物を売て仕舞います。例えばその時に浴衣一枚を質に入れ、ば貳朱貸して呉れる、之を手離して売ると云えば貳朱と貳百文になるから売ることになると云うような經濟法にして、且つ又私は写本で錢を取ることもしない。大事な修業の身を以て錢の爲めに時を費すは勿体ない、吾身の爲めには一刻千金の時である、金がなければ唯使わぬと覺悟を定めて、大阪に居る間とうく一錢の金も借用したことなくして、その後江戸に来て同様に、仮初にも人に借用したことはない。折節自分で想像しては唯怖くて堪らない、借金が出来来て人から催促されたら如何だろう、世間の人、朋友の中にも毎度ある話だ、借金が出来て返さなければならぬと云て、此方から借りては彼方に返し、又彼方から借りては此方に返すと云う者があるが、私は少しも感服しない。誠に氣の済まぬ話で、金を借りて返さなくてならぬなんて嘸忙しい事であろう、能くもアレで一日でも半日でも安んじて居られたものだと思つて、殆んど推量が出来ない。一口に云えば私は借金の事に就て大の臆病者で、少しも勇氣がない。人に金を借用してその催促に逢うて返すことが出来ないと言ふときの心配は、恰も白刃を以て後ろから追蒐けられるような心地がするだろうと思ひ

ます。

駕籠に乗らず下駄、傘をかうソコで私が金を大事にする心掛けの事实に現われた例を申せば、江戸に参てから下谷練堀小路の大槻俊斎先生の塾に朋友があつて、私はその時鉄砲洲に居たが、その朋友の処へ話に行て、夜になつて練堀小路を出掛けて、和泉橋の処に來ると雨が降出した。こりやドウも困たことが出来た、逆も鉄砲洲までは行かれないと思つと、和泉橋の側に辻駕籠が居たから、その駕籠屋に鉄砲洲まで幾らで行くかと聞たら、三朱だと云う。ドウも三朱と云う金を出してこの駕籠に乗るは無益だ、此方は足がある。ソレは乗らぬことにして、その少し先きに下駄屋が見えるから、下駄屋へ寄て下駄一足に傘一本買て両方で二朱余り、三朱出ない。夫れから雪駄を懷に入れて、下駄を穿て傘をさして鉄砲洲まで歸て來た。デその途中私は独り首肯き、この下駄と傘が又役に立つ、駕籠に乗たつて何も後に残るものはない、こんな処が慎むべきことだと思たことがありますが、マアその位に注意して居たから、外は推して知るべし、一切無駄な金を使たことがない。紙入に金を入れて置く、ソレは二分か三分か入れてある、入れてあるけれども何時まで経てもその金のなくなつたことがない。酒は固より好きだから朋友と酒を飲みに行くことはある、ソんな時には金も入りますが、唯独りでブラリと料理茶屋に這入て酒

を飲むなぞと云うことは仮初にもしたことがない。ソレ程に私が金を大事にするから、又同時に人の金も決して貪らない。ソリヤ以前奥平家に対して朝鮮人を気取たのは別な話にして、その外と云うのは決して金は貪らないと、自身独立、自力自活と覺悟を極めました。

事變の当日、約束の金を渡すソコで以て慶応三年、即ち王政維新の前年の冬、芝新錢座に有馬家（大名）の中屋敷が四百坪ばかりあるその屋敷を私が買いました。徳川の昔から法律に依ると、武家屋敷は換え屋敷を許しても売買は許さないと云うのが掟であつた。所が徳川もその末年になると様々な根本的改革と云うような事が行われて、武家屋敷でも代金を以て売買勝手次第と云うことになつて、新錢座の有馬の中屋敷が売物になると人の話を聞いて、同じ新錢座住居の木村摂津守の用人大橋栄次と云う人に周旋を頼んで、その有馬屋敷を買うことに約束して、価は三百五十五両、その時の事だから買うと云た所が、武家と武家との間で手金だの証書取換せなど、云うことのあろう訳けはない、唯売りましよう然らば則ち買いましようと云う丈けの話で約束が出来て、その金の受取渡しは何時だと云うと、十二月二十五日に金を相渡し申す、請取ろうと、チャンと約束が出来て居て、夫れから私はその前日、三百五十五両の金を揃えて風呂敷に包んで、翌早朝新錢座の

木村の屋敷に行て見ると、門が締しまつて潜くぐり戸まで鎖してある。夫れから門番に、此処を明けて呉れ、何で締めて置かかと云うと、「イーエ此処は明けられません。」「明けられません。」「明けて福澤だと云うのは、私は亜米利加アメリカの由縁で、木村家には常に出入しゅつにゅうして家の者のようにして居たから、門番も福澤と聞きいて潜戸を明けて呉れたは呉れたが、何だか門前が騒々しい、ドタバタ遣やつて居る。何事か知らんと思て南の方を見ると、真黒な煙が立て居る。ソレで木村の玄関あがつに上て大橋に遇あつて、大變騒々しいが何だと云うと、大橋がヒソ／＼して、「お前さんは何も知らぬか、大變な事が出来ました、大騒動だ、酒井さかいの人数が三田みたの薩州の屋敷を焼払おうと云う、ドウもそりや大騒動、戦争で御座ござると云うから、私も驚いて、ソリヤ少しも知らなかつた、成程ドウも容易ならぬ形勢だが、夫れは夫れとして、時にあの屋敷の金を持もつて来たから渡してお呉くんなさいと云うと、大橋が、途方もない、屋敷どころの話じゃない、何の事だ、モウこりや江戸中の屋敷が一錢の価あたいなしだ、ソレを屋敷を買うなんてソんな馬鹿らしい事は一切罷やめだ、マアそんな事を為しなさるなど云て取とり合あぬから、私は不承知だ。ソリヤ爾そうでない、今日渡わたすと云う約束だからこの金は渡さなくてはならぬと云うと、大橋は脇おほしの方むいに向て、「約束したからと云て時勢に依よつたものだ、この大變な騒動中に屋敷を買うと云うような馬鹿ば氣げたことがあるものか。仮令たとい今買えばと云て

も、三百五十五両を半価にしると云えば半価にするに違いない、只の百両でも悦んで売
だろう、兎に角に見合せだ、罷めだくと云て相手にならぬから、私は押返して、「イヤ
それは出来ません。大橋さん、能くお聞きなさい。先達これを有馬から買おうと云う
ときに、何と貴方は約束なすったか、只十二月の廿五日即ち今日、金を渡そう、受取ら
うと、ソレより外に何にも約束はなかった。若し万が一、世の中に変乱があれば破約する、
その価を半分にすると云う言葉が、約束の中にあるかないかと云うに、そんな約束はない
ではないか。仮令い約条書がなかうと、人と人と話したのが何寄の証拠だ、売買の約
束をした以上は当然に金を払わぬこそ大きな間近いだ、何でも払わなければならぬ。
加之ならず、マダ私が云うことがある。若し大橋さんの言う通りにこの三百五十五両
を半価にせよとか百両にせよとか云えば、時節柄有馬家では承知するであろう。ソコで私
が三百五十五両の物を百両に買ったと斯うした所で、この変乱がどんなになるか分らない。
今あの通り酒井の人数が三田の薩州屋敷を焼払って居るが、是れが何でもない事で天下奉
平、安全の世の中になるまいものでもない。扱ひよく天下泰平になって、私が彼の買
屋敷の内に住い込んで居る。スルと有馬の家来も大勢あるから、私の処の門前を通る度に
睨んで通るだろう、彼の屋敷は三百五十五両の約束をしたが、金の請取渡しのその日に

三田に大變乱があつたそのために百兩で賣た、福澤は二百五十五兩得をして、有馬家では二百五十五兩損をしたと、通る度に睨んで通るに違ひない。口に言わないでも心に爾う思そおもつて忌な顔いやをするに極て居る。私はソンの不愉快な屋敷に住もうと思わない。何は扱置きさて、構うことはない、ドウぞこの金を渡して下ください。皆無損かいむをしても宜よろしい。この金を唯渡ただした計りばかで、その屋敷に住まうどころではない、逃出して行くと云うような大騒動があるかも知れない。有ればあつた時の話だ。人間世界の事は何が何やら分らない、確かに生きて居ると思う人が死んだりする。矧いねんや金だ、渡さなければならぬと振ねくれ込んで、到とう頭うもつ持いて行て貰いいました。爾そう云いう訳わけで誠に私が金と云うことに就つて極きめて律義に正しく遣やて居たと云うのは、是これは矢張り昔の武家根性で、金錢の損得に心を動かすは卑劣だ、氣が餒うえるすと云うような事を思おもつたものと見えます。

子供の学資金を謝絶またによつすそれに又似寄たことがある。明治の初年に横浜の或あ豪商が学校を拵こしらえて、この慶應義塾の若い人を教師に頼んでその学校の始末をして居ました。爾そうするとその主人は私に親みづから新塾に出張して監督をして貰いたいと云う意があるように見える。私の家にはそのとき男子が二人、娘が一人あつて、兄ななつが七歳に弟いが五歳ぐらい。是れも追々成長するに違ひない、成長すれば外国に遊学おもさせたいと思て居る、所が世間一般の風を

見るに、学者とか役人とか云う人が動もすれば政府に依頼して、自分の子を官費生にして外国に修業させることを祈て、ドウやら斯うやら周旋が行届て目的を達すると獲物でもあつたように悦ぶ者が多い。嗚呼見苦しい事だ、自分の産んだ子ならば學問修業の爲めに洋行させるも宜しいが、貧乏で出来なければ爲せぬが宜しい、夫れを乞食のように人に泣付て修業をさせて貰うとは扱もく意氣地のない奴共だと、心竊に之を慫笑して居ながら、私にも男子が二人ある、この子が十八、九歳にもなれば是非とも外国に遣らなければならぬが、先だつものは金だ、どうかしてその金を造り出したいと思えども、前途甚だ遙なり、二人遣て何年間の學費は中々の大金、自分の腕で出来ようか如何だろうか誠に覺束ない、困たことだと常に心に思て居るから、敢て愧ることもなし、颯々と人に話して、金が欲しい、金が欲しい、ドウかして洋行をさせたい、今この子が七歳だ五歳だと云うけれども、モウ十年経てば仕度をしなければならぬ、ドウもソレまでに金が出来れば宜いかと、人に話して居ると、誰かこの話を例の豪商にも告げた者があるか、或日私の処に来て商人の云うに、お前さんに彼の学校の監督をお頼み申したい、斯く申すのは月に何百円とかその月給を上げるでもない、態々月給と云ては取りもしなからうが、茲に一案があります、外ではない、お前さんの小供兩人、彼のお坊ツちゃん兩人を外国に遣る

その修業金になるべきものを今お渡し申すが如何だろう、此処で今五千円か一万円ばかりの金をお前さんに渡す、所で今要らない金だからソレを何処へか預けて置く、預けて置くに小供衆が成長する、成長して外国に行こうと云うときには、その金も利倍増長して確かに立派な学費になつて、不自由なく修業が出来ましょう、この御相談は如何で御座ると云い出した。成程是れは宜い話で、此方はモウ実に金に焦れて居るその最中に、二人の子供の洋行費が天から降て来たようなもので、即刻応と返辭をしなければならぬ処だが、私は考えました。待て霎時、どうも爾うでない、抑も乃公が彼の学校の監督をしないと云うものは、為しない所以があつて為しないとチャンと説を極めて居る。ソコで今金の話が出て来て、その金の声を聞き前説を変じて学校監督の需に応じようと云えば、前に之を謝絶したのが間違いか、ソレが間違いでなければ今その金を請取るのが間違いである。金の為めに変説と云えば、金さえ見れば何でもすると斯う成らなければならぬ。是れは出来ない。且つ又今日金の欲しいと云うのは何の為めに欲しいかと云えば、小供の為めだ。小供を外国で修業させて役に立つように為よう、学者に為ようと云う目的であるが、子を学者にすると云う事が果して親の義務であるかないか、是れも考えて見なければならぬ。家に在る子は親の子に違いない。違いないが、衣食を授けて親の力相應の教育を授けて、ソレで沢

山だ。如何あつても最良の教育を授けなければ親たる者の義務を果さないと云う理窟はない。親が自分に自から信じて心に決して居るその説を、子の為めに變じて進退すると云ては、所謂独立心の居処が分らなくなる。親子だと云ても、親は親、子は子だ。その子の為めに節を屈して子に奉公しなければならぬと云うことはない。宜しい、今後若し乃公の子が金のない為めに十分の教育を受けることが出来なければ、是れはその子の運命だ。幸にして金が出来れば教育して遣る、出来なければ無学文盲のまゝにして打遣て置くと、私の心に決断して、扨先方の人は誠に厚意を以て話して呉れたので、固より私の心事を知る訳もないから、体無く礼を述べて断りましたが、その問答応接の間、私は眼前に子供を見てその行末を思い、又顧みて自分の身を思い、一進一退これを決断するには随分心を悩ましました。その話は相済み、その後も相替らず真面目に家を治めて著書翻訳の事を勉めて居ると、存外に利益が多くて、マダその二人の小供が外国行の年頃にならぬ先きに金の方が出来たから、小供を後廻しにして中上川彦次郎を英国に遣りました。彦次郎は私の為めに只た一人の甥で、彼方も亦只た一人の叔父さんで外に叔父はない、私も亦彦次郎の外に甥はないから、先ず親子のようなものです。彼れが三、四年も英国に居る間には随分金も費しましたが、ソレでも後の小供を修業に遣ると云う金はチャンと用意が

出来て、二人とも亜米利加に六年ばかり遣て置きました。私は今思い出しても誠に宜い心持がします。能くあの時に金を貰わなかった、貰えば生涯氣掛りだが、宜い事をしたと、今日までも折々思い出して、大事な玉に瑾を付けなかったような心持がします。

乗船切符を偽らず右様な大金の話でない、極々些細の事でも一寸と胡麻化して貪るようなことは私の虫が好かない。明治九年の春、私が長男一太郎と次男捨次郎と兩人を連れて上方見物に行くとき、一は十二歳余り、捨は十歳余り、父子三人従者も何もなしに、横浜から三菱会社の郵便船に乗り、船賃は上等にて十円か十五円、規則の通りに払うて神戸に着船、金場小平次と云う兼て懇意の問屋に一泊、ソレから大阪、京都、奈良等、諸所見物して神戸に帰て来て、復た三菱の船に乗込むとき、問屋の番頭に頼んで乗船切符を買い、サア乗込みと云うときにその切符を請取て見れば、大人の切符が一枚と子供の半札が二枚あるから、番頭を呼んで、「先刻申した通り切符は大人が二枚、小供が一枚の筈だ、何かの間違いであろう、替えて貰いたいと云うと、番頭は落付払い、「ナ―二間違いはありません。大きいお坊ツちゃんの御年も御誕生も聞きました。正味十二と二、三ヶ月、半札は当然です。規則には満十二歳以上なんて書てありますが、満十三、四歳まで大人の船賃を払う者は一人もありはしめませんと云うから、私は承知しない。」「二、三ヶ月でも

二、三日でも規則は規則だ、是非規則通りに払うと云うと、番頭も中々剛情で、ソんな馬鹿な事は致しませんと云て議論のように威張るから、「何でも宜しい。乃公は乃公の金を出して払うものを払い、貴様には唯その周旋を頼む丈けだ。何も云わずに呉れると申して、何円か金を渡して、乗船前、忙しい処に切符を取替えた事がある。是れは何も珍らしくない、買物の代を当然に払うまでの事だから、世間の人も左様であろうと思うけれども、今日例えば汽車に乗て見ると、青い切符を以て一寸と上等に乗込む人もあるようだ。過日も横浜から例の青札を以て上等に飛込み神奈川に上った奴がある。私は箱根歸りに丁度その列車に乗て居て、ソット奴の手に握てる中等切符を見て、扱々賤しい人物だと思いました。

本藩の扶持米を辞退す是れまで申した所では何だか私が潔白な男のように見えるが、中々爾うでない。この潔白な男が本藩の政庁に対しては不潔白とも卑劣とも名状すべからざる挙動をして居ました。話は少々長いが、私が金銭の事に付き数年の間に豹変したその由来を語りましょう。王政維新のその時に、幕府から幕臣一般に三ヶ条の下問を発し、第一、王臣になるか、第二、幕臣になつて静岡に行くか、第三、帰農して平に民になるかと云て来たから、私は無論帰農しますと答えて、その時から大小を棄て、丸腰になつて仕

舞い、ソコではれまで幕府の家来になつて居るとは云いながら、奥平からも扶持米を貰て居たので、幕臣でありながら半ばは奥平家の藩臣である。然るに今度いよく帰農と云えば、勿論幕府の物を貰う訳でもないから、同時に奥平家の方から貰て居る六人扶持か八人扶持の米も、御辞退申すと云て返して仕舞いました、と申すはその時に私の生活はカツ／＼出来るか出来ないかと云う位であるが、併しドウかしたなら出来ないことはないとおおよそその見込が付て居ました。前にも云う通り私は一体金の要らない男で、一方では多少の著訳書を書いて利益を収め、又一方では頓と無駄な金を使わないから多少の貯蓄も出来て、赤貧ではない。是れから先き無病堅固にさえあれば、他人の世話にならずに衣食して行かれると考を定めて、ソレで男らしく奥平家に対しても扶持方を辞退しました。スルと奥平の役人達は却て之を面白く思わぬ。「ソナナにしくなくても宜い、是れまで通り遣うと云て、その押問答がな／＼喧ましい。妙なもので、此方が貰おうと云うときには容易に呉れぬものだが、要らないと云うと向うが頻りに強うる。ソレで仕舞には、ドウもお前は不親切だ、モウ一步進めると藩主に対して薄情不忠な奴だと云うまでになつて来た。夫れから此方も意地になつて、「ソレなら戴きましよう。戴きましようだが、毎月その扶持米を精げて貰いたい。モ一つ序でにその米を飯か粥に焚て貰いたい。イヤ毎月と云わずに

毎日貰もらいたい。都すべての失費は皆米の内つぐので償つかいさえすれば宜よいから爾そうして貰もらいたい。ソレでドウだと申すに、御扶持おふちを貰もらわなければ不親切不忠と云いわれる、不忠の罪を犯すまでにして御辞退申す程かんがえの考かんがはないから慎つつしんで戴おさきます。願ねがひの通りその御扶持米まいが飯めしか粥かになつて来れば、私は新錢座私宅しんせんざ近きんじよ処の乞食ふれに触ふを出して、毎朝来い、喰くわして遣やると申して、私が殿様から戴おさいた物を、私宅の門前に於おいて難浚者共に戴おさかせます積りですと云いうような乱暴な激論で、役人達も困こまたと見え、とう／＼私の云いう通りに奥平藩の縁も切れて仕舞まいました。

本藩に対してはその卑劣朝鮮人の如ごとし斯こう云いえば私が如何いかにも高尚廉潔の君子のように見えるが、この君子の前後を丸出しにすると実は大笑いこの話だ。是これは私一人でない、同藩士も同じことだ。イヤ同藩士ばかりでない、日本国中の大名の家来は大抵たいてい皆同じことであらう。藩主から物を貰もらえば拝領と云いつて、之これに返礼する気はない。馳走ちそうになれば御酒下ごしゆくされなんと云て、氣の毒にも思わず唯難ただありがた有あいと御辞儀じぎをするばかりで、その実は人間相あい互あいの附合つきあいと思わぬから、金錢の事に就つても亦またその通りでなければならぬ。私が中津藩なかつに対する筆法は、金の辞退どころか唯取ただること計ばかり考かんえて、何でも構かわぬ、取れるだけ取れと云いう氣で、一両でも十両でも旨うまく取出せば、何だか獵かりに行いつて獲物えもののあつたような心

持ころもちがする。拝借と云て金を借りた以上は此方こつちのもので、返すと云う念は万々ない。仮か初りにも自分の手に握れば、借りた金も貰もらつた金も同じことで、後の事あとは少しも思わず、義理も廉恥れんちもないその有様ありさまは、今の朝鮮人が金を貪むさぼると何にも変かわつたことはない。嘘も吐つけば媚こびも献けんじ、散々さんざんなことをして、藩の物を只取ただろうくとばかり考かんえて居たのは可笑おかしい。

百五十両を掠め去るその二、三ヶ条を云えば、小幡おばたその外ほかの人が江戸に来て居て、私が一切引受けて世話をして居るときに、藩から勿論もちろんソレに立行く丈だけの金を呉くれよう訳わけはない。ドウやら斯こうやら種々様々に、私が有らん限りの才覚をして金を造つくつた。例えば當時横浜に今のような欧字新聞がある、一週に一度ずつの発行、その新聞を取寄せて、ソレを翻譯ほんやくしては、佐賀藩の留守居るすいとか仙台藩の留守居とか、その外一、二藩もありました、ソんな人に話を付けて、ドウぞ翻譯か訳を買かつて貰もらいたいと云て多少の金にするような工風くふうをしたり、又は私が外国から持もつて帰かえつた原書の中の不用物を売うつたりして金策をして居ましたが、何分大勢おおぜいの書生の世話だからその位の事では逆とても追付おいく訳わけのものでない。所でその時江戸の藩邸に金のあることを聞き込んだから、即案に宜いい加減な事を書立かきたて、何月何日頃何の事で自分の手に金の這入はいる約束があると云うような嘘うそを拵こしらえて、誠めかしく家老の処に

行て、散々御辭儀をして、斯うく云う訳けですから暫時百五十両丈の御振替を願いますと極手輕に話をする、家老は逸見志摩と云う誠に正しい氣の宜い人で、暫時のことならば拝借仰付けられても宜かろうと云うような曖昧な答をしたから、その答を聞くや否やすぐにその次の元締役の奉行の処に行て、今御家老志摩殿に斯う云う話をした所が、貸して苦しくない、御聞濟になつたから、今日その御金を請取りたいと云うと、奉行は不審を抱き、ソレは何時の事だか知らぬがマダその筋から御沙汰にならぬと妙な顔色して居るから、仮令い御沙汰にならぬでもモウ事は済んで居ます、唯金をさえ渡して下されば宜しい、何も六かしい事はないと段々説た、所が家老衆が爾う云えば、御金のないことはない、余り不都合でもなからうとその答も曖昧であつたが、此方はモウ済んだ事にして仕舞て、その足で又その下役の元締小吟味、是れが真実その金庫の鍵を持て居る人であるその小吟味方の処へ行て、只今金を出して貰いたい、斯うく云う次第で決してお前さんの落度になりはしない、正当な手順で、僅か三ヶ月経てば私の手にちゃんと金が出来るからすぐに返上すると云て、何の事はない、疾雷耳を掩うに違あらず、役人と役人と評議相談のない間に、百五十両と云う大金を掠めて持て來たその時は、恰も手に竜宮の珠を握りたるが如くにして、且つその握た珠を竜宮へ返えそうなんと云う念は毛頭ない。誠に不

埒な奴さ。夫れで以て一年ばかり大に樂をしたことがあります。

原書を名にして金を貪る又或る時、家老奥平壱岐の処に原書を持参して、御買上を願うと持込んだ所が、この家老は中々黒人、その原書を見て云うに、是れは宜い原書だ、大層高価のものだろうと頻りに賞めるから、此方はチャンと向うの腹を知て居る、有益な本で実価は安いなどと威張て出掛けると、ソレじゃ外へ持て行けと云うに極めて居るから、一番、その裏を搔て、「左様です、原書は誠に必要な原書ですが、之を私が奥平様にお買上げを願うと云うのは、この代金を私が請取て、その金は私が使て、爾うしてその御買上げになった原書を私が拝借しよう」と斯う云うので、正味を申せば私がマア金を唯貰おうと云う策略でござる。斯くの通り平たく心の実を明らかに申上げるのだから、ドウかこの原書を名にして金を下さい。一口に申せば私は体の宜い乞食、お貰い見たようなものでござると打付けた所が、家老も仕方がない、その訳けは、家老が以前に自分の持て居る原書一冊を奥平藩に二十何両かで売付けたことがあるその事を聞込んだから私が行たので、若しも否めばお前さんはドウだと暴れて遣ろうと云う強身の伏線がある、丸で脅迫手段だから、家老も仕方なしに承知して、私も矢張りその原書を名にして先例に由り二十何両かの金を取て、その内十五両を故郷の母の方に送て一時の窮を凌ぎました。

人間は社会の虫なりと云うような次第で、ソレはソレは卑劣とも何とも実に云いようのない悪い事をして一寸とも愧じない。仮初にも是れはドウも有間敷事だなんて思たことがない。取らないのは損だとばかり、獵に行けば雀を撃たより雁を取た方がエライと云う位の了簡で、旨く大金を掠め取れば心窃に誇て居るとは、実に浅ましい事であるのみならず、本来私の性質がソレ程卑劣とも思わない、随分家風の悪くない家に生れて、幼少の時から心正しき母に育てられて、苟も人に交て食ふことはしないと説を立てゝ居る者が、何故に藩庁に対してばかり斯くまでに破廉恥なりしや、頓と訳けが分らぬ。シテ見ると人間と云う者はコリヤ社会の虫に違いない。社会の時候が有りのまゝに続けば、その虫が虫を産んで際限のない所に、この蛆虫即ち習慣の奴隷が、不図面目を改めると云うには、社会全体に大なる変革激動がなければならぬと思われる。ソコで三百年の幕府が潰れたと云えば、是れは日本社会の大変革で、随分私の一身も始めて夢が醒めて、藩庁に対する挙動も改まらなければならぬ。是れまで自分が藩庁に向て愧ずべき事を犯したのは、畢竟藩の殿様など云う者を崇め奉つて、その極度はその人を人間以上の人と思ひ、その財産を天然の公共物と思ひ、知らず識らず自から鄙劣に陥りしことなるが、是れからは藩主も平等の人間なりと一念こゝに發起して、この平等の主義からして物を食ふは男子の事

に非ずと云う考えが浮かんだのだらうと思われる。その時には特に考えたこともない、説を付けたこともないが、私の心の変化は恐ろしい。何故に以前藩に対してあれほど卑劣な男が後に至ては折角呉れようと云う扶持方をも一酷に辞退したか、辞退しなくつても世間に笑う者もないのに、打て変た人物になつて、この間まで丸で朝鮮人見たような奴が、恐ろしい権幕を以て呉れる物を刎返して、伯夷、叔齊のような高潔の士人に變化したとは、何と激変ではあるまいか。他人の話ではない、私が自分で自分を怪しむことであるが、畢竟封建制度の中央政府を倒してその倒るゝと共に個人の奴隸心を一掃したと云わなければならぬ。

支那の文明、望むべからず之を大きく論ずれば、彼の支那の事だ、支那の今日の有様を見るに、何としても満清政府をあゝの儘に存じて置いて、支那人を文明開化に導くなんと云うことは、コリや真実無益な話だ。何は扱置き老大政府を根絶やしにして仕舞て、ソレから組立てたらば人心こゝに一変することもあろう。政府に如何なるエライ人物が出ようとも百の李鴻章が出て来たつて何にも出来はしない。その人心を新にして国を文明にしようとならば、何は兎もあれ、試みに中央政所を潰すより外に妙策はなからう。之を潰して果して日本の王政維新のように旨く参るか参らぬか、屹と請合は難けれども、一国独立の為

めとあれば試みにも政府を倒すに会釈はあるまい、国の政府か、政府の国か、このくらいの事は支那人にも分る筈と思う。

旧藩の平穩は自から原因あり私の經濟話から段々枝がさいて長くなりましたが、序ながら中津藩の事に就て、もう少し云う事があります。前に申す通り私は勤王佐幕など云う天下の政治論に少しも関係しないのみならず、奥平藩の藩政にまでも至極淡泊にあつたと云うそのために、茲に随分心に快いことがある、と云うのはあの王政維新の改革が行われたときに、諸藩の事情を察するに、勤王佐幕の議論が盛で、動もすれば旧大臣等に腹を切らせるとか、大英断を以て藩政改革とか云うために、一藩中に争論が起り、党派が分れて血を流すと云うようなことは、何れの藩も十中八、九、皆ソレであつたその時に、若し私に政治上の功名心があつて、藩に行て佐幕とか勤王とか何か云出せば、必ず一騒動を起すに違いない。所が私は黙て居て一寸も発言せず、人が噂をすれば、爾う喧しく云わんでも宜い、棄てゝ置きなさいと云うように、極淡泊にして居たから、中津の藩中が誠に静で、人殺しも何もなかつたのはソレが為めだらうと思います。人殺しどころか人を黜陟したと云うこともなかつた。

藩の重役に因循姑息説を説くソコで私が明治三年、中津に母を迎えに行たことがある、所

がその時は藩政も大いに^{かわつ}変て居まして、福澤が東京から来たから話を聞こうではないかと云うようなことになって、家老の邸^{やしき}に呼ばれて行た、所が藩の役人と云う有らん限りの役人重役が皆其^{そこ}処に出て居る。案ずるに、私が行たらば^{さぞ}嘸ドウも大變な事を云うだろうと待^ま受けて居たに^{ちう}違いない。夫^それから私が其処に出席すると、重役達の云うに、藩はドウしたら宜^よかろうか、方向に迷^{まよつ}て五里霧中ななんと、何か心配そうに話すから、私は之^{これ}に答えて、イヤもう是^これはドウするにも及ばぬことだ、能^{よく}く諸藩では或^{ある}は禄を平均すると云うような事で大分^{そうぞう}騒々しいが、私の考えでは何にもせず^{こま}に今日のこの儘で、千石取て居る人は千石、百石取て居る人は百石、大平無事に悠^{ゆう}々として居るが上策だと、その説^{つまびらか}を詳に陳べると、列座の役人は大層驚くと同時に、是^これはく穩かなことを云うもの哉^{かな}と云わぬばかりの趣で、大分顔色が宜い。

武器売却を勧む夫^それから段々話が進んで来た所で、私は一つ注文を出した。今云^いう通り禄も身分も元の通りにして置くが宜^よかろう、ソレは宜^{よろ}しいが、茲^{ここ}に一つ忠告^{ちゅうこ}したいことがある。今この中津藩^{なかつ}には小銃もあれば大砲もあり、武^{もつ}を以て国を立てようと云うその趣^{おもむき}はチャンと見えて居るが、併^{しか}し今の藩士とこの藩に在る武器で以て果して戦争が出来るかドウか、私はドウも出来なかつたと思う、左^されば今日^{ただ}只今長州の人がズツと暴れ込めば長州に

従わなければならぬ、又薩州の兵が攻来れば之にも抵抗することが出来ないから薩州に従わなければならぬ、誠に心配な話である、之を私が言葉を立てて評すれば、弱藩罪なし武器災をなすと云わねばならぬ、ダカラ寧ろその鉄砲を皆売って仕舞いたい、見れば大砲は何れもクルツプだ、これを売れば三千五千或は一万円になるかも知れぬから、一切売って仕舞て昔の琉球見たようになって仕舞うが宜い、爾うして置いて長州から政めて来たら、ハイ、又薩摩から遣て来たら、ハイ、斯う為うとか、ア、為うとか云えば、ドウか長州に行て直に話をして下さい、又長州ならドウか薩州に行て直談を頼むと云て、一切の面倒を他に嫁して、此方はドウでも宜いと、斯う云う仕向けが宜からう、そうした所で殺しもしなければ捕縛して行きもしないから爾う云うようにしたい、そうして一方に於てはドウしてもこの世の中は文明開化になるに極てるから、学校を拵えて文明開化の何物たるを藩中の少年子弟に知らせると云う方針を執るが一番大事である、忤爾う云う方針を執るとして、武器を廃して仕舞えば、余り割合が宜過ぎるようだが、ソコには斯う云うことがある、今私は東京の事情を察するに、新政府は陸海軍を大に改革しようとして金がなく困て居る、ソコで一片の願書なり届書なり認めて出して見るが宜しい、その次第はこの中津藩は武備を廃したるために年々何万円と云う余計な金がある、この金を納めましょ

うから政府の方でドウでも為すつて下さいと斯う云えば、海陸軍では大に悦ぶ、政府の身
になつて見れば、この諸藩三百の大名が各々色變りの武器を作り色變りの兵を備えて置
くその始末に堪まるものじやない、ドウしたツて一様にしたいと云うのは、コリヤ政府の
政略に於て有るに極た訳ではないか、然るに此処ではクルップの鉄砲だ、隣ではアーム
ストロングの大砲だ、イヤ彼処では仏蘭西の小銃、此方は和蘭から昔し輸入したゲベル
を持て居ると云うような、日本国中千種万様の兵備では、政府に於てイザ事と云ても戦争
が出来そうにもしない、ソレよりかその金を納むるが宜い、爾うすれば独り政府が悦ぶの
みならずして、中津藩も誠に安樂になる、所謂一挙兩全の策であるから爾う遣りなさい
と云た。

武士の丸腰所がソレには大反対さ。兵事係の役人が三人も四人も居る中で、菅沼新五右衛
門と云う人などは大反対、満坐一致で、ソレは出来ませぬ、何の事はない、武士に向て丸
腰になれと云うような説で、ソレ計りは何としても出来ないと云うから、私は深く論じも
せず、出来なければ為なざるな、ドウでも宜しい、御勝手になさい、只私は爾うしたらば
便利だと思ふ丈けの話だからと云て、ソレ切り罷めになつて仕舞いました、併し私はそ
の政治論に熱しなかつたと云う為めに、中津の藩士が怪我を為なかつたと云うことは、是

れは事實に於て間違いないことで、自から藩の爲めに功德になつて居ましょう。その上に中津藩では減祿をしないのみならず、平均した所で加増した者がある。何でも大變に割合が宜かつた。例えば私の妻の里などは二百五十石取て居て三千円ばかりの公債証書を貰ひ、今泉（秀太郎氏なり）は私の妻の姉の家で三百五十石か取て居たが四千元も貰ひましたろう。けれども藩士の祿券と云うものは悪銭身に付かずと云うような訳で、終にはなくして仕舞つて何もありません。兎に角に中津藩の穩かであつたと云うことは間違いない話です。

商売の実地を知らず話は以前に立還て復た經濟を語りましょう。私は金錢の事を至極大切にしますが、商売は甚だ不得手である、その不得手とは敢て商売の趣意を知らぬではない、その道理は一通り心得て居る積りだが、自分に手を着けて売買貸借は何分ウルサクて面倒臭くて遣る氣がない。且つむかしの士族書生の氣風として、利を貪るは君子の事に非ずなんと云うことが脳に染込んで、商売は愧かしいような心持がして、是れも自から身に着き纏うて居るでしょう。既に江戸に始めて来たとき、同藩の先輩岡見彦曹と云う人が、和蘭辞書の原書を翻刻して一冊の代価五兩、その時には安いもので随分望む人もある中に、私が世話をして朋友に一冊買わせて、その代金五兩を岡見に持て行く

と、主人が金一分、紙に包んで呉れたから驚いた、是れは何の事か少しも分らん、本の世話をして売たその礼とは呆れた話だ、畢竟主人が少年書生と見縊て金を恵む了簡であらう、無礼な事をするもの哉と少し心に立腹して、真面目になつて争う事があると云うような次第で、物の売買に手数料など、云うことは町人共の話として、書生の身には夢ほども知らない。

火斗を買て貨幣法の間違いを知る左れども是等は唯書生の一身に直接して然るのみ。扱経済の理窟に於ては当時町人共の知らぬ処に考の届くことがある。或るとき私が鍛冶橋外の金物屋に行て台火斗を買て、価が十二匁と云うその時、どう云う訳けだか供の者に銭を持たせて、十二匁なれば凡そ一貫二、三百文になるから、その銭を店の者に渡したときに、私が不図心付た。この銭の目方は凡そ七、八百目から一貫目もある、然るに銭の代りに請取た台火斗は二、三百目しかない、銭も火斗も同じ銅でありながら、通用の貨幣は安くて売買の品は高い、是れこそ経済法の大間違いだ、こんな事が永く続けば銭を鑄潰して台火斗を作るが利益だ、何としても日本の銭の価は騰貴するに違いないと説を定めて、一歩を進めて金貨と銀貨との目方、性合を比較して見て、西洋の金一銀十五の割合にすれば、日本の貨幣法は間違いも間違いか大間違いで、私が首唱して云うにも及ばず、外国の商人

は開国その時から大判小判の輸出で利を占めて居るとの風聞。ソレから私も知て居る金持の人に頻りに勧めて金貨を買わせた事があるが、是れも唯人に話をする計りで自分には何にも為ようとと思付かぬ。唯私の覚えて居るのは安政六年の冬、米国行の前、或人に金銀の話をして、翌年夏、帰国して見れば、その人が大に利益を得た様子で、御礼に進上すると云て、一朱銀の数も計えず私の片手に山盛り一杯金を呉れたから、深く礼を云うにも及ばず、何は忝置き早速朋友を連れて築地の料理茶屋に行て、思うさま酒を飲ませたことがある。

簿記法を翻譯して簿記を見るに面倒なり先ずこの位なことで、その癖私は維新後早く帳合之法と云う簿記法の書を翻譯して、今日世の中にある簿記の書は皆私の訳例に倣うて書たものである。ダカラ私は簿記の黒人でなければならぬ、所が読書家の考と商売人の考とは別のものと見えて、私はこの簿記法を実地に活用することが出来ぬのみか、他人の記した帳簿を見ても甚だ受取が悪い。ウンと考えれば固より分らぬことはない、屹と分るけれども、唯面倒臭くてソんな事をして居る気がないから、塾の會計とか新聞社の勘定とか、何か入組んだ金の事はみんな人任せにして、自分は唯その総体の締て何々と云う数を見る計り。こんな事で商売の出来ないのは私も知て居る。例えば塾の書生などが学費

金を持て来て、毎月入用だけ請取りたいから預けて置きたいと云う者がある。今の貴族院議員の滝口吉良なども、先年書生の時はその中の一人で、何百円か私の処に預けてあったが、私はその金をチャンと筆筒の袖斗に入れて置いて、毎月取りに来れば十円でも十円でも入用だけ渡して、その残りは又紙に包んで仕舞て置く。その金を銀行に預けて如何すれば便利だと云うことを知るまい事か、百も承知で心に知て居ながら、手で為ること出来ない。銀行に預けるは扱置き、その預た紙幣の大小を一寸私に取替えて本の姿を變えることも気が済まない。如何でも是れは持て生れた藩士の根性か、然らざれば書生の机の抽斗の會計法でしょう。

借用証書があらば百万円遣ろうソコで或時例の金融家のエライ人が私方に来て、何か金の話になつて、千種万様、実に目に染みるような混雑な事を云うから、扱て如何もウルサイ事だ、この金を彼方に向けて、彼の金は此方に返えすと云う話であるが、人に貸す金があれば借りなくても宜きそうなものだ、商売人は人の金を借りて商売すると云うことは私も能く知て居るが、苟も人に金を貸すと云うことは余た金があるから貸すのだ、仮令い商売人でも貸す金があるなら成る丈けソレを自分に運転して、他人の金をば成る丈け借用しないようにするのが本意ではないか、然るに自分に資本を持て居ながら、態々人に借

用とは入らざる事をしたものだ、余計な苦勞を求めるようなものだと言つと、その人が大に笑つて、迂闊^{うかつ}千万、途方もない事を云う、商売人と云うものは入組^{いりぐみ}んで、滅茶^{めっちゃ}々々になつたと云うその間に、又種々様々の面白いことのあるもので、そんな馬鹿な事が出来るものか、啻^{ただ}に商売人に眼^めらず、凡^{およ}そ人の金を借用せずに世の中を渡ると云うことが出来るものか、ソんな人が何処^{どこ}に在るかと言つて私を冷却するから、私はその時始めてヒヨイと思^{おも}付^{つい}た。今御話を聞けば、世の中に借金しない者が何処に在るかと言うが、その人は今ここに居ます。私は是^これまで只^{ただ}の一度も人の金を借りたことがない。「そんな馬鹿な事を云いなさるな。「イヤ如何^{どう}してもない。生れて五十年（是れは十四、五年前の話）人の金を一錢でも借りたことはない。ソレが嘘ならば、試^{こころみ}に私の印形の据^{すわ}つて居るものとは云わない、反古^{ほご}でも何でも宜^{よろ}しい、ソレを搜^もつて持^もつて来て御覽。私が百万円で買おう。ドウしたつてありはしない。日本国中に福澤^{ふくざい}の書^かいた借用証文と云うものはソレこそ有る氣遣いはないが如何^{どう}だ、と云うような訳^{わけ}けで、その時に私も始めて思い出したが、私は生れてこの方^{かた}遂^{つい}ぞ金を借りたことがない。是れはマア私の眼から見れば尋常一様の事と思うけれども、世間の人が見たらば甚^{はなは}だ尋常一様でないのかも知れぬ。

金を預けるも面倒なりソレで私は今でも多少の財産を持て居る、持て居たけれども私とこ

ろの會計と云うものは至極簡單で、少しも入込んだことはない。この金を誰に返えさなければならぬ、之を此方に振向けなければならぬと云うような事は絶えてない。ソレで僅かばかり二百円とか三百円とか云う金が、手元にあつてもなくても構わない、ソレを銀行に預けて、必要のとき小切手で払いをすれば利息が徳になると云う、ソレは私も能く知て居て、世間一体そう云う風になりたとは思えども、扨自分には小面倒臭い、ソんな事にドタバタするよりか、金は金で仕舞て置いて、払うときにはその紙幣を計えて渡して遣ると、斯う云う趣向にして、私も家内もその通りな考えで、眞実封建武士の机の抽斗の會計と云うことになつて、その話になると丸で別世界のようで、文明流の金融法は私の家に這入りません。

仮初にも愚痴を云わず夫れからして、世間の人が私に對して推察する所を、私が又推察して見るに、ドウも世人の思う所は決して無理でない、と云うのは私が若い時から困たと云うことを一言でも云うたことがない、誠に家事多端で金の入用が多くて困るとか、今歳は斯う云う不時な事があつて困却致すとか云うような事を、仮初にも口外したことがない、私の眼には世間が可笑しく見える、世間多数の人が動もすれば貧乏で困る、金が不自由だ、無力だ、不如意だ、なんかと愚痴をこぼすのは、或は金を貸して貰いたいと云う

ような意味で言うのか、但しは洒落に言うのか、飾りに言うのか、私の眼から見れば何の事だか少しも訳けが分らない、自分の身に金があるうとなかろうと敢て他人に関係したことでない、自分一身の利害を下らなく人に語るのは独語を言うようなもので、こんな馬鹿氣た事はない、私の流儀にすれば金がなければ使わない、有ても無駄に使わない、多く使うも、少なく使うも、一切世間の人のお世話に相成らぬ、使いたくなければ使わぬ、使いたければ使う、嘗て人に相談しようとも思わなければ、人に喙を容れさせようとも思わぬ、貧富苦樂、共に独立独歩、ドンな事があつても、一寸でも困たなんて泣言を云わずに何時も悠々として居るから、凡俗世界ではその様子を見て、コリヤ何でも金持だと測量する人もありましょう。所が私は又その測量者があるうとなかろうと、その推測が中ろうと中るまいと、少しも頓着なしに相替らず悠々として居ます。既に先年、所得税法の始めて發布せられた時などは可笑しい、区内の所得税掛りとか何とか云う人が、私の家には財産が凡そ七十万円あるその割合で税を取ると、内々云て来た者があるから、私がその者に云うに、何卒その言葉忘れて呉れるな、見て居る前で福澤の一家残らず裸体になつて出て行くから、七十万で買って貰いたい、財産は帳面のまゝ渡して、家も倉も衣服も諸道具も鍋も釜も皆遣るから、ソツクリ買取て七十万円の金に易えたい、唯漠然たる評

価は迷惑だ、現金で売買したい、爾うなれば生来始めての大儲けで、生涯さぞ安樂であらうと云て、大笑いしたことがあります。

他人に私事を語らず私が経済上に堅固を守て臆病で大胆な事の出来ないのは、先天の性質であるか、抑も亦身の境遇に駆られて遂に堅く凝り固まったものでしょう。本年六十五歳になりますが、二十一歳のとき家を去て以来、自から一身の謀を為し、二十三歳、家兄を喪いしより後は、老母と姪と二人の身の上を引受け、二十八歳にして妻を娶り子を生み、

一家の責任を自分一身に担うて、今年に至るまで四十五年の間、二十三歳の冬大阪緒方先生に身の貧困を訴えて大恩に浴したるのみ、その他は仮初にも身事家事の私を他人に相談したこともなければ又依頼したこともない。人の智恵を借りようとも思わず、人の差図を受けようとも思わず、人間万事天運に在りと覚悟して、勉めることは飽くまでも根気能く勉めて、種々様々の方便を運らし、交際を広くして愛憎の念を絶ち、人に勧め又人の同意を求めるなどは十人並に遣りながら、ソレでも思う事の叶わぬときは、尚おそれ以上に進んで哀願はしない、唯元に立戻て独り静に思止るのみ。詰る所、他人の熱に依らぬと云うのが私の本願で、この一義は私が何時発起したやら、自分にも是れと云う覚えはないが、少年の時からソんな心掛け、イヤ心掛けと云うよりもソんな癖があったと思わ

れます。

按摩を学ぶ中津なかつに居て十六、七歳のとき、白石しらいしと云う漢学先生の塾に修業中、同塾生の医者か坊主か二人、至極しごくの貧生で、二人とも按摩あんまをして凌しのいで居る者がある。その時、私は如何どうでもして国を飛出そうと思て居るから、之これを見て大に心を動かし、コリヤ面白い、一文なしに国を出て、罷り違まかちがえば按摩あんまをしても喰くうことは出来ると思て、ソレから二人の者に按摩の法を習い、頻しきりに稽古けいこして随分上達ずいぶんしました。幸さいわいにその後按摩の芸が身を助ける程の不仕合ふしあわせもなしに済すみましたが、習うた芸は忘れぬもので、今でも普通の田舎按摩よりかエライ。湯治などに行て家内子供を揉やっんで遣て笑わせる事があります。こんな事がマア私の常に云う自力自活の姿とでも云うべきものか、是れが故人の伝を書くとか何とか云えば、何々氏夙つとに独立の志あり、年何歳その学塾に在るや按摩法を学んで云々うんぬんなしかつめんと、鹿爪しかつめらしく文字を並べるであろうが、私などは十六、七のとき大志も何もありません、唯貧乏ただでその癖、学問修業はしたい、人に話しても世話をして呉くれる氣遣いなし、しようことなしに自分で按摩おもいついと思付た事です。凡そ人の志はその身の成行次第なりゆきに由よつて大きくもなり又小さくもなるもので、子供の時に何を言おうと何を行おうと、その言行が必ずしも生涯の抵当になるものではない、唯先天の遺伝、現在の教育に從したがつて、根氣能く勉つとめ

て迷わぬ者が勝を占めることでしよう。

一大投機私が商売に不案内とは申しながら、生涯の中で大きな投機のようなことを試みて、首尾能く出来た事があります。ソレは幕府時代から著書翻譯を勉めて、その製本売捌の事をば都て書林に任してある。所が江戸の書林が必ずしも不正の者ばかりでもないが、兎角人を馬鹿にする風がある。出版物の草稿が出来ると、その版下を書くにも、版摺の職人を雇うにも、亦その製本の紙を买入るにも、都て書林の引受けで、その高しも安いも云うがまゝにして、大本の著訳者は当合扶持を授けられると云うのが年来の習慣である。ソコで私の出版物を見ると中々大層なもので、之を人仕せにして不利益は分て居る。書林の奴等に何程の智恵もありはしない、高の知れた町人だ、何でも一切の権力を取揚げて此方のものにして遣うと説を定めた。定めたは宜いが実は望洋の歎で、少しも取付端がない。第一番の必要と云うのが職人を集めなければならぬ。今までは書林が中に挟まって居て、一切の職人と云う者は著訳者の御直参でなく、向う河岸に居るようなものだから、彼れを此方の直轄にしなければならぬと云うのが差向きの必要。ソコで私は一策を案じたその次第は、当時、明治の初年で余程金もあり、之を掻集めて千両ばかり出来たから、夫れから数寄屋町の鹿島と云う大きな紙問屋に人を遣て、紙の話をして、

土佐半紙を百何十俵、代金千両余りの品を即金で一度に買うことに約束をした。その時に千両の紙と云うものは実に人の耳目を驚かす。如何なる大書林と雖も、百五十両か二百両の紙を買うのがヤツトの話で、ソコへ持て来て千両現金、直ぐに渡して遣ると云うのだから、値も安くする、品物も宜い物を寄越すに極てる。高かったか安かったか知らないが、百何十俵の半紙を一時に新錢座に引取て、土蔵一杯積込んで、ソレから書林に話して版摺の職人を貸して呉れと云うことにして、何十人と云う大勢の職人を集め、旧同藩の土族二人を監督に置いて仕事をさせて居る中に、職人が朝夕紙の出入れをするから、蔵に這入てその紙を見て大に驚き、大変なものだ、途方もないものだ、この家に製本を始めたが、このくらい紙があれば仕事は永續するに違いないと先ず信仰して、且つ此方では払いをキリ／＼して遣ると云うような訳けで、是れが端緒になって、職人共は問わず語りに色々な事を皆白状して仕舞う。此方の監督者は利いた風をして居るが、その実は全くの素人でありながら、職人に教わるようなもので、段々巧者になつて、ソレから版木師も製本仕立師も次第々々に手に附けて、是れまで書林の為すべき事は都て此方の直轄にして、書林には唯出版物の売捌を命じて手数料を取らせる計りのことにしたのは、是れは著訳社会の大変革でしたが、唯この事ばかりが私の商売を試みた一例です。

品行家風

莫逆の友なし経済の事は右の如くにして、私は私の流義を守て生涯このまゝ替えずに終ることであろうと思いますが、ソレから又自分の一身の行状は如何であつたか、家を成した後に家の有様は如何かと云うことに付て、有りのまゝの次第を語りましょう。扨私の若い時は如何だと申すに、中津に居たとき子供の時分から成年に至るまで、何としても同藩の人と打解けて真実に交わることが出来ない、本当に朋友になつて共々に心事を語る所謂莫逆の友と云うような人は一人もない、世間にないのみならず親類中にもない、と云て私が偏窟者で人と交際が出来ないと云うではない。ソリヤ男子に接しても婦人に逢うても快く話をして、ドチラかと云えばお饒舌りの方であつたが、本当を云うと表面ばかりで、実はこの人の真似をして見たい、彼の人のように成りたいとも思わず、人に誉められて嬉しくもなく、悪く云われて怖くもなく、都て無頓着で、悪く評すれば人を馬鹿にして居たようなもので、仮初にも争う氣がないその証拠には、同年輩の子供と喧嘩をしたことがない、喧嘩をしなければ怪我もしない、友達と喧嘩をして泣て家に帰て阿母さんに言告げ

ると云うようなことは唯ただの一度もない。口先くわき計り達者で内実は無難無事な子でした。大言壮語の中、忌むべきを忌むソレから国を去さつて長崎に行き大阪に出てその修業中も、ワイ／＼朋友と共に笑ひ共に語かたつて浮々うかくして居るようであるけれども、身の行状を慎つつしみ品行を正ただしくすると云うことは、努めずして自然にソレが私の体に備そなわつて居ると云いつても宜よろしい。モウそれはさん／＼な乱暴な話をして、大言壮語、至らざる所なしと云う中にも、嫌いやらしい汚ない話と云うことは一寸とでも為したことがない。同窓生の話に能くある事で、昨夜、北の新地に遊んでなんと云うような事を云出いそうとすると、私は態わざと其処そこを去らずに大箕あ坐ぐらをかいてワイ／＼とその話を打消し、「馬鹿野郎、余計なことを口走るな、と云うような調子で雑まぜ返して仕舞う。ソレから江戸に出て来ても相替あいからずその通り、朋友も多い事だから相互あいたがいに往来するのは不断の事で、頻しきりに飛廻とびまわつて居たけれども、扱例さての吉原とか深川とか云う事になると、朋友共が私に話をする事が出来ない。その癖くせ私は能く事情を知して居る。誠に事細ことこまかに知て居るその訳わけは、小本こほんなんぞ読よむにも及およばず、近く朋友共が馬鹿話に浮しかれて饒舌しゃべるのを、黙だまつて聞きて居れば容易に分る。六むかしい事も何にもない、チャンと吞し込んで知て居るけれども、如何いかなこと、左様さような事を思出したこともないのみならず、吉原深川は扱置さてき、上野の花見に行いつたこともない。

始めて上野、向島を見る私は安政三年、江戸に出て来て、只酒が好きだから所謂口腹の奴隷で、家がない時は飲みに行かなければならぬ、朋友相会すれば飲みに行くと云うような事は、ソリヤ為て居るけれども、遂ぞ花見遊山はしない。文久三年六月、緒方先生不幸のとき、下谷の自宅出棺、駒込の寺に葬式執行のその時、上野山内を通行して、始めて上野と云う処を見た。即ち私が江戸に来てから六年目である。「成る程これが上野か、花の咲く処かと、通行しながら見物しました。向島もその通りで、江戸に来てから毎度人の話には聞くが一度も見たことがない。所で明治三年酷い腸窒扶斯を煩い、病後の運動には馬に乗るのが最も宜しいと、医者も勧め朋友も勧めたので、その歳の冬から馬に乗て諸方乗廻り、向島と云う処も始めて見れば、玉川辺にも遊び、市中内外、行かれる処だけは何処でも乗廻わして、東京の方角も大抵分りました。その時に向島は景色もよし道もよし、毎度馬を試みて、向島を廻つて上野の方に帰て来るとき、何でも土手のような処を通りながら、ア、彼処が吉原かと心付て、ソレではこのまゝ馬に乗て吉原見物を為しようじやないかと云出したら、連騎の者が場所柄に騎馬では余り風が悪いと止めて、ソレ切りになつて未だに私は吉原と云う処を見たことがない。

小僧に盃を差す斯う云うような次第で、一寸と人が考えると私は奇人偏窟者のように思

われましようが、決して爾^そうでない。私の性質は人に附^つ合^あいして愛^{あい}憎^{そう}のない積^りりで、貴賤^{きでん}貧富^{ひんふ}、君子も小人も平等^{へいとう}一樣^{いよう}、芸妓に逢^あうても女郎^{ぢやうらう}を見ても塵^{ちり}も埃^{あひ}も之^{これ}を見て何とも思わぬ。何とも思わぬから困^こることもない。此^こ奴^{いつ}は穢^けれた動^け物^{ぶつ}だ、同席^{どうせき}は出来^きないなんて、妙な洩^はい顔^{かほ}色^{しき}して内^{うち}実^{じつ}プリ／＼怒^{おこ}ると云^いうような事^{こと}は決^けしてない。古^{ふる}いむかしの事^{こと}であるが、四十余年前^{よそよそ}、長崎^{ながさき}に居るとき、光永寺^{みつえいじ}と云^いう真^{しん}宗^{しゅう}寺^{でら}に同藩^{どうはん}の家老^{けらう}が滞留^{ちりゅう}中^{ちゆう}、或^{ある}日^ひ市中^{いちぢゆう}の芸妓^{げいぎ}か女^め郎^{らう}か五^ご、六^{ろく}人も変^{へん}な女^めを集^{あつ}めて酒宴^{しゅえん}の愉快^{えきげき}、私^{わたし}はその時酒^{しゅ}を禁^{きん}じて居^ゐるけれども陪席^{ばいせき}御相伴^{ごしやうばん}を仰^{おほ}せ付^けけられ、一座^{いざ}杯盤^{はいばん}狼藉^{ろうぜき}の最^{さい}中^{ちゆう}、家老^{けらう}が私^{わたし}に杯^{はい}をさして、「この酒^{しゅ}を飲^のんで、その杯^{はい}を座中^{ざちゆう}の誰^{たれ}でも宜^{よろ}しい、足下^{そくか}の一^{いち}番^{ばん}好^{こう}いてる者^{もの}へさすが宜^{よろ}かろうと云^いうのは、実^{じつ}は其^{そこ}処^こに美^み人^{にん}が幾^{いく}人^{たり}も居^ゐる、私^{わたし}はその杯^{はい}を美^み人^{にん}にさしても可^{おか}笑^わしい、態^{わざ}と避^さけてさ／＼なくても可^{おか}笑^わしい、屹^{きつ}と困^こるであらうと黜^{なぐ}るのはチャント分^わて居^ゐる。所^{ところ}が私^{わたし}は少しも困^こらない。杯^{はい}をグイと干^{かん}して、大^{だい}夫^ふさん^の命^{いのち}に従^{したが}い一^{いち}番^{ばん}好^{こう}いた人^{ひと}に上^あげます、ソレ高^{たか}さん、と云^いて杯^{はい}をさしたのは、六^{ろく}、七^{しち}歳^{さい}ばかりの寺^{てら}の末^{まつ}子^しで、私^{わたし}が瀉^{しゃ}蛙^{あしやあ}々々^{わらわ}として笑^{わら}て居^ゐたから家老^{けらう}殿^{でん}も興^{きよう}にならぬ。既^{すで}に今年^{ことし}春^{はる}ジャパン・タイムス社^{しゃ}の山田^{やまだ}季^{すえじ}治^ちが長崎^{ながさき}へ行^いくと聞^きき、不^ふ図^と光永寺^{みつえいじ}の事^{こと}を思^{おも}出^でして、あの時^{とき}は如^{どう}何^{なん}なつてるか、高^{たか}さんと云^いう小僧^{しょうそう}があつた筈^{はず}だが、如^{どう}何^{なん}して居^ゐるか尋^{たず}ねて見^みたいと申^{まを}したら、山田^{やまだ}の返^{へん}事^じに、寺^{てら}は旧^{もと}の通^とり焼^やけ

もせず、高さんも無事息災、今は五十一歳の老僧で隠居して居るとて写真など寄送よこしましたが、右の一件も私の二十一歳の時だから、計かぞえて見ると高さんは七歳でしたらうに、恐ろしい古い話です。

嫌疑を憚そらず左様さやういう訳わけで私は若い時から婦人に対して仮かり初そめにも無礼はしない。仮令たとい酒に酔よつても謹つつしむ所は屹きつと謹つつしみ、女の忌いやがるような禁句を口外したことはない。上じやう戸本性で、謹つつみながら女を相手に話もすれば笑いもして談笑自在、何時いつも慣れ々しくして、その極きわみは世間で云う嫌疑けんぎと云うような事を何とも思わぬ。血に交わりて赤くならぬこそ男子たる者の本領であると、チャンと自分に説きを極めてあるから、男女夜行くときは灯ともしびを照らすとか、物を受授するに手より手にせずとか、アンな古めかしい教訓は、私の眼から見ると唯ただ可笑おかしいばかり。扱さてもく卑怯なる哉かな、ソンの窮窟な事で人間世界が渡れるものか、世間の人が妙な処に用心するのはサザ忙しいことであらう、自分は古人の教おしえに縛ばれる気はないと、自みづから自分の身を信じて颯々さつさつと人の家に入でいり出して、其処にお嬢さんが居ようと、若い内おかみさん君が独り留守して居ようと、又は杯はいばんろうぜき盤狼藉ばんろうぜきの常に芸妓とか何とか云う者が騒いいで居ようと、少しも遠慮はしない。酒を飲のんで大きな声をしてドン／＼話をして、酔えば面白くなつて戯あそれて居ると云うような風であるから、或あるは人が見たらば変に

思うこともありましょう。

醜声外聞の評判却て名誉ソコで或時奥平藩の家老が態々私を呼びによこして、扱云うよう、足下は近來某々の家などに毎度出入して、例の如く夜分晩くまで酒を飲で居るとの風聞、某家には娘もあり、某家は何時も芸妓など出入して家風が宜しくない、足下がそんな処に近づいて醜声外聞とは残念だ、君子は瓜田に履を結ばず、李下に冠を正さずと云うことがある、年若い大事な身体である、少し注意致したら宜かろうと、真面目になつて忠告したから、私はその時少しも謝らない。左様で御在ますか、コリヤ面白い。私は今まで随分太平樂を云たとか、恐ろしい声高に話をして居たとか云て、毎度人から嫌がられたこともありましたが、併し艶男と云われたのは今日が生れてから始めて。コリヤ私の名誉で、至極面白い話だから私は罷めますまい。相替らずその家に出入しましょう。此処で御注意を蒙て夫れで前非を改めて罷めるなんて、ソんな弱い男ではござらぬ。但し御親切は難有い、御礼は申上げますが、実は私は何とも思わぬ。却て面白いから、モツと評判を立て、貰いたいと云て、冷かして歸た事があります。

始めて東京の芝居を観る前に申す通り、私は江戸に来て六年目に始めて上野と云う処を見て、十四年自に始めて向島を見たと云うくらいの野暮だから、勿論芝居などを見物した

ことはない。少年のとき旧藩中津で、藩主が城内の能舞台で田舎の役者共を呼出して芝居を催し、藩士ばかりに陪観させる例があつて、その時に一度見物して、その後大阪修業中、今の市川団十郎の実父海老蔵が道頓堀の興行中、或る夜同窓生が今から道頓堀の芝居に行くから一緒に行こう、酒もあると云うから、私は酒と聞いて応と答え、ソレから行く道で酒を一升買つて、徳利を携えて二、三人連れで芝居に這入り、夜分二幕か三幕見たのが生来二度自の見物。ソレから江戸に来て、江戸が東京となつても、芝居見物の事は思出しもせず、又その機会もなくして居る中に、今を去ること凡そ十五、六年前、不図した事で始めて東京の芝居を見て、その時戯れに、

誰道名優伎絶倫

先生遊戯事尤新

春風五十独醒客

却作梨園一醉人

と云う詩が出来ました。之を見ると私が変人のようにあるが、実は鳴物は甚だ好きで、女の子には娘にも孫にも琴、三味線を初め、又運動半分に踊の稽古もさせて老余唯一の楽しみにして居ます。

不風流の由来がんらい元もと来き私は生れ付き殺風景でもあるまい、人間の天性に必ず無芸殺風景と約束があるでもなからうと思うが、何分私の性質と云うよりも少年の時から様々の事情がコンな男にして仕舞しまつたのでしよう。先まず第一に私は幼少の時から教育の世話をして呉くれる者がないので、ロクに手習てならひをせず成長したから、今でも書が出来ない。成長の後でも自分で手本ならつを習なつたら宜よきそうなのだが、その時は既にすでに洋学の門かたきに入いつて天下の儒者流を目的にして、儒者のすることなら一から十まで皆氣に入らぬ、就なかなずく中ちゆうその行状が好かない。口に仁義忠孝など饒舌しゃべりながら、サアと云いうときには夫れ程に意氣地いくじはない。殊ことに不品行で酒のんを飲ので詩つくつを作つくて書が旨いと云いえば評判が宜よい。都すべて氣に喰くわぬ。よし／＼洋学流の吾わ々れわれは反対に出掛けて遣やろうと云いう氣になつて、恰あたかも江戸の劍術全盛の時代に刀劍を売うり払らて仕舞しまい、兼すて嗜すきな居合いあいも罷やめて知らぬ風ふうをして居たような塩梅あんばい式に、儒者の奴等が詩を作ると云いえば此方こつちは態わざと作らずに見せよう、奴等が書を善くすると云いえば此方は殊こと更ならに等閑なおよにして善く書かずに見せようと、飛だ処こゝに力身りきみ込こんで手習てならひをしなかつたのが生涯の失策。私の家の遺伝を云いえば、父も兄も文人で、殊ことに兄は書も善くし、画えも出来、篆てんこく刻も出来る程の多芸な人に、その弟はこの通りな無芸無能、書画は扱さ置き骨董も美術品も一切無頓着、住居の家も大工任せ、庭園の木石も植木屋次第、衣服の流行など何が

何やら少しも知らず又知ろうとも思わず、唯人の着せて呉れるものを着て居る。或時家内の留守に急用が出来て外出のとき、着物を着替えようと思い、箆笥の引出しを明けて一番上にある着物を着て出て、帰宅の上、家内の者が私の着て居るのを見て、ソレは下着だといつて大に笑われたことがある。殺風景も些と念入の殺風景で、決して誉めた話でない。畢竟少年の時から種々様々の事情に逐われてコンな事に成行き、生涯これで終るのでしよう。兎角世間の人の悦んで居るような事は、私には楽しみにならぬ、誠に損な性分です。ダカラ近来は芝居を見物したり、又は宅に芸人など呼ぶこともあるが、是れとて無上の快樂事とも思われず、マアゝゝ児孫を集めて共に戯れ、色々な芸をさせたり嗜きな物を馳走したりして、一家内の長少睦しく互に打解けて談り笑うその談笑の声を一種の音楽として、老余の樂みにして居ます。

妻を娶て九子を生むソレから私方の家事家風を語りましょう。文久元年、旧同藩士の媒妁を以て同藩士族江戸定府土岐太郎八の次女を娶り、是れが今の老妻です。結婚の時私は二十八歳、妻は十七歳、藩制の身分を申せば妻の方は上流士族、私は小士族、少し不釣合のようであるが、血統は兩人共頗る宜しく、往古はイザ知らず、凡そ五世以降双方の家に遺伝病質もなければ忌むべき病に罹りたる先人もなし。妻は無論、私の身に悪疾のあ

るべきようもなく、夫妻無病。文久三年に生れたのが一太郎、その次は捨次郎と、次第に誕生して四男五女、合して九人の子供になり、幸にして九人とも生れたまゝ、皆無事で一人も欠けない。九人の内五人までは母の乳で養い、以下四人は多産の母の身体衛生の爲めに乳母を雇うて育てました。

子供の活動を妨げず養育法は着物よりも食物の方に心を用い、粗服はさせても滋養物は屹と与えるようにして、九人とも幼少の時から体養に不足はない。又その躰方は温和と活潑とを旨とし、大抵の処までは子供の自由に任せる。例えば風呂の湯を熱くして無理に入れるような事はせず、据風呂の側に大きな水桶を置いて、子供の勝手次第に、ぬるくも熱くもさせる。全く自由自在のようなれども、左ればとて食物を勝手に任せて何品でも喰い次第にすると云う訳ではない。又子供の身体の活潑を祈れば室内の装飾などは逆も手に及ばぬ事と覺悟して、障子唐紙を破り諸道具に疵付けても先ず見逃がしにして、大抵な乱暴には大きな声をして叱ることはない。酷く剛情を張るような事があれば、父母の顔色を六かしくして睨む位が頂上で、如何なる場合にも手を下して打たうことは一度もない。又親が実子に向ても嫁に接しても、又兄弟姉妹に対しても名を呼棄にせず、家の中に嚴父慈母の區別なく、嚴と云えば父母共に嚴なり、慈と云えば父母共に慈なり、一家の中

は丸で朋友のようで、今でも小さい孫などは、阿母おつかさんはどうかすると怖いけれども、お祖父じいさんが一番怖くないと云て居る。世間並なみにすると少し甘いように見えるが、ソレでも私方の孫子まごこに限り別段に我儘わがままでもなし、長少戯たわぶれながら長者の真面目に言う事は能く聞て逆う者もないから、余り嚴重にせぬ方が利益かと思われる。

家に秘密事なし又家の中に秘密事なしと云うのが私方の家風で夫婦親子の間に隠す事は無い、ドンな事でも云われないことはない。子供が段々成長して、是れは彼の子に話して此の子には内証なんて、ソんな事は絶えてない。親が子供の不行届とがを咎めて遣れば、子供も亦親またの失策を笑うと云うような次第で、古風な目を以て見ると一寸と尊卑の礼儀がないように見えましよう。

礼儀足らざるが如しその礼儀の事に就て申せば、家の主人が出入するとき家内の者が玄関まで送迎して御辞儀じぎをすると云うような事が能く世間にあるが、私の処では絶えてソんな事がない。私の外出するには玄関からも出れば台所からも出る。帰るときもその通りで唯足の向むいた方に這入はいて来る。或は車に乗て帰て来た時に、車夫又別当共へ、玄関の処で御帰りなんて余計な事を云て呉れるな、と云う訳けであるから、幾ら玄関で怒鳴ても出て来る人はない。その一点になると世間の人じゃない近くは内の御祖母おばばさんが怪んで居ましよう。

この老人は土岐家の後室、本年七十七歳、むかしは奥平藩士の奥様で、武家の礼儀作法を大事に勤めた身であるから、今日の福澤の家風を見て、何分不作法で善くない、左ればとて是れが悪いと云う箇条もない、妙な事だと思て居るだろうと、私は窃に推察します。

子女の間に軽重なしソレから又私に九人の子供があるが、その九人の中に軽重愛憎と云うことは真実一寸ともない。又四男五女のその男の子と女の子と違いのあられよう訳もない。世間では男子が生れると大造目出度がり、女の子でも無病なれば先ずく目出度いなんて、自から軽重があるようだが、コンな馬鹿氣た事はない。娘の子なれば何が悪い、私は九人の子がみんな娘だつて少しも残念と思わぬ。唯今日では男の子が四人、女の子が五人、宜い塩梅に振分けになつてると思ふばかり、男女長少、腹の底から之を愛して兎の毛ほども分隔てはない。道德学者は動もすると世界中の人を相手にして一視同仁なんて大きな事を云てゐるではないか。況して自分の生んだ子供の取扱いに、一視同仁が出来ぬと云うような浅ましい事があられるものか。唯私の考に、総領もその他の子供も同じとは云いながら、私が死ねば総領が相続する、相続すれば自から中心になるから、財産を分配するにも、外の子に比較して一段手厚くして、又何か物があつて、兄弟中誰にも遣りようがない、唯一つしかないと云うような物は、総領の一太郎が取て宜かろうと云うくら

いな事で、その外には何も変ることはない。例えば斯う云う事がある。明治十四、五年の頃、月日は忘れたが、私が日本橋の知る人の家に行て見ると、その座敷に金屏風だの蒔絵だの花活だのゴテく一杯に列べてある。コリヤ何だと聞て見れば、亜米利加に輸出する品だと云う。夫れから私が不図した出来心で、この品を一目見渡して私の欲しいものは一品でもない、皆不用品だが、又入用と云えば一品も残さず皆入用だ、兎に角に之を亜米利加に積出して幾らの金になれば宜いのかソレは知らぬけれども、売ると云えば皆買うが如何だ、買ったからと云てソレを又儲けて売ろうと云うのではない、家に仕舞込んで置くのだと云うと、その主人も唯の素町人でない、成程爾うだな、コリヤ名古屋から来た物であるが、亜米利加に遣て仕舞えば是れ丈けの品がなくなる、お前さんの処に遣れば失くならずにあるから売りましょう、ソンなら皆買うと云て、二千二、三百円かで、何百品あるか碌に品も見ないで皆買って仕舞たが、夫れから私とその品を見て楽しむではなし、品柄も能く知らず数も覚えず、唯邪魔になるばかりだから、五、六年前の事でした、九人の小供に分けて取て仕舞えと申して、小供がワイく寄て、その品を九に分けて、ソレを籤で取て、今では皆小供が銘々に引受けて、家を持て居る者は家に持て行く者もあり、マダ私のところの土蔵の中に入れてあるのもある、と云うのが凡そ私の財産分配法で、如何にもその

子に厚薄と云うものは一寸ちよいともないのでから、小供の中に不平があろうたツて有られた訳わけのものではないと思て居ます。

西洋流の遺言法に感服せず近來遺言も書きました。遺言の事に就つては、能く西洋の話にある主人の死んだ後で遺言書を明けて見てワツと驚いたなんて云う事は毎度きい聞てるが、私は甚はなはだ感服しない。死後に見せることを生前に言うことが出来ないとは可笑おかしい。畢ひつきよう竟きやう西洋人が習慣に迷うて馬鹿をして居るのだ、乃公おれはソンな馬鹿の真似はしないぞと云て、家内子供に遺言の書付を見せて、この遺言書は箆たんす笥きのこの抽斗ひきだしに這入はいて居るから皆能く見て置け、又説またが變れば又書替かきかえて又見せるから、能く見て置おて、乃父おれの死んだ後で争うような卑劣な事をするなよと申して笑わらて居ます。

体育を先にす扱さて又子供の教育法に就つては、私は専もつぱら身体の方を大事にして、幼少の時から強しいて読書などさせない。先まず獸じゆうしん身を成して後に人心を養うと云うのが私の主義であるから、生れて三歳五歳まではいろはの字も見せず、七、八歳にもなれば手習てならいをさせたりさせなかったり、マダ読書はさせない。夫それまでは唯ただ暴れ次第に暴れさせて、唯衣食には能く氣を付けて遣やり、又子供ながらも卑劣な事をしたり賤いやしい言葉を真似たりすれば之これを咎とがむのみ、その外ほかは一切投遣いつさいなげやりにして自由自在にして置くその有様は、犬猫の子を育

てると変わることはない。即ち是れが先ず獸身を成すの法にして、幸に犬猫のように長成して無事無病、八、九歳か十歳にもなればソコで始めて教育の門に入れて、本当に毎日時を定めて修業をさせる。尚おその時にも身体の事は決して等閑にしない。世間の交母は動もすると勉強々と云て、子供が静にして読書すれば之を賞める者が多いが、私方の子供は読書勉強して遂ぞ賞められたことはないのみか、私は反対に之を止めて居る。小供は既に通り過ぎて今は幼少な孫の世話をして居るが、矢張り同様で、年齢不似合に遠足したとか、柔術体操がエラクなつたとか云えば、褒美でも与えて賞めて遣るけれども、本を能く読むと云て賞めたことはない。既に二十年前の事です。長男一太郎と次男捨次郎と兩人を帝国大学の予備門に入れて修学させて居た処が兎角胃が悪くなる。ソレから宅に呼返して色々手当すると次第に宜くなる。宜くなるから又入れると又悪くなる。到頭三度入れて三度失敗した。その時には田中不二麿と云う人が文部の長官をして居たら、田中にも毎度話をしました。私方の小供を予備門に入れて實際の試験があるが、文部学校の教授法をこのまゝにして遣て行けば、生徒を殺すに極て居る。殺さなければ氣狂いになるか、然らざれば身心共に衰弱して半死半生の片輪者になって仕舞うに違いない。丁度この予備門の修業が三、四年かゝる、その間に大学の法が改まるだろうと思つて、ソレ

を便りに子供を予備門に入れて置くが、早く改正して貰いたい。この儘で置くならば東京大学は少年の健康屠殺場と命名して宜しい。早々教授法を改めて貰いたいと、懇意の間柄で遠慮なく話はしたが、何分埒が明かず、子供は相替らず三ヶ月遣て置けば三ヶ月引かして置かなければならぬと云うような訳けで、何としても予備門の修業に堪えず、私も遂に断念して仕舞うて、夫れから此方の塾（慶應義塾なり）に入れて普通の学科を卒業させて、亜米利加に遣て彼の大学の世話になりました。私は日本大学の教科を悪いと云うのではない、けれども教育の仕様が余り嚴重で、荷物が重過ぎるのを恐れて文部大学を避けたのです。その通りで今でも説は変えない、何としても身体が大事だと思います。

子女幼時の記事又私の考に、人間は成長して後に自分の幼年の時の有様を知りたいもので、他人はイザ知らず私が自分で左様思うから、筆まめな事だが私は小供の生立の模様を書いて置きました。この子は何年何月何日何分に産れ、産の難易は云々、幼少の時の健康は斯くく、氣質の強弱、生付きの癖など、ザツと荒増し記してあれば、幼少の時の写真を見ると同様、この書たものを見れば成長の後、第一面白いに違いない、自から又心得になる事もありましょう。私などは不幸にして実父の面も知らず、画像に写したものでなし、又私がドンな子供であつたか母に聞たばかりで書たものはない。少年の時から長老

の人がソナ話をすると耳を傾けて聞いて、唯残念にばかり思うて、独り身の不幸を悲んで居たから、今度は私の番になってこの通りに自分の伝を記して子供の爲めにし、又先年小供の生立の事をも認めて置たから先ず遺憾はない積りです。

三百何十通の手紙又親子の間は愛情一偏で、何ほど年を取ても互に理窟らしい議論は無用の沙汰である。是れは私も妻も全く同説で、親子の間を成る丈に離れぬようにする計り。

例えば先年、長男次男が六年の間亜米利加に行て居ましたその時には、亜米利加の郵船が一週間に大抵一度、時としては二週間に一度と云う位の往復でしたが、小供兩人の在米中、私は何か要用のときは勿論、仮令い用事がなくても毎便必ず手紙を遣らない事はない。

六年の間何でも三百何十通と云う手紙を書きましたが、私が手紙を書放にして家内が校合方になつて封じて遣るから、両親の親筆に相違ない。彼方の小供兩人も飛脚船の

来る度に必ず手紙を寄越す。この事は兩人出発の節堅く申付て、「留学中手紙は毎便必ず

く出せ、用がなければ用がないと云て寄越せ、又學問を勉強して不死半生の色の青い大

學者になつて歸て来るより、筋骨逞しき無學文盲なものになつて歸て来い、その方が余程悦しい。仮初にも無法な事をして勉強し過ぎるな。儉約は何処までも儉約しろ、けれど

も健康に係わると云うほどの病氣か何かの事に付き、金次第で如何にもなると云うことな

らば思い切て金を使え、少しも構わぬからと斯う云うのが私の命令で、ソんな事で六年の間學んで二人とも無事に歸て來ました。

一身の品行、亦自から効力あり又私の内が夫婦親子睦じくて私の行狀が正しいからと云て、特に營める程の事でもない。世の中に品行方正の君子は幾らもある。私も亦、これが人間唯一の目的で一身の品行修まりて能事終るなんて自慢をするような馬鹿でもないと自から信じて居るが、扱又これが妙なもので、社会の交際に関係する所は甚だ廣くて、意外の辺に力を及ぼすことがあるその一例を申せば、旧藩の奥平家に対して私は如何なる者ぞと尋ぬるに、見る影もなき貧小士族が、洋学など修業して異様な説を唱え、或は外国に行き、又或は外国の書を翻譯して大言を吐散らし、剩さえ儒流を輕蔑して憚る所を知らずと云えば、是れは所謂異端外道に違いない。同藩一般の見る所でこの通りなれば、藩主の奥なんぞにはドンな報告が這入て居るか知れない。兎に角に福澤諭吉は大変な奴だと折紙が付て居たに違いない。所が物換り星移り、段々時勢が變遷して王政維新の世の中になつて見れば、藩論も自から面目を改め、世間一般西洋流の喧ましい今日、福澤もマンザラでなし、或は之を近づけて何かの役に立つこともあるうと云うような説がチラホラと湧て來たその時に、嶋津祐太郎と云う奥平家の元老は、頗る事の能く分る、云わば卓識の君子

で、時勢の緩急を視察して、コリヤ福澤を疏外^{そがい}するは不利であると云うことに着眼して居る折柄、奥平家の大奥に芳蓮院^{ほうれんいん}様と云う女隠居がある、この貴婦人は一^{ひとつ}橋家^{とつばし}から奥平家に下^{くだ}て来た由緒ある身分で、最早^{もは}や余程の老年でもあり、一家無上の御方^{おんかたさま}様と崇^{あが}められて居る。ソコで嶋津^{しまづ}が先^まずその御隠居様に対して色々西洋の話をする中に、彼の国には文学武備、富国強兵、医術も精^{くわ}しく航海術も巧^{たくみ}なり、その中には随分^{ずいぶん}日本の風俗習慣に違^{ちが}つた事も数々ありますが、爰^{こゝ}に西洋流義に不思議なるは男女の間柄で、男女相^{あいたがい}互^{がい}に軽重なく、如何^{いか}なる身分の人でも一夫一婦に限^{かぎ}て居ます、是^これ丈^だけは西洋の特色で御座^{ござ}ると云^いう所を持込んだ所が、その御隠居様も若い時には直接に身に覚えがある。この話を聞^きて心を動かさずには居られない。恰^{あた}も豁^{かつ}然^{ぜん}発明^{はつめい}した様子で、ソレから福澤を近づける氣になつて、次第々々に奥向の方に出入の道が開けて、御隠居様を始め所^い謂^わ御上^{おかみじ}通りの人に逢^あうて見れば、福澤の外道^たも唯^{ただ}の人間で、角^つも生えて居なければ尻尾^{しつぽ}のある者でもない、至極^{しごく}穩かな人間だと云う所からして、段々懇親^{こんしん}になつたと云うその話は、程^{ほど}経て後に内々嶋津から聞きました。シテ見ると一夫一婦の説も隠^{いん}然^{ぜん}の中には随分勢力のあるもので、就^つては今の世に多妻の悪弊^{あくへい}を除^{のぞ}いて文明風にするなんと論ずるは野暮^{やぼ}だと云うような説があるけれども、畢^ひ竟^{きやう}負^{まけ}借^{おし}みの苦しい遁^にげ口上^{くじやう}で取るに足らない。一夫一婦の正論

決して野暮やぼでない、世間の多数は同主義で、殊ことに上流の婦人は悉く此方の味方であるから、私の身がこの先き何時いつまで生きて居るか知れぬけれども、有らん限りの力を尽して、前後左右を顧みかえりずドンな奴を敵にしても構わぬ、多妻法を取締めて、少しでもこの人間社会の表面だけでも見られるような風ふうにして遣やらうと思て居ます。

老余の半生

仕官を嫌う由縁私の生涯は終始替しゆうしかわることなく、少年時代の辛苦、老後の安楽、何も珍らしいことはない。今の世界に人間普通の苦楽を嘗なめて、今日に至るまで大に愧はじることもなく大に後悔することもなく、心静こころやすに月日を送りしは、先ずまづ以て身の仕合せしあわせと云わねばならぬ。所で世間は広し、私の苦楽を遠方から見て色々に評論し色々に疑う者もありましょう。就中なかに私がマンザラの馬鹿でもなく政治の事も随分ずいぶん知て居ながら、遂に政府の役人にならぬと云うは可笑おかしい、日本社会の十人は十人、百人は百人、皆立身出世を求めて役人にこそなりたがるその処ところに、福澤が一人これをいやがるのは不審だと、蔭で窃かげひそに評論する計ばかりでない、現に直接に私に向て質問する者もある。啻ただに日本人ばかりでない、知己の外

国人も私の進退を疑い、何故政府に出て仕事をせぬか、政府の好地位に立て思う事を行えば、名誉にも為り金にも為り、面白いではないかと、米国人などは毎度勧めに來たことがあるけれども、私は唯笑て取合わぬ。ソコで維新の当分は政府の連中が私を評して佐幕家の一人と認め、彼れは旧幕府に操を立て、新政府に仕官せぬ者である、將軍政治を悦んで王政を嫌う者である、古來、革命の歴史に前朝の遺臣と云う者があるが、福澤もその遺臣を氣取て、物外に瓢然として居ながら心中無限の不平を抱いて居るに違いない、心に不平があれば新政府の爲めに宜いことは考えない、油断のならぬ奴だなんて、種々様々な想像を運らして居る者の多いのは、私も大抵知て居る。所が斯く評せらるゝ前朝の遺臣殿は、久しい以前から前朝の門閥制度、鎖国主義に愛想をつかして、維新の際に幕府の忠臣義士が盛んに忠義論を論じて佐幕の氣焰を吐て脱走までする時に、私は強て議論もせず、脱走連中に知て居る者があれば、余計な事をするな、負けるから罷にしろと云て止めて居た位だから、福澤を評するに前朝の遺臣論も勘定が合わぬ。前朝の遺臣と云えば維新の時に幕府の忠臣義士こそ丁度適當の嵌役なれども、この忠臣義士は前朝に忠義の一役を勤めて何時の間にか早替り、第二の忠義役を勤めて第二の忠臣義士となつて居るから、是れも遺臣と云われぬ。その遺臣論は姑く擱き、私の身の進退は、前に申す通り、維新の

際に幕府の門閥制度、鎖国主義が腹の底から嫌だから佐幕の気がない。左ればとて勤王家の挙動を見れば、幕府に較べてお釣りの出る程の鎖国攘夷、固よりコンな連中に加勢しようと思ひも寄らず、唯ジツと中立独立と説を極めて居ると、今度の新政府は開国に豹変した様子で立派な命令は出たけれども、開国の名義中、鎖攘タツプリ、何が何やら少しも信ずるに足らず、東西南北何れを見ても共に語るべき人は一人もなし、唯独りで身に叶う丈けの事を勤めて開国一偏、西洋文明の一天張りでリキンで居る内に、政府の開国論が次第々々に真成のものになって来て、一切万事改進ならざるはなし、所謂文明駸々乎として進歩するの世の中になったこそ実に有り難い仕合せで、実に不思議な事で、云わば私の大願も成就したようなものだから、最早や一点の不平は云われない。

問題更らに起るソコで私の身の進退に就ても更らに問題が起る。是れまで新政府に出身しなかつたのは、政府が鎖国攘夷の主義であるから之を嫌うたのだ、仮令い開国と触出してもその内実は鎖攘の根性、信ずるに足らずと見縊たのである、然るに政府の方針がいよゝゝ開国文明と決して着々事実に顕わるゝに於ては、官界に力を尽して政府人と共に文明の国事を経営するこそ本意ではないかと世間の人の思うのは、一寸と尤ものように見えるが、この一段になつてもマダ私に動く気がない。

殻威張の群に入るべからず従前曾て人に語らず、又語る必要もないから黙て居て、内の妻
子も本当に知りますまいが、私の本心に於て何としても仕官が出来られないその真面目を
丸出しに申せば、第一、政府がその方針を開国文明と決定して大に国事を改革すると同時
に、役人達が国民に対して無暗に威張る、その威張るのも行政上の威厳と云えば自から理
由もあるが、實際は爾うでない、唯殻威張をして喜んで居る。例えば位記などは王政維
新、文明の政治と共に罷めそうなことを罷めずに、人間の身に妙な金箔を着けるような事
をして、日本国中いらざる処に上下貴賤の区別を立て、役人と人民と人種の違うような
細工をして居る。既に政府が貴いと云えば政府に入る人も自然に貴くなる、貴くなれば自
然に威張るようになる、その威張りは即ち殻威張で、誠に宜しくないと知りながら、何も
蚊も自然の勢で、役人の仲間になれば何時の間にか共に殻威張を遣るようになり行く。然
かのみならず、自分より下に向て威張れば上に向ては威張られる。鼯こつこ鼠こつこ、実
に馬鹿らしくて面白くない。政府に這入りさえねば馬鹿者の威張るのを唯見物して唯笑
て居る計りなれども、今の日本の風潮で、役人の仲間になれば、仮令い最上の好地位に居
ても兎に角に殻威張と名づくる醜体を犯さねばならぬ。是れが私の性質に於て出来
ない。

身の不品行は人種を殊にするが如し之を第一として、第二には甚だ申し憎いことだが、役人全体の風儀を見るに気品が高くない。その平生美衣美食、大きな邸宅に住居して散財の法も奇麗で、万事万端思切りが能くて、世に処し政を料理するにも卑劣でない、至極面白く、白き風であるが、何分にも支那流の磊落を氣取て一身の私を慎しむことに氣が付かぬ。動もすれば酒を飲んで婦人に戯れ、肉慾を以て無上の快樂事として居るように見える。家の内外に妾などを飼うて、多妻の罪を犯しながら恥かしいとも思わず、その惡事を隠そうともせずに横風な顔をして居るのは、一方に西洋文明の新事業を行い、他の一方には和漢の旧醜體を学ぶものと云わねばならぬ。ダカラ外の事を差置てこの一点に就て見れば、何だか一段下等下人種のように見える。是れも世の中の流俗として遠方から眺めて居れば左まで憎らしくもなく又咎めようとも思わぬ、時に往來して用事も語り談笑妨げなければ、とも、扱ひよくこの人種の仲間になつて一つ竈の飯を喰ひ本當に親しく近くなろうと云うには、何処となく穢なように汚れたように思われてツイ嫌になる。是れは私の潔癖でも云うようなもので、全体を申せば度量の狭いのでしょうか、何分にも生れつきの性質とあれば仕方がない。

忠臣義士の浮薄を厭う第三、幕末に勤王佐幕の二派が東西に立分れて居るその時に、私

は唯^{ただ}古来の門閥制度が嫌い、鎖国攘夷が嫌いばかりで、固^{もと}より幕府に感服せぬのみか、コンな政府は潰^{つぶ}して仕舞^{しま}うが宜^よいと不断^{きえん}氣焰^{はい}を吐^はて居たが、左^さればとて勤王連の様を見れば、鎖攘論は幕府に較べて一段も二段も劇^{はげ}しいから、固よりコンな連中に心を寄せる筈^{はず}はない。唯黙^{もく}つて傍觀^{ぼうくわん}して居る中に維新の騒動^{さうどう}になつて、徳川將軍は逃^{かえ}げて歸^{かえ}て來た。スルと幕府の人は勿^{もちろん}論^{ろん}、諸方の佐幕連が中々^{やかま}喧^{けん}しくなつて議論百出、東照神君三百年の遺業は一朝にして棄^すつべからず、三百年の君恩は臣子の身として忘るべからず、薩長何者ぞ、唯^こ是^これ関ヶ原の降参武士のみ、常々たる三河譜代^{みかわ}の八万騎、何の面目あれば彼の降参武士に膝を届すべきやなんて、大造^{たいそう}な劍幕で、薩長の賊軍を東海道に邀^{むか}え撃^うんとする者もあれば、軍艦^{もつ}を以て脱走する者もあり、策士論客は將軍に謁^{えつ}して一戦の奮発を促^うがし、諫^{かん}争^{そう}の極^{きよく}聲^{こゑ}を放^{はな}つて号泣するなんぞは、如何^{いか}にもエライ有様^{ありさま}で、忠臣義士の共進会であつたが、その忠義論もトウ／＼行われずに幕府がい／＼解散になると、忠臣義士は軍艦^{のつ}に乗^のて箱館^{はこ}に居る者もあれば、陸兵を指揮して東北地方に戦^{いくさ}う者もあり、又はプリ／＼立腹して静岡の方に行く者もあるその中で、忠義心の堅い者は東京を賊地^{いづ}と云て、東京で出來た物は菓子も喰^くわぬ、夜分寝る時にも東京の方は頭にせぬ、東京の話をすれば口^{くち}が汚^けれる、話を聞けば耳^{みみ}が汚^けれると云^いう塩梅^{あんばい}式^{しき}は、丸で今世の伯夷^{はくゐ}、叔^{しゅく}齊^{せい}、静岡^{しずく}は恰^{あた}も明治初年

の首陽山しゅやうざんであつたのは凄まじい。所が一年立ち二年立つ中に、その伯夷、叔齊殿が首陽山に蕨の乏しいのを感じたか、ソロ／＼山の麓ふもとに下りて、賊地の方にノツソリ首を出すのみか、身体からだを丸出まるだしにして新政府に出身、海陸の脱走人も静岡行の伯夷、叔齊も、猫も杓しやくし子も政府の辺に群れ集あつまつて、以前の賊徒今の官員衆に謁見、是れは初めて御目おめに掛るとも云われまい、兼て御存じの日本臣民で御座ると云うような調子で、君子は既往を語らず、前言ぜんげん前行ぜんこうは唯戯ただわづれのみと、双方打解けて波風なみかぜなく治まりの付たのは誠に目出度めでたい、何も咎立とがめてするにも及ばぬようだが、私には少し説がある。抑も王政維新あらしの争そが、政治主義の異同おこつから起て、例えば勤王家は鎖国攘夷を主張し、佐幕家は開国改進を唱えて、遂に幕府の敗北と為り、その後に至て勤王家も大に悟りて開国主義に變じ、恰も佐幕家の宿論に投ずるが故に、之と共に爾後しごの方針を与にすると云えば至極しごく尤もに聞ゆれども、當時の争に開鎖など云う主義の沙汰さたは少しもない。佐幕家の進退は一切いっさい万事、君臣の名分から割出して、徳川三百年の天下云々と争いながら、その天下が無くなつたら争の点も無くなつて平氣の平左衛門とは可笑おかしい。ソレも理窟の分らぬ小輩ならば固より宜しいが、争論の發起人しきで頻りに忠義論を唱えて伯夷はくい叔齊しゆくせいを氣取り、又はその身躬みみずから脱走して世の中を騒がした人達の氣が知れない。勝負は時の運に由る、負けても恥かしいことはない、

議論が中らなかつても構わないが、遣傷なつたらその身の不運と諦らめて、山に引込むか、寺の坊主にでもなつて、生涯を送れば宜いと思えども、中々以て坊主どころか、洒蛙々々と高い役人になつて嬉しがつて居るのが私の氣に喰わぬ。扱々忠臣義士も当てにならぬ、君臣主従の名分論も浮気なものだ、コンな薄べらな人間と伍を為すよりも独りで居る方が心持が宜いと説を極めて、初一念を守り、政治の事は一切人に任せて、自分は自分だけの事を勉めるように身構えをしました。実は私の身の上に何も縁のないことで、入らざるお世話のようだが、前後の事情を能く知て居るから、忠臣義士の成行を見るとツイ氣の毒になつて、意氣地なしのように腰拔のように、思うまいと思ても思われて堪らない。全く私の癩癩でしようが、是れも自然に私の功名心を淡泊にさせた原因であろうと思われます。

独立の手法を示さんとす第四には、勤王佐幕など云う喧しい議論は差置き、維新政府の基礎が定まると、日本国中の士族は無論、百姓の子も町人の弟も、少しばかり文字でも分る奴は皆役人になりたいと云う。仮令い役人にならぬでも、兎に角に政府に近づいて何か金儲でもしようと思ふ熱心で、その有様は臭い物に蠅のたかるようだ。全国の人民、政府に依らねば身を立てる処のないように思つて、一身独立と云う考は少しもない。偶ま外国

修業の書生などが帰て来て、僕は畢生^{ひつせい}独立の覚悟で政府仕官は思いも寄らぬ、なんかんと鹿^{しか}爪^{つめ}らしく私方へ来て満腹の気焰^{きえん}を吐く者は幾らもある。私は最初から当てにせずに宜^いい加減に聞流して居ると、その独立先生が久しく見えぬ。スルと後に聞けばその男はチヤンと何省の書記官に為^なり、運の好^いい奴は地方官になつて居ると云うような風で、何も之^{これ}を咎^{とが}めるではない、人々の進退はその人の自由自在なれども、全国の人が唯^{ただ}政府の一方を目的にして外^{ほか}に立身の道なしと思^{おも}込んで居るのは、畢^{ひつきよう}竟漢学教育の余弊で、所謂^{いわゆる}宿^{しゆくせき}昔青雲の志と云うことが先祖以来の遺伝に存して居る一種の迷^{まよひ}である。今この迷を醒^さまして文明独立の本義を知らせようとするには、天下一人でもその真実の手本を見せたい、亦自^{まねのず}からその方針に向う者もあるだろう、一国の独立は国民の独立心から湧^わて出ることだ、国中を挙げて古風の奴隸根性では逆^{とて}も国が持てない、出来ることか出来ないことかソんな事に躊躇^{ちゆうちよ}せず、自分がその手本になつて見ようと思^{おも}付き、人間万事無頓着^{むとんじやく}と覚悟を定^きめて、唯独立独歩と安心決^{けつじよう}定したから、政府に依りすぎる気もない、役人達に頼む気もない。貧乏すれば金を使わない、金が出来れば自分の勝手に使う。人に交わるには出来る丈^だけの誠を尽して交わる、ソレでも忌^{いや}と云^いえば交わつて呉^くれなくても宜^{よろ}しい。客を招待すれば此方^{こち}の家風の通りに心を用いて饗応する、その風が嫌いなら来て呉^くれなく

ても苦しくない。此方こつちの身に叶う丈だけを尽して、ソレから上は先方の領分だ。誉めるなり譏そしるなり喜ぶなり怒いかるなり勝手次第にしろ、誉められて左さまで歎なげびもせず、譏そしられて左まで腹も立てず、いよく気が合わねば遠くに離れて附合ばかわぬ計りだ。一切いっさい万事、人にも物にもぶら下らずに、云いわば捨身いになつて世の中を渡るとチャンと説を定めて居るから、何としても政府へ仕官などは出来ない。この流儀が果して世の中の手本になつて宜いい事か、悪い事か、ソレも無頓着むとんじやくだ、宜よければ甚はなだ宜よろしい、悪るければソレまでの事だ、その先さきまで責任を脊負せおい込もうとは思いません。

右の通り条目を並べて第一から第四まで述のべ立て、見れば、私の政府に出ないのは初めからチャンと理窟きを定めて箇様々と自から自分を束縛してあるように見えるが、実はソレホド窮窟わな訳ではない、ソレホド六むすかしい事でもない。唯ただ今日これを筆記して人に分るようにしようとするには、話に順序がなくては叶わぬ。ソコで久しい前年から今日に至るまで、物に触れ事に当り、人と談論した事などを思出して、彼の時はア、であつた、この時は斯こうであつたと、記憶中に往来するものを取集めて見ると、前に記した通りになる。詰つまる所、私は政治の事を軽く見て熱心でないのが政界に近づかぬ原因でしょう。喩たとえば人の性質けいしやうに下戸上戸げこじやうこがあつて、下戸は酒屋に入らず上戸は餅屋に近づかぬと云いう位のもの

で、政府が酒屋なら私は政事の下戸でしょう。

政治の診察医にして開業医に非ずとは云うものゝ、私が政治の事を全く知らぬではない、口に談論もすれば紙に書きもする。但し談論書記する計りで、自からその事に当らうと思わぬその趣は、恰も診察医が病を診断してその病を療治しようとも思わず、又事実^{おひ}に於て療治する腕もないようなものでしょうが、病床の療治は皆無素人でも、時としては診察医も役に立つことがある。ダカラ世間の人も私の政治診断書を見て、是れは本^こ当の開業医で療治が出来るだろう、病家を求めるだろうと推察するのは大間違いの沙汰^{さた}です。

明治十四年の政変この事に就^つ一寸と語りますが、明治十四年の頃、日本の政治社会に大騒動^{おこつ}が起て、私の身にも大笑いな珍事が出来ました。明治十三年の冬、時の執政^{せつせい}大隈、伊藤^{いとう}、井上^{いのうえ}の三人から私方に何か申して参^{まい}て、或る処に面会して見ると、何か公報のよう^{いとう}な官報のような新聞紙を起すから私に担任して呉^くれろと云う。一向趣意^{しゆい}が分らぬから先ず御免と申して去ると、その後度々^{たびたび}人の往復を重ねて話が濃くなり、とうとう仕舞^{しまい}に、政府はいよく国会を開く積りでその用意^たの爲めに新聞紙も起す事であると秘密を明かしたから、是れは近頃面白い話だ、ソんな事なら考え直して新聞紙も引受けようと凡^{およ}そ約束は出来たが、マダ何時^{いつ}からと云う期日は定まらずに、そのまゝに年も明けて明治十四年と

為^なり、十四年も春去^{しゆんきよしゆうらい}秋来^{とん}、頓^{とん}と埒^{らち}の明かぬ様子なれども、此方^{こつち}も左^さまで急ぐ事でないから打遣^{うちやつ}て置く中に、何か政府中に議論が生じた見え、以前至極^{しごく}同主義でありし隈伊井の三人が漸^{ようや}く不和になつて、その果ては大隈^{おおくま}が辞職^{さき}することになりました。扱^{さて}大隈の辞職は左^さまで驚くに足らず、大臣の進退は毎度珍らしくもない事であるが、この辞職の一条が福澤にまで影響して来たのが大笑いだ。当時の政府の騒ぎは中々一通りでない。政府が動けば政界の小輩も皆動揺して、随^{したがつ}て又種々様々の風聞を製造する者も多いその風聞の一、二を申せば、全体大隈と云うは専横な男で、様々に事を企てるその後^{うしろ}には、福澤が居て謀主になつてゐるその上に、三菱の岩崎弥太郎^{いわさきやたらう}が金主になつて既^{すで}に三十万円の大金を出したそうだなんて、馬鹿な茶番狂言の筋書見たような事を触廻^{ふれま}わして、ソレから大隈の辞職と共に政府の大方針が定まり、国会開設は明治二十三年と予約して色々の改革を施す中にも、従前の教育法を改めて所謂^{いわゆる}儒教主義を復活せしめ、文部省も一時妙な風^{ふう}になつて来て、その風^{ふう}が全国の隅々までも靡^{なび}かして、十何年後の今日に至るまで政府の人もその始末に当惑して居るでしょう。凡^{およ}そ当時の政変は政府人の発狂とでも云^いうような有様^{ありさま}で、私はその後岩倉^{いわくら}から度々^{たびたび}呼びに来て、ソツと裏の茶室のような処で面会、主人公は何かエライ心配な様子で、この度の一件は政府中、実に容易ならぬ動揺である、西南戦争の

時にも随分苦勞したが、今度の始末はソレよりも六かしいなんかと話すのを聞けば、余程騒いだものと察しられる。実に馬鹿氣たことで、政府は明治二十三年、国会開設と国民に約束して、十年後には饗応すると云て案内状を出したようなものだ、所がその十年の間に客人の氣に入らぬ事ばかり仕向けて、人を捕えて牢に入れたり東京の外に逐出したり、マダ夫れでも足らずに、役人達はむかしの大名公卿の真似をして華族になって、是れ見よがしに殻威張を遣て居るから、天下の人はます／＼腹を立てゝ暴れ廻る。何の事はない饗応の主人と客とマダ顔も合わせぬ先きに角突合いになつて居るから可笑しい。十四年の真面目の事實は、私が詳に記して家に蔵めてあるけれども、今更ら人の忌がる事を公けにするでもなし黙て居ますが、そのとき私は寺島と極惡意だから何も蚊も話して聞かせて、「ドウダイ僕が今、口まめに饒舌つて廻ると政府の中に随分困る奴が出来るかと云うと、寺島も始めて聞いて驚き、「成程そうだ、政治上の魂胆は随分穢いものとは云いながら、是れはアンマリ酷い。少し振くつて遣ても宜いじゃないかと、態と勧めるような風であつたけれども、私は夫れ程に思わぬ、「御同前に年はモウ四十以上ではないか、先ず／＼ソナ無益な殺生は罷にしよう」と云て、笑て分れたことがある。

保安条例コンな訳で、私は十四年の政變のその時から、何も實際に關係はない、俗界に云

う政治上の野心など思おもいも寄らぬ事だから誠に平気で、唯他人のドタバタするのを見物して居るけれども、政府の目を以てこの見物人を見れば、又不思議なもので、色々な姿に写る見える。明治何年か保安条例の出したとき、私もこの条例の科人とがにんになって東京を逐出おいだされると云う風聞。ソレはその時塾に居た小野友次郎が警視庁に懇意こんいの人があつて、極内々その事を聞出して、私と同時に後藤象次郎も共に放逐ほうちくと確たしかに云うから、「十二殺されるではなし、イザと云えば川崎辺まで出て行けば宜いと申して居る中、その翌日か翌々日か小野が又来て、前の事は取消しになったと云うので事は済すみました。又その後明治二十年頃かと思う、井上角五郎が朝鮮で何とやらしたと云うので捕とらえられて、その時の騒動と云うものは大變で、警察の役人が来て私方の家搜しサ。夫それから井上が何か吟味に逢うて、福澤諭吉に証人になつて出て来いと云て、私を態々裁判所に呼出して、タワイもない事を散々尋たずね、ドウかしたら福澤も科人の仲間にしたいと云うような風が見えました。都てコンな事は唯大間違で、私の身には何ともない。却て世の中の人心の動くその運動の方向緩急を視察して面白く思て居るが、又一步を進めて虚心平氣に考うれば、私が兎角政界の人に疑われると云うのも全く無理はない。第一私は何としても役人になる気がない、是れは世間に例の少ない事で、仕官流行、熱中奔走の世の中に、独りこれが嫌いひとと云えば、

一寸と見て不審を起さねばならぬ。ソレもいよく官途に気がないとならば田舎にでも引込んで仕舞えば宜いに、都会の真中に居て然かも多くの人に交際して、口も達者に筆もまめに、洒蛙々と饒舌たり書たりするから、世間の目に触れ易く、随て人に不審を懷かせるのも自然の勢である。

一片の論説能く天下の人心を動かす之を第一として、モ一つ本当の事を云うと、私の言論を以て政治社会に多少の影響を及ぼしたこともありましよう。例えば是れまで頓と人の知らぬ事で面白い話がある。明治十年、西南の戦争も片付て後、世の中は静になって、人間が却て無事に苦しむと云うとき、私が不図思付て、是れは国会論を論じたら天下に応ずる者もあろう、随分面白かろうと思て、ソレからその論説を起草して、マダその時には時事新報と云うものはなかったから、報知新聞の主筆藤田茂吉、箕浦勝人にその草稿を見せて、「この論説は新聞の社説として出されるなら出して見なさい、屹と世間の人が悦ぶに違いない。但しこの草稿のまゝに印刷すると、文章の癖が見えて福澤の筆と云うことが分るから、文章の趣意は無論、字句までも原稿の通りにして、唯意味のない妨げにならぬ処をお前達の思う通りに直して、試みに出して御覧。世間で何と受けるか、面白いではないかと云うと、年の若い元気の宜い藤田、箕浦だから、大に悦んで草稿を持って帰て、

早速報知新聞の社説に戴せました。当時、世の中にマダ国会論の勢力のない時ですから、この社説が果して人氣に投ずるやら、又は何でもない事になって仕舞うやら、頓と見込みが付かぬ。凡そ一週間ばかり毎日のように社説欄内を填めて、又藤田、箕浦が筆を加えて東京の同業者を煽動するように書立て、世間の形勢如何と見て居た所が、不思議なる哉、凡そ二、三ヶ月も経つと、東京市中の諸新聞は無論、田舎の方にも段々議論が喧しくなつて来て、遂には例の地方の有志者が国会開設請願なんて東京に出て来るような騒ぎになつて来たのは、面白くもあれば、又ヒヨイと考直して見れば、仮令い文明進歩の方針とは云いながら、直に自分の身に必要がなければ物数寄と云わねばならぬその物数寄な政治論を吐て、図らずも天下の大騒ぎになつて、サア留めどころがない、恰も秋の枯野に自分が火を付けて自分で当惑するやうなものと、少し怖くなりました。併し国会論の種は維新の時から蒔てあつて、明治の初年にも民選議院云々の説もあり、その後とても毎度同様の主義を唱えた人も多い。ソナな事が深い永い原因に違ひはないけれども、不図した事で私が筆を執て、事の必要なる理由を論じて喋々 啗々 数千言、啗んでくゝめるように言て聞かせた跡で、間もなく天下の輿論が一時に持上て来たから、如何しても報知新聞の論説が一寸と導火になつて居ましよう、その社説の年月を忘れたから 先達

箕浦^{みのうら}に面会、昔話をして新聞の事を尋ねて見れば、同人もチャンと覚えて居て、その後古い報知新聞を貸して呉^くれて、中を見ると明治十二年の七月二十九日から八月十日頃まで長々と書^{かき}並べて、一寸と辻褄^{つじつま}が合^{あつ}て居ます。是^これが今の帝国議會を開^たく為^{ため}の加勢^{かぜ}になったかと思えば自分でも可笑^{おか}しい。シテ見ると先^{さき}きの明治十四年の騒動に、福澤が政治に關係するなんかんと云^いわれて、その後も兎角^{とかく}私の身に目を着ける者が多くて色々に怪しまれたのも、直接に身に覚えのない事とは云^いいながら、間接には自^{おのず}から因縁のないではない。国会開設、改進^{かじん}々歩^ぽが国の為^{ため}に利益なればこそ善^よけれ、是^これが實際の不利益ならば、私は現世の罪は免^{まぬ}かれても死後閻魔^{えんま}の庁^{ひと}で酷^{ひど}い目に逢^あう筈^{はず}でしょう。報知新聞の一件ばかりでない、政治上に就^つて私の言行は都^{すべ}てコンな塩梅^{あんばい}式^{しき}で、自分の身の私に利害はない所^{いわけ}謂^る診察医^{かんがえ}の考^{かんがえ}で、政府の地位を占めて自^{みず}から政權を振廻^{ふりま}わして天下の治療をしようと云う了簡^{りょうかん}はないが、如何^{どう}でもして国民一般を文明開化の門に入れて、この日本国を兵力の強い商売繁昌^{しょうばいはんちやう}する大国にして見たいと計^{ばか}り、夫^それが大本願で、自分独り自分の身に叶^だうだけの事をして、政界の人に交際すればとて、誰に逢^あうても何ともない、別段に頼^{たの}むこともなければ相談することもない、貧富苦楽、独り分に安^{やす}んじて平気で居^{かんがえ}るから、考^{かんがえ}の違^{ちが}う役人達^{やくにん}が私の平生を見たり聞^きいたりして変に思^{おも}うたのも決して無理でない、けれども眞実に於^おて

私は政府に対して少しも怨^{うらみ}はない、役人達にも悪い人と思う者は一人もない、是^これが封建門閥の時代に私の流儀にして居たらば、ソレこそ如何^{いか}なる憂^{あつ}き目に逢^{あつ}て居るか知れない。今日安全に寿命を永くして居るのは明治政府の法律^{たまたものおもつ}の賜^{あつ}と思^{おも}て喜んで居ます。

時事新報ソレから明治十五年に時事新報と云^いう新聞紙を発^{はつ}起^{おこ}しました。丁^{ちやうど}度十四年政府變動の後で、慶應義塾先進の人達が私方^{わたし}に來^きて頻^{しき}りにこの事を勧^{すす}める。私も亦^{また}自分で考^{かん}えて見るに、世の中の形勢は次第に變化して、政治の事も商売の事も日々夜々運動の最中、相互^{あいたがい}に敵味方が出來て議論は次第に喧^{かまびす}しくなるに違^{ちが}ひない。既^{すで}に前年の政変も孰^{いづ}れが是^{これ}か非^ひかソレは差置^{さしお}き、双方主義の相違^{さうび}で喧嘩をしたことである。政治上に喧嘩が起れば經濟商売上にも同様の事が起らねばならぬ。今後はいよくますます^{はなは}甚^{はなは}だしい事になるであらう。この時に當て必要なるは所謂^{いわけ}不偏不党の説であるが、扨^{さて}その不偏不党とは口でこそ言え、口に言いながら心に偏^{へん}する所があつて一身の利害に引かれては逆^{とて}も公平の説を立てる事が出來ない。ソコで今全国中に聊^{いささ}かながら獨立の生計^なを成^なして多少の文思^{ぶんし}もありながら、その身は政治上にも商売上にも野心なくして恰^{あたか}も物外に超然たる者は、※呼^{おこ}がましくも自分の外^{ほか}に適當の人物が少なからうと心の中に自問自答して、遂^{つい}に決心して新事業に着手^{すなわ}したものが即^{すなわ}ち時事新報です。既^{すで}に決斷した上は友人中これを止^とめる者もありしが、

一切取合いっさいわらず、新聞紙の発売数が多かろうと少なかろうと他人の世話になろうと思わず、この事を起すも自力なれば倒すも自力なり、仮令たとい失敗して廃刊しても一身一家の生計を變あらずるに非ず、又自分の不名誉とも思わず、起すと同時に倒すの覚悟を以て、世間の風潮に頓とん着じゃくなしに今日までも首尾能く遣て来たことですが、畢竟ひつきよう私の安心決定けつじようとは申しながら、その実は私の朋友には正直有為ゆういの君子が多くて、何事を打任せても間違などは云いう忌いやな心配は聊いささかもない。発行の当分、何年の間は中上川彦次郎なかみがわひこじろうが引受け、その後は伊藤欽亮いとうきんすけ、今は次男の捨次郎すてじろうが之に任じ、會計は本山彦一もとやまひこいち、次で坂田実さかたみのる、今は戸張志智之助等とばりしちのすけが専ら担任して居ますが、私の性質として金銭出納の細目を聞きたこともなく、見たこともなく、その人々のするがまゝに任かせて置おいて、曾かつて一度も變な間違の出来たことはない。誠に安心氣樂なものです。コンな事が新聞事業の永續する訳わけけでしょう。又編輯へんしゅうの方に就つて申せば、私の持論に、執筆者は勇を鼓こして自由自在に書くべし、他人の事を論じ他人の身を評するには、自分とその人と両々相対あいたいして直接に語られるような事に限りて、それ以外に逸すべからず、如何いかなる劇論、如何なる大言壯語も苦しからねど、新聞紙に之を記すのみにて、扱さその相手の人に面会したとき自分の良心に愧はじて率直に陳のべることの叶かわぬ事を書て居ながら、遠方から知らぬ風をして恰あたも逃げて廻わ

るようなものは、之を名づけて蔭弁慶かげべんけいの筆と云う、その蔭弁慶こそ無責任の空論なと為り、罵言ばりごん讒謗ざんぼうの毒筆なと為る、君子の愧はずべき所なりと常に警いましめて居ます。併しかし私も次第に年をとり、何時いつまでもコンな事に勉強するでもなし、老余は成る丈たけ閑静に日を送る積りで、新聞紙の事も若い者に譲り渡して段々遠くなつて、紙上の論説なども石河幹明いしかわみきあき、北川きたが礼弼れいすけ、堀江帰一ほりえきいちなどが専ら執筆して、私は時々立案してその出来た文章を見て一寸ちよい々々加筆する位にして居ます。

事を為すに極端を想像すさて扨さてこれまで長々と話を続けて、私の一身の事、又私に係した世の中の事をも語りましたが、私の生涯中に一番骨を折たのは著書おつ翻ほん訳やくの事業で、是れには中々話が多いが、その次第は本年再版した福澤全集の緒言ちよげんに記してあれば之これを略し、著訳の事を別にして、元来がんらい私が家に居おり世に処するの法を一括して手短てみじかに申せば、都て事の極端を想像して覚悟を定め、マサカの時に狼狽ろうばいせぬように後悔せぬようにと計りばか考えて居ます。生きて居る身はいつ何時なんどき死ぬかも知れぬから、その死ぬ時に落付おちついて静にしよう云うのは誰も考えて居ましょう。夫れと同様に、例えば私が自身自家の経済に就つては、何としても他人に対して不義理はせぬと心に決けつじよう定して居るから、危い事を犯すことが出来ない。斯こうすれば利益がある、爾そうすれば金が出るなど云いつても、危険を犯して

失敗したときには必ず狼狽ろうばいすることがあろう、後悔おもつすることがあろうと思つて、手を出ることが出来ない。金を得て金を使うよりも、金がなければ使わずに居る。按摩あんぶく按腹あんぷくをしなくても餓えて死ぬ氣遣きづかいはない、粗衣粗食などに閉口する男でないと力身りきみこ込んで居るような訳わけで、私が經濟上に不活澆かつぱつなのは失敗の極端を恐れて鈍くして居るのですが、その外ほか直接に一身の不義理にならぬ事に就ては必ずしも不活澆でない。トブの詰り遣やりそこ傷やなつても自身独立の主義に妨げのない限りは颯々さつさつと遣やります。例えば慶應義塾を開いて何十年來様々変化は多い。時としては生徒の減ることもあれば増ふえることもある。唯ただ生徒ばかりでない、會計上からして教員の不足することも度々たびたびでしたが、ソんな時にも払は少しも狼狽ろうばいしない。生徒が散ずれば散ずるまゝにして置け、教員が出て行くなら行くまゝにして留めるな、生徒散じ教員去さつて塾が空屋あきやになれば、残る者は乃公一人おれだ、ソコで一人の根氣で教えられる丈だけの生徒を相手に自分が教授して遣やる、ソレも生徒がなければ強しいて教授しようとは云いわぬ、福澤諭吉は大塾ひらいを開て天下の子弟を教えねばならぬと人に約束したことはない、塾の盛衰に氣を揉もむような馬鹿はせぬと、腹の底に極端の覺悟きを定めて、塾ひつを開たその時から、何時なんどきでもこの塾を潰つぶして仕舞しまうと始終しじゅう考えて居るから、少しも怖いものはない。平生は塾務を大切にして一生懸命に勉強もすれば心配もすれども、本当に私の心

事の真面目しんめんもくを申せば、この勉強心配は浮世の戯れ、仮りの相ですから、勉めながらも誠に安気です。近日は又慶應義塾の維持たの爲めとて、本塾出身の先進輩しんしんが頻りに資金を募集して居ます。是れが出来れば斯道このみちの爲めに誠に有益な事で、私も大に喜びますが、果して出来るか出来ないか、私は唯静ただずかにして見て居ます。又時事新報の事も同様、最初から是非とも永續させねばならぬと誓ちかを立てた訳わけでもなし、或は倒れることもあるう、その時に後悔せぬようにと覚悟をして居るから、是れも左までの心配にならぬ。又私の著訳書に他人の序文を求めたことのないのも矢張り同じ趣意しゆいであると申すは、人の序文題字などを以て出版書の信用を増すは自おのから名誉でもあるうが、内実は発売を多くせんとするの計略と云いても宜よろしい。所が私の考かんは左様そうでない。自分の著訳書が世間に流行すれば宜よいと固もとより心の中に願ねがいながらも、又一方から考かんえて是れが全く売れなくても後悔はしないと、例の極端を覚悟して居るから、実際の役にも立たぬ余計な文字もんじを人に書かいて貰もらつたことはない。又他人に交わるの法もこの筆法に従い、私は若い時からドチラかと云いえば出しやばる方で、交際の広い癖に、遂ついぞ人と喧嘩をしたこともない。親友も甚はなはだ多いが、この交際に就ついても矢張り極端説は忘れない。今日までこの通りに仲好く附つき合あはして居るが、先方の人がいっ何なん時ど変心せぬと云いう請合むすは六かしい。若し左様なれば交際は罷やめなければならぬ。交際

を罷めても此方の身に害を加えぬ限りは相手の人を憎むには及ばぬ、唯近づかぬようにする計りだ。コンな事で朋友が一人なくなり二人なくなり次第に淋しくなつて、自分独り孤立するようになってても苦しくない、決して後悔しない、自分の節を屈して好かぬ交際は求めずと、少年の時から今に至るまでチャンと説は極めてありながら、現実には頓とソンの必要はない。生来六十余年の間に、知る人の数は何千も何万もあるその中で、誰と喧嘩したことも義絶したこともないのが面白い。都て斯う云う塩梅式で、私の流儀は仕事をするにも朋友に交わるにも、最初から棄身になつて取て掛り、仮令い失敗しても苦しからずと、浮世の事を軽く視ると同時に一身の独立を重んじ、人間万事、停滯せぬようにと心の養生をして参れば、世を渡るに左までの困難もなく、安氣に今日まで消光して来ました。身体の養生扱又心の養生法は右の如しとして、身の養生は如何だと申すに、私の身に極めて宜しくない極めて赤面すべき悪癖は、幼少の時から酒を好む一条で、然かも図抜けの大酒、世間には大酒をしても必ずしも酒が旨いとは思わず、飲んでも飲まなくても宜いと云う人があるが、私は左様でない。私の口には酒が旨くて多く飲みたいその上に、上等の銘酒を好んで、酒の良否が誠に能く分る。先年中一樽の価七、八円の時、上下五十銭も相違すれば、先ず価を聞かずにチャンとその風味を飲み分けると云うような黒人で、その

上等の酒をウンと飲んで、肴さかなも良い肴を沢山喰い、満腹のみくい飲食した跡で飯もドツサリ給たべ残す所なしと云う、誠に意地の穢きたない所謂牛飲馬食とも云うべき男である。尚なおその上に、この賤しむべき男が酒に酔よつて酔狂でもすれば自から警いましめると云うこともあるが、大酒の癖に酒の上が決して悪くない。酔えば唯ただ大きな声をして饒舌じやうごるばかり、遂つひぞ人の氣になるような忌いやがるような根性の悪いことを云いて喧嘩をしたこともなければ、上戸じやうこ本性真面目まじめになつて議論したこともないから、人に邪魔にされない。是これが却かえつて不幸で、本人は宜いい氣になつて、酒とさえ云いえば一番先さきに罷まかり出て、人の一倍も二倍も三倍も飲んで天下に敵なしなんて得意がつて居たのは、返すくも愧はかしい事であるが、酒の事を除のぞいてその外ほかになれば、私は少年の時から宜いい加減な摂生家と云いつても宜よろしい。何も別段に摂生をしようなんてソンの六むすかしい考かんがえのあらうようもないが、日に三度の食事の外ほかにメツタに物を食くわない。或あるは母が給たべさせなかつたのか知らぬが、幼少から癖になつて間の食物が欲しくない。殊ことに晩食の後、夜になれば如何いかなる好物があつても口に入れることが出来ない。例えば親類の不幸に通夜するとか、又は近火の騒さわぎに夜を更ふかすとかして、自然に其そ処に食物が出て来ても食う氣にならぬ。是これは母に仕込まれた習慣が生のこつて居るのでしよう。摂生たの爲めには最も宜しい習慣です。又私は随分氣の長い方でない、何事もテキパキ早く

遣ると云う風で、時としては人に笑われるような事も多い。所が三度の食事となると丸で別人のように変化して、何としても早く食うことが出来ない。子供の時に早飯と何とやらは武士の嗜なんと云て、人に悪く云われた事もあり、又自分でも早く食いたいと思て居たが、何分にも頬張て生嚼にして食うことが出来ない。その後西洋流の書を読んで生嚼の宜しくない事を知て、始めて是れは却て自分の悪い癖が宜い事になったと合点して大きに悦び、爾来憚る所もなくゆる／＼食事をして、凡そ人の一、二倍も時を費します。是れも撰生のために甚だ宜しい。

漸く酒を節すソレカラ又酒の話になつて、私が生得酒を好んでも、郷里に居るとき少年の身として自由に飲まれるものでもなし、長崎では一年の間、禁酒を守り、大阪に出てから随分自由に飲むことは飲んだが、兎角錢に窮して思うように行かず、年二十五歳のとき江戸に来て以来、囊中も少し温かになつて酒を買う位の事は出来るようになったから、勉強の傍ら飲むことを第一の樂みにして、朋友の家に行けば飲み、知る人が来ればスグに酒を命じて、客に勧めるよりも主人の方が嬉しがって飲むと云うような訳で、朝でも昼でも晩でも時を嫌わず能くも飲みました。夫れから三十二、三歳の頃と思う。独り大に発明して、斯う飲んででは逆も寿命を全くすることは叶わぬ、左ればとて断然禁酒は、

以前に覚えがある、唯一時の事で永続きが出来ぬ、詰り生涯の根気でそろ／＼自から節ずるの外に道なしと決断したのは、支那人が阿片を罷めるようなもので随分苦しいが、先ず第一に朝酒を廃し、暫くして次ぎに昼酒を禁じたが、客のあるときは矢張り客来を名にして飲んで居たのを、漸く我慢して、後にはその客ばかりに進めて自分は一杯も飲まぬことにして、是れ丈けは如何やら斯うやら首尾能く出来て、サア今度は晩酌の一段になって、その全廃は迎も行われないから、そろ／＼量を減ずることにしようと方針を定め、口では飲みたい、心では許さず、口と心と相反して喧嘩をするように争いながら、次第々々に減量して、稍や穩になるまでには三年も掛りました、と云うのは私が三十七歳のとき酷い熱病に罹て、万死一生の幸を得たそのとき、友医の説に、是れが以前のような大酒では迎も助かる道はないが、幸に今度の全快は近年節酒の賜に相違ないと云たのを覚えて居るから、私が生涯鯨飲の全盛は凡そ十年間と思われる。その後酒量は減ずるばかりで増すことはない。初めの間は自から制するようにして居たが、自然に減じて飲みたくも飲めなくなったのは、道徳上の謹慎と云うよりも年齢老却の所為でしょう。兎に角に人間が四十にも五十にもなつて酒量が段々強くなって、遂には唯の清酒は利きが鈍いなんてブランドーだのウヰスキーだの飲む者があるが、アレは宜くない。苦しかろうが罷めるが上策だ。私

の身に覚えがある。私のような無法な大酒家でも、三十四、五歳のときトウ／＼酒慾を征伐して勝利を得たから、況して今の大酒家と云ても私より以上の者は先ず少ない、高の知れた酒客の葉武者だ、そろ／＼遣れば節酒も禁酒も屹と出来ましょう。

身体運動ソレから私の身体運動は如何だとその話もしましょう。幼年の時から貧家に生れて身体の運動はイヤでもしなければならぬ。ソレが習慣になつて生涯身体を動かして居ます。少年のとき荒仕事ばかりして、冬になると、あかぎれが切れて血が出る、スルと木綿糸できれくち切口を縫てぬつ熱油を滴らしてた手療治をして居た事を覚えて居る。江戸に来てから自然ソナナことが無くなつたから、或る時、

鄙事多能年少春

立身自笑却壞身

浴余閑坐肌全淨

曾是綿糸縫 人

と云う詩のようなものを記した事がある。又藩中に居て武芸をせねば人でないように風がふう悪いから、なかむらしようべえ中村庄兵衛と云う居合の先生に就て少し稽古したから、その後、洋学修業に出ては、国に居るときのように荒い仕事をしないから、始終居合刀を所持して、大阪の

藩の倉屋敷に居るとき、又緒方の塾でも、折おり節ふしはドタバタ遣やつて居ました。夫それから江戸に来て世間に攘夷論ざいぎが盛さかんになつてから居合は罷やめにして、兼て腕に覚えのある米搗こめつきを始め、折々遣やつて居た所が、明治三年、大病を煩わづらうて、病後何分にも旧もとのようにならぬ。その年か翌年か岩いわ倉くら大使が欧行に付き、親友の長与専齋ながよせんさいも随行を命ぜられ、近々きんきん出立として私方に告別に参り、キニーネ・オンスのビンを懷中から出して、「君の大病全快はしたが、来年その時節に為なると何か故障を生じて薬品の必要があるに違いない。是これは塩酸キニーネ最上の品で、薬店などにはない。之これを遣やるから大事に貯えて置け。僕の留守中に思おもひ當あたることがあろうと云いうのは実に朋友の親切なれども、私は却かえつて喜ばぬ。「馬鹿なことを云いつて呉くれるな。病氣全快の僕の身に薬なんぞ要いるものか。面白くもない。僕は貰もらわないと云うと、長与ながよが笑わらつて、「知らぬ事を云うな。屹きつと役に立つことがあるから黙だまつて取とり置けと云て、その薬を私に渡して別れた所が、果しかして然り、長与の外行留主るす中、毎度発熱して、夫それキニーネ又またキニーネとて、トウ／＼オンスの品を飲み尽したと云うような容体で、何分にも力が回復しない。

病に媚めびず横浜の女医ドクトル・シモンズの説に、何でも肌に着くものはフラネルにせよと云うから、シャツも股ももひき引もフラネルで拵こしらえ、足袋の裏にもフラネルを着けさせて全身

を纏まとうて居た所が、頓とんと効能が見えぬ。ドウかすると風を引ひて悪寒おかんを催もよほして熱が昇ある。毎度の事で、凡およそ二年余り三年になつても同様であるから、或日私あるひ おおいが大に奮発こつちして、是れは医師の命令に従したがひ、余り病氣を大切にもつとして、云わば病に媚こるようなものだ。此方から媚こるから病は段々付つけあがる。自分の身体には自分の覚えがある。眞実の病中には固もつとより医命に服することなれども、今日は病後の摂生より外ほかに要はないから、自分で摂生を試こころみましよう。抑も自分の本もとは田舎士族で、少年のとき如何いかなる生活して居たかと云いえば、麦飯を喰くらひ唐茄子の味噌汁すずを啜すすり、衣服は手織木綿ておりのツンツルテンを着て、フラネルなんぞ目に見たこともない。この田舎者が開国の風潮に連れ東京に住居して、当世流に摂生も可笑おかしい。田舎者の身体の方が驚しいて仕舞しまう。即ち今日風すなわを引かたり熱かぜが出たりしてグヅグひいとして居るのは摂生法の上等に過あやまちる誤であるから、ただに前非を改めると申して、その日からフラネルのシャツも股引ももひきも脱ぎ棄すなわて、仕舞しまつて、唯の木綿の襦袢ただに取替え、ストーブも余りに焚たかぬようにして、洋服は馬に乗る時計ばかり、騎馬の服と定きめて、不斷は純粹の日本の着物を着て、寒い風が吹ふき通とおしても構はかわず家にも居れば外にも出る。唯食物ただばかりを西洋流に真似て好き品を用い、その他は一切いっさいむかしの田舎士族に復古して、ソレから運動には例の米こ搗薪割めつき まきわりに身を入れて、少年時代の貧乏世帯じたいと同じようにして毎日汗を出して働いて

居る中に、次第に身体が丈夫になって、風も引かず発熱もせぬようになって来ました。私の身の丈たは五尺七寸三、四分、体量は十八貫目足らず。年の頃十八、九の時から六十前後まで増減なし、十八貫を出したこともなければ十七貫くだつに下たこともない。随分調子の宜よろしいその身体が、病後は十五貫目にまで減じて二、三年悩んだが、この田舎流の摂生法でチヤンと旧もとの通りに復して、その後六十五歳の今日に至り今でも十七貫五百目より少くない。扱さて私が考えるに右の田舎摂生が果して実効を奏したのか、又は病の回復期が自然に來た処で偶然にも摂生法を改めたのか、ソレは何とも判断が付かぬ。兎とに角かくに生理上必要の処に少し注意さえすれば、田舎風の生活も悪くないと云いうこと丈だは確かに分る。但ただし肌なに寒風の吹通しが有益であるか、又は外またの摂生を以て体力が強くなって、實際害に為なるべき寒風にも能く抵抗よして之に堪これうるのであるか、即ち寒風その物は薬に非あらず、寒風をも犯むとんじやくして無頓着むとんじやくと云うその全般の生活法が有益であるか、凡およそこの種の關係は医学の研究すべき問題と思います。ソレは扱さて置き、私の摂生は明治三年、三十七歳大病の時から一面目を改め、書生時代の乱暴無茶苦茶、殊ことに十年間鯨飲けいりんの悪習を廃して、今日に至るまで前後凡そ四十年になりますが、この四十年の間にも初期は文事勉強の余暇を偷つとんで運動摂生したものが、次第に老却するに従い今は摂生を本務にしてその余暇に文を勉つとめることにし

ました。

居合、米搗今でも宵は早く寝て朝早く起き、食事前に一里半ばかり芝の三光から麻布古川辺の野外を少年生徒と共に散歩して、午後になれば居合を拔たり米を搗たり、一時間を費して晩の食事も、チャンと規則のようにして、雨が降ても雪が降ても年中一日も欠かしたことはない。去年の晩秋戯れに、

一点寒鐘声遠伝

半輪残月影猶鮮

草鞋竹策侵秋曉

歩自三光渡古川

なんて詩を作りましたが、この運動摂生が何時まで続くことや、自分で自分の体質の強弱、根気の有無を見て居ます。

行路変化多し回顧すれば六十何年、人生既往を想えば恍として夢の如しとは毎度聞く所であるが、私の夢は至極変化の多い賑かな夢でした。旧小藩の小士族、窮屈な小さい箱の中に詰込まれて、藩政の楊枝を以て重箱の隅をほじくるその楊枝の先きに掛た少年が、ヒヨイと外に飛出して故郷を見捨てるのみか、生来教育された漢学流の教をも打遣て西洋学の門

に入り、以前に變^{かわつ}た書を読み、以前に變^{かわつ}た人に交わり、自由自在に運動して、二度も三度も外国に往来すれば考^{かんがえ}は段々広くなつて、旧藩は扱^{さて}置き日本が挟く見えるようになって来たのは、何と賑かな事で大きな変化ではあるまいか。或^{ある}はその間に艱^{かん}難^{なん}辛苦など述立てれば大造^{たいそう}のようだが、咽^{のども}元通れば熱さ忘れると云うその通りで、艱^{かん}難^{なん}辛苦も過ぎ^{しまえ}仕舞^{しまえ}えば何ともない。貧乏は苦しいに違いないが、その貧乏が過ぎ去^{さつ}た後で昔の貧苦を思^{おも}ひだ^{もい}出して何が苦しいか、却^{かえつ}て面白いくらいだから、私は洋学を修めて、その後ドウやら斯^こうやら人に不義理をせず頭を下げぬようにして、衣食さえ出来れば大願成就と思^{おも}て居た処に、又囀^{まな}らずも王政維新、いよゝ日本国を開^{ひら}いて本^{ほん}当^{だう}の開国となつたのは難^{あり}有^{がた}い。幕府時代に私の著^そわした西洋事情なんぞ、出版の時の考^{かんがえ}には、天下にコンなものを讀む人が有るか無いか夫^それも分らず、仮令^{たと}い讀んだからとて之^{これ}を日本^{にほん}の實際^{じしつ}に試^{こころ}みるなんて固^{もと}より思^{おも}いも寄らぬことで、一口^{ひとくち}に申せば西洋の小説、夢物語の戯^げ作^{さく}くらいに自^みから認^{した}めて居たものが、世間に流行して實際の役に立つのみか、新政府の勇氣は西洋事情の類でない、一段も二段も先^さきに進^{すす}んで思^{おも}切^{いきつ}た事を断行して、アベコベに著述者を驚かす程のことも折々見えるから、ソコで私も亦^{また}以前の大願成就に安^{やす}んじて居られない。コリヤ面白い、この勢^{いきおい}に乗じて更^{おほ}いに大^{おほ}に西洋文明の空氣を吹込み、全国の人心を根底から転覆して、絶遠の東洋

に一新文明国を開き、東に日本、西に英国と、相對^{あいたい}して後^{おく}れを取らぬようになられないものでもない、茲^{ここ}に第二の誓願^{ちげん}を起して、投身^{さて}に叶う仕事は三寸の舌、一本の筆より外^{ほか}に何もないから、身体^{しんたい}の健康を頼みにして専ら^{もっぱら}塾務^{しゆく}を務め、又筆を弄^{もてあそ}び、種々様々の事を書き散らしたのが西洋事情以後の著訳です。一方には大勢の学生を教育し、又演説などして所思^{しよし}を伝え、又一方には著書^{ほんやく}翻譯^{ずいぶん}、随分忙しい事でしたが、是^これも所謂^{いわず}万分之一を勉^{つと}める気でしよう。所で顧^{かえり}みて世の中を見れば堪^たえ難^{がた}いことも多いようだが、一国全体の大勢は改進々歩の一方で、次第々々に上進して、数年の後その形に顕^{あら}われたるは、日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも難^{ありがた}有^いいとも云^いいようがない。命あればこそコンな事を見聞するのだ、前に死^{さき}んだ同志の朋友が不幸だ、ア、見せて遣^やりたいと、毎度私は泣きました。実を申せば日清戦争何でもない。唯^{ただ}是^これ日本の外交の序^{じよ}開^{びら}きでこそあれ、ソレほど喜^わぶ訳^{わけ}もないが、その時の情に迫^せまれば夢中にならずには居^ゐられない。凡^{およ}そコンな訳^{わけ}で、その原因は何処^{いづく}に在るか云えば、新日本の文明富強は都て先人遺伝の功德に由来し、吾^{われ}々^{われ}共^{われ}は丁^{ちよう}度^ど都合の宜^いい時代に生れて祖先^{せんぞ}の賜^{たま}を唯^{ただ}貰^{もら}うたようなものに違^{ちが}いはないが、兎^とに角^{かく}に自分の願^{がん}に掛^かけて居^ゐたその願^{がん}が、天の恵み、祖先の余德^{よとく}に由^{よつ}て首尾^{しゆゐ}能^よく叶^なうたことなれば、私の為^{ため}には第二の大願成就と云^いわねばならぬ。

人間の慾に際限なし左れば私は自分の既往を顧みれば遺憾なきのみか愉快な事ばかりであるが、扱^{さて}人間の慾には際限のないもので、不平を云^いわすればマダ／＼幾らもある。外国交際又は内国の憲法政治などに就^{つい}て其^それ是^これと云う議論は政治家の事として差置^{さしお}き、私の生涯の中に出来^でて見^みたいと思う所は、全国男女の氣品を次第々々に高尚に導いて眞実文明の名に愧^はかしくないようにする事と、仏法にても耶蘇^{やそ}教にても孰^{いづ}れにても宜^{よろ}しい、之^{これ}を引立てゝ多数の民心を和^{やわ}らげるようにする事と、大^{おお}に金を役じて有形無形、高尚なる学理を研究させるようにする事と、凡^{およ}そこの三ヶ条です。人は老しても無病なる限りは唯^{ただ}安閑として居られず、私も今の通りに健全なる間は身に叶^だう丈^{だけ}の力を尽^つす積^{もり}です。

福翁自伝 終

青空文庫情報

底本：「福澤諭吉著作集 第12巻 福翁自伝 福澤全集緒言」慶應義塾大学出版会

2003（平成15）年11月17日初版第1刷発行

底本の親本：「福翁自傳」時事新報社

1899（明治32）年6月15日発行

初出：「時事新報」時事新報社

1898（明治31）年7月1日号～1899（明治32）年2月16日号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、次の箇所では、大振りにつくっています。

「長崎遊学中の逸事」の「三ヶ寺」

「兄弟中津に帰る」の「二ヶ年」

「小石川に通う」の「護持院《いじいん》ヶ一原《はら》」

「女尊男卑の風俗に驚」の「安達《あだち》ヶ一原《はら》」

「不在中桜田の事変」の「六ヶ年」

「松木、五代、埼玉郡に潜む」の「六ヶ月」

「下ノ関の攘夷」の「英仏蘭米四ヶ国」

「剣術の全盛」の「関ヶ原合戦」

「発狂病人一条米国より帰来」の「一條条」

※「翻」と「飜」、「子供」と「小供」、「煙草」と「烟草」、「普魯西」と「普魯士」、

「華盛頓」と「華聖頓」、「大阪」と「大坂」、「函館」と「箱館」、「氣※」[#「火+

稲のつくり」、第4水準2-79-87]」と「氣焰」、「免《まぬか》れ」と「免《まぬ》かれ

」、「一寸《ちよい》と」と「一寸《ちよいと》」と「一寸《ちよつと》」、「積《つも》

り」と「積《つもり》」の混在は、底本通りです。

※底本の編者による語注は省略しました。

※窓見出しは、自筆草稿にある書き入れに従って底本編集時に追加されたもので、文章の途中に挿入されているものもあります。本テキストでは富田正文校注「福翁自伝」慶應義塾大学出版会、2003（平成15）年4月1日発行を参考に該当箇所に近い文章の切れ目に挿入しました。

※底本では正誤訂正を「」に入れてルビのように示しています。補遺は自筆草稿に従つ

て「」に入れて示しています。

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそつて、あらためました。

入力：田中哲郎

校正：りゅうぞう

2017年5月17日作成

2017年7月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

福翁自伝

福翁自伝

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 福澤諭吉

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>